宮城県文化財調査報告書　第62集

東北新幹線関係遺跡調査報告書
－Ⅱ－

昭和 55 年 1 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
日本国有鉄道仙台新幹線工事局

序

道路及び鉄道交通網の整備事業は、現代社会の進歩発展から生じる必然的な要請であり、県下でもこうした目的の建設事業が数多く計画実施されております。

しかしながら埋蔵文化財は、長い伝統の中で育まれた先人の貴重な文化遺産であり、その保存をはかり活用を考えていくことも現代に生きるわれわれの責務であります。

東北新幹線は仙台平野を南北に縦貫して通過する大規模な建設工事であり、関係する遺跡は28遺路を数えます。これらの遺跡については、昭和47年以来発掘調査を実施し昭和54年5月で完了し多くの成果を得ております。

本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告の第2冊目として「飯詰舘跡・谷津川・田中・台の山・道上・八幡崎Ｂ・熊谷・大門」の各遺跡を集録しております。

ここに関係各位の御協力に深甚なる敬意を表わすとともに、本書が記録保存の成果として社会教育や学術研究の場に役立つことを切に願っているしだいです。

昭 和 55 年 1 月

宮城県教育委員会
教育長 北 村　潮

目　　次

(1) 飯詰館跡 3

(2) 田中遺跡 (3) 谷津川遺跡 17

(4) 台ノ山遺跡 51

(5) 道上遺跡 213

(6) 八幡崎B遺跡 221

(7) 熊谷遺跡 263

(8) 大門遺跡 273

例　　言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書第2冊分として8遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南から順に行った。
3. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係市町村教育委員会・各学校教職員・学生補助員の方々の協力をいただいた。
4. 調査および整理において、東北歴史資料館ならびに宮城県多賀城跡調査研究所からご指導ご助言を賜った。
5. 石器の材質同定は東北大学助教授　蟹沢聡史氏にお願いした。
6. 人骨については札幌医科大学講師　百々幸雄氏のご教授を負うところが大きい。
7. 土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1973) を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。
8. 地形図は建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。田中遺跡・谷津川遺跡－1/25,000「白石南部」・「白石東南部」台ノ山遺跡・道上遺跡－1/25,000「大河原」八幡崎遺跡－1/25,000「仙台東北部」・「富谷」大門遺跡・熊谷遺跡－1/25,000「築館」・「金成」飯詰館跡－1/50,000「桑折」
9. 整理・報告書の作成は文化財保護調査係が行った。各遺跡の整理・執筆分担は次のとおりである。

   田中遺跡・谷津川遺跡－森貢喜

   台ノ山遺跡・阿部博志・千葉宗久

   道上遺跡－千葉宗久

   八幡崎B遺跡　小井川和夫・森貢喜

   大門遺跡・熊谷遺跡－真山悟

   飯詰館跡－阿部恵

調　査　遺　跡

調査主体者　　宮城県教育委員会
日本国有鉄道仙台新幹線工事局

調査短担当者　　宮城県教育庁文化財保護課

遺跡番号	遺跡名	所在地	調査期日	収録ページ
1	飯詰館	白石市斎川字飯詰	昭和51年3月22日 ～3月25日 昭和52年3月12日	3
2	田中	白石市大鷹沢三沢字田中	昭和49年5月20日 ～6月18日	17
3	谷津川	白石市大鷹沢三沢字川崎	昭和49年5月29日 ～6月18日	17
4	台ノ山	柴田郡大河原町金ノ瀬新開台ノ山	昭和47年9月5日 ～昭和48年1月23日	51
5	道上	柴田郡大河原町小山田字館前	昭和50年6月25日 ～7月2日	213
6	八幡崎B	宮城郡利府町利府字八幡崎	昭和49年 4月15日～5月10日 8月28日～9月10日	227
7	熊谷	栗原郡志波姫町熊谷	昭和52年10月11日 ～10月25日	269
8	大門	栗原郡志波姫町北郷中里および大門	昭和52年9月5日 ～10月10日	279

調査に至る経過

日本の歴史を探るためには埋蔵文化財の担う役割が非常に大きい。ところが埋蔵文化財は一度破壊されると、永久にその価値を失うものである。そこに埋蔵文化財の取り扱いの慎重さと保護の重要性がある。

昭和46年10月、日本国有鉄道から東北新幹線の予定路線の発表があり、文化庁と日本国有鉄道との覚書きにもとづき宮城県教育委員会が発掘調査を担当することとなった。

宮城県教育委員会では、先づ予定路線の分布調査を計画策定し、担当を関係市町村文化財担当者と分布調査員14名とで構成し、昭和47年1月までの間に実施した。しかし、この時点では路線敷のセンター杭が設定されていなかったため、調査結果は不確実なものであった。従って昭和47年2月以降センター及び幅杭が設定されたところで、文化財保護室調査係職員によって第2回目の分布調査を実施し、路線敷内に含まれる事前調査の必要な30遺跡を登録し報告書（宮城県教育委員会27集　昭和47.3）を作成した。

その後、実質係りのない4遺跡を除外し、新たに発見された2遺跡を追加登録し最終的には28遺跡を発掘調査の対象とした。

昭和47年度に至り、日本国有鉄道から発掘調査促進の要望があり、5月には発掘調査の基本事項を協議し、7月に発掘調査の委託契約を締結し、8月から調査を開始した。翌年度以降は年度当初に発掘調査の計画策定に基づいて受託し、昭和54年5月第3次観音沢遺跡の発掘調査をもって、東北新幹線関係遺跡の全遺跡が完了した。

東北新幹線関係遺跡位置図

(1) 飯詰（いいづめ）館跡

目　　次

Ⅰ　位置と環境……5
Ⅱ　規模・構造……7
Ⅲ　調査の経過……8
Ⅳ　調査の方法と成果……9
Ⅴ　考　察……9

調査要項

遺跡名：飯詰館跡（宮城県遺跡地名表登載番号：02111）

遺跡記号：ＢＮ

所在地：宮城県白石市斉川字飯詰

調査対象面積：約3,000m²（発掘範跡180m²）

調査期間：昭和51年3月22日～3月25日、昭和52年3月12日

調査員：宮城県教育庁文化財保護課

技師　佐々木安彦　阿部恵　佐藤好一

嘱託　清野俊太郎

Ⅰ　位置と環境

飯詰館は白石市斎川字飯詰に所在し、白石市の中心部、東北本線白石駅から南に約3km、国道4号線の東側約0.4kmの所に位置している。

白石市周辺の地形を概観すると、西には奥羽火山地群の1つ蔵王火山地とそれに連なる二井宿山地や高館丘陵が、東には阿武隈山地に連らなる角田丘陵地性山地や角田丘陵が横たわり、その中央には、これらの山地や丘陵を開析して流れる白石川とその支流の児捨川・斎川によって形成された段丘や、白石低地と呼ばれる比較的狭隘な扇状地性低地が樹枝状に発達している。

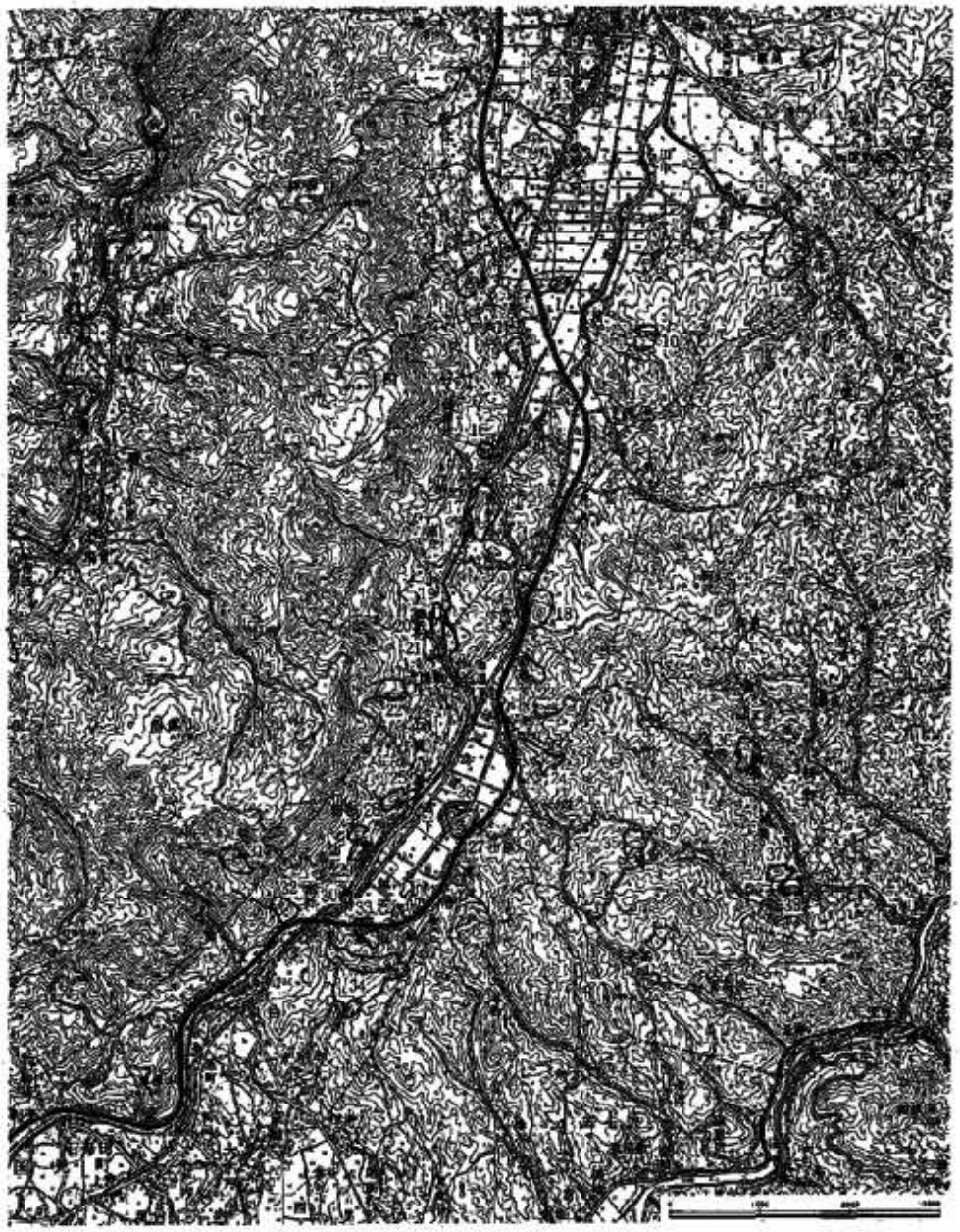
館跡の立地する白石市南部は、二井宿山地を形成する中・小起伏山地の東麓を南北に走る堆積緩斜面と角田丘陵地性山地の大起伏丘陵地との間に小起伏丘陵地や斉川流域に発達した扇地性低地などの低平な地勢が南北に細長く伸びており、その南端は福島県伊達郡国見町貝田をへて福島盆地の北端に接している。

飯詰館は、この隘路が白石低地に向って広くなろうとする部分のほぼ中央に位置する独立丘陵に立地している。現在この丘陵は一部が畑、他の大部分は杉林となっている。

白石市内の山地・山麓地・丘陵地・段丘や低地上には旧石器時代以降、多くの遺跡が分布しており、現在まで約400の遺跡が確認されている（宮城県教委：1976.1978）。このうち中世に属すると考えられる遺跡としては約60ケ所の城館跡や、中世陶器窯である東北古窯跡、大平地区に集中して残る馬ノ塚遺跡.明神塚墳・赤城石塚墳などの塚遺跡がある。また、斎川の自然堤防上に立地する田中・谷津川遺跡でも中世陶器片が出土しており、白石市に隣接する蔵王町持長寺遺跡では中世に属すると思われる掘立柱建物跡が4棟検出されている。

このような遺跡のあり方は中世における白石地方に様々な生活が営まれていたことを伝えているが、文献資料がほとんど残っていないことや板碑・墓碑等で中世に属するものが発見されていないこともあり、白石地方の中世史はほとんど解明されていないのが現状である。

これは約60を数え、分布の密な館跡でも顕著で、その構築、使用年代や居住館主などが明らかなものは少なく、わずかに伝承の残るものが少数あるだけである。しかし、館跡の分布は旧奥州街道が狭い隘路を通る福島県との県境から斎川周辺にかけて集中しており、県境から飯館までの約8kmの間の街道に臨む丘陵上や斜面・独立丘陵には規模の大小はあるが22もの館跡が存在している。そして、この奥州街道は古くは東山道と呼ばれ、中央と東北地方を結ぶ大幹線道路で、源頼朝の平泉攻略の経路ともなった街道でもあり、南北朝の争いを初めとして近世・片倉氏が白石城に封ぜられるまでの幾度かの争乱時にはこの地は要衝の地になったと思われる。



1. 飯詰館	2. 白石城	3. 館	4. 赤城石塚	5. 馬ノ塚遺跡	6. 神明堀塔	7. 太平館
8. 赤館	9. 地蔵院館	10. 鹿子館	11. 高野館	12. 馬場館	13. 大町小館	14. 大町城
15 三沢城	16. 御所館	17. 馬牛館	18. 明堂館	19. 乙森小屋館	20. 徳妙館	21. 八幡館
22. 鳥沢小屋館	23. 山道館	24. 太幸館	25. 忍形山館	26. 笹森小屋館	27. 愛宕館	28. 十郎館
29. 別当館	30. 深山館	31. 権現館	32. 虚空蔵館	33. 湯ノ倉館	34. 高寺山寺	35. 小屋館
36. 北山館	37. 小屋下館	38. 小屋館	39. 東小館	40. 岩井倉館		

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　規模・構造

飯詰館の立地する丘陵は、麓線で東西220m、南北160mと小規模な、東西に長い楕円形状の独立丘陵である。四周は急峻な斜面となっており、頂部にはわずかに屈曲するが東西に細長いほぼ平坦な尾根をもっている。面積は約30,000m²で、最も高い所で標高93.6m、現水田面との比高は35～40mである。

本館跡は、小独立丘陵の自然地形を利用して構築されたもので、頂部には東西2つの平場とそれをとりまく平場・段状遺構が、斜面にも数段の段状遺構や通路などが遺存しており、丘陵裾部には水濠がめぐっていたと考えられた。

頂部遺構としては、東西2つの平場とそれをとりまく2つの平場や段状遺構などがある。

平場－平場はいずれも小規模なもので標高の高い順に、東側の平場を第1平場、西側の平場を第2平場、第1平場の東に接する平場を第3平場、第1平場と第2平場の間にある平場を第4平場とした。第1平場－一辺約20mで方形を呈しており、平場面はほぼ平坦である。標高92.6～93.6mと最も高い所に位置している。第2平場－中心部を道路が縦断しており、2分されているが、本来は東西30m、南北10mと東西に細長い平場であったと思われる。標高89.5～90.5mで、西にわずかに傾斜している。現在、平場上には道路が通っている他に東屋や金華山の石碑などが建っており、旧状は改変を受けていると思われる。第3平場－第1平場の東に接している平場で第1平場と同じような規模をもち、平場面は東にゆるく傾斜している。第1平場との比高は1.5～4mある。この平場の北西部は第1平場の北側にも段状に廻り込んでいる。平場内には2ヶ所に穴を掘った跡が残っている。第4平場－第1平場と第2平場の間にある平場で通路状の高まりによって2分されている。標高88～89m最も低い平場である。この平場の南側は東端部が第1平場の南側に、西端部が第2平場の南側に段状にのびている。

段状遺構－第1平場の北側に幅約1mの狭い段状遺構が、第3平場の東側には幅1.5～1.4mとこれも小規模な段状遺構が取りついている。第2平場には南側西半から北側西半まで幅2～5mほどの段状遺構が二重に巡っている。上段の段状遺構と第2平場との間には斜行する通路が認められ、また、第4平場からのびる段状遺構ともわずかな段差をもって接続している。

通路状遺構－第2平場と第1平場の間に第4平場を2分する形で、上幅1～3m、基底幅4～7m、高さ約0.5mの通路上の高まりが認められる。第2平場と第1平場を結ぶ通路とも考えられるが、第2平場を東西に縦断する道路の延長線上にあり、あるいは後世の道路の可能性もある。

斜面の遺構としては、頂部平場をとりまく段状遺構からいくぶん斜面を下ったところに、段状遺構とそれを結ぶ通路状遺構などがある。

段状遺構－館跡の北東部から南西部にかけての東斜面と南斜面、標高80mから58mまでの間に数段、等高線に沿う形で構築されている。段状遺構が明瞭に残る東斜面には整然と4段の段状遺構が巡っており、部分的には6段認められる。最上位を巡る段状遺構を除き、各段の規模は幅2～10m、長さ20～60mで、各段間は段差をもって横位に連続している。最上位の段は東斜面北端から南斜面中央まで幅5～8mの段状遺構として巡り、南斜面西よりで項部第4平場直下の平場へ通じる通路状遺構と館跡西端の裾部へ降りていく幅1.5mほどの通路状遺構とに分れている。

通路状遺構－前述した館跡西端から最上位段状遺構に通じる通路状遺構をはじめとして、上位と下位の段状遺構間には、それを連続させるための通路と考えられる遺構が斜面に対して位に取りついているのが数ケ所で認められた。

裾部の遺構としては堀遺構が考えられる。現在は、近年行なわれた圃場整備事業によって丘陵裾部まで区画整理され、旧状はまったく残っていないが、第5図に圃場整備前の館周辺の様相を示してある。それによると丘陵西端から南東部まで丘陵裾に沿って細長い水田が並んでおり、その外側に丘陵裾に平行して道路が走っている。このような状況は、この部分に堀遺構が存在していたことを示していると思われ、この他の部分にも水濠であるか空堀であるかは不明であるが堀遺構が巡っていたことが十分予想できる。また、この堀遺構の内側には、主に畑として利用されていた比較的規模の大きな平場がほぼ全周していたことも旧地形からは読み取れる。

Ⅲ　調査の経過

飯詰館は昭和42年に実施された東北自動車道路線敷を中心とする幅4kmの分布調査によって発見され、遺跡として登録された（宮城県教委：1968）。昭和46年には東北新幹線路線敷の分調査によって館跡の一部が路線敷内に含まれていることが判明し（宮城県教委：1972）、昭和48年2月5日から25日まで館跡全体にわたる測量調査を実施した（宮城県教委：1973）。測量調査の結果、平場、段状遺構、堀等の遺構が確認され、館跡余体の規模は小さいが、確認された各遺構の保存状態は良好であることが明らかとなった。

その後、館跡にかかる部分の工法が、オープンカット工法からトンネル工法に変更されたため、測量調査の結果明らかになった主要な遺構は削平をまぬがれることとなった。しかし、丘陵裾部には橋脚が建設される予定であり、この部分に旧地形などから堀状遺構の存在が予想されたため、昭和51年3月22日から3月25日までの4日間、館跡南側の路線敷内にかかる丘陵裾部を対象として第1次調査を実施した。また昭和52年3月12日には、前年、調査対象区内に農道が通っていたため調査できなかった。館跡北側を対象として第2次調査を実施した。

Ⅳ　調査の方法と成果

第1次調査－館跡南側の畑と水田部分に、新幹線中心杭281km＋780mを基準として13×4mの南北に長いトレンチを設定した。トレンチはさらに南側に1m幅で約3m拡張した。発掘面積は約55m²である。

調査区内からは上幅11.3m、広幅6.0m、深さ約1.5m、断面「U」字形をした東西に延びる堀が検出された（第2･5図）。堀の両壁の立ち上がりはゆるやかである。南壁は地山土を壁とする部分が底面近くに限られるためか残りはあまり良くなく、残存高は1m弱しかない。堀内の堆積土は5層ある。第3･4層は丘陵側から流入した同一の層と思われるが、水田下の層である第4層部分がグライ化して土色が異っている。第5層は南側から、第6･7層は北側から流入堆積した層で、いずれもグライ化している。堆積層からは遺物の出土はなかった。

第2次調査－館跡北側の路線敷、農道、水路、水田部分、新幹線中心杭281km＋980m付近に東西15m、南北15mの「L」字形のトレンチを設定した。調査面積は約125m²であるが、調査時にはすでに橋脚工事が始まっており、十分な調査はできなかった。調査できたのは、南北トレンチの北半だけで、断面図もシートパイルが打ち込まれていたため作製できたのは東壁と南壁だけである。

第3･5図に示したように南北トレンチの北端近くには堀の北壁と思われる立ち上がりが認められ、この部分で約1.2mの深さをもつ。堀の底面は丘陵南側に向ってゆるやかに上っており、また、南端近くに幅2.5m、深さ1mの溝が堆積土を切って掘り込まれているために、南壁は不明瞭となっているが、12m以上の堀幅をもつと思われる。堀内の堆積土は4層（第6～9層）あり、すべてグライ化している。特に第6層中には植物遺存体や炭化物の混入が見られる。

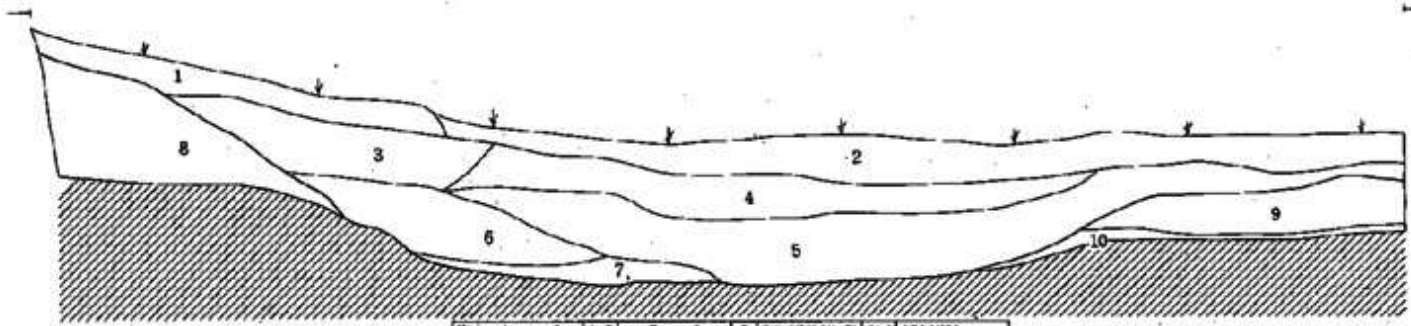
遺物としては、第4層より須恵器坏の口縁部の細片が1点、第9層中から曲物の底部か蓋と思われる木製品が1点出土している。

出土遺物（第4図）

曲物－直径18cm、内径16.5cm、厚さ6mmの断面「凸」状の底板に、厚さ1.5m、残存高1.2cmの薄板を周らせ、4ケ所を幅6mmほどの樹皮で底板に固定している。小型の曲物容器の底部と思われるが、蓋の可能性もある。

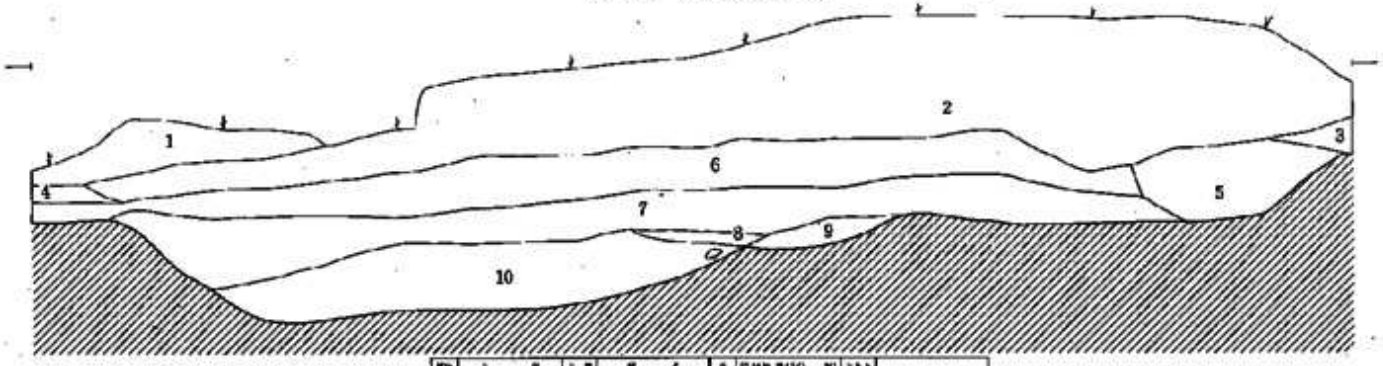
Ⅴ　考　察

飯詰館は福島盆地と白石低地を結ぶ越河から斎川までの隆路のほぼ北端、隆路がまさに白石低地に向って開こうとする部分のほぼ中央に位置している独立丘陵上に立地している。その部平場からは隆路へも白石低地にも眺望が開けており、この隘路の通行を一望にすることがで



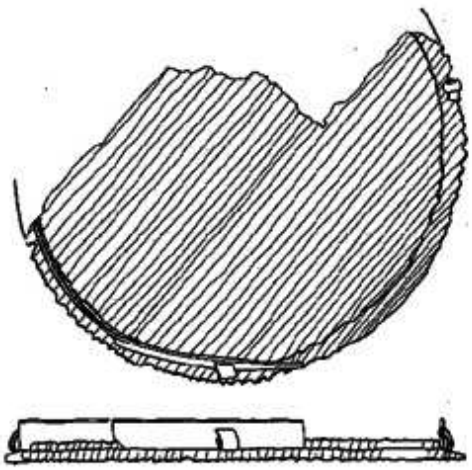
No.	土色	土質	備考	No.	土色	土質	備考
1	暗 色7.5YR3/3	シルト	現耕作土	6	ローム色5YR 3/3	ブロック	小粒を少量含む
2	暗褐色10YR 3/3	シルト	現耕作土	7	暗褐色10YR 3/3	ブロック	小粒を少量含む
3	暗 褐 色7.5YR 3/3	シルト	小粒を多量に含む 締まり	8	暗 褐 色7.5YR 3/3	シルト	粘性の強い土を多量に含む 2.5YR6/6ローム小ブロックを10%程度含む
4	暗褐色7.5YR 3/3	シルト	中～大粒を含む	9	暗褐色10YR 3/3	ブロック	小粒を少量含む
5	暗褐色10YR 3/3	シルト	小粒～中粒を少量含む	10	暗褐色10YR 3/3	ブロック	粘土ブロック10%程度含む

第2図　南側堀跡断面図



No.	土色	土質	備考	No.	土色	土質	備考
1	暗褐色10YR 3/3	シルト		6	暗褐色10YR 3/3	シルト	
2	暗褐色10YR 3/4	シルト		7	暗褐色10YR 3/3	シルト	粘性が強い・硬化層を含む
3	暗褐色10YR 3/3	シルト		8	ローム色7.5YR 5/6	シルト	
4	暗褐色7.5YR 3/3	シルト		9	暗褐色10YR 3/3	シルト	
5	暗褐色10YR 3/3	小 砂	粘土多量に含む	10	暗褐色10YR 3/3	小 砂	粘土多量に含む

第3図　北側堀跡断面図



第４図出土遺物－曲物

きる。

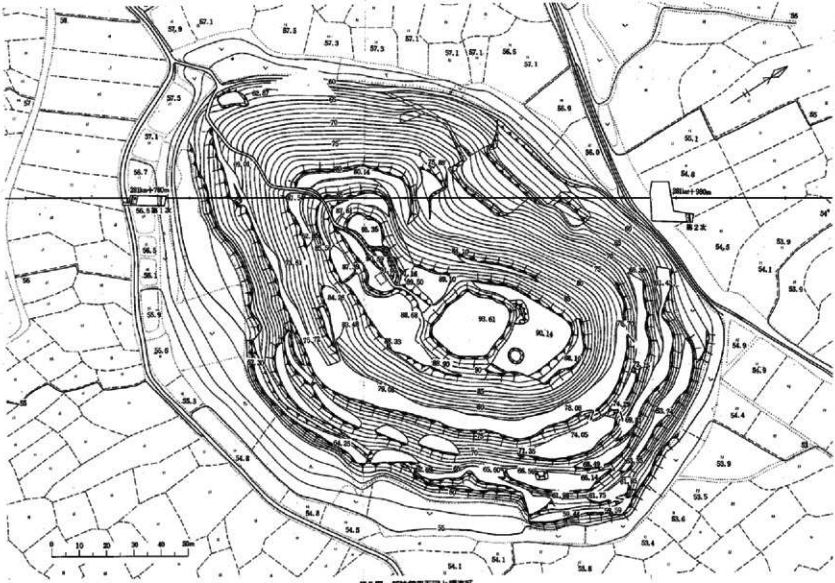
交通の要衝の地を占める本館跡は、すでに述べたように分布調査・測量調査によって丘陵頂部に小規模ではあるが4つの平場とそれを取り囲む段状遺構が、東斜面と南斜面には数段の段状遺構と通路状遺構などが確認された。

丘陵裾部からは発掘調査の結果、幅11m以上の規模をもつ堀が検出された。この堀は丘陵裾に沿って内側に平場を伴いながら丘陵全体を巡っていたと考えら、飯詰館は東西220m、南北180mの小規で長楕円形を呈する独立丘陵を堀で囲繞し、丘陵全体に自然地形を利用した各種の遺構を配した館跡であることが明らかになった。しかし、その全体的な規模は他の館跡と比較して小さく、特に頂部平場の大きさはいずれも小規模で、中心遺構と考えられる第1平場も20×20mほどの大きさしかない。

このような立地や規模、構造等をもつ飯詰館ではあるが、この館跡の構築年代や使用年代、館主名が明らかになるような文献資料や伝承はまったく残っていない。また、堀跡から出土した曲物は出土状況から堀が機能していた時期に流入した遺物と考えられたが、その年代を特定することはできなかった。しかし、延宝年間（1673～1680）の「仙台領古城書上」や寛保元年に編された「封内風土記」（田辺希文：1772）などにこの館跡の名が見えない事は、この館跡の存在が江戸時代にすでに忘れさられていたためとも思われ、消極的な理由ではあるが、この館が江戸時代以前に廃絶されたものと考えられる。一方、この館跡の遺構や構造の特徴などは古代まで遡るものとは考えられず、この館跡は中世に機能した可能性が考えられる。今回の発掘調査部分が丘陵裾の限定された範囲だけであったため、館跡全体の詳しい構造など不明な点が多いが、規模の小さいこの館で日常的な生活が営まれたとは考えられず、この館は居館というより争乱時の物見台や出城などの支城的な性格をもつ館跡である可能性が強い。

引用・参考文献

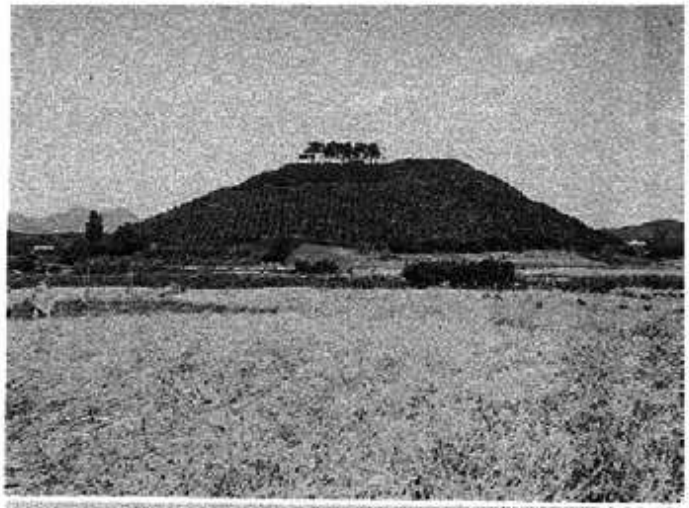
：延宝年間（1673～1680）「仙台領古城書上」『仙台叢書』所収
田辺希文：1772「封内風土記」『仙台叢書』所収
白石市編さん委員会：1976『白石市史・別巻・考古資料篇』
〃　〃　：1979『白石市史Ⅰ・通史第』
宮城県教育委員会：1968「埋蔵文化財緊急調査概報（東北縦貫自動車道遺跡地名表・同試掘調査略報）」宮城県文化財調査報告書第17集
〃　〃　：1972「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書（地名表・試掘調査概報（白石・高清水地区））」宮城県文化財調査報告書第27集
〃　〃　：1973「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」宮城県文化財調査報告書第30集
〃　〃　：1976「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第46集
〃　〃　：1976「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第47集
〃　〃　：1978「宮城県遺跡地名表改訂版」



第５図　飯詰館平面図と調査区

図　　版

館跡全景(南より
昭和43年9月撮影)



館跡全景(北より
昭和51年撮影)

南側堀跡

図版1

北側堀跡北壁部分

北側堀跡
遺物出土状況

曲物

図版2

(2) 田中遺跡

(3) 谷津川遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境……19
1. 位置と地形……19
2. 周辺の遺跡……19
Ⅱ　調査の方法と経過……21
Ⅲ　発見遺構と出土遺物……26
1. 田中遺跡……26
(1) 基本層序……26
(2) 発見遺構……26
(3) 出土遺物……28
(4) 考察……33
2. 谷津川遺跡……36
(1) 基本層序……36
(2) 発見遺構……36
(3) 出土遺物……37
(4) 考察……38
Ⅳ　まとめ……40
(附) 白石市田中遺跡出土頭蓋　札幌医科大学講師　百々幸雄……44

調査要項

遺跡名：田中遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：02135
遺跡記号：ＢＯ
所在地：宮城県白石市大鷹沢三沢字田中
調査対象面積：約1,720m²（発掘面積370m²）
調査期間：昭和49年5月20日～6月18日
調査員：宮城県教育庁文化財保護課
技術主査：早坂春一　技師　宮崎敬典
小井川和夫　阿部恵　佐藤好一
田中則和　真山悟　阿部博志
森貢喜　芳賀寿幸

調査要項

遺跡名：谷津川遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：02133
遺跡記号：ＢＰ
所在地：宮城県白石市大鷹沢三沢字川崎
調査対象対象面積：約2,320m²（発掘面積252m²）
調査期間：昭和49年5月29日～6月18日
調査員：田中遺跡と同じ

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1. 位置と地形

田中遺跡は、国鉄東北本線白石駅より南方約1.5kmの白石市大鷹沢三沢字田中に所在している。谷津川遺跡は、田中遺跡の北方約500mの地点、白石市大鷹沢三沢字川崎に所在している。

田中・谷津川遺跡が位置している宮城県南部の地形を概観すると、西側に奥羽山地帯、東側に阿武隈山地帯があり、その間に奥羽山麓帯と中部低地帯が広がっている。奥羽山地帯は、南北に長く延び、二井宿山地などの奥羽山地と蔵王火山地などの火山群から成っている。阿武隈山地帯は、福島県から続く阿武隈山地の最北端に位置し、二つに枝分れしている。東側の支脈は亘理海岸平野を東側に望み、海岸線に沿って北上し、北端は阿武隈川と接している。奥羽山地帯と阿武隈山地帯の間には阿武隈川、白石川が流れ、周辺の丘陵を開析して、その流域には中部低地帯の段丘、扇状地、沖積地を形成している。

蔵王山麓に源を発する白石川は、いくつかの支流をあつめて東流し、途中に白石盆地、槻木低地を形成し、槻木付近で阿武隈川に合流する。白石盆地は南北約6.5km、東西約2.5kmの範囲にわたり、白石川やその支流の小河川によって埋積された盆地状の低地である。現在は白石地方の主要な水田地帯になっている。盆地の東南部には白石川の支流のひとつである斎川が、付近の山麓に源を発し、北流しながら周囲に沖積低地を発生させ、両岸には自然堤防を形成している。

田中遺跡はこの自然堤防の東岸に立地しており、標高約46mの微高地にある。斉川との比高差は約2m、周囲の水田面との比高差は約0.5mである。

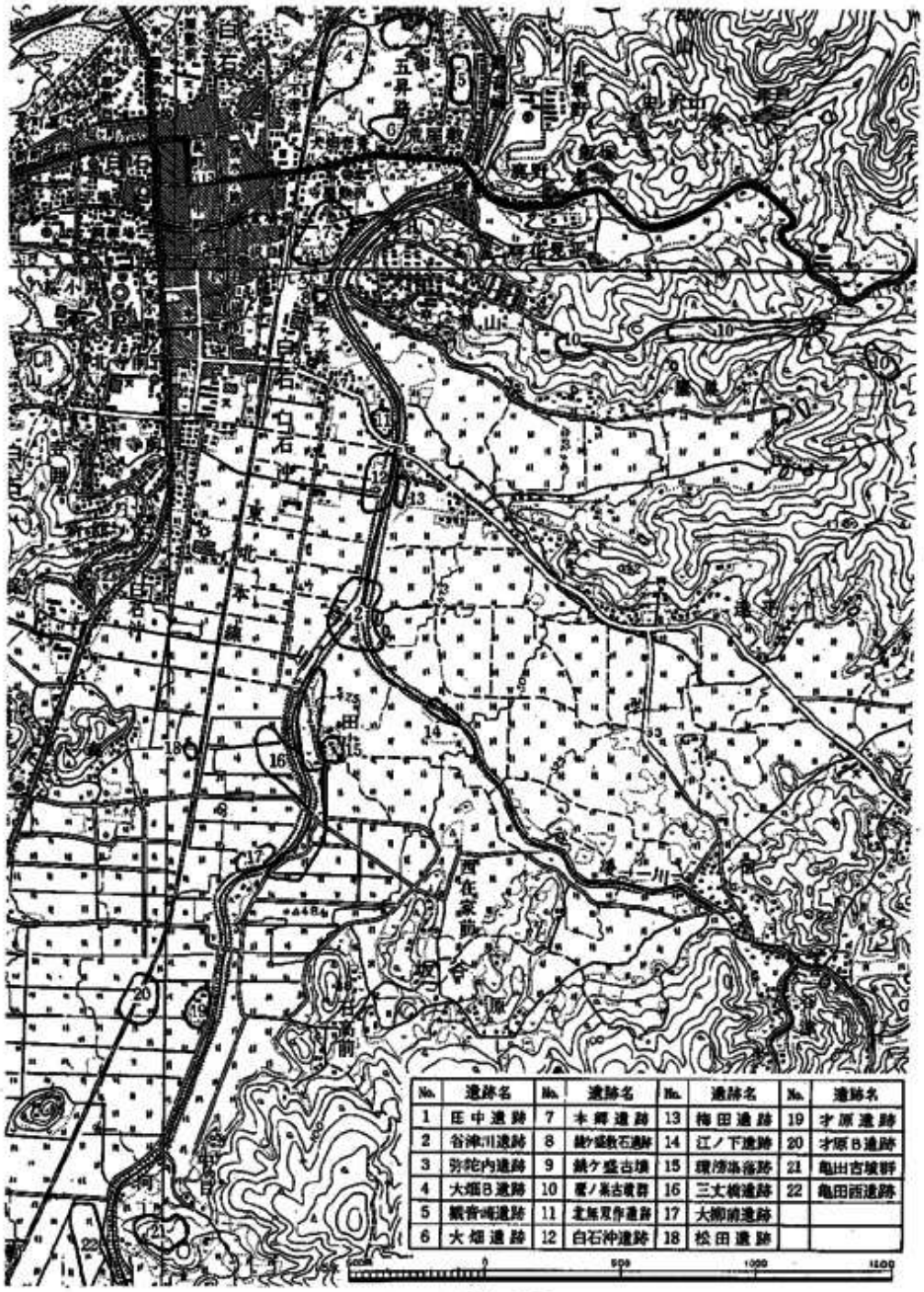
谷津川遺跡は、谷津川が斉川に合流する自然堤防上に立地している。標高約45mの微高地にあり、斎川との比高差約1m、周囲の水田面との比高差はわずかで約0.2mほどである。

2. 周辺の遺跡

田中・谷津川遺跡が立地している斎川流域には、多くの遺跡が存在している。

縄文時代の遺跡は少なく松田遺跡、穴前遺跡で縄文土器が採集できるのみである。白石市周辺の縄文時代の遺跡のほとんどは、蔵王山東麓の台地や、白石川やその支流によって形成された河岸段丘上に立地しており、採集経済が生産基盤であった縄文時代ではあまり低地の沖積地には、進出してこないことが窺われる。

弥生時代に入ると斎川流域の梅田遺跡、弥陀内遺跡、大御前遺跡、大畑遺跡などで、弥生土器が散布しており、梅田遺跡、谷津川遺跡などでは石包丁が出ていることから、すでにこの沖



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	田中遺跡	7	本郷遺跡	13	梅田遺跡	19	才原遺跡
2	谷津川遺跡	8	鏡ケ盛敷石遺跡	14	江ノ下遺跡	20	才原B遺跡
3	弥陀内遺跡	9	鏡ケ盛古墳	15	環滂集落跡	21	亀出古墳群
4	大畑B遺跡	10	鷹ノ巣古墳群	16	三丈橋遺跡	22	亀田西遺跡
5	観音崎遺跡	11	北無双作遺跡	17	大柳前遺跡		
6	大畑遺跡	12	白石沖遺跡	18	松田遺跡		

第１図　遺跡の位置

積低地では稲作農耕が開始されたことが考えられるが、水田などの遺構が未だ発見されておらず不明である。

古墳時代には、流域沿いの丘陵に鷹ノ巣古墳群や亀田古墳群がある。この頃にはすでに農耕村落の中で階級分化の成立があり、これらの古墳の被葬者達によって斎川流域を含む白石市周辺が支配されていたと考えられる。

奈良・平安時代に入ると遺跡の数は多くなり、周辺には北無双作遺跡、白石沖遺跡、二丈橋遺跡、才原遺跡、亀田西遺跡、本郷遺跡、観音崎遺跡、金倉遺跡など妙知られ、斎川流域では増々稲作農耕が盛んになったことが窺われる。それと同時に白石地方も次第に律令体制の中に組み込められ、養老5年（721年）には刈田郡も建置され、次第に律令支配の力が強くなってくる。

このような律令支配を裏付けるものはあまり知られていないが、白石川・斎川流域の沖積低地には条里遺構の存在があると思われ、注目される地域である。

中世の遺跡は少なく、あまり知られていないが、田中遺跡の近くに環濠集落跡（註）があるが、詳細は不明である。また、中世陶器を焼いた東北古窯跡が東方約4kmのところにある。

このように、田中・谷津川遺跡が立地している斎川流域は、縄文時代から中世までの遺跡が分布しており、長い間人々が生活していたことが窺われる。

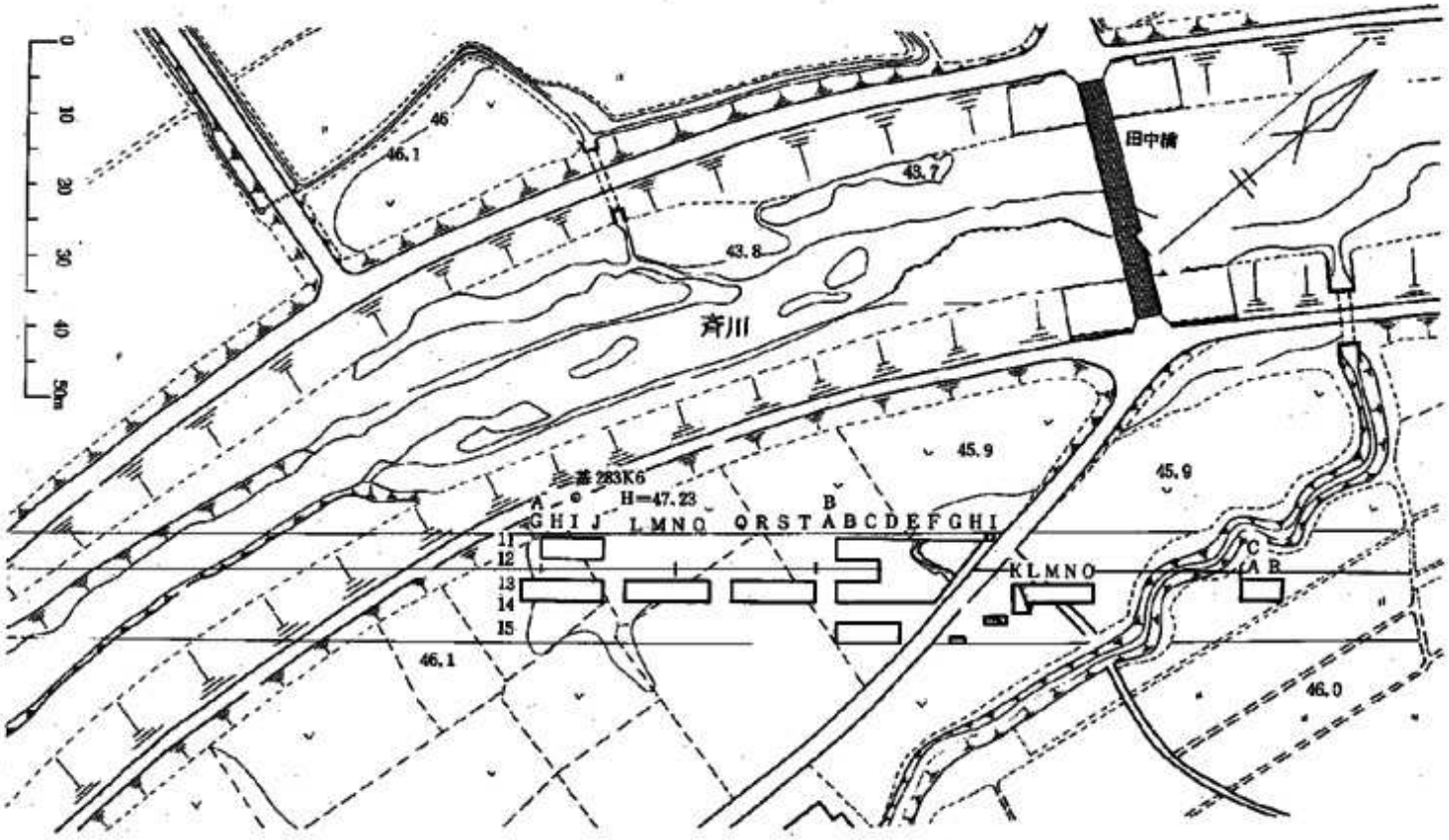
（註）宮城県遺跡地名表にあるが、詳細は不明である。

Ⅱ　調査の方法と経過

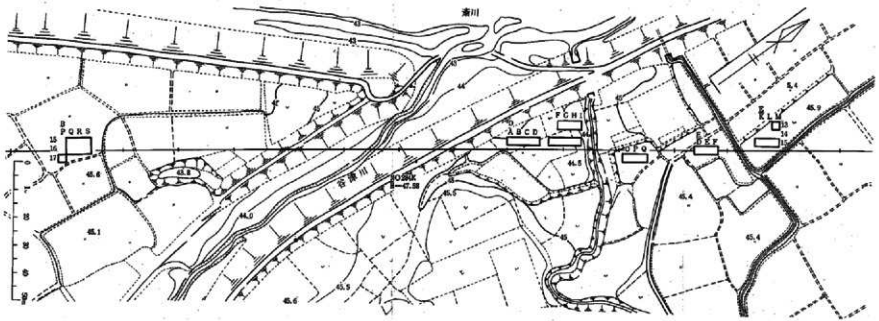
1. 調査の方法

田中遺跡：調査区の設定は、遺跡にかかる路線敷内の東西16km×南北108mの範囲に、新幹線の中心杭、283.620kmと283.680kmを結んだ線、これに直交する線を基準線にし、283.560kmを原点として3mのグリットを組んだ。地区名は南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表わし、両者の組み合わせで呼ぶことにした。調査区南側から大きく、A・B・C…の順に地区を決め、各地区のグリットごとにさらにA-Tをひとつの大きな単位としてアルファベットをつけた（A…AT、BA…BT…等）。また数字は、調査区の西側を11区として東傾にいくにしたがって数を増やしていくようにした。発掘は、基本層位、遺構の存在を知るため、3～4グリットを1単位とした南北に長いトレンチを一列おきに設定した。その結果、調査区の中央部から積み土遺構が確認されたので、周辺のグリットを拡げ、その範囲を調査した。遺構、トレンチの断面の実測図は全て$^{1}/_{20}$の縮尺で作成した。

谷津川遺跡：調査区の設定は、路線敷内の東西16m×南北140mの範囲に、新幹線の中心杭、



第２図　田中遺跡地形図、グリッド配図



第３図　谷津川遺跡地形図、グリッド配図

273.400kmと284.200kmを結んだ線、これに直交する線を基準線にし、284.100kmを原点として3mのグリットを組んだ。南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表わし、両者の組み合わせで地区名を呼ぶことにした。谷津川をはさんで南側をB区、北側はD区から始め北へ行くにしたがってE、F…としていった。さらに各地区のグリットごとにはA-Tをひとつの単位としてアルファベットをつけた。（DA…DT、EA…等）。数字は調査区の西側を13区として、東側に行くにしたがって数を増やしていった。発掘は、基本層位、遺構の存在を知るため3～4グリットを1単位とした南北に長いトレンチを一列おきに設定し、主に畑地の部分を調査した結果、南側から焼土遺構が確認され、周辺のグリットを拡張した。遺構、トレンチの断面の実測図は全て$^{1}/_{30}$の縮尺で作成した。

2. 調査経過

田中・谷津川遺跡は、昭和47年2月28日～3月3日の期間に予備調査が行なわれた。

田中遺跡では土師器、須恵器片が少量出土したが、谷津川遺跡からは遺物は出土しなかった（宮教委：1972）。今回の調査では遺跡の性格をつかむため、両遺跡が近接していることから併行して調査を進めた。

田中遺跡：調査開始は昭和49年5月20日である。まずグリットを設定し、粗掘りは調査区の南側から北側に向かって進めた。その結果、調査区のほぼ中央BE・F－11グリットの地表下約40cmで粘土の拡がりを確認した。調査はこの粘土の拡がりに主力を注いだ。全体の拡がりを確認するため周辺のグリットを掘り下げたが、調査区外にも延びていくことがわかり、全体の平面形はつかめなかった。また、内部の状況を知るため立ち割った結果、9層の粘土が積み上げられたように堆積していた。その後、確認した拡がりの平面形、立ち割った断面の実測図を作成した。調査区の南側AG-13グリットの地表下約2mの粘土層から人骨（頭部）が単独で出土しれ周囲を調査したが関連する施設は発見されなかった。その他のトレンチでは何ら遺構も発見されなかった。遺物は各トレンチから出土しているが、調査区中央のトレンチからの出土が多い。弥生時代から中世までのものである。各トレンチの断面実測図を作成し、埋め戻しをして6月18日には調査は終了した。

谷津川遺跡：調査開始は昭和49年5月29日からで、田中遺跡の調査の途中から始めた。まずグリットを設定し、粗掘りは谷津川の北側から進めたが、何ら遺構も発見されず、また、遺物もあまり出土しなかった。それで南側の畑地の部分に調査区を設定し、組掘りを進めた結果、焼土遺構1基を確認し、周囲のグリットを拡げて調査をした。その後、焼土遺構の平面図、堆積土の断面図・各トレンチの断面図を作成して埋め戻しをし、6月18日には調査を終了した。

Ⅲ　発見遺構と出土遺物

1. 田中遺跡

(1) 基本層序

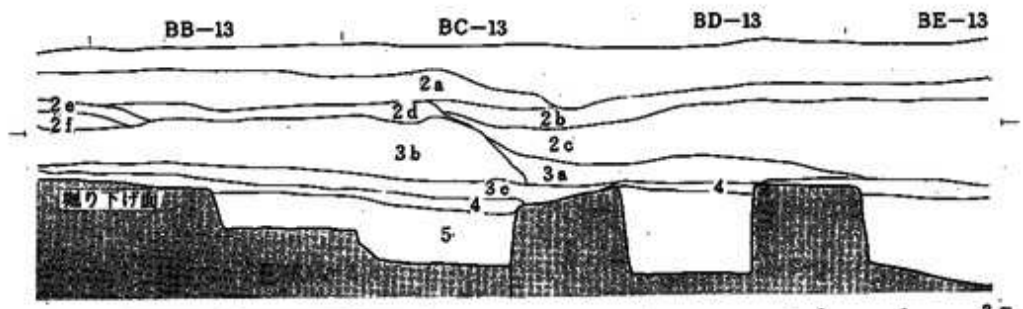
基本的に、Ⅰ層からⅤ層まで確認され、Ⅵ層は砂礫層で地山になる。Ⅰ層は表土で暗褐色粘土質シルト層で、調査区全体にほぼ水平に堆積している。Ⅱ層は、黒褐色粘土質シルト層で6層に細分できるところもあり、調査区全体にほぼ水平に堆積している。Ⅲ層は暗褐色砂質粘土層で2層から3層に細分され、調査区全体にほぼ水平に堆積している。Ⅰ層、Ⅱ層に比して、層の厚さは薄い。Ⅳ層は暗オリーブ色粘土質砂層で、調査区南・北に見られず中央部にのみ堆積している。部分的にグライ化しており、青灰色を呈しているところもある。Ⅴ層は暗緑灰色粘土層で調査区全体にほぼ水平に堆積している。遺物はⅠ層からⅤ層まで出土している。Ⅰ層からⅢ層は弥生時代から中世までの遺物が混在しており、再堆積したものと思われる。特に、調査区中央部のⅡ層からの遺物が多い。人骨はⅤ層の粘土層から出土している。

(2) 発見遺構

積み土遺構

〈位置と確認〉

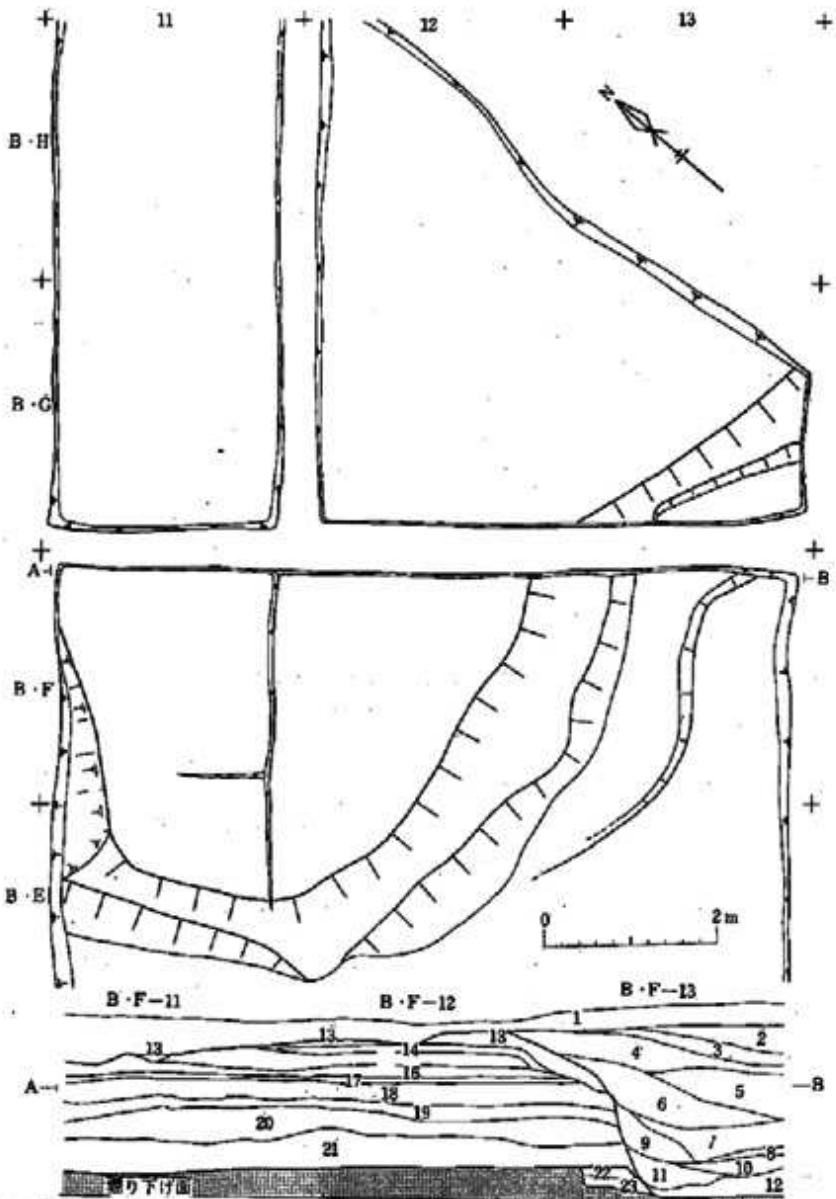
ＢＥ・Ｆ－11グリットのⅠ層（表土）を排除した段階で、Ⅱ層が表出しないで粘土の層が拡がっているのが確認された。拡がりは、北側ではＢＪ－11グリット、ＢＫ－13グリットでなくなり、東側ではＢＩ－15グリットでなくなる。西側は調査区外にも拡がっていくことが確認された。



層位	No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	表土
第Ⅱ層	2a	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	炭化物含む
	2b	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	
	2c	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	2bより若干明るい
	2d	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	細砂を含む
	2e	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	炭化物含む
	2f	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	2eより若干明るい

第Ⅲ層	3a	暗褐色 10YR 3/3	砂質粘土	
	3b	暗褐色 10YR 3/3	砂質粘土	3aより若干明るい
	3c	暗褐色 10YR 3/3	砂質粘土	3a・3bより粘土が多い
第Ⅳ層	4	暗オリーブ色 2.5Y 3/3	粘土質砂	
第Ⅴ層	5	暗緑灰色 10GY 3/1	粘土	

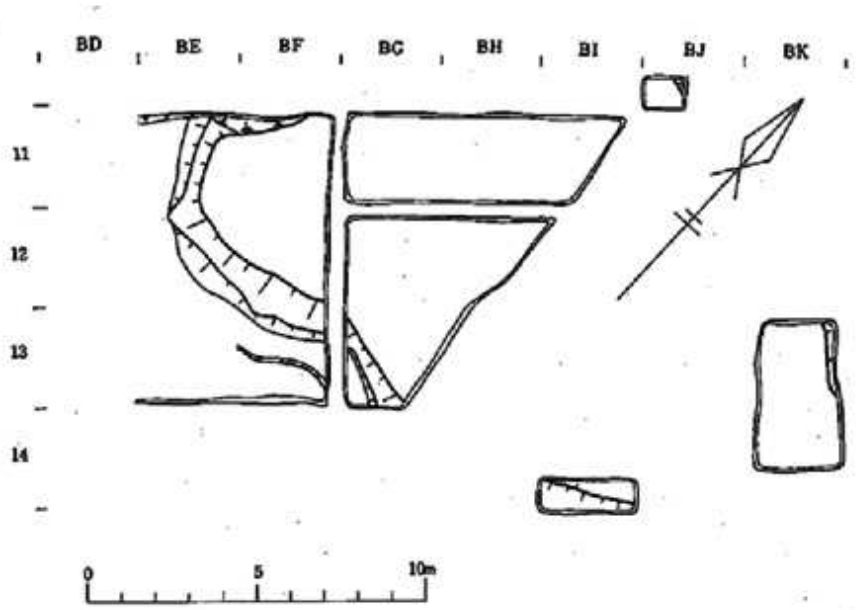
第４図　田中遺跡BB～E－13グリッド東壁断面図



層位	層No.	土色	土性	備考
第I層	1	明褐 色(7.5 YR 5/6)	粘土質シルト	耕土
第II層	2	黒褐 色(7.5 YR 3/2)	粘土質シルト	
	3	黒褐 色(7.5 YR 3/2)	粘土質シルト	酸化物・焼土含む
	4	黒褐 色(7.5 YR 3/2)	粘土質シルト	
	5	褐 色(7.5 YR 4/6)	粘土質シルト	6層より若干明るい
	6	褐 色(7.5 YR 4/6)	粘土質シルト	
第III層	7	褐 色(7.5 YR 4/6)	砂質粘土	
	8	褐 色(7.5 YR 4/6)	砂質粘土	
第IV層	9	にぶい褐色(7.5 YR 5/4)	粘 土	上層の斑状土
	10	暗青灰色(5 PB 3/1)	粘 土	〃
	11	明褐 色(7.5 YR 5/6)	シルト質粘土	下層の斑状土
	12	暗青灰色(5 PB 3/1)	粘 土	

層位	層No.	土色	土性	備考
積み土	13	黒褐 色(7.5 YR 3/2)	粘 土	
	14	暗褐 色(7.5 YR 3/3)	粘 土	
	15	灰黄 色(7.5 YR 5/2)	粘 土	
	16	にぶい褐色(7.5 YR 5/3)	粘 土	
	17	明褐 色(7.5 YR 5/6)	シルト質粘土	
湧崎層位	18	にぶい褐色(7.5 YR 5/3)	粘 土	
	19	明褐 色(7.5 YR 5/6)	シルト質粘土	
	20	にぶい褐色(7.5 YR 5/3)	粘 土	
	21	にぶい褐色(7.5 YR 5/3)	砂質粘土	
第V層	22	褐 色(7.5 YR 5/6)	砂質粘土	
	23	灰黄 色(5 PB 5/1)	砂質粘土	

第5図　田中遺跡積み土遺構



第6図　田中遺跡積み土遺構全体平面図

〈平面形・規模〉

全体の拡がりは、西側で調査区外にも延びているため平面形は不明であるが、北側、東側では粘土がなくなり、広い範囲に拡がっているわけではない。高さ約1.3m～1.7mに積み上げられたもので、立ち上がりは急で途中に段がつく。基底部は高さ約30cm削り出されている。

ＢＦ－11・12・13グリットの北壁に沿って立ち割った結果、粘土は、Ⅳ層の上面からほぼ水平に9層に分かれ堆積していた。出土遺物、これに関連すると思われる施設は検出されなかった。

(3) 出土遺物

土器、石製品（砥石）、人骨が出土している。Ⅱ層、Ⅲ層の出土が多い。人骨はⅤ層から出土している。

〈土器〉

土器は、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器がある。ほとんどが破片であり、図上復元可能なものは少ない。

弥生土器（第8図1～8）

全部で8点ある。その内、口縁部資料は2点でその他は体部破片である。

2は甕形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は強く屈曲して、口縁部は外傾

する。口唇部に縄文（ＬＲ）が施され、頚部には、体部に横位縄文を施文した際の原体の末端の痕跡が認められる。1は壺形土器の口縁部の破片でやや内弯する。一本工具による細い沈線が、横位に三本走っている。3～8は体部の破片で、縄文（ＬＲ）の地文だけが施されている。中には付加縄文が施されているものもある。

土師器

土師器には、坏、甕、壺、甑がある。

坏（第7図1～6）

坏1（1）

丹塗りの土器である。体部から頚部まで内弯気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部の内側に稜が形成されている。底部は欠いているが、丸底と思われる。外面の器面調整は、口縁部は横ナデ・体部はヘラミガキが施されているがあまり明確でない。内面は、口縁部は横ナデ、体部は不明である。

坏2（2）

体部から頚部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。底部は欠いているが、丸底と思われる。外面の器面調整は、口縁部は横ナデ、体部は不明である。内面の器面調整は摩滅のため不明である。

坏3（3）

体部上半で強く屈曲し、口縁部は強く外反する。内、外面に稜をもつ。底部は欠いており、不明である。外面の器面調整は、口縁部は横方向の刷毛目、体部は不明である。内面の器面調整は、口縁部から体部にかけてヘラミガキ・黒色処理されている。

坏4（4）

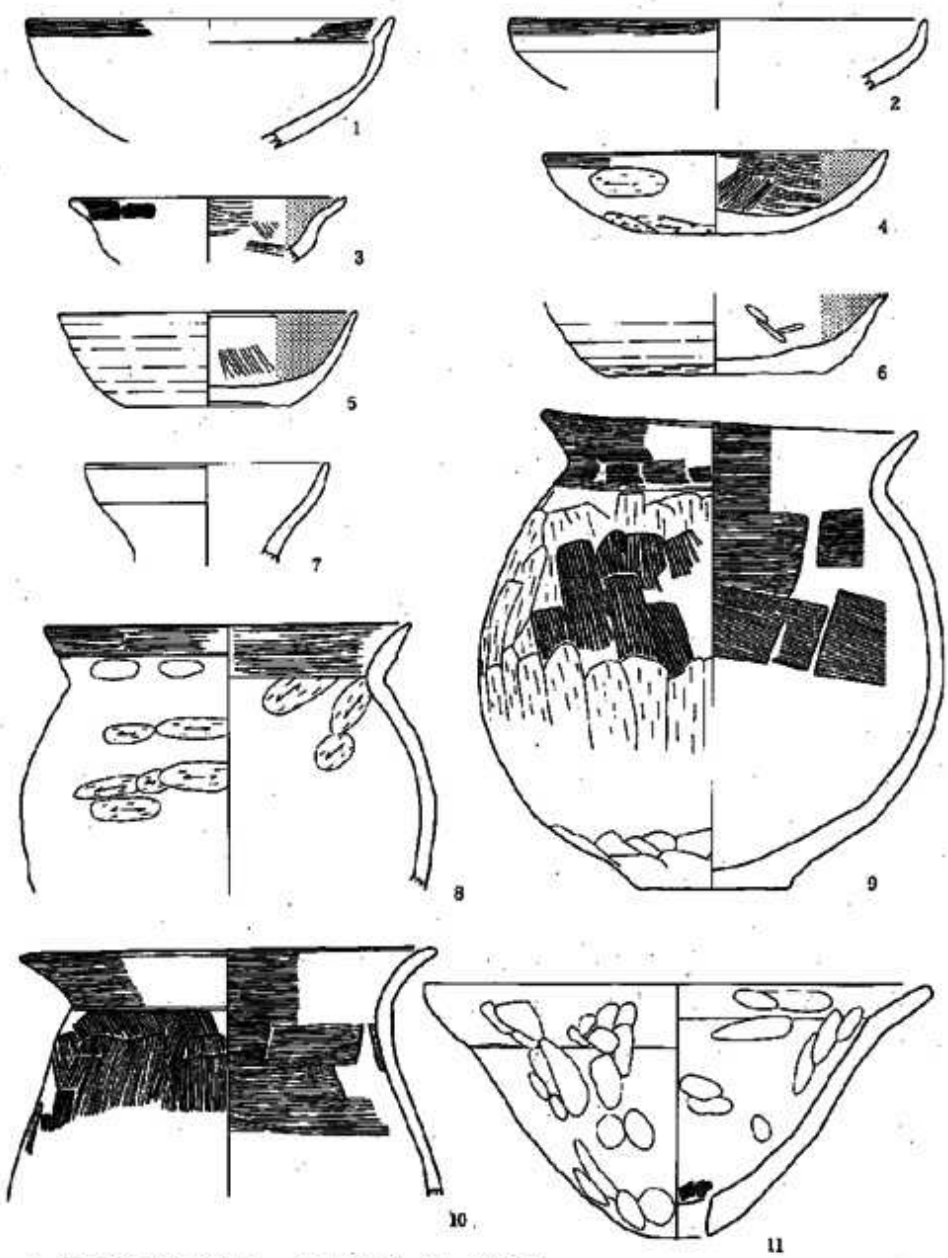
体部から頚部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は丸底である。外面の器面調整は、口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリである。内面の器面調整は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

坏5（5）

製作にロクロを使用しているもので、体部から頚部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部はそのまま外傾する。底部は、右方向の回転糸切り技法によって切り離されており、再調整はしていない。内面の器面調整は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

坏6（6）

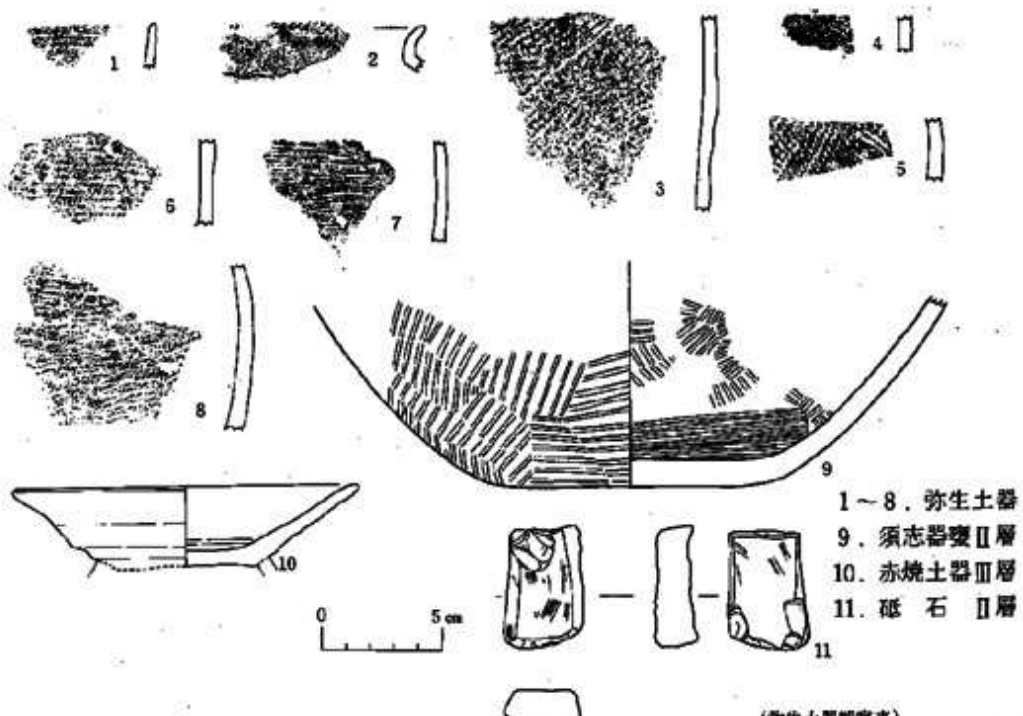
製作にロクロを使用したもので、口縁部は欠いているが体部から頚部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反すると思われる。底部は右方向の回転糸切り技法によって切り離されており、体部下端は回転ヘラケズリで再調整されている。内面の器面調整は、ヘラミガキ・黒



1．土師器坏　BF－13区Ⅱ層
2．〃　BF－13区Ⅱ層
3．〃　地点不明
4．〃　BE－13区Ⅱ層
5．〃　BE－13区Ⅱ層
6．〃　BE－13区Ⅱ層
7．土師器盤　CJ－13区Ⅱ層
8．〃　甕　BF－13区Ⅱ層
9．〃　BD－13区Ⅳ層
10．〃　BD－13区Ⅲ層
11．〃　鉢　CJ－14区Ⅰ層

0　10cm

第7図　田中遺跡出土遺物（Ⅰ）



（弥生土器観察表）

No	地区	層	部位	調整 内面	調整 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面
1	BR－11	2	口縁部	不明	不明	横位沈線	明赤褐色	橙色
2	BF－12	1	口縁部	ナデ	ミガキ	口縁部に縄文(LR)	赤褐色	暗赤褐色
3	CJ－14	2	体部	ナデ	縄文(LR)		黒色	浅黄橙色
4	BG－11	1	体部	ナデ	縄文(LR)		極暗赤褐色	明赤褐色
5	CJ－14	2	体部	ナデ	縄文(LR)		明赤褐色	明赤褐色
6	CJ－14	2	体部	ナデ	縄文(LR)		暗赤褐色	極暗赤褐色
7	BE－12	1	体部	ナデ	縄文(LR)		暗褐色	褐色
8	BΓ－13	2	体部	ナデ	縄文(LR)		黒褐色	灰褐色

第8図　田中遺跡出土遺物Ⅲ

色処理されている。

壺（第7図7）

頸部から口縁部にかけての破片である。頸部は外反しながら口縁部にいたり、内弯気味に外反する。頸部と口縁部の境には、わずかに稜がみられる。内外面の器面調整は、摩滅のため不明である。

甕（第7図8～10）

甕1（9）

頸部で「く」字状に屈曲して口縁部で外反する。体部はふくらみ、球形を呈する。最大径は、

体部ほぼ中央部にある。底部は平底である。外面の器面調整は、口縁部から頸部にかけて横ナデであり、体部は全体にヘラケズリが施されているが、ヘラミガキの痕跡も認められ、体部上半には刷毛目も認められる。内面の器面調整は、口縁部から頸部にかけて横ナデであり、体部はヘラナデである。

甕2（8）

頸部で「く」字状に屈曲して口縁部で外反する。体部はふくらみ、球形を呈する。最大径は、体部ほぼ中央にある。底部は欠いており不明である。外面の器面調整は、口縁部中央に横方向に一本の沈線が巡っており、沈線の上は横ナデ、下はヘラミガキが施されているが、明確でない。体部は横方向のヘラケズリである。内面の器面調整は、口縁部から頸部にかけて横ナデ、体部はヘラケズリである。

甕3（10）

頸部で「く」字状に屈曲して口縁部で外反する。頸部に軽い段がある。体部下半から底部にかけて欠くが、体部はあまりふくらまず、長胴形になるものと思われる。最大径は体部にある。外面の器面調整は、口縁部から頸部にかけて横ナデ、体部は刷毛目である。内面の器面調整は、口縁部から頸部にかけて横ナデ、体部は横方向のヘラナデである。

甑（第7図11）

複合口縁であるが、その後調整を受け不明瞭である。体部からやや内弯気味に立ち上がり、口縁部は急に外反してひらく鉢形を呈する。底部は丸味を帯び、中央部には径2.5cmの甑孔1個をもつ。焼成前に孔を穿っているが、その後、孔の周辺をナデで調整している。外面の器面調整は、口縁部から底部にかけてヘラミガキであるが、あまり明確なものではない。内面の器面調整は、口縁部から体部にかけてヘラミガキで、底部の孔周辺はヘラナデが施されている。

須恵器（第8図9）

須恵器の出土は、土師器に比して著しく少なく、そのほとんどは破片である。図上復元できるのは1点のみである。

甕の底部から体部下半までの破片である。内外面には、平行タタキ目がみられ、内面の底部は横ナデが施されている。

赤焼土器（第8図10）

高台付坏である。坏部は製作にロクロを使用しており、底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。器高は低く皿状を呈する。底部は、回転糸切り技法によって切り離され、高台が剥落した痕跡がみられる。

中世陶器

1点出土している。大甕の体部破片と思われる。内外面の器面調整は、横ナデである。色調

は、内外面とも暗赤褐色を呈しており、粗砂粒が胎土に混入している。

〈石製品〉

砥石（第7図11）

石材は砂質泥岩で、最大幅3.4cm、厚さ1.6cm、現存最大長5.2cmであり、短冊形を呈する。使用面は5つある。

(4) 考察

積み土遺構

調査区のＢＥ・Ｆ－11・12グリットで確認され、全体的な拡がりは、東側、・西側では調査区外にも延びており、確実な平面形は把握できなかったが、ＢＪ－10、ＢＫ－13、ＢＩ－15グリットで粘土が切れる層を検出しており、東西に延びる可能性がある。この積み土遺構は、高い所で1.7m、低い所で1.3mあり、第Ⅳ層上面から粘土が水平に9層堆積していることから、人為的に構築されたものである。その目的は現在のところ不明である。構築年代は、第Ⅳ層が堆積した後構築されたもので、第Ⅳ層中から南小泉式の甕（第7図9）が出土していることから、それより古いものではないと思われる。

出土遺物

〈弥生土器〉

口縁部資料は2点あり、第8図2　は、頸部が屈曲する甕形土器の破片で、口唇部に縄文が施されているものである。これと類似したものは、仙台市船渡前遺跡（宮教委:1977）で大泉式の土器に伴っており、村田町北沢遺跡(宮教委:1978)では円田式の土器に伴って出ていることから、大泉式～円田式の土器に伴う甕形土器と思われる。（第8図1）は、口縁部がやや内弯する壺形土器の破片で、細い沈線が横位に走っているものである。これと類似したものは、蔵王町大橋遺跡（藤沼:1974）などで出ており、円田式のものと思われる。（第8図3～8）は、体部破片で縄文の地文のみのものであり、これらの編年的位置は不明である。

〈土師器〉

図上復元したものは坏6点、甕3点、壺1点、甑1点である。これらの土師器の分類と編年的位置を考えていく。

坏は次のように分類される。

Ⅰ・ロクロ不使用	a・内面黒色処理なし	第7図1・2
	b・内面黒色処理あり	第7図3・4
Ⅱ・ロクロ使用	回転糸切り	第7図5・6

Ⅰa類は口縁部が外傾し内側に稜をもつ丹塗土器と口縁部がほぼ直立するものである。類似したものは、仙台市南小泉遺跡（仙台市教委:1978）、多賀城市新田遺跡（小笠原・阿部:1968）仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（宮教委:1974）などで出土しており、南小泉式のものとされている。

Ⅰb類は、体部上半が強く屈曲し、内外面に稜をもつものと口縁部がやや外反し、体部には段、沈線が巡らないものとがあり、内面は黒色処理されている。類似したものは、仙台市栗囲遺跡（仙台市教委:1975）、蔵王町塩沢北遺跡（藤沼:1971）、志波姫町糠塚遺跡（宮教委:1978）などで出土しており、栗囲式あるいは国分寺下層式と考えられる。

Ⅱ類は、いずれも製作にロクロを使用して、内面が黒色処理されているのである。底部は回転糸切り技法によって切り離されている。塩釜市表杉ノ入貝塚（加藤：1954）、志波姫町糠塚遺跡などで類似したものが出ており、表杉ノ入式と考えられる。

甕

甕は次のように分類される。

Ⅰ・体部球形	第7図8・9
Ⅱ・体部長胴形	第7図10

Ⅰ類は、最大径が体部にあり、器高より小さいものである。仙台市南小泉遺跡（仙台市教委：1978）、多賀城市新田遺跡（小笠原・阿部:1968）、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（宮教委:1974）などで類似したものが出ており、南小泉式のものと考えられる。

Ⅱ類は、本部が長胴形になるもので、角田市住社遺跡（志間:1958）、白石市北無双作遺跡（白石高郷土研究部：1969、白石市:1976）など類似したものが出ており、住社式以降のものと考えられる。

壺

口縁部から頸部までの破片で不明である。

甑

複合口縁で、口縁部がひらく鉢形を呈し、底部に甑孔1個をもつものである。類似したものは、仙台市南小泉遺跡（仙台市教委:1978）、名取市西野田遺跡（宮教委：1974）などで出ている。西野田遺跡出土の甑は、外面に刷毛目が施されており、南小泉式以前のものとされているが、本遺跡の甑には刷毛目はみられず、また明瞭な複合口縁を呈するものでないため南小泉式のものと考えられる。

須恵器

所属年代は不明である。

〈赤焼土器〉

製作にロクロを使用した高台付坏である。口径14.5cm、底径6cm、高さ3.5cmで、坏部は皿状を呈している。高台は剥落している。底部は回転糸切り技法によって切り離されている。これと類似したものは多賀城跡（岡田茂弘也：1970）、白石市植田前遺跡（加藤:1972）、蔵王町下原田遺跡（藤沼:1971）などで出土しており、多賀城では須恵系土器（岡田、桑原：1974）とされており、植田前遺跡、下原田遺跡ではロクロ使用で非内黒坏としてとらえられているが、赤焼土器と須恵系土器の比較は現在のところ困難であり、年代は不明である。しかし、表杉ノ入式に伴うものとされており、一般的に平安時代のものと思われる。

〈中世陶器〉

大甕の体部破片と思われる。年代は不明であるが、付近に中世の窯跡である東北古窯跡（白石市:1976）があり、関連するものと思われる。

2. 谷津川遺跡

(1) 基本層序

基本的に第Ⅰ層から第Ⅳ層まで確認した。しかし、谷津川付近の地区では層の乱れがある。Ⅰ層は表土で暗灰黄色砂質シルト層、Ⅱ層は褐色砂質シルト層、Ⅲ層は暗褐色粘土質シルト層、Ⅳ層は黒褐色粘土質シルト層で、谷津川付近の地区を除いていずれも調査区全体に水平に堆積している。遺物はⅠ層からⅢ層まで出土しており、弥生時代のものから中世までの遺物が混在しており、各層は再堆積したものと思われる。焼土遺構はⅡ層上面で確認されている。

(2) 発見遺構

焼土遺構

〈位置と確認〉

BR－15グリットのⅡ層上面で確認され、重複はない。

〈平面形・規模〉

1.1m×1.3mの方形を呈し、深さは確認面から約30cmである。東西両壁に張り出し部をもつ。東壁では長さ約30cm、幅約30cm、西壁では長さ約20cm、幅約20cmの張り出しである。東西の張り出し部を結んだ底面中央部には、深さ約30cm～7cmの溝が1本走っている。壁はやや急に立ち上がり、張り出し部を除く壁は、火熱を受け赤変し固くしまっている。底面は火熱を受けた痕跡は認められない。

〈堆積土〉

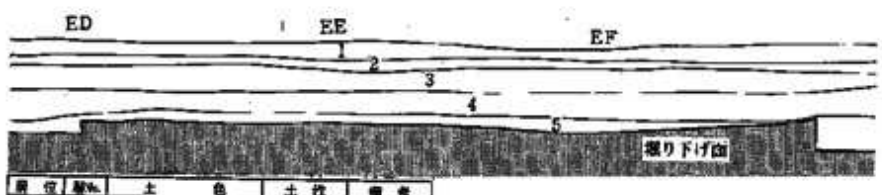
3層認められる。

Ⅰ層…黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト層に、暗褐色(7.5YR$^{3}/_{3}$)シルトが斑状に混入している。ほぼ全域に堆積している。

Ⅱ層…黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）シルト層、壁沿いに堆積している。焼土が混入している。

Ⅲ層…木炭層である。厚さ約5cmで底面直上に堆積している。

〈出土遺物〉



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗灰黄色(2.5Y 3/3)	砂質シルト	炭 1
第Ⅱ層	2	褐色(10YR 3/3)	砂質シルト	
第Ⅲ層	3	暗褐色(10YR 3/3)	粘土質シルト	酸化土含む
第Ⅳ層	4	黒褐色(10YR 3/2)	粘土質シルト	

第9図　谷津川遺跡ED～F－16グリッド西壁断面図

3層木炭層より土師器細片1点、古銭2枚（摩滅が激しく判読不可能）火葬骨片(注)が出土した。

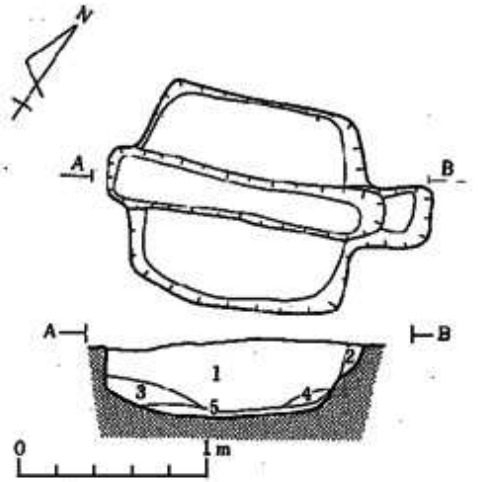
(3) 出土遺物

量は少ないが、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器が出土している。ほとんどが破片である。

弥生土器（第11図1～6）

全体で6点ある。口縁部資料は2点であり、その他は体部破片である。

2は甕形土器の口縁部から頸部の破片である。頸部が屈曲し、口縁部は外反する。口唇部には縄文（LR）が施されて、頸部には綾絡文が横位に施されている。1は壺形土器の口縁部から頸部の破片である。頸部で屈曲し、口縁部は内弯するものである。一本工具による細い沈線で山形文を描いている。4は鉢形土器の体部破片である。一本工具による細い沈線が横位に走り、沈線と沈線の間には縄文が残っている。3は壺形土器の体部破片で、一本工具による太い沈線で変形工字文状を描いている。5、6は体部破片で、縄文（LR）の地文だけが施されている。



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(7.5 YR 3/1)	シルト	暗褐色(7.5YR 3/1)シルトが混入
	2	黒褐色(7.5 YR 3/1)	シルト	焼土含む
第Ⅱ層	3	黒褐色(7.5 YR 3/1)	シルト	焼土含む
	4	黒褐色(7.5 YR 3/1)	シルト	木炭・焼土混入
第Ⅲ層	5	黒褐色(7.5 YR 3/1)	シルト	木炭混入

第10図谷津川遺跡焼土遺構

(注) 札幌医科大学講師百々幸雄氏の鑑定によれば、火葬骨片は人骨であるが、細片であり性別・年令は不明とのことである。

土師器

坏、甕、小形手捏土器があるが、ほとんどが破片で図上復元したのは小形手捏土器のみである。

小形手捏土器（第11図7）

口径4.5cm、底径3.5cm、高さ2.7cmの小形のものである。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は平底である。摩滅が激しく、器面調整は不明である。

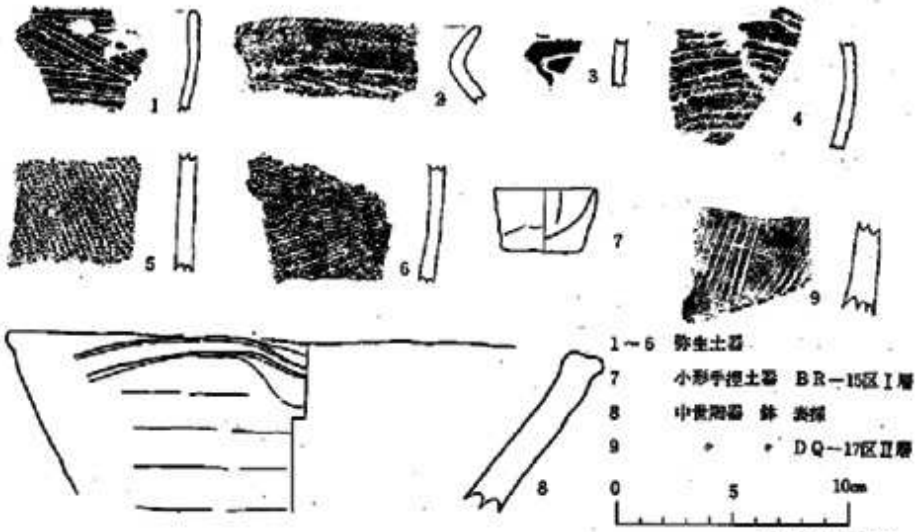
須恵器

全て破片で、甕の体部破片、坏の口縁部破片がある。

中世陶器（第11図8・9）

8点出土している。全て破片である。器形は、大甕と鉢とがある。大甕は体部破片で内外面

の調整はナデである。色調はいずれも暗赤褐色を呈しており、同じ色調の斑点が内部から噴きだしたように見えるのもある。鉢は擂鉢で口縁部と体部の資料があり、口縁部は片口をもち、内面に筋目がないもの（8）と、体部は内面に筋目があるもの（9）とがある。



（弥生土器観察表）

No	地区	層	部位	調整 内面	調整 外面	文様表現技法	色調 内面	色調 外面
1	DB－16	4	口縁部	ナデ	ミガキ	横位沈線・斜位沈線	黒色	黒色
2	BQ－16	3	口縁部	ナデ	ナデ	口唇部縄文・胴部縄文	灰褐色	黒色
3	BQ－16	3	体部	不明	不明	横位沈線・弧状沈線	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色
4	BS－16	3	体部	不明	不明	横位沈線・縄文	明赤褐色	浅黄橙色
5	BB－16	2	体部	ナデ	縄文（LR）		黒色	黒色
6	BQ－16	3	体部	ナデ	縄文（LR）		にぶい赤褐色	暗赤褐色

第11図 谷津川遺跡出土遺物

(4) 考察

焼土遺構

平面形は方形を呈し、2つの張り出し部があり底面には溝が1本張り出し部を結んで走っているものである。張り出し部を除く壁は火熱を受け赤変し固くしまっているが、底面は焼けておらず、木炭が堆積している。出土遺物は古銭（判読不明）、火葬骨片などが出土している。平面形で方形を呈している該種遺構は、亘理町宮前遺跡（宮教委:1975）、田尻町天狗堂遺跡（佐藤・手塚:1978）、瀬峰町長者原Ⅱ遺跡（高橋:1979）などで出ており、張り出し部をもつものは丸森町中平遺跡（太田:1979）で出ているが張り出し部は1つだけである。したがって県内に於いて本遺跡のような該種遺構は知られていない。県外で類似したものとして奈良県宇陀郡谷畑遺跡（白石・田坂：1974）で平面形が方形で2つの張り出し部をもつものが8基発見されており、いずれも長さ1m～1.5m、幅0.7m～1.2m程の長方形を呈し、底面には2つの張り出

し部を結んで溝が1本走っているもので壁面は火熱を受けており、火葬骨片が出土しているものである。張り出し部は煙道と考えられ、伴出した陶器より室町初期から末期にわたる火葬施設とされている。以上のことから本遺跡の場合も火葬骨片が出土しており、谷畑遺跡の場合と同様な形態・構造を示していることから中世の火葬施設の可能性が強い。

出土遺物

〈弥生土器〉

口縁部資料2点である。第11図2は頸部が屈曲し口縁部が外反する甕形土器の破片であるもので、口唇部に縄文が施され、頸部に綾絡文が施されているものである。これと類似したものは仙台市船渡前遺跡（宮教委:1977）で大泉式の土器と伴って出ており、村田町北沢遺跡（宮教委：1978）では円田式の土器に伴って出ていることから、大泉式から円田式の土器に伴うものと思われる。

第11図1　は口縁部が内弯する壺形土器の破片で、沈線による山形文を構成しているものである。これと類似したものは、蔵王町大橋遺跡（藤沼:1971）、蔵王町欠遺跡（白鳥:1971）、名取市西野田遺跡（宮教委:1974）などで出ており、円田式のものと思われる。

第11図4　は鉢形土器の体部破片で、仙台市南小泉遺跡（仙台市教委：1978）から類似したものが出ており、桝形式と考えられる。（第11図3）は変形工字文的な文様構成をするもので、角田市鱸沼遺跡（志間:1971）、名取市西野田遺跡（宮教委:1974）などで類似したものが出ており、大泉式と考えられる。　第11図5・6　は体部破片で縄文の地文だけのものであり、編年的位置は不明である。

〈土師器〉

小形手捏土器

類似したものは仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（宮教委:1974）などで出ている。年代は不明である。

〈須恵器〉

破片のみで年代は不明である。

〈中世陶器〉

大甕は全て体部破片であり、詳細は不明であるが、白石市東北古窯跡（白石市:1976）で類似したものが出ている。東北古窯跡は、常滑系のもので鎌倉時代中・後期から室町時代前半にかけてのものと考えられている（藤沼:1976）。本遺跡のものも同じようなことが言えよう。

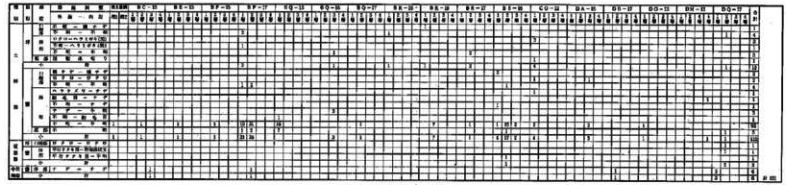
擂鉢は、口縁部に片口が1個あり内面に筋目がないものと体部破片で内面に筋目があるものとがある。内面に筋目がないものは、三本木町多高田窯跡（藤沼地:1978）で出ており、鎌倉時代後期のものと推定されている。内面に筋目があるものは、焼成は極めて良好で胎土に粗い砂粒も混入しておらず、他の破片と若干様相が異なっており、筋目がないものより新しいもの

と考えられる。

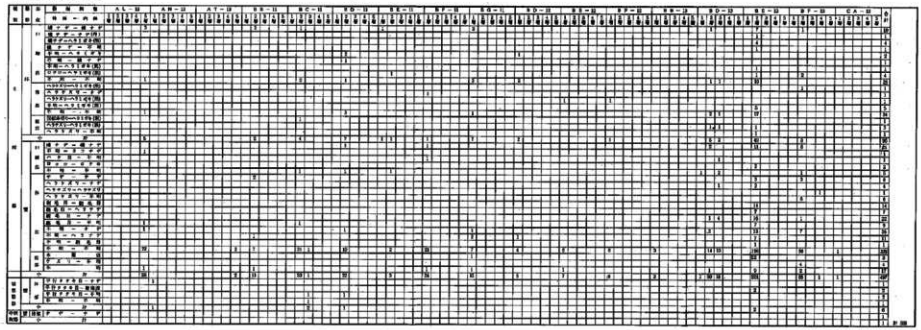
Ⅳ　まとめ

1. 田中・谷津川遺跡は斉川が形成した自然堤防上に立地している。
2. 発見された遺構として田中遺跡から積み土遺構、谷津川遺跡からは焼土遺構1基が発見されたが、積み土遺構については調査区外にも延びており、十分な調査もできず性格は不明である。焼土遺構については火葬骨片が出土していることから中世の火葬施設の可能性がある。
3. 出土遺物は、ほとんど全て表土および堆積層から出土したものである。弥生土器、土師器（古墳時代から平安時代までのもの）、須恵器、赤焼土器、中世陶器、その他、砥石が1点出土している。また、人骨（頭部）が1点単独で出土した。これらのことから付近に、関連する遺構の存在が考えられる。
4. このように田中・谷津川遺跡からは弥生時代から中世までの遺物が出土しており、斉川流域には両遺跡とほぼ同年代の遺跡もあり、両遺跡を含めた斉川流域の沖積低地では、長い間人々が生活していたことがわかる。

谷津川遺跡破片集計表



田中遺跡破片集計表



〈引用参考文献〉（五十音順）

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14　東北史学会

氏家和典・大場恒一（1954）：「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史』8　東北史学会

太田昭夫（1979）：「中平遺跡－昭和53年度宮城県文化財発掘調査略報－」『宮城県文化財調査報告書』第57集　宮城県教育委員会

小笠原好彦・阿部義平（1968）：「宮城県新田遺跡の土師器」『考古学雑誌』54－2　日本考古学会

岡田茂弘也（1970）：「宮城県多賀城跡調査研究所年報1970　多賀城跡－昭和45年度発掘調査概報－」宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所

岡田茂弘・桑原滋郎（1976）：「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅰ　多賀城跡研究所

加藤道男（1972）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－植田前遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第25集　宮城県教育委員会

加藤　孝（1954）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』Ⅴ　宮城学院女子大学

小井川和夫・高橋守克（1977）：「宮城県対島遺跡出土の土器」『宮城史学』5号　宮城教育大学歴史学概究会

小井川和夫・手塚　均（1978）「糖塚遺跡－昭和52年度宮城県文化財発掘調査略報」－宮城県文化財調査報告書」第53集　宮城県教育委員会

斎藤吉弘・真山　悟（1978）：「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集　宮城県教育委員会

佐藤好一・手塚　均（1978）：「天狗堂遺跡発掘調査概報」『田尻町文化財調査報告書』第1集田尻町教育委員会

志間泰治（1958）「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』43－4　日本考古学会

志間泰治（1971）：『鹿沼遺跡』　宮城県教育委員会、東北電力株式会社

白鳥良一（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－欠遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会

白石市史編さん委員会（1976）：『白石市史』別巻　白石市

白石太一郎・田坂正昭（1974）：「槻原町萩原、谷畑中世墓地の調査」『青陵』No. 24　橿原考古学研究所

高橋守克（1979）：「長者原Ⅱ遺跡」『瀬峰町文化財報告書』第2集　瀬峰町教育委員会

藤沼邦彦（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－大橋遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会

藤沼邦彦（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－塩沢北遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会

藤沼邦彦（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報－下原田遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会

藤沼邦彦（1976）：「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『研究紀要』第2巻　東北歴史資料館

藤沼邦彦他（1978）：「多高田窯跡調査報告書」『三本木町文化財調査報告書』第4集　三本木町教育委員会

宮城県白石高等学校（1969）：「斉川流域および北無双作遺跡の出土遺物について」『郷土研究部研究誌』15号　宮城県白石高等学校

宮城県教育委員会（1974）：「東北新幹線関係調査報告書Ⅰ－西野田遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第35集

宮城県教育委員会（1974）：「東北新幹線関係調査報告書Ⅰ－岩切鴫ノ巣遺跡－」『宮城県文化財報告書』第35集

宮城県教育委員会（1972）：「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第27集

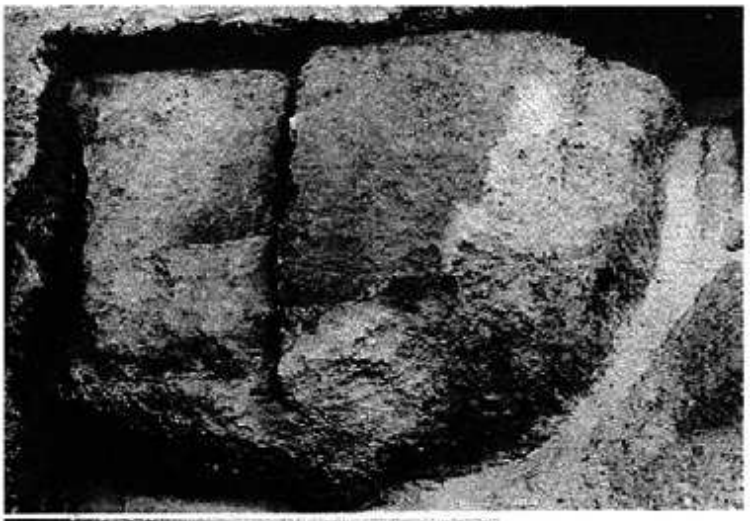
図　　版

田中遺跡近景

谷津川遺跡近景

田中遺跡作業風景

図版1



田中遺跡積み土遺構
（上から）

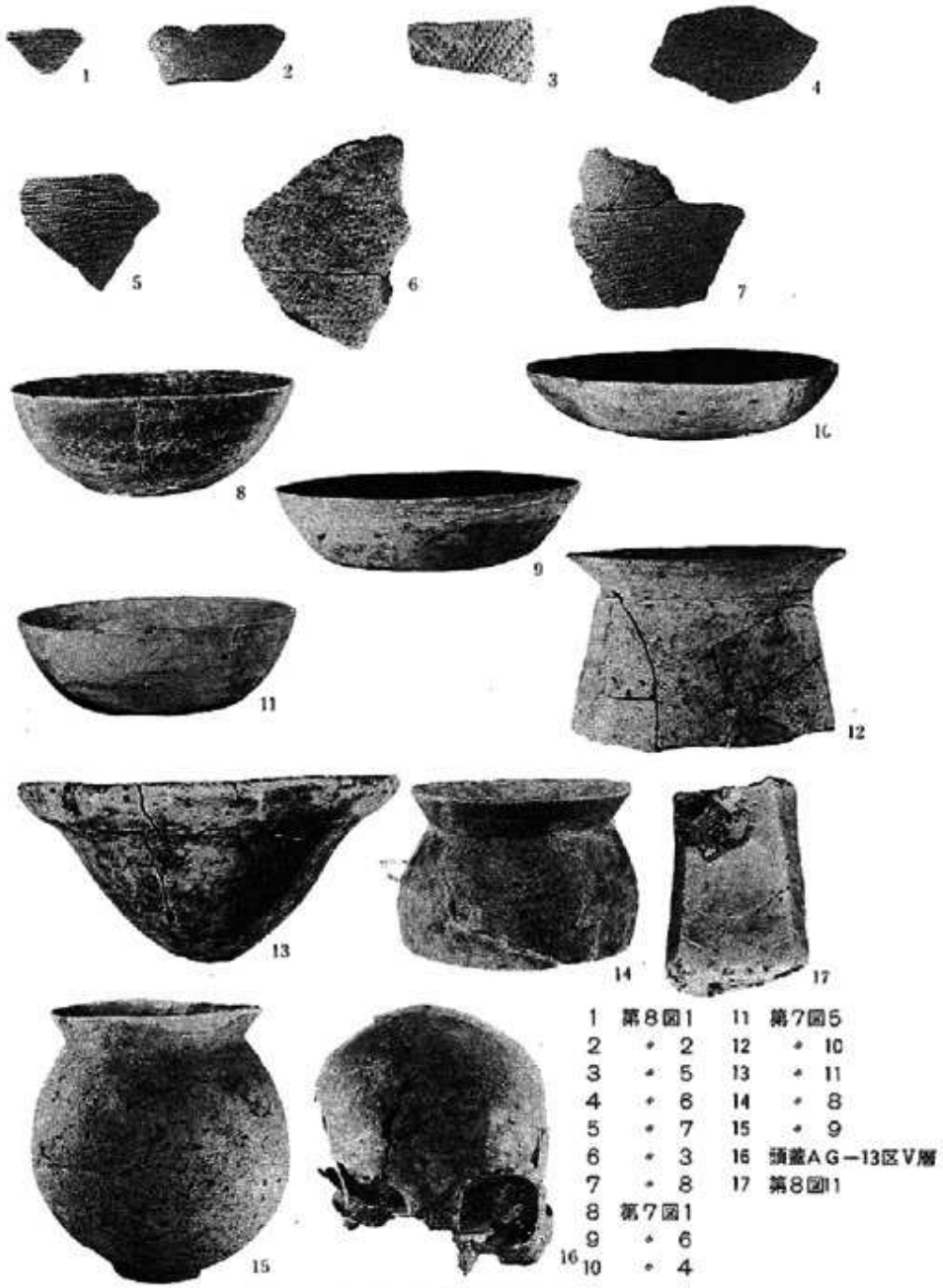
田中遺跡積み土遺構断面

田中遺跡土師器甕出土状況

田中遺跡土師器甕出土状況

田中遺跡土師器甕出土状況

図版3



1 第8図1
2 〃 2
3 〃 5
4 〃 6
5 〃 7
6 〃 3
7 〃 8
8 第7図1
9 〃 6
10 〃 4
11 第7図5
12 〃 10
13 〃 11
14 〃 8
15 〃 9
16 頭蓋AG－13区V層
17 第8図1

図版4　田中遺跡出土遺物

谷津川遺跡 焼土遺構

谷津川遺跡出土遺物
1～5　弥生土器
6～10　中世陶器
1　第11図1
2　第11図4
3　第11図3
4　第11図2
5　第11図5
6　第11図9
7　BC－13区Ⅲ層
8　第11図
9　DQ－17区Ⅰ層
10　〃

図版5

(4) 台ノ山遺跡（だいのやま）

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……53
Ⅱ　調査の方法と経過……57
1. 調査の方法……57
2. 調査の経過……57
3. 資料整理の方法……58
Ⅲ　調査の成果……61
1. 基本層位……61
2. 遺構の分布……61
3. 発見された遺構と遺物……65
(1) 竪穴住居跡とその出土遺物……65
(2) 掘立柱建物跡とその出土遺物……123
(3) 土壙とその出土遺物……126
(4) 溝状遺構とその出土遺物……130
(5) 石組炉跡……132
(6) 焼土遺構とその出土遺物……132
(7) 遺構以外の堆積土出土遺物……133
Ⅳ　遺構、遺物に関する考察と問題点……143
1. 縄文土器……143
2. 弥生土器……144
3. 土師器・須恵器……147
(1) 分類……147
(2) 組合せとその年代……161
(3) 土師器・須恵器に関する問題点……162
4. 土器以外の遺物について……168
5. 遺構の年代……169
6. 竪穴住居跡の考察と問題点……170
Ⅴ　まとめ……179

調査要項

遺跡名：台ノ山遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：06012）

遺跡記号：ＡＳ

所在地：宮城県柴田郡大河原金ヶ瀬新開台ノ山

調査対象面積：路線敷約6,300m²（発掘面積も同じ）

送電線鉄塔用地約250m²

調査期間：昭和47年9月5日～昭和48年1月23日

調査員：宮城県教育庁文化財保護室

技師　佐藤庄一

調査協力者：秦　昭繁　山形大学歴史研究会

Ⅰ　遺跡の位置と環境

台ノ山遺跡は国鉄東北本線大河原駅の西方約3km、柴田郡大河原町金ヶ瀬新寺字山鳥、金ヶ瀬字新開に所在している。

宮城県の西には奥羽山脈が南北に走り、その東麓はなだらかな斜面をもつ数多くの丘陵が東方に延びており、陸前丘陵と呼ばれている。この丘陵南端では、蔵王山麓から延びた高館丘陵、阿武隈山地の北方に角田丘陵がある。

大河原周辺の地形をみると、北部に高館丘陵、南部に角田丘陵、中央部に高館丘陵南端を開析した槻木低地がある。

本遺跡は高館丘陵から南東方に派生した丘陵上にあり、東側の村田盆地と西側の円田盆地、南側の槻木低地に狭まれている。

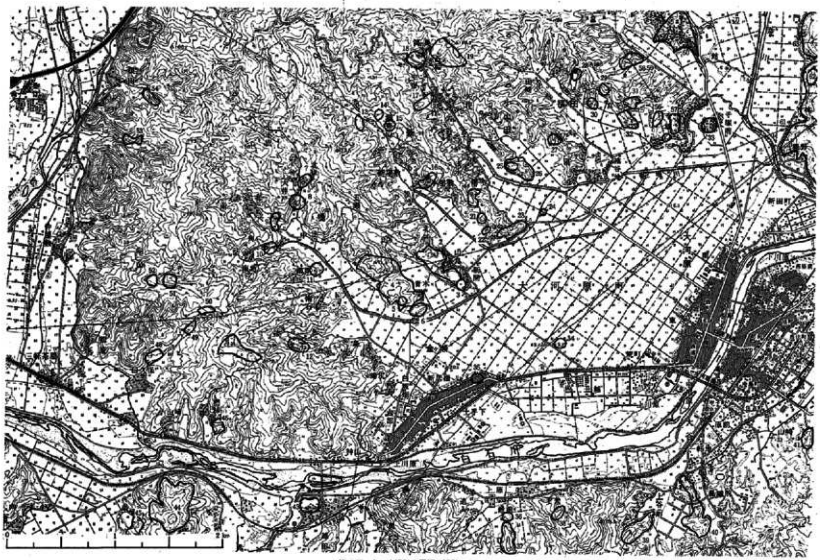
この丘陵は槻木低地に向って6つの舌状小丘陵が広がっており、この南側の舌状小丘陵末端部に本遺跡が立地している。遺跡の標高は30～40mで、平坦な面となっており、現状は畑地である。土師器、須恵器、石製模造品などの散布がみられる。

本遺跡周辺の遺跡をみると、縄文時代の遺跡としては青木遺跡・中遺跡・耳取遺跡・堤北遺跡・小山田落合遺跡・小山田遺跡（以上大河原町）の遺物包含地があり、すべて丘陵に立地している。また上川名貝塚をはじめとする早期後半～前期初頭の槻木貝塚群（柴田町）が北東方約10kmの舌状丘陵の末端部に位置している。弥生時代の遺跡としては鹿野山遺跡、鴻の巣遺跡深沢遺跡、見世前遺跡（以上村田町）の遺物包含地があり、すべて丘陵に立地している。古墳時代の遺跡としては金ヶ瀬遺跡、新開遺跡、山の神遺跡、牛戸山遺跡（以上大河原町）の遺物包含地があり、金ヶ瀬遺跡は自然堤防に、新開遺跡、山の神遺跡、牛戸山遺跡は丘陵斜面に立地している。また横穴古墳では、青木横穴古墳群、北屋敷横穴古墳群、薬師横穴古墳郡、坂下横穴古墳群、馬取前横穴古墳群（以上大河原町）があり、すべて丘陵斜面に立地している。奈良、平安時代の遺跡としては新開遺跡、山の神遺跡、牛戸山遺跡、耳取遺跡、大井戸遺跡（以上大河原町）の遺物包含地があり、丘陵に立地している。中世以降の城館としては新開館跡、平城跡、小山田館跡（以上大河原町）があり、すべて丘陵に立地している。なお新開館跡については、台ノ山遺跡と同地点の舌状小丘陵の末端部に立地している。

番号	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	06012	台ノ山遺跡	丘陵	集落跡	縄文(早～晩)弥生古墳・奈良・平安
2	06018	新開館跡	丘陵	城館	中世
3	06011	新開遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳・奈良・平安
4	06042	平城跡(青木館)	丘陵	城館	館倉
5	06038	青木横穴古墳群	分離丘陵	横穴古墳	古墳
6	06039	青木遺跡	分離丘陵	包含地	縄文
7	06027	大井戸遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
8	06044	北屋敷横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
9	06026	中遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(後)
10	06045	神上横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古	古墳(後)
11	06025	耳取遺跡	丘陵裾	包含地	縄文・奈良・平安
12	06007	滝の沢遺跡	分離丘陵	包含地	古墳・奈良・平安
13	06028	馬北遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文(後)
14	06030	洞芳山横山古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
15	06029	洞芳山遺跡	丘陵斜面	包含地	
16	06013	幕師横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
17	06031	五輪遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
18	06001	小山田宿合遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(後・晩)
19	06008	小山田遺跡	丘陵	包含地	縄文(後)
20	06014	坂下横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
21	06019	牛戸山遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳・奈良・平安
22	06018	山の神遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳・奈良・平安
23	06032	馬取前横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
24	06017	天神堂遺跡	沖積平野	包含地	古墳・奈良・平安
25	06015	道上横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
26	06016	小山田城跡(小山田城跡)	丘陵	城館	室町
27	06022	屋敷敷横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
28	06033	福田古墳	丘陵中腹	墳	歴倉
29	06020	千家B横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳
30	06021	山下横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
31	06005	打越横穴古墳群	分離丘陵	横穴古墳	古墳(後)
32	06037	千家館跡	丘陵	城館	

番号	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
33	06005	嶋越古墳	分離丘陵	前方後円墳	古墳
34	06034	薬師堂遺跡	沖積平野	祠	歴倉
35	06040	金ケ瀬遺跡	自然堤防	包含地	古墳
36	06023	館前遺跡	丘陵裾	包含地	縄文(中)
37	06041	大谷城跡	丘陵	城館	
38	06024	上大谷横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳・奈良
39	06002	大谷上横穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古墳(後)
40	06039	見城ケ越跡	丘陵	城館	
41	06043	梅王前遺跡	丘陵裾	包含地	平安
42	06035	中屋敷前遺跡	沖積平野	包含地	奈良・平安
43	02205	堀田館跡	台地	城館	中世
44	02195	冠木館跡	丘陵	包含地・城館	縄文(中)中世
45	02152	内屋B遺跡	丘陵斜面	集落跡	奈良・平安
46	05117	櫻林遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
47	05097	大久保遺跡	丘陵	包含地	縄文(中・後)
48	05001	向上遺跡(日ケ久保遺跡)	丘陵裾	包含地	古墳・奈良・平安
49	05088	桜ケ沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(後)奈良・平安
50	05017	日ケ久保人遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・奈良・平安
51	05096	東久保遺跡	丘陵斜面	包含地	平安・奈良
52	05098	大平山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
53	05102	定矢ノ口遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(後)奈良・平安
54	05116	一本木遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中・後)
55	07020	千家(千人家)古墳	丘陵中腹	円墳	古墳
56	07026	日ノ崎遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳・奈良・平安
57	07019	千家山古墳	丘陵頂	前方後円墳	古墳
58	07027	日向前遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・古墳・奈良・平安
59	07028	寄合横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)
60	07029	玄番館跡(沼尻館跡)	丘陵	城館	中世
61	07016	上野山古墳群	丘陵	円墳	古墳(後)
62	07031	王塚古墳	丘陵中腹	円墳	古墳(後)
63	07050	堀野山遺跡	丘陵	包含地	縄文(中・後)弥生

第1表 遺跡地名表



第１図　台ノ山遺跡と周辺の遺跡

Ⅱ　調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査は東北新幹線の本線敷を対象として行なったが、中途にあいて、新幹線工事のための送電用鉄塔移転にともない、丘陵東斜面のA・B地点を追加調査した。

本線敷については、新幹線中心杭293.860km（仮称原点A）と293.880km（原点B）を一結ぶ直線を基準とし、それに直交する直線を設け、3m単位のグリットを組んだ。そして、原点Aの南側を40区、北側を41区、東側をH区、西側をI区とし、それぞれ延長してグリッド名を付した。

A地点については、東北電力白石線鉄塔No.61の中心杭を原点にして、これを通る東－西、南－北の直交する基準線を設定し、原点から北向き時計回りにA-1区～A－4区とした。B地点については、鉄塔No.62の中心杭を原点として、A地点と同様に基準線を設け、北向き時計回りにB－1区～B－4区とした。

発掘の方法としては、原則として5グリッドを単位としたトレンチを一列おきに設定した。その後、発掘区の表土を掘り下げ、遺跡における遺構、遺物がどのような分布状況にあるか検討した。その結果、本線敷に関しては丘陵の北、南側斜面を除いてはほぼ全面発掘することにした。また、A・B地点についても全面発掘することにした。遺構の発掘上の留意点としては原則として分層的発掘法によって行なった。遺構が発見された時、遺構の新旧関係、遺物の編年的位置づけなどを明確にするため、どの層から確認されたかを留意した。しかし、各遺構間に距離があったり、撹乱のため層位的に区別できなかったために、遺構掘り込み面と遺構確認面が一致しなかった。遺構の廃絶後の状況については、どのような過程を経ながら堆積土が埋まったかを検討するために、層の分布、厚さ、堆積の仕方などについて畔を残して観察を加えた。しかし、色調などの観察に個人差が生じたため、廃絶後の状況について考察は行い得なかった。遺構がどのような方法で構築されたかを調べるために、精査終了後、遺構の床面下を掘り下げて観察した。実測図の作成については、発掘調査した部分に遣り方を設定し、$^{1}/_{20}$の平面図を作成し、レベルを記入した。また、必要に応じて$^{1}/_{20}$の断面図を作成した。

2. 調査の経過

発掘調査を開始したのは9月5日である。調査は秦昭繁氏、山形大学歴史学研究会の協力を得て、宮城県教育庁文化財保護室が担当して始まった。遺跡の範囲内で路線敷となるのは、舌状小丘陵末端部の平坦面と、ゆるやかな傾斜面である。その調査対象面積は東西45m×南北140m、6300m^{2}であり、そのうち3,450m^{2}を発掘調査した。調査の全容がほぼ明らかになった11

月18日、調査成果を一般に公開するため、現地説明会資料を印刷し、発掘現場において説明会を開催した。この段階で、古墳時代、平安時代の竪穴住居跡が20軒以上発見されていた。さらに12月にはいり、遺構の一部については調査が終了した。路線敷内の遺構の精査と併行しながら、新幹線工事のための送電用鉄塔の移転にともなう丘陵の南、東斜面の二地点250 m^2を追加調査した。調査終了は翌年の1月23日であった。

3. 資料整理の方法

イ. 遺構の整理

発掘現場で作成した平面図（$^1/_{20}$）、断面図（$^1/_{20}$）、遺構記載カードをもとにして、遺構の整理を進めた。住居跡の平面形・規模・カマドの各部分の名称は文化財保護課が他の遺跡で使用してきたものと基本的に同じである。

遺構の番号については、発掘現場において通しナンバーを付した。しかし、掘り下げてみて遺構とならなかった場合には、欠番としている。

図版については、掘立柱建物跡は$^1/_{80}$、住居跡・土壙・溝状遺構・石組炉跡・焼土遺構は$^1/_{60}$で作成している。

ロ. 遺物の整理

遺物の作業手順については、文化財保護課が従来から実施しているものと基本的に同じである。整理方法については、作業手順に従い整理作業を行ない、資料化する場合には次の点に注意した。

① 土器の実測図の作成は、原則として完形あるいは残存部が$^1/_4$以上の土器を対象としている。底部の切り離し痕、木葉痕のあるものは拓本を付している。

② 製作、接合方法、底部切り離し、内外面の器面調整技法はできる限り図化した。実測図に使用した製作技法の表現は岩切鴻ノ巣遺跡で使用したものを基準にしている。

③ 土器の実測図は実物大で作成した。また、残存部が$^1/_4$以下の土師器・須恵器は遺構、地区層位ごとに破片点数を調べた。その後、各遺構、層位ごとに器形・部位・器面調整別に統計処理を行ない、末尾に被片集計表として一括した。

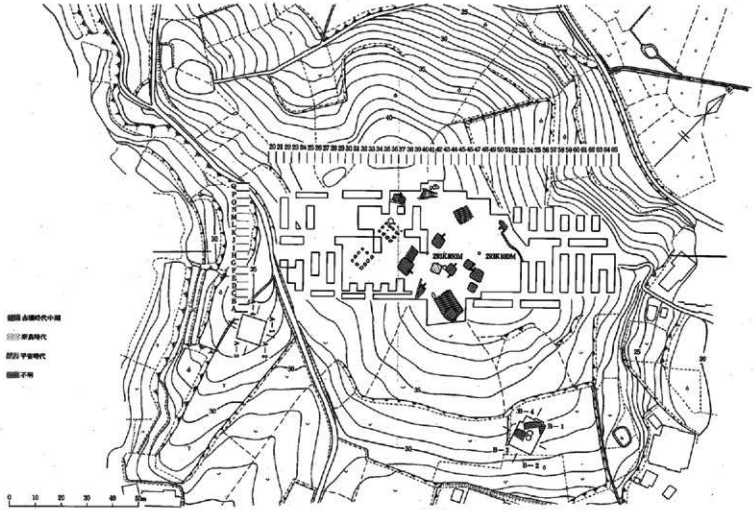
④ 縄文土器、弥生土器の整理方法については、すべて小破片であるため実測図の作成はできなかった。器面文様の明らかなものは拓本をとっている。また各遺構・層位・文様によって統計処理を行ない、破片集計表をつくった。

⑤ 石器・石製模造品・鉄製品などについては実物大で実測図を作成した。

⑥ 図版の作成については、遺構から出土した遺物は遺構ごとに、各地区層位から出土したものは堆積土として一括して図版を作成した。遺物の図版は次の縮尺で作成した。

$^1/_3$…縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器

$^1/_2$…石器、石製模造品、鉄製品



第２図　台ノ山遺跡グリッド配置図

Ⅲ　調査の成果

1. 基本層位

〔本線敷〕

調査区域内における層位を観察すると、表土から地山面までの堆積層には基本的に3枚の層が認められる。それらは地区によって部分的に相違がある。

第Ⅰ層は表土の明褐色微砂層である。第Ⅱ層は淡褐色土層で調査区の北・南側の傾斜地に分布し、2枚に細分される。地山に沿って傾斜している。第Ⅲ層は黒褐色土層で、南側に部分的に堆積し、2枚に細分される。第Ⅱ・Ⅲ層とも部分的に撹乱を受けている。第Ⅳ層は地山である。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層中には、縄文時代から奈良、平安時代までの各時期の遺物を含んでいる。

遺物は層理面に対して、不規則な状態で出土しており、二次堆積と考えられる。遺構は住居跡16軒、掘立柱建物跡3棟、焼土遺構4基、石組炉跡1基、溝状遺構1本、土壙11基が検出され、地山面で確認した。

〔A地点〕

表土下は地山である。表土は明褐色微砂層で、厚さは10～20cmである。遺構は発見されず、遺物は表土から土師器坏破片が1点出土した。

〔B地点〕

表土から地山面までの堆積層には、基本的に3枚の層が認められた。第Ⅰ層は表土の明褐色微砂層、第Ⅱ層は褐色粘質微砂層で2枚に細分される。第Ⅲ層は1暗褐色粘質微砂層である。いずれも、地山の傾斜に沿って堆積している。第Ⅰ～Ⅲ層中には縄文時代から奈良、平安時代までの遺物を含んでいる。遺構は住居跡3軒、土壙2基検出され、地山面で確認した。

2. 遺構の分布

今回の調査で発見された遺構には、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、土壙1基、石組炉跡1基、焼土遺構4基、溝状遺構1本がある。これらの遺構は舌状小丘陵の平坦部から緩斜面にかけて分布している。

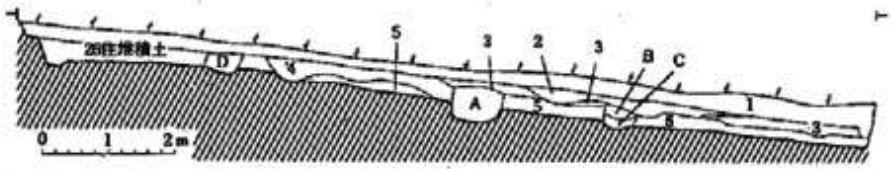
竪穴住居跡は、その位置より、平坦部を中心として次の4地区に分布している。

○　ほぼ平坦部に位置している（2住、3住、4住、5住、6住、8住、9住、10住、13住、15住、20住、20B住）。

○　平坦部から北緩斜面に移行する地区に位置している（11住）。

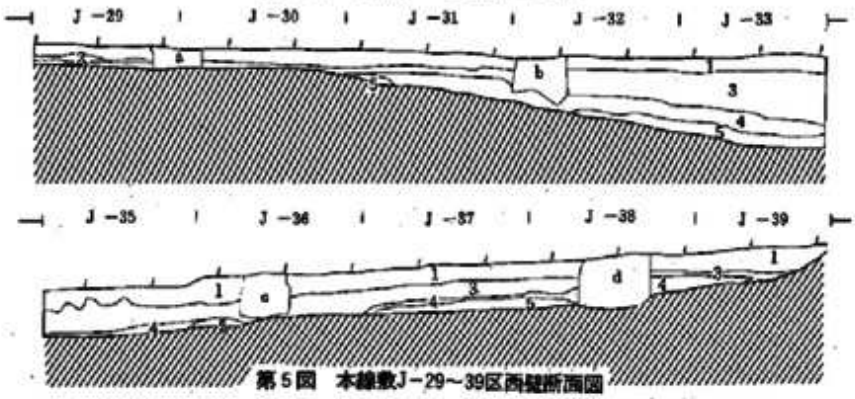
○　平坦部から南緩斜面に移行する地区に位置している（1住、7住、17住）。

第3図　A地点Ⅰ・2区東壁断面図

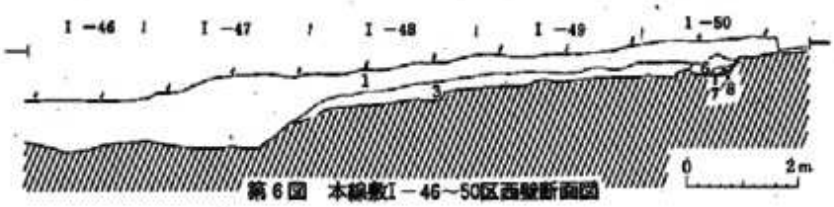


層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	備考	第3層	5	暗褐色粘質微砂層	本炭・焼土を少量含む	
第1層	1	明褐色微砂層		表土		A	黄褐色粘質微砂層	5cm横後のあらい粘土粒を多く含む　遺物少量含む	撹乱
	2	明褐色粘質微砂層				B	暗茶褐色粘質微砂層	本炭・焼土を少量含む	
第2層	3	黄褐色粘質微砂層	1cm～5cmのローム粒を多く含む			C	暗茶褐色粘質微砂層	Bに比し、本炭・焼土が少い	
	4	褐色粘質微砂層	本炭・焼土・遺物を含む			D	暗褐色微砂層		

第4図　B地点Ⅰ・2区東壁断面図



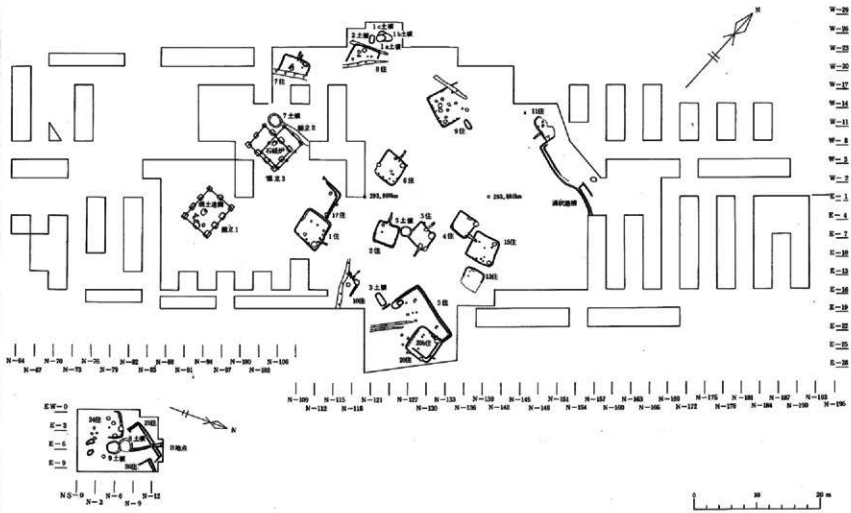
第5図　本線敷J－29～39区西壁断面図



第6図　本線敷I－46～50区西壁断面図

本線敷基本層位

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	備考					
第1層	1	淡褐色微砂層		表土		7	茶褐色粘質微砂層	地山の土を多く含む	溝堆積土2層
第II層	2	淡褐色土層				8	暗褐色微砂層		溝堆積土3層
	3	淡褐色土層	小さい砂ロームを含む			a	淡褐色土層	淡褐色微砂を含む	撹乱
第III層	4	淡褐色土層	ロームを含む			b	褐色土層	ロームのブロックを含む	
	5	黒色土層	硬や焼土を含む、粘性強くしまっている			c	褐色土層	ロームのブロックを含む	
	6	褐色粘質微砂層	遺物・本炭を多く含む	溝堆積土1層		d	淡褐色土層	淡褐色微砂を含む	



第７図　台ノ山遺跡遺構配置図

○　南東緩斜面に位置している（24住、25住、26住）。

掘立柱建物跡は平坦部から南緩斜面に移行する地区に位置している。

土壙は、平坦部、南東緩斜面、平坦部から南緩斜面に移行する地区にあり広い範囲にわたって位置している。

溝状遺跡は平坦部から北緩斜面に移行する地区に位置している。

石組炉跡は平坦部から南緩斜面に移行する地区に位置している。

焼土遺構は平坦部から南緩斜面に移行する地区に位置している。，

3. 発見された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡とその出土遺物

第1号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第17号住居跡、後世の溝と重複している。第17号住居跡との新旧関係は確認できなかった。

平面形・規模：後世の溝により南東隅が破壊されているが、平面形は南東隅がいくぶんつきでた隅丸方形を呈している。規模は長軸約4.5m、短軸約4.4mである。

竪穴層位：堆積土は3層に大別される。第1層（褐色粘質微砂層）；木炭、焼土を多量に含む。住居内全域に堆積しており、中央部では床面上までおよんでいる。第2層（黄褐色砂質微砂層）；南、東、西壁際に堆積している。第3層（灰黄色砂質粘土層）；西、南壁際から床面上にかけて部分的に堆積している。

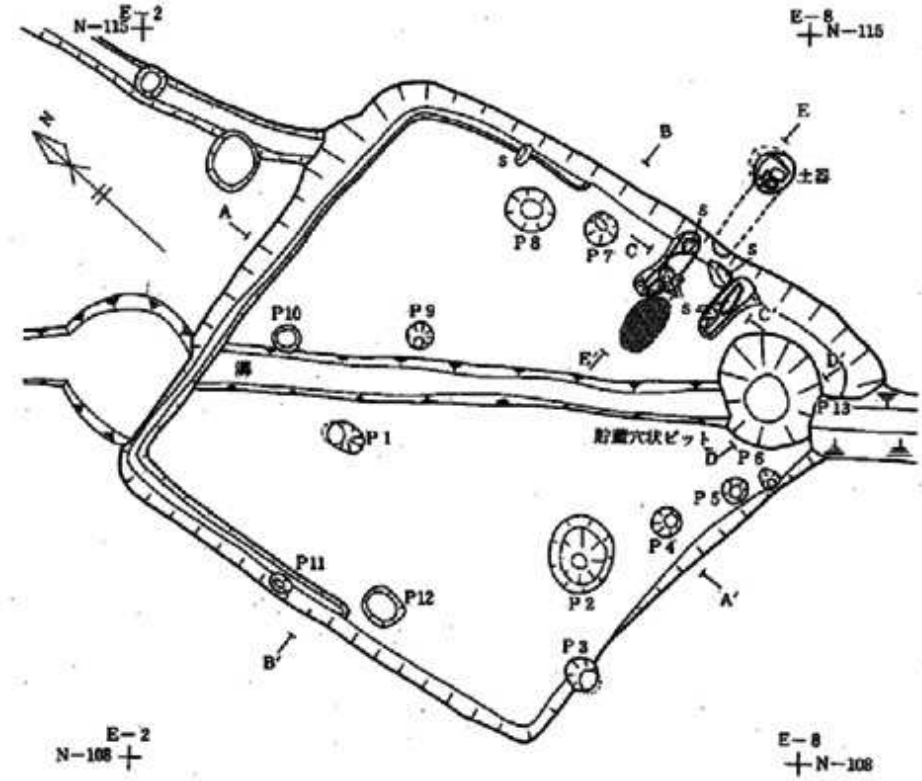
壁：南東、北西隅が部分的に破壊されている。地山を壁としている。保存良好な東壁の残存高は床面から約60cmある。壁の立ち上がりはいずれも急角度である。

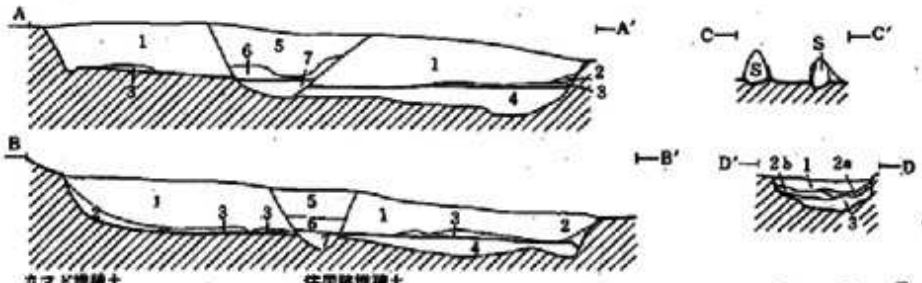
床：南東－北西に走る幅30cm前後の後世の溝により床面が破壊されている。床面はほぼ平坦で北東から南西に傾斜している。床面下には一部掘り方が認められた。中央部から東、北壁際までは地山、中央部から西、南壁際までは掘り方埋土（暗灰黄色砂質粘土層）上面を床としている。

柱穴：床面に8個、壁に2個、床面下に2個ピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡が認められなかった。また、規則性等も認められず、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝：北と東・西の北半の壁沿いに巡って確認された。底面幅は10～15cm、床面からの深さ4～7cmである。断面形は「U」字形を呈している。

カマド：東壁中央部南寄りに検出された。燃焼部、煙道部から成る。燃焼部両側壁は数個の角礫を芯とし粘土でそのまわりをおおっている。芯とした石の底面には掘り方が認められなかっ





カマド堆積土

層No.	土色・土性	混入物・その他
1a	褐色粘質微砂層	[illegible]
1b	暗褐色粘質微砂層	[illegible]
2	淡褐色微砂質粘土層	
3	赤褐色砂質微砂層	焼土を含む
4	暗褐色粘質微砂層	[illegible]
5	焼土	
6	暗赤褐色砂質微砂層	[illegible]
7	褐色粘質微砂層	[illegible]

貯蔵穴状ピット堆積土

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	褐色粘質微砂層	[illegible]
2層	2a	暗褐色粘土層	
	2b	暗褐色粘土層	[illegible]
3層	3	褐色粘質微砂層	[illegible]

住居跡堆積土

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	備考
1層	1	褐色粘土質微砂層	[illegible]	
2層	2	黄褐色砂質微砂層		
3層	3	黄褐色砂質粘土層		
	4	暗黄褐色砂質粘土層		[illegible]
	5	淡褐色微砂層		[illegible]
	6	黄褐色粘土質微砂層		〃
	7	暗褐色微砂層	[illegible]	〃

第8図　第1号住居跡

た。側壁内側は火燃を受け赤変している。燃焼部の長さは約75cmで、底面は浅い皿状を呈する。燃焼部左側壁の前面に50×30cmの範囲に焼土が認められた。燃焼部奥壁は住居跡東壁をそのまま利用し、燃焼部底面からほぼ垂直に20cmほど立がり、煙道へと移行する。煙道部の長さは1.1mでトンネル状に掘り抜かれ、煙道底面幅は20～30cmで煙出しに向ってわずかに高くなってゆく。煙道先端には径40cmのピット状の煙出しが掘りこまれている。煙道底面との段差は認められない。軸方向はE－90°－Nである。煙出し上部から土師器甕が出土している。

貯蔵穴状ピット：カマド右脇（住居南東隅）に検出された。後世の溝により破壊されているが、平面形は径約1mの円形である。最深部の底面は床面から30cmあり、丸底状を呈する。堆積状況は水平堆積に近く、自然流入による堆積とは考え難い。堆積土は3層認められたが上部の2層には多量の木炭、焼土が含まれる。底面の一部に青灰色粘土層（灰と思われる）が堆積している。堆積上の2層から土師器坏が出土している。

ピット

Pit NO.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
深　さ (cm)	25	28	73	48	34	43	6	19	54	19	5	8	30
備　　考	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貯蔵穴状ピット

出土遺物：床面・煙出し・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器・石製模造品が出土している。

〔床面・煙出し・貯蔵穴状ピット〕

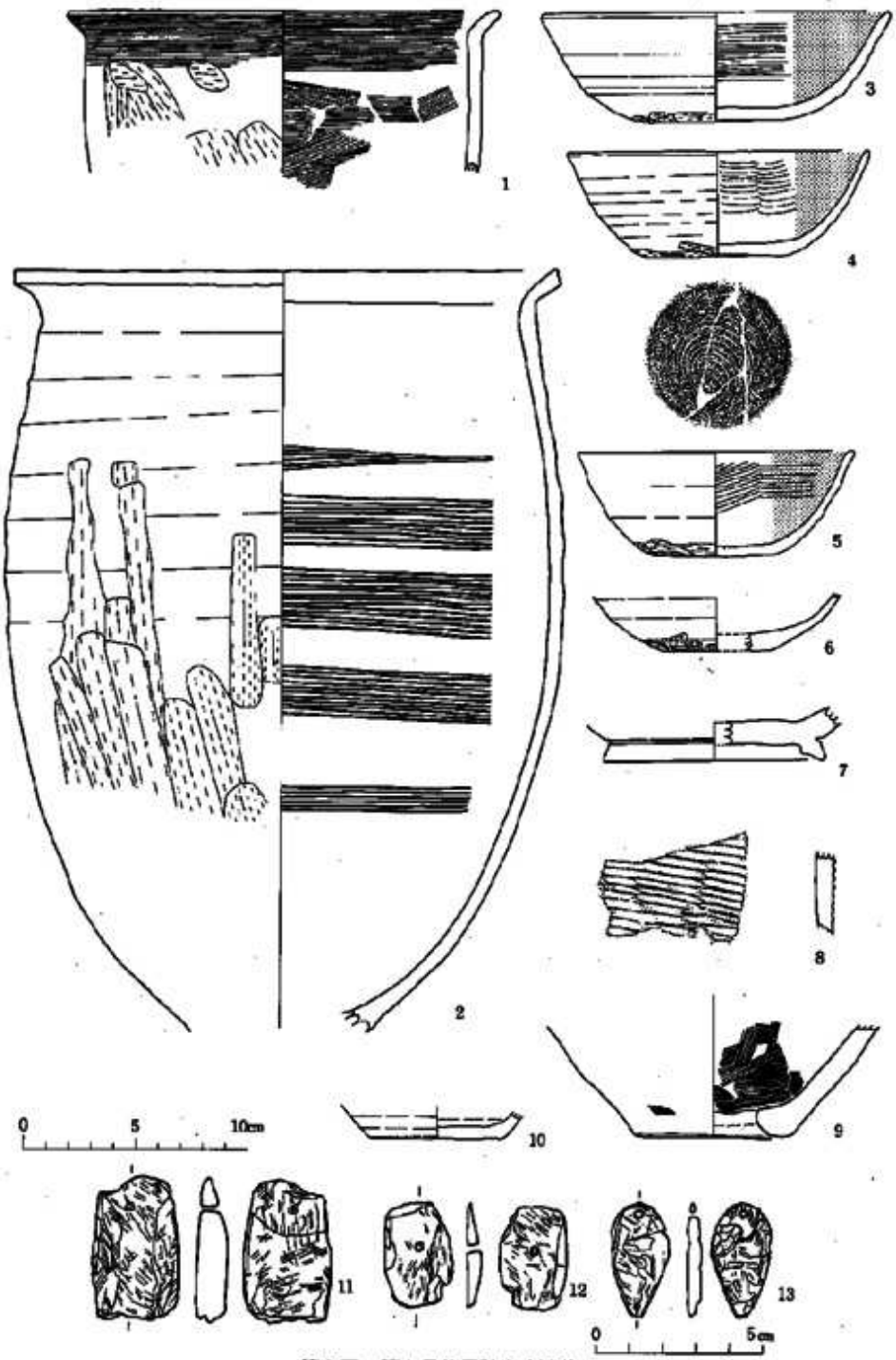
土師器

坏：床面（3）と貯蔵穴状ピット（4・5）から出土したものである。製作に際し、ロクロを使用している。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾する。4は底部が回転糸切り技法で切り離されている。3・5は輯調整のため切り離し技法が不明なものである。前者は体部下端から底部周縁、後者は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されている。

器面調整はいずれも外面にロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ロクロの回転方向の明らかなものは右回転である。

甕：1・2は煙出し出土のものである。製作に際し、ロクロを使用していないものと使用しているものがある。いずれの器形も口径に比べ器高が大きい。最大径は口縁部・あるいは体部中央にあり、長胴形のものである。前者は1で体部上半からほぼ直線的に頸部に移行し、口縁部が外傾する。後者は2で体部中央がわずかにふくらみ、口縁部が短く外傾し、口縁端部が上方につまみだされている。

器面調整は1は口縁部内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はナデ、2は体部外面に手持ちヘラケズリ、内面には刷毛目が施されている。



第9図　第1号住居跡出土遺物

須恵器

坏：6は床面出土のものである。口縁部・底部の一部を欠損している。底部は回転糸切り技法で切り離されている。再調整として、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。

高台付坏：7は床面出土のものである。底部破片のため全体の器形は不明である。高台部は短く外方にのび、端部内面は外方へ削がれたように薄くなっている。底部に回転ヘラケズリが施されているため切り離し技法は不明である。

甕：8は床面出土のものである。体部破片のため全体の器形は不明である。ロクロ調整後、外面に平行タタキ目が施されている。

〔堆積土〕

土師器

甑：9は単孔式の甑である。体部下半以下の破片であるため全体の器形は不明である。底部中央に径約4cmの孔がある。

器面調整は外面にヘラナデ、内面にはナデが施されている。

須恵器

坏：10は底部破片である。底部を回転糸切り技法で切り離している。特に、再調整は認められない。

石製模造品

剣形石製模造品：13は先端部がわずかに欠損しているがほぼ完形品である。柳葉形を呈し、先端部が尖り、基部に1個の孔をもつ。現存部分の長さ3.4cm、最大幅1.7cm、最大厚5mm、孔の径は3mmである。横断面は長方形を呈する。表裏側面の3面は研磨しており、擦痕が認められる。

形態不明な石製模造品：11・12は基部・先端部の一部が欠損している。いずれも表裏面に稜をもつものである。基部に1個の孔をもつ。表裏側面の3面は研磨しており擦痕が認められる。11は現存部分の長さ4.3cm、最大幅2.2cm最大厚9mm、孔の径は2mmあり比較的大形のものである。12は現存部分の長さ3cm、最大幅2cm、最大厚5mm、孔の径は2mmである。両者は剣形石製模造品と考えられる。

第2号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：認められない。

平面形・規模：隅の角ばった正方形で、規模は長軸約3.45m、短軸約3.40mである。

竪穴層位：堆積土は8層に大別できる。第1層（褐色微砂層）；東壁際に分布し、床面に達している。第2層（淡黄褐色土層）；凝灰岩粒を含み、住居全体と床面東部を覆っている。第3層（灰褐色微砂層）；凝灰岩粒を霜降り状に含み、北辺から床面中央部に堆積している。第4層（黄褐色微砂層）；地山ブロックを含み、床面の中央部から西部に堆積している。第5層（褐色微砂層）；西辺から床面北西部に堆積している。第6層（暗褐色微砂層）；炭化物を多量に含み燃焼部右側壁付近に堆積している。第7層（赤褐色微砂層）；炭化物；焼土を含み、南壁中央付近の床面に堆積している。第8層（褐色粘質土層）；壁に沿う床面に堆積している。

壁：地山を壁としている。4壁が残存し保存状態は比較的良好で、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁で約35cmある。

床面：地山を床とし、ほぼ平坦である。南西隅と南壁中央壁際とにそれぞれ平面形が80×54cm、30×20cmの楕円形の範囲で炭化物が認められた。

柱穴：ピットは床面から20個、床面下から3個検出された。配置の規則性は認められず、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。西壁付近の床面には小ピットが集中して認められたが、その性格は明らかにできなかった。

周溝：カマド・西壁中央より北寄りの部分及び東壁中央を除き、壁に沿って認められた。底面幅3～12cm、床面からの深さは3～10cmで、断面形は「U」字形である。

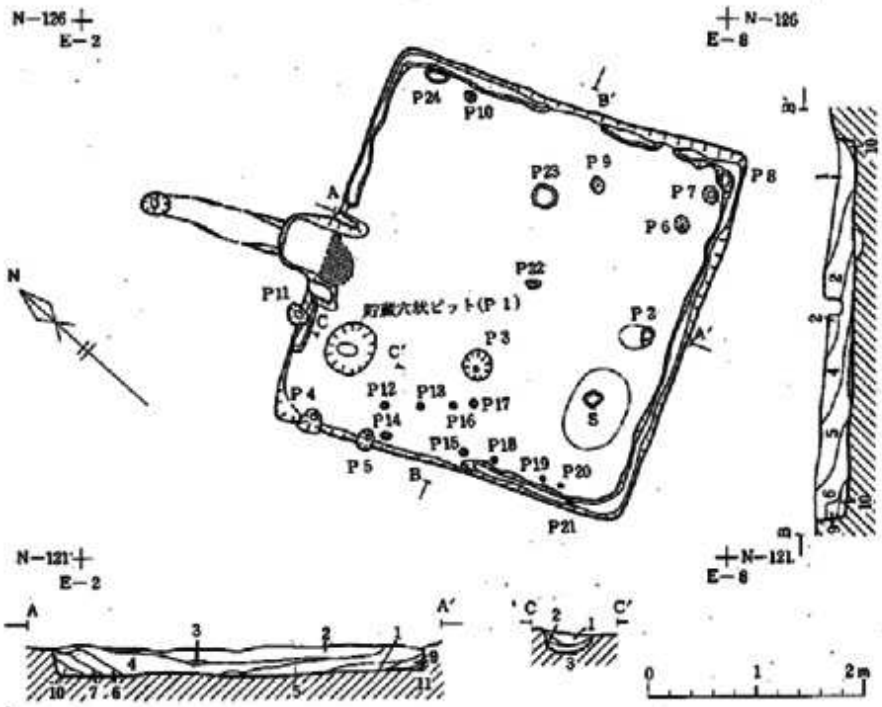
カマド：北壁中央よりやや西寄りで検出された。燃焼部と一部削平された煙道部とから成る。燃焼部奥壁は住居壁から40cm地山を削り込んで作り出し、両側壁は粘土で構築している。底面は浅い皿状を呈し焼面が認められた。奥壁はほぼ垂直に12cm立ち上がり煙道へ移行する。煙道部の残存長は約1.3mである。煙道底面幅は20～25cmで、煙出しに向ってやや高くなっている。煙出しは径約20cmの円形で、深さは確認面から約10cmある。軸方向はN－25°－Wである。

貯蔵穴状ピット：カマドの左脇（住居北西隅）にあり、平面形は径約40cmの円形で、深さは床面から20cmある。堆積土は2層認められた。上層に炭化物を含む。

ピット

ピットNO	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24
深さ(cm)	20	15	8	45	28	5	5	11	5	5	37	13	5	8	7	9	5	13	6	6	5	6	15	8
備考	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	床面下	床面下	床面下

出土遺物：床面・堆積土から土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器が出土している。



層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	調査
1 層	1	褐色砂質		
2 層	2	淡黄褐色土層	縁灰岩粒を含む	
3 層	3	淡黄褐色粘質土層		
	4	灰褐色砂質		
4 層	5	黄褐色砂質	縁灰岩を喫点状に含む	
5 層	6	褐色砂質	縁灰岩粒が縁降与状にまじる	
6 層	7	赤褐色砂質	炭化物が多量にまじる	
7 層	8	赤褐色砂質	焼土・炭化物がまじる	
8 層	9	黄褐色粘土層		
	10	褐色粘質土層		
	11	淡黄色粘質砂質	地山を含む	調査

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1 層	1	暗褐色砂質	炭化物を含む
	2	暗褐色砂質	炭化物をあく含む
2 層	3	黄褐色粘質砂質	縁灰岩粒を多量に含む

第10図　第2号住居跡

〔床面〕

土師器

坏：1は床面上より出土した。製作に際し、ロクロを使用していない。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾している。底部は丸底である。器面調整として、口縁部外面に横ナデ、体部にヘラミガキ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、底部が放射状、他の部分は横方向である。

〔堆積土〕

土師器

坏：2・3は製作に際し、ロクロを使用しておらず、小形である。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾している。2は底部が丸底風平底で、器厚は全体的に薄手であるが、底部と体部の間の屈曲部がやや厚くなっている。器面調整として、外面の口縁部から体部にはヘラズリ後ヘラミガキ、底部にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は斜位か横方向である。3は底部が丸底で、器厚は底部が厚く、口縁部に近づくに従い薄くなる。器面調整として、外面の口縁部から体部には横ナデ後ヘラミガキ、底部には手持ちヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕：4は底部のみである。底部には木葉痕が認められる。器面調整は内外面とも摩滅が著るしく観察が困難である。

須恵器

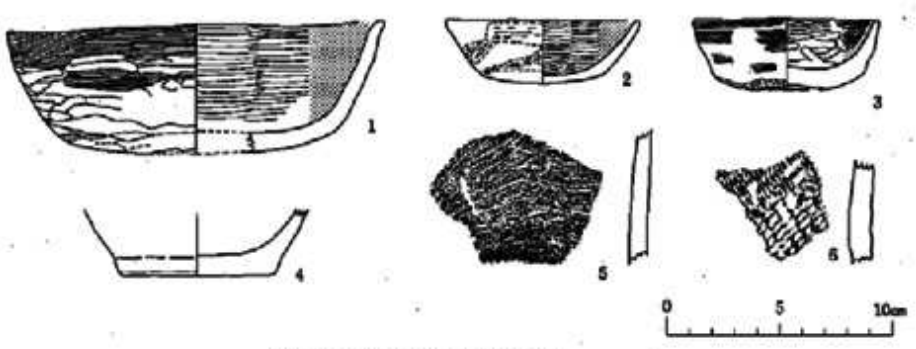
坏・甕：4点出土しておりいずれも小破片で図示できなかった。坏体部外面にヘラケズリされているものもある。

縄文土器

体部破片が2点出土している。6は胎土に植物の繊維を含んでおり、外面に単節羽状縄文（RL・LR）が施されている。もう1点は胎土に植物の繊維は含まず、外面に単節斜行縄文（LR）が施されている。小破片で摩滅が著しく、図示できない。

弥生土器

体部破片が3点出土している。外面に単節斜行縄文が施されており、原体がRLのものとLRのもの（5）がある。



第11図　第２号住居跡出土遺物

第3号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第5土壙と重複している。新旧関係については確認できなかった。

平面形・規模：やや東西に長い不整の隅丸方形である。規模は長軸約3.4m、短軸約3.1mである。

竪穴層位：堆積土は3層に大別することができる。第1層（灰褐色粘土層）；東壁際から住居中央部にかけて堆積している。第2層（暗褐色粘土層）；炭化物を含んでおり、住居床面に堆積している。第3層（明褐色粘質微砂層）；東壁際に堆積している。

壁：4壁が残存しているが、南西隅は第5土壙と重複している。地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、残存する壁高は保存の良好な東壁で10～15cmである。

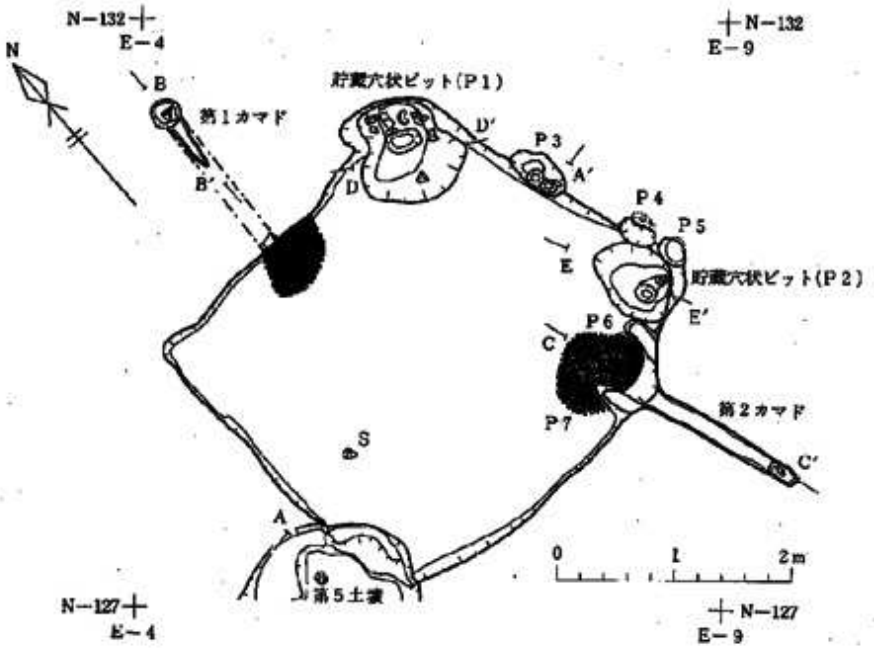
床面：床面は平坦である。床面下に掘り方（黄褐色粘土層）が認められる。

柱穴：東壁に入りこんで2個、第2カマド燃焼部底面下から2個、計4個のピットが検出されている。第2カマド燃焼部底面下から検出されたP6に柱痕跡が認められたが、他のピットには柱痕跡が認められず、また規則性も認められない。第2カマド燃焼部底面下から検出されたピットは、第2カマド使用時以前のピットである。

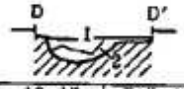
周溝：認められない。

カマド：北壁中央に第1カマド、南壁中央部東寄りに第2カマドが検出されている。燃焼部側壁が、第1カマドには残存していないが第2カマドには残存していることから、第2カマドが住居廃絶時のものと考えられる。第1カマドの焼面の範囲は51×50cmの不整な円形で、底面は皿状にくぼんでおり、固く焼けている。燃焼部から煙道へはゆるやかに傾斜している。煙道部の中央部が削平されているが、推定の長さは1.6m、底面幅10cmで先端に煙出しが取り付いている。煙出しの平面形は径25cmの円形で、煙道底面との比高は21cmある。軸方向はN－8°　Eである。第2カマドの燃焼部側壁は粘土で構築されている。燃焼部の長さは約50cmである。焼面の範囲は80×60cmの楕円形で、底面はくぼんでいる。燃焼部から煙道へは、なだらかな傾斜をもって移行している。煙道底面は煙出しに向かってゆるやかに低くなっている。煙道部の長さは1.4m、底面幅は約15cmある。煙道部先端に取り付いている煙出しは、平面形が25×14cmの楕円形で、煙道底面との比高は約8cmある。軸方向はS－12°　－Eである。

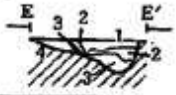
貯蔵穴状ピット：2個検出されている。P1は第1カマドの右脇（住居北東隅）に位置し、張り出している。最大径95cmの不整な円形で、床面からの深さは約20cmある。堆積土中から土師器坏、土師器甕、須恵器坏が出土している。P2は第2カマドの左脇（住居南東隅）にある。平面形は70×60cmの楕円形で、床面からの深さは約30cmある。堆積土中には焼土・木炭が多量



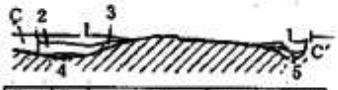
層位	層No.	土色・土性	混入物	備考
1層	1	黄褐色粘土層		
2層	2	暗褐色粘土層	炭化物を混入	
3層	3	明褐色粘質微砂層		
	4	黄褐色粘土層		掘り方埋土



層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	黄褐色粘質微砂層	ローム粒をとんどで中に明褐色の微砂混入
2層	2	明褐色微砂層	ローム粒・炭化をやや含む



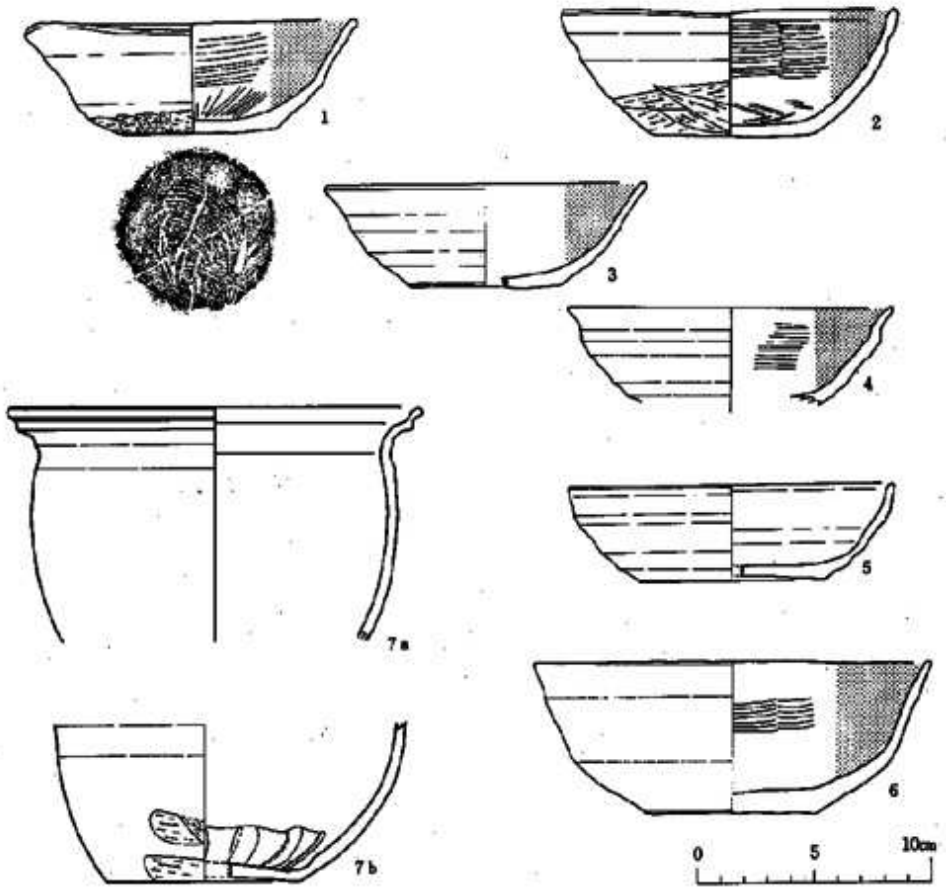
層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	淡赤褐色	ホールブロック焼けをよく含む
2層	2	黄褐色粘質微砂層	ローム粒をとんどで中に明褐色の微砂混入
3層	3	赤褐色微砂層	炭化・木炭をよく含む
	4	褐色微砂層	掘り方埋土



層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	黄褐色微砂層	ローム粒ブロックをよく含む
2層	2	明褐色微砂層	ローム粒をやさく、炭化・木炭を含む
	3	暗赤褐色微砂層	2層に炭化をよく含んだもの
3層	4	黄褐色木炭層	
4層	5	黄褐色微砂質粘土層	1層よりローム・ブロックをよく含む

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	褐色微砂層	木炭・炭化をよく含みまらまらしている
2層	2	黄褐色粘質微砂層	1層にローム・ブロックをよく含む

第12図　第13号住居跡



第13図　第３号住居跡出土遺物

に混入している。

その他の遺構：確認面が不明なものであるが、東壁のほぼ中央に位置し、張り出しているピット3が確認された。平面形は55×30cmの楕円形で、床面からの深さは約20cmである。堆積土から土師器が出土している。

ピット

pit No.	P１	P２	P３	P４	P５	P６	P７
深さ(cm)	２０	３０	20	１４	３	３０	２４
堆積土	－	－	－	－	－	黄褐色微砂質粘土	明褐色微砂質粘土
備　考	貯蔵穴状ピット	貯蔵穴状ピット	－	－	－	柱痕跡あり	Ｐ６より新しい

出土遺物：床面・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔床面・貯蔵穴状ピット〕

土師器

坏：床面上（4）と貯蔵穴状ピット（1・2・3）から出土した。いずれも製作に際し、ロクロを使用している。1・3は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾している。底部を回転糸切り技法で切り離しているもの（1・3）と、再調整のため切り離し技法の不明なもの（2）がある。4は底部の大部分が欠損しているため、切り離し技法の不明なものである。1・3は体部下端に、2は体部中央から底部に手持ちヘラケズリが施されている。器面調整はいずれも外面はロクロ調整、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕：7a.bは、同一個体の口縁部と底部の破片である。製作に際し、ロクロを使用しており口径が器高よりも大きいと推定される小形の土器である。口縁部は外反し、端部が直立ぎみになる。体部外面には、ロクロ調整、下端にヘラケズリが、内面は摩滅が著しいが、下端にナデツケが施されている。底面にはヘラケズリが施されている。

須恵器

坏：5は体部がやや丸味をおびて内弯気味に立ち上がる器形である。底部に回転糸切り痕を残し、再調整は加えられていない。ロクロの回転は右方向である。

〔堆積土〕

土師器

坏：6は、製作に際し、ロクロを使用している。器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。底部の切り離し技法が摩滅のため不明なものである。内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

第4号住居跡

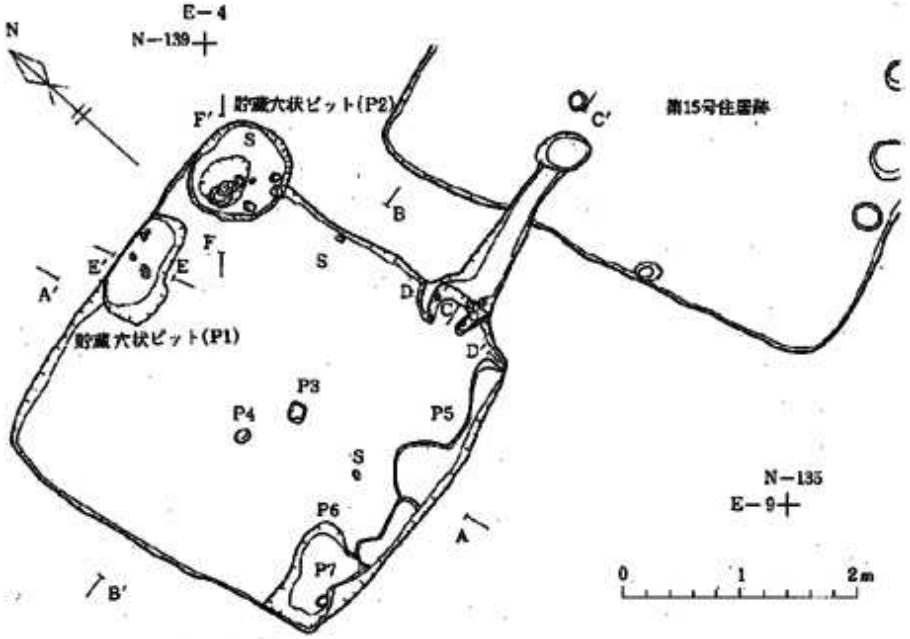
確認面：地山面で確認した。

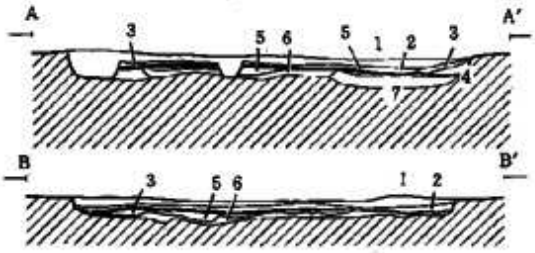
重複：第15号住居跡と重複している。新旧関係については確認できなかった。

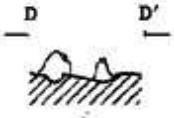
平面形・規模：隅丸方形で、規模は長軸3.3m、短軸3.2mである。

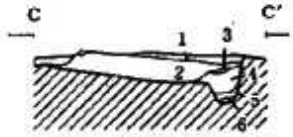
竪穴層位：堆積土は4層に大別することができる。第1層（淡褐色微砂層）；木炭を少量含んでおり、住居全体に堆積している。第2層（茶褐色微砂層）；礫と木炭を含んでおり、住居全体に堆積している。第3層（黄褐色粘土質微砂層）；地山粒を斑点状に含み、壁際から床面全体に堆積してい糺住居北東方向からの流入が考えられる。第4層（灰黄色砂質粘土層）；地山に茶褐色微砂粒を含み、北壁際に堆積している。

壁：4壁が残存しており、地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、保存の良い西壁で、壁高は約10cmある。



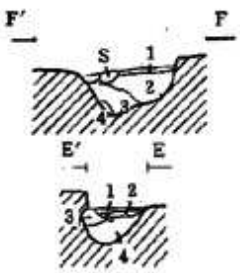






層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	調査
1 層	1	淡褐色微砂層	炭を少量含む	
2 層	2	黄褐色微砂層	礫(河原石粒5～15cm)含む。炭少量含む	
3 層	3	黄褐色粘質微砂層	地山(灰黄色砂質粘土)を斑点状に含む	
4 層	4	灰黄色砂質粘土層	地山に茶褐色微砂を含む	
	5	灰黄色微砂質粘土層	灰黄色粘土に褐色微砂を含む	粘床
	6	明黄色粘質微砂層	褐色微砂に灰黄色粘土を含む	粘質・張り方流土
	7	黄褐色微砂質粘土層	やわらかい、炭物少量	張り方流土

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1 層	1	褐色微砂層	黒い
2 層	2	褐色微砂層	焼石含む。炭少々含む
3 層	3	黄褐色微砂質粘土層	地山の土質と相似レンズ状に入り込む
4 層	4	褐色微砂層	炭多し。焼土・土器片含む
5 層	5	灰黄色微砂層	炭含む。黒部層
6 層	6	灰白色粘質土層	地山の土質より粘質有



層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1 層	1	褐色微砂層	炭化物・焼土少量含む
2 層	2	黄褐色粘質層	炭化物・焼土少量含む
3 層	3	褐色粘質微砂層	炭化物なし
4 層	4	灰赤褐色微砂層	焼土・炭化物多い。ローム質粘土のブロックを含む

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1 層	1	褐色微砂層	焼土・炭化物少量含む
2 層	2	黄褐色粘質土層	炭化物・焼土含む
3 層	3	淡赤褐色微砂層	炭化物・焼土を多量含む この層より呼出土
4 層	4	黄褐色粘質土層	炭化物・焼土含む

第14図　第４号住居跡

床面：床面は平坦で、灰黄褐微砂質粘土の貼床が床面全体に認められる。カマド周辺の床面は、たたしめられたように固くなっている。床面下には掘り方が認められる。

柱穴：床面から5個、床面下から2個のピットが検出されているが、いずれも柱痕跡は認められない。また規則性も認められず、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝：南壁沿いに部分的に認められる。底面幅5～20cm、深さ10cmで、断面形は「U」字形である。堆積土中には炭化物が多量に含まれている。

カマド：東壁の南隅に位置し、燃焼部側壁は粘土で構築されている。燃焼部の長さは40cmある。側壁内側は火熱を受け赤変している。燃焼部から煙道へは特に段落がなく移行している。煙道部は地山を掘っており、煙出しに向ってゆるやかに低くなっている。煙道部の長さは1.7m、底面幅は15～20cmあり、煙道部の先端には煙出しが取り付いている。煙出しの平面形は45×35cmの楕円形で、煙道底面との比高は約20cmある。軸方向はE－14°－Nである。

貯蔵穴状ピット：2個検出されている。P1は北壁中央から検出されている。平面形は90×40cmの楕円形で、床面からの深さは約30cmある。堆積土は4層確認された。下部には焼土・炭化物が多量に含まれている。P2は住居北東隅から検出されている。平面形は径90cmの円形で、土師器坏も出土している。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
深さ(cm)	30	30	7	10	10	10	20	10	10
備考	貯蔵穴状ピット	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	－

出土遺物：貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔貯蔵穴状ピット〕

土師器

坏：P2から1・2が出土している。製作に際しロクロを使用している。器形はいずれも体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上がる。両者は底部が回転糸切り技法で切り離されている。切り離し後、外面体部下端から底周に手持ちヘラケズリが施されているもの（1）と、再調整が施されていないもの（2）である。器面調整は、いずれも外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。ロクロの回軸方向の明らかなものは右回転である。

〔堆積土〕

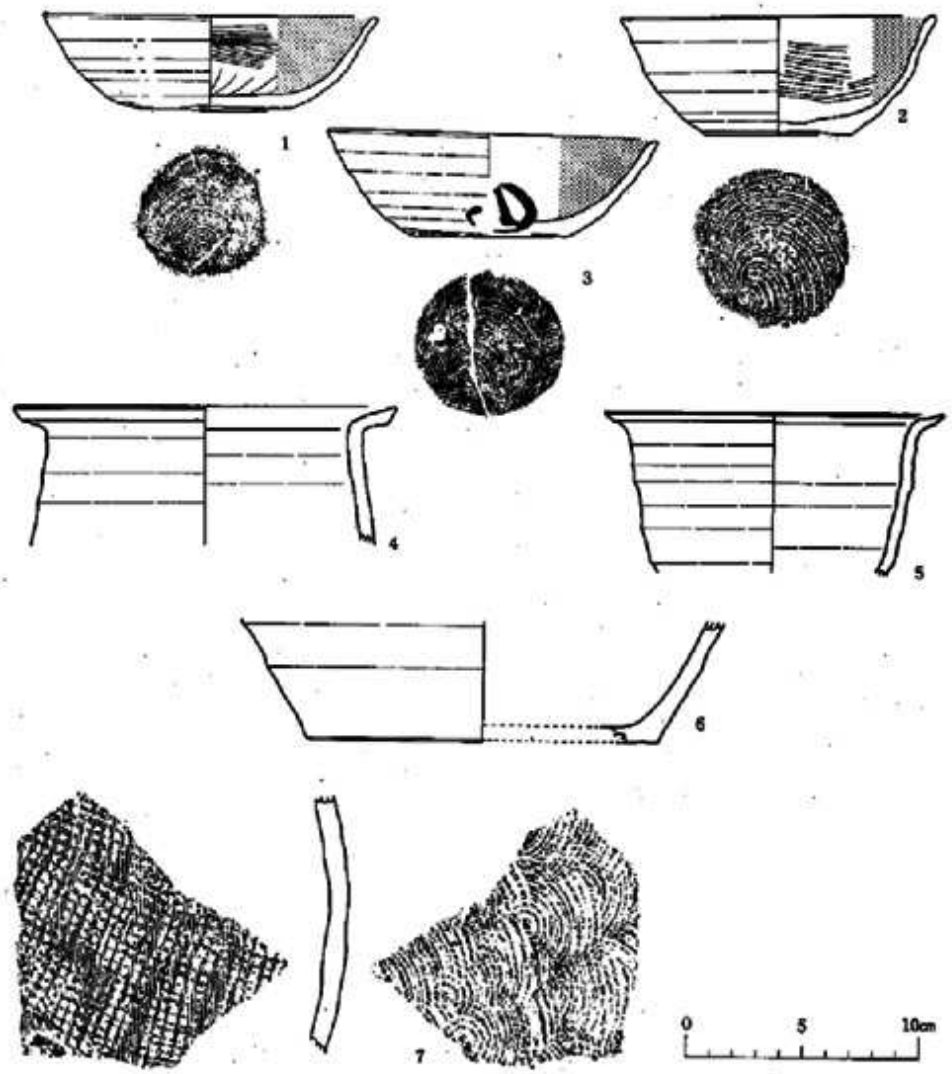
土師器

坏：3は製作に際しロクロを使用している。器形は体部から口縁部にかけて丸味をもって立

ち上がる。底部を回転糸切り技法で切り離している。切り離し後、外面体部下端から底周に手持ちヘラケズリが施されている。器面調整は、外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。また、体部中央から下端に墨書があるが、判読できない。

甕：体部下半以下が欠損している（4・5）。製作に際しロクロを使用しており、4は口径よりも器高が大きく、5は口径より器高が小さい。いずれも口縁部に最大径がある。口縁部は外反しており短い。器面調整は内外面ともロクロ調整である。

須恵器



第15図　第4号住居跡出土遺物

甕：体部下半から底部にかけての破片（6）と体部破片（7）の2点がある。6の器面調整は外面にロクロ調整・内面にナデが施されている。7は弯曲した体部破片であり、外面には格子タタキ目・内面には青海波文が認められる。

第5号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第20号住居跡と重複している。第20号住居跡より古い。

平面形・規模：北半部が残存している。北辺の長さは9.3mある。平面形は隅が角ばっており、方形基調と推定される。

竪穴層位：堆積土は1層（褐色粘質微砂層）のみで木炭を含んでおり、住居全体に堆積している。

壁：北壁の保存は良好であるが、東・西壁は部分的に残存している。地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、保存の良い北壁で、壁高は10−15cmある。

床面：床面は平坦であるが、南にややゆるやかに傾斜している。黄褐色砂質粘土の貼床が部分的に認められる。

柱穴：床面から8個のピットが検出されている。いずれも柱痕跡は認められない。また規則性もないため、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝：北・西壁沿い及び東壁沿いに認められ、全周するものと考えられる。底面幅約15cm、深さ10～15cmで、断面形は「U」字形である。

カマド・炉：認められない。

貯蔵穴状ピット：北壁中央部から南へ約3.5mの位置にP1が検出されている。平面形は径45cmの円形で、堆積土中から土師器坏、土師器壺、円礫が出土している。

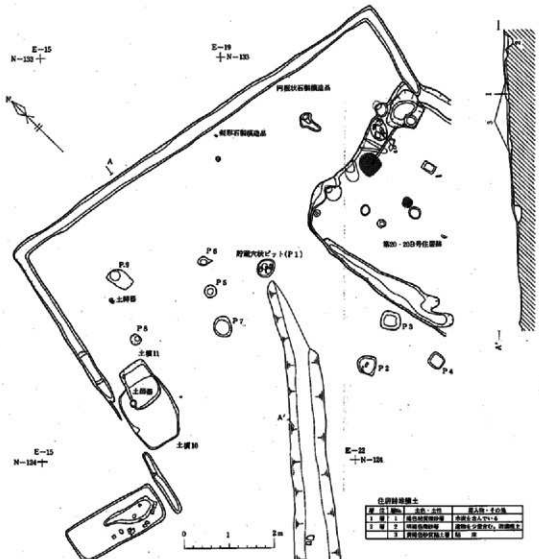
その他の遺構：第5号住居跡の床面で第10・11号土壙が検出された。

第10土壙は、第5号住居跡の北西隅から約4m南の西壁沿いに位置している。この土壙は第11土壙より新しい。第5号住居跡に共伴するものかどうか不明である。平面形は1.5×1.1mの不整な隅丸長方形で、深さは確認面から約15cmある。堆積土中から土師器が出土している。

第11土壙は第1土壙の北側に位置し、第10土壙の底面で確認された。平面形は、1.0×0.7mの隅丸方形で、深さは確認面から約20cmある。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認され、上層に木炭・焼土を含んでいる。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
深さ(cm)	15	10	35	35	20	20	25	25	45
備考	貯蔵穴状ピット	−	−	−	−	−	−	−	−


E−15
N−133
E−19
N−133
円盤状石製模造品
棍形石製模造品
A
P.9
土師器
P6
P5
P7
P8
土師器
土師器
土師器
P3
P2
P4
A'
E−15
N−134
E−22
N−134
0
1
2m
I
I'
S
A'

第16図　第5号住居跡

出土遺物：床面・貯蔵穴状ピット・堆積土土壙から、土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器石製模造品・不定形石器・円礫が出土している。

〔床面・貯蔵穴状ピット〕

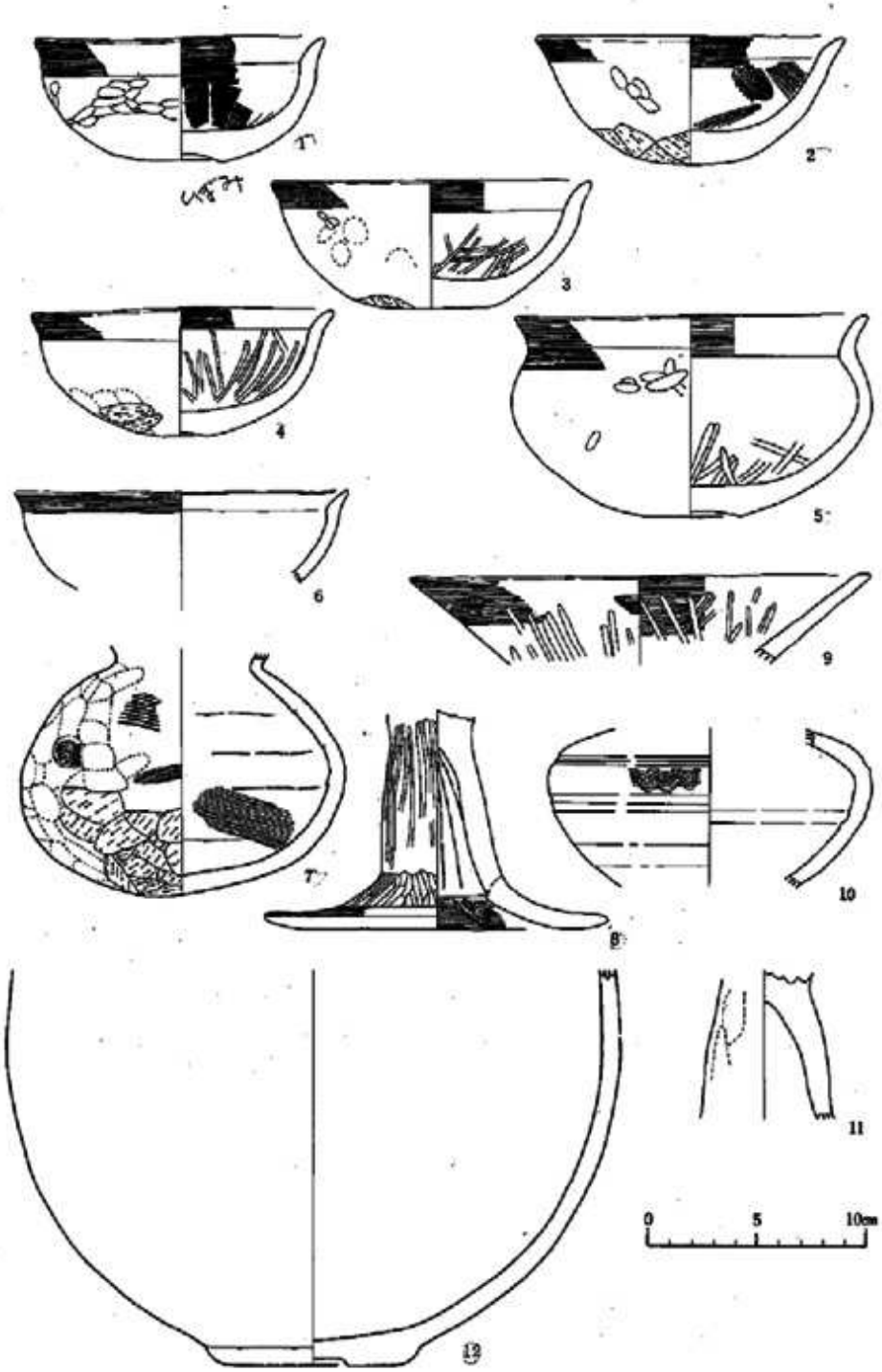
土師器

坏：床面出土（1・5）と、貯蔵穴状ピット出土（P1－2・4）のものがある。4点とも製作に際しロクロを使用しておらず、口縁部は屈曲し、内面に稜がある。2は口縁部が外反し、体部がやや丸味をおび外傾しており、底部が丸底である。器面調整は、外面の口縁部にヨコナデ、体部上半から中央部にかけてヘラミガキ、体部下半から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面の口縁部から体部上端にかけてヨコナデ、体部にナデ、底部に刷毛目が施されている。1はほぼ完形に近いもので口縁部が外反し、体部がやや丸味をおび外傾しており、底部が平底（上底）である。器面調整は、外面の口縁部にヨコナデ、体部にヘラミガキが施されている。体部下半は摩滅しているため調整不明である。内面の口縁部から体部上端にかけてヨコナデ、体部にヘラナデ、底部から体部に放射状のヘラミガキが施されている。5は口縁部が外反し、体部は内弯しており、底部が平底（上底）である。器面調整は、外面の口縁部から体部上端にかけてヨコナデが施されているが、体部はナデの痕跡がわずかにみられる。口縁部内面にヨコナデ、体部上半に横方向のヘラミガキ、底部から体部上半にかけて放射状のヘラミガキが施されている。4は口縁部が外反し、体部がやや丸味をおび外傾しており、底部が平底（上底）である。器面調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部上半は摩滅しているため不明であるが、下半にヘラケズリが施されている。口縁部内面にヨコナデ、底部から口縁部にかけてヘラミガキが施されている。

甕：12は床面出土のものである。体部上半以上を欠損しているため全体の器形は不明である。体部は球形を呈する。底部は平底で中央部に径2.5cm前後の円形の凹みが認められる。器面調整は、内外面とも摩滅が著しく、観察が困難である。

高坏：8は床面から出土しており、脚部（柱状部・裾部）の破片である。柱状部が直立に近く、裾部は比較的長い。柱状部と裾部の接合部は明確である。器面調整は、外面の柱状部から裾部にヘラミガキ、裾部にヨコナデ、柱状部内面はシボリ目、裾部はヨコナデ、ヘラナデが施されている。

壺：7は貯蔵穴状ピット（P1）から出土しており、口縁部、頸部が欠損している。体部は球をつぶしたような横に長い楕円形であり、底部は丸底である。器面調整については、外面は体部から底部にかけてヘラケズリが施され、その後に単位不明のヘラミガキが施されている。
体部上半に刷毛目、ナデの痕跡がわずかに認められる。体部中央にわずかに丹塗りが認められる。内面にはナデが認められる。積み上げ痕も観察される。



第17図　第5号住居跡出土遺物

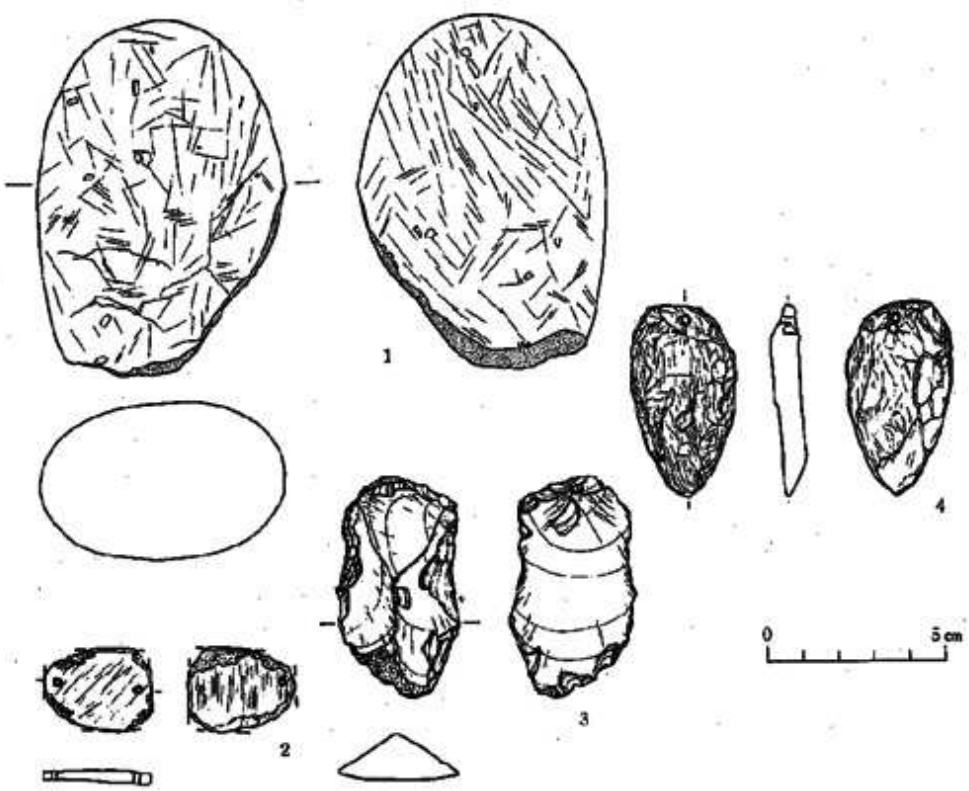
石製模造品

床面から2点出土している。

円板状石製模造品：第18図2はほぼ完形品でやや方形に近い。扁平なもので両端に2個の孔がある。大きさは3.02cm×2.37cmで、・厚さ0.30cmある。孔は一方向から穿孔されており、孔の径は0.19cmある。表裏両面は製作時に研磨しており、擦痕が観察される。また、側縁は大半が破損しており、残存している部分は、摩滅しているために調整痕は不明である。

剣形状石製模造品：第18図4は剣形であり、基部の一部がわずかに欠損しているがほぼ完形品である。柳葉形を呈し先端部が尖り、基部には2個の孔があるが、穿孔されているのは1個である。表裏面には研磨されており、擦痕が認められる。現在部の長さは5.5cm、最大幅30cm最大厚9mm、孔の径は3mmあり比較的大形のものである。

円礫：貯蔵穴状ピット内出土である（第18図1）。一部分が欠損しているが、楕円形を呈しており、全面がなめらかである。



第18図　第5号住居跡出土遺物

〔堆積土〕

土師器

坏：6は底部が欠員している。製作に際してロクロを使用しておらず、口縁部は屈曲し、内内面に稜がある。口縁部は外反し、体部がやや丸味をおび外傾している。器面調整は、外面の口縁部にヨコナデか施されているが、体部は摩滅しているため不明である。内面にはナデの痕跡がわずかにみられる。

高坏：2点出土している。9は坏部上半のみの破片である。坏部は直線的に外傾している。器面調整は、外面にヘラミガキが施されてあり、刷毛目の痕跡も部分的にみられる。内面はナデの後にヘラミガキが施されている。11は脚部（柱状部のみ）の破片であり、柱状部は直立に近い。器面調整は、外面にケズリの痕跡がわずかにみられる。

須恵器

壺?：10は体部破片であるため、全体の器形は不明である。体部は肩部で丸味をもって内弯している。外面の肩部と体部上半の弯曲部分に上下に各二条の沈線がめぐらされている。沈線間には細い櫛描き波状文が施されている。内面はロクロ調整が施されている。

縄文土器

体部破片が1点出土してる。胎土に植物の繊維が含まれており、内外面に条痕が施されている。摩滅が著しいため図示できない。

弥生土器

体部破片が1点出土している。外面は縄文が施されており、縄文は単節斜行縄文（ＲＬ）である。小破片が摩滅が著しいため図示できない。

不定形石器

第18図3は、長さ6.28cm、幅3.56cmで剥片を素材としている。断面は三角形を呈しており、刃部は片面から調整が行なわれているが、先端部は両面から調整が行なわれている。

〔土壙〕

土師器

坏：第10土壙から第17図3が出土している。製作に際し、ロクロを使用しておらず、口縁部は外反し、内面に稜がある。体部はやや丸味をおび外傾している。底部が丸底である。器面調整は、外面の口縁部にヨコナデ、体部の摩滅が著しいが、部分的にケズリとヘラミガキが認められる。体部下半から底面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。内面の口縁部にヨコナデ、底部から体部上半にかけてヘラミガキが施されている。

第6号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：認められない。

平面形・規模：南西隅が耕作により削平されているが、平面形は北西隅がやや張り出した隅丸方形である。規模は長軸約4.1m、短軸約3.7mである。

竪穴層位：堆積土は2層に大別される。第1層（暗褐色微砂質土層）；炭化物や少量のローム粒子を含む。住居内全域に堆積しており中央部では床面上まで及んでいる。第2層（淡黄褐色粘質土層）；小粒の凝灰岩を含み、壁沿いに堆積している。

壁：地山を壁としている。全体的に残存壁高は低いが、そのうちでも良好な東、北壁は床面から20～25cmでほぼ垂直に立ち上がる。

床面：地山を床としてほぼ平坦で東から西にわずかに傾斜している。

柱穴：床面に10個、壁に掘り込まれた2個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は認められない。規則性等も認められず、柱穴と考えられるピットの抽出はできなかった。

周溝：検出できなかった。

カマド：北壁中央部東寄りに検出された。燃焼部・煙道部から成る。燃焼部側壁は粘土で構築し、側壁内側・奥壁は火熱を受け赤変している。燃焼部の長さは45cmで、底面がわずかにくぼむ。燃焼部奥壁は燃焼部底面から急角度に立ち上がり煙道に移行する。煙道は煙道末端部から中央部まで底面幅40～45cmの溝状、中央部から先端部までトンネル状に残存している。
煙道底面は煙出しに向って傾斜している。煙出し底面との段差は認められない。溝状になっている煙道底面には上部構造の一部と思われる黄褐色粘質土層（地山）が堆積していることから、本来、煙道全体がトンネル状に地山を掘り抜いて構築したと思われる。煙道先端には35×25cmのピット状の煙出しが掘りこまれている。煙道部の長さは1.65mある。軸方向はN－7°－Wである。

貯蔵穴状ピット：カマド右脇（住居北東隅）に検出された。80×70cmで、床面からの深さは15cmで浅い丸底状を呈する。堆積土は3層認められ、下部に木炭・焼土が多量に含まれている。

その他の遺構：床面下から西壁に沿って長さ3.6m，幅1.1mの長方形を呈した竪穴遺構が検出された。その性格は不明である。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
深さ(cm)	－	15	8	7	5	8	27	53	7	39	5	26	16	5
備　考	－	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

出土遺物：カマド・堆積土から土師器・弥生土器が出土している。

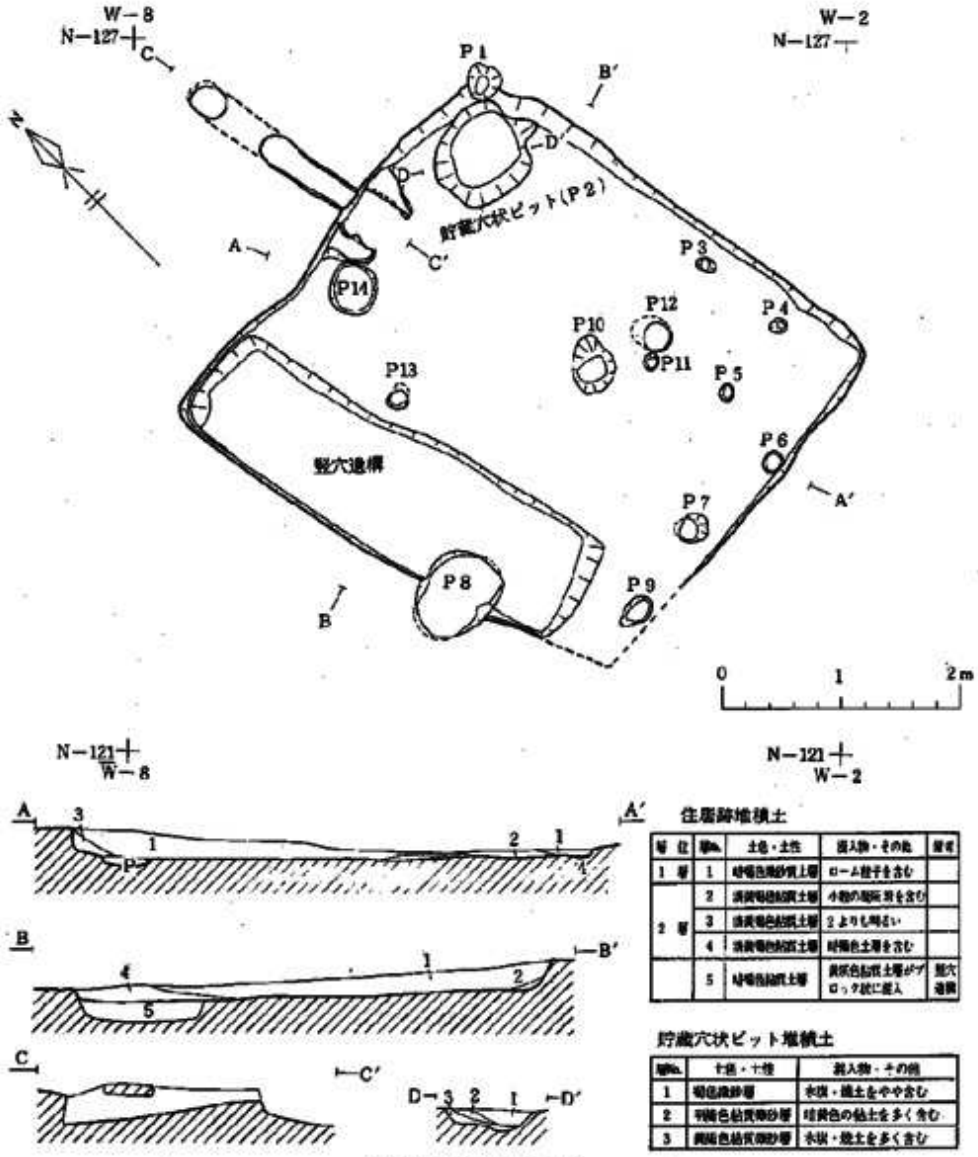
〔カマド〕

土師器甕の体部が2点出土しているが、小破片のため図示できなかった。

〔堆積土〕

土師器

坏：1は体部上半以上の破片であるため、全体の器移は不明である。製作に際し、ロクロを使用していない。口縁部が外反し、内面に稜がつく。器面調整は摩滅が著しく観察が困難であるが、体部内面にわずかにヘラミガキが施されている。



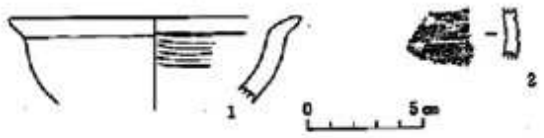
住居跡堆積土

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	備考
1層	1	暗褐色微砂質土層	ローム粒子を含む	
2層	2	淡黄褐色粘質土層	小粒の暗褐斑を含む	
	3	淡黄褐色粘質土層	2よりも明るい	
	4	淡黄褐色粘質土層	暗褐色土層を含む	
	5	暗褐色粘質土層	黄灰色粘質土層がブロック状に混入	竪穴遺構

貯蔵穴状ピット堆積土

層No.	土色・土性	混入物・その他
1	明褐微砂層	炭粒・焼土をやや含む
2	明褐色粘質微砂層	暗黄色の粘土を多く含む
3	褐色粘質微砂層	炭粒・焼土を多く含む

第19図　第6号住居跡



第20図　第6号住居跡出土遺物

弥生土器

体部破片が1点（2）出土している。外面は横位沈線により文様が表現されている。

第7号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：認められない。

平面形・、規模：南半が土取りのため破壊されている。全体の形は明らかではないが残存している部分から推定すると、平面形は隅丸方形を基調とすると考えられる。規模は北辺で約4.4mである。

竪穴層位：堆積土は3層に大別される。第1層（黒褐色粘質微砂層）；木炭を含む。壁際から住居全域に堆積し、中央部が厚い。第2層（褐色粘質微砂）；木炭、焼土を多く含む。壁際から住居全域に堆積し、中央部では床面上にまで及んでいる。第3層（暗黄褐色粘質微砂層）；地山ブロックを含み、壁際から床面上に堆積している。

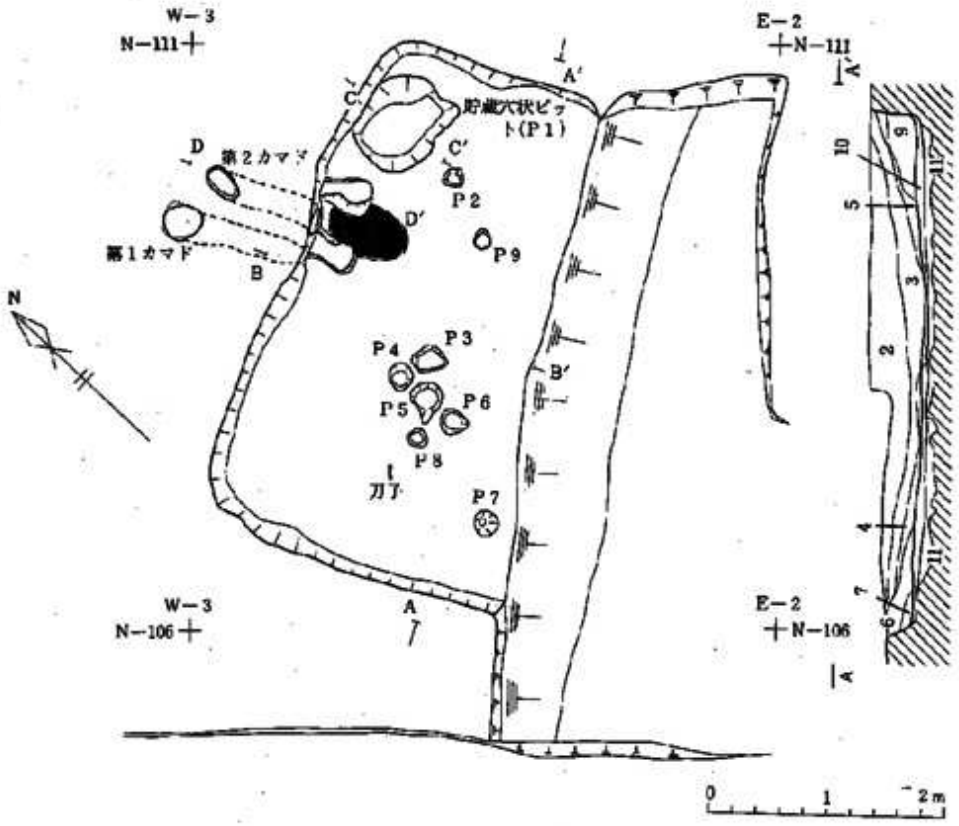
壁：北壁と東、西壁の北半が残存し、地山を壁としている。保存良好な北壁の残存高は床面から40～50cmある。壁は急角度で立ち上がる。

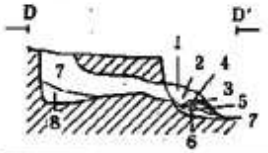
床面：北半が残存している。灰褐色粘土層の貼床が認められる。北壁沿いはやわらかいが、それ以外では固くほぼ平坦である。床面下に掘り方が認められた。

柱穴：床面から7個、床面下から1個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は認められない。また、規則性等も認められず、柱穴と考えられるピットの抽出はできなかった。

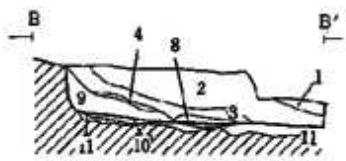
周溝：検出できなかった。

カマド：北壁中央部に2基ならんで検出された。西側のものを第1カマドとする。東側のものを第2カマドとする。〔第1カマド〕は煙道部が残存している。煙道部の長さは1.2mありトンネル状になっている。底面幅20cm前後で煙出しに向って傾斜し、煙出し底面とにわずかな段が認められる。煙道先端には、径20cmの円形の煙出しが取り付いている。〔第2カマド〕は燃焼部、煙道部から成る。燃焼部側壁は粘土で構築し、側壁内側と奥壁は火熱を受け赤変している。燃焼部の長さは40cmで、底面に80×50cmの焼面が認められた。燃焼部奥壁は燃焼部底面から比較的急角度に立ち上がり、煙道に移行する。煙道部の長さは1.1mで地山をトンネル状に

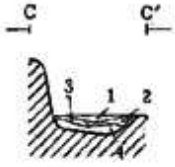




層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1	1	褐色粘質土層	細い焼土・炭を多く含む
2	2	褐色粘質土層	細いローム ブロックを含む
3	3	黒褐色粘質土層	1cm以下の焼土をまばらに含む、粘性強
4	4	黒 土	粘性強
5	5	褐色粘質土層	細いローム・ブロックではなく、1cmオーダーのローム粒を含む
6	6	暗褐色粘質土層	焼土・炭の混ったもの
7	7	褐色粘質土層	炭 焼土を多量に含む
8	8	明褐色粘質土層	炭を多く含む、焼土は少ない

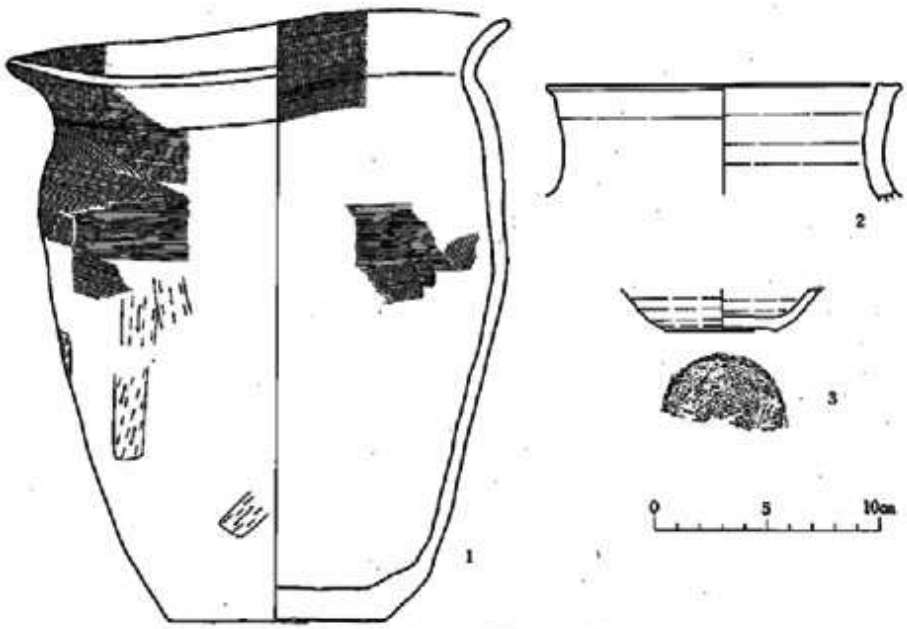


層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	備考
1層	1	褐色粘質土層	焼土小粒・炭粒を含む	
	2	褐色粘質土層	炭粒をやや含む	
2層	3	褐色粘質土層	小粒・焼土を多く含む	
	4	褐色粘質土層	ローム・ブロックを含む	
3層	5	暗褐色粘質土層	ローム・ブロックを含み、やや小さい	
	6	暗褐色粘質土層	ローム・ブロック、炭化物を多量に含む	
	7	暗褐色粘質土層	ローム・ブロックを含まない	
	8	暗褐色粘質土層	大型のローム・ブロック(10cm以上)を含む	
	9	暗褐色粘質土層	ローム・ブロックを多量に含む	
	10	黒褐色粘質土層		地山崩落土
	11	黄褐色粘質土層		貼り床構土



層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	黒褐色粘土層	焼土をやや含む
2層	2	褐色粘質土層	焼土を多量に含む
	3	褐色粘質土層	焼土・ローム を多量に含む
3層	4	黄褐色粘質土層	地山崩落土を中量含む

第21図　第7号住居跡



第22図　第７号住居跡出土遺物

第23図　第７号住居跡出土遺物

掘り抜いている。煙道底面は煙出しに向ってなだらかに傾斜する。煙道先端には30×20cmのピット状の煙出しが掘りこまれている。その上半部周縁は火熱により地山が赤変している。第1カマドに側壁がないことから、第1から第2カマドに改築されたと考えられる。軸方向はいずれもN－27°　C－Wである。

貯蔵穴状ピット：第2カマド右脇（住居北東隅）に検出された。平面形は85×75cmで床面からの深さは15cmで浅い皿状を呈する。堆積土は3層確認された。上部では焼土、下部では灰を主体とし、焼土を少量含む。上部から土師器甕が出土している。

ピット

PitNO	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
深さ(cm)	15	2	19	11	21	5	15	25	3
備考	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	－	－

出土遺物：床面・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器・刀子・再製模造品が出土している。

〔床面・貯蔵穴状ピット〕

土師器

甕：第22図1は貯蔵穴状ピット出土のものである。製作に際し、ロクロを使用していない。口径に比べ器高が大きく最大径が口縁部にある。口縁部は外反し、端部は丸くおさまり、体部上半がわずかにふくらみ、ひずみの大きい長胴形である。胎土に0.5mm～0.2mmの小礫を含む。器面調整は口縁部内外面に横ナデ、外面体部上半にナデ、下半にヘラケズリ、内面にナデ、ヘラナデが施されている。

刀子：第23図2は床面出土のものである白刀身の部分が欠損している。現長5.5cmある。

〔堆積土〕

須恵器

坏：第22図3は口縁部が欠損している。底部を回転糸切り技法で切り離している。特に再調整は認められず、内外面に明瞭なロクロ調整がみられる。

甕：第22図2は口縁部破片であるため全体の器形は不明である。口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部外面がやや外方にのびる。端部はわずかな凹みをもち、広い平坦面をつくっている。内外面にロクロ調整が認められる。

石製模造品

円板状石製模造品：第23図1は欠損品であるが、残存部から推定すると円形と思われる。扁平な面に2個の孔がある。孔は側縁部にあり、1個は半分欠損している。孔は一方向から穿たれている。表裏側面の3面は研磨されており、擦痕が認められる。最大幅4.7cm、最大厚4mm、孔の径は3mmある。

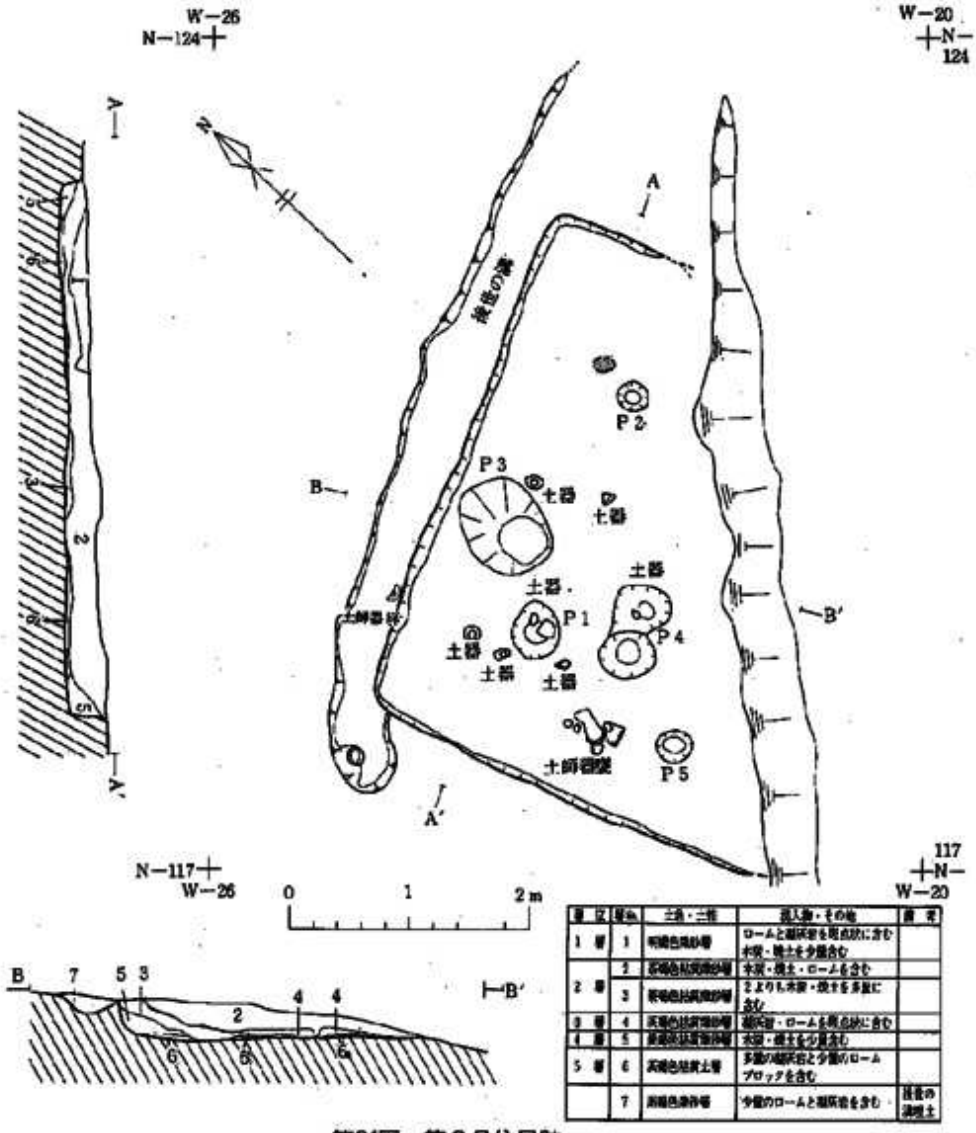
第8号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：北辺が後世の溝と重複している。

平面形・規模：南半が削平されているが、平面形は隅丸方形を基調とすると考えられる。規模は北辺で4.3mある。

竪穴層位：堆積土は5層に大別される。第1層（明褐色微砂層）；焼土・木炭やローム、凝



層位	層色	土質・土性	混入物・その他	備考
1層	1	明褐色微砂層	ロームと凝灰岩を斑点状に含む 木炭・焼土を少量含む	
2層	2	茶褐色粘質微砂層	木炭・焼土・ロームを含む	
	3	灰褐色粘質微砂層	2よりも木炭・焼土を多量に含む	
3層	4	黄褐色粘質微砂層	凝灰岩・ロームを斑点状に含む	
4層	5	多量凝灰岩質微砂層	木炭・焼土を少量含む	
5層	6	灰褐色粘質土層	多量の凝灰岩と少量のロームブロックを含む	
	7	灰褐色粘質層	少量のロームと凝灰岩を含む	撹乱の混入土

第24図　第８号住居跡

灰岩を斑点状に少量含み、東壁際に堆積している。第2層（茶褐色粘質微砂層）；焼土・木炭を含む。住居全域に堆積しており、中央部では床面上まで及んでいる。第3層（灰褐色粘質微砂層）；ローム・凝灰岩を斑点状に含み、中央部床面に堆積している。第4層（黄褐色粘質微砂層）；ロームと少量の凝灰岩を含み、壁際に堆積している。第5層（灰褐色粘質土層）；多量のロームと凝灰岩を含み、床面上に2～4cmの厚さで部分的に堆積している。

壁：北壁・東壁の一部・西壁の大半が残存し地山を壁としている。保存良好な西壁残存高は床面から30cmある。各壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。

床面：北半が残存している。床面はほぼ平坦な地山で、西から東に向ってわずかに傾斜している。東壁から1m西側に20×10cmの焼土が確認された。

柱穴:床面から2個、床面下から3個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は確認められない。また、規則性等も認められず、柱穴と考えられるピットの抽出はできなかった。

周溝:検出されなかった。

カマド:検出されなかった。

貯蔵穴状ピット:検出されなかった。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5
深さ(cm)	48	12	17	11	6

出土遺物:床面・堆積土から土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器が出土している。

〔床面〕

土師器

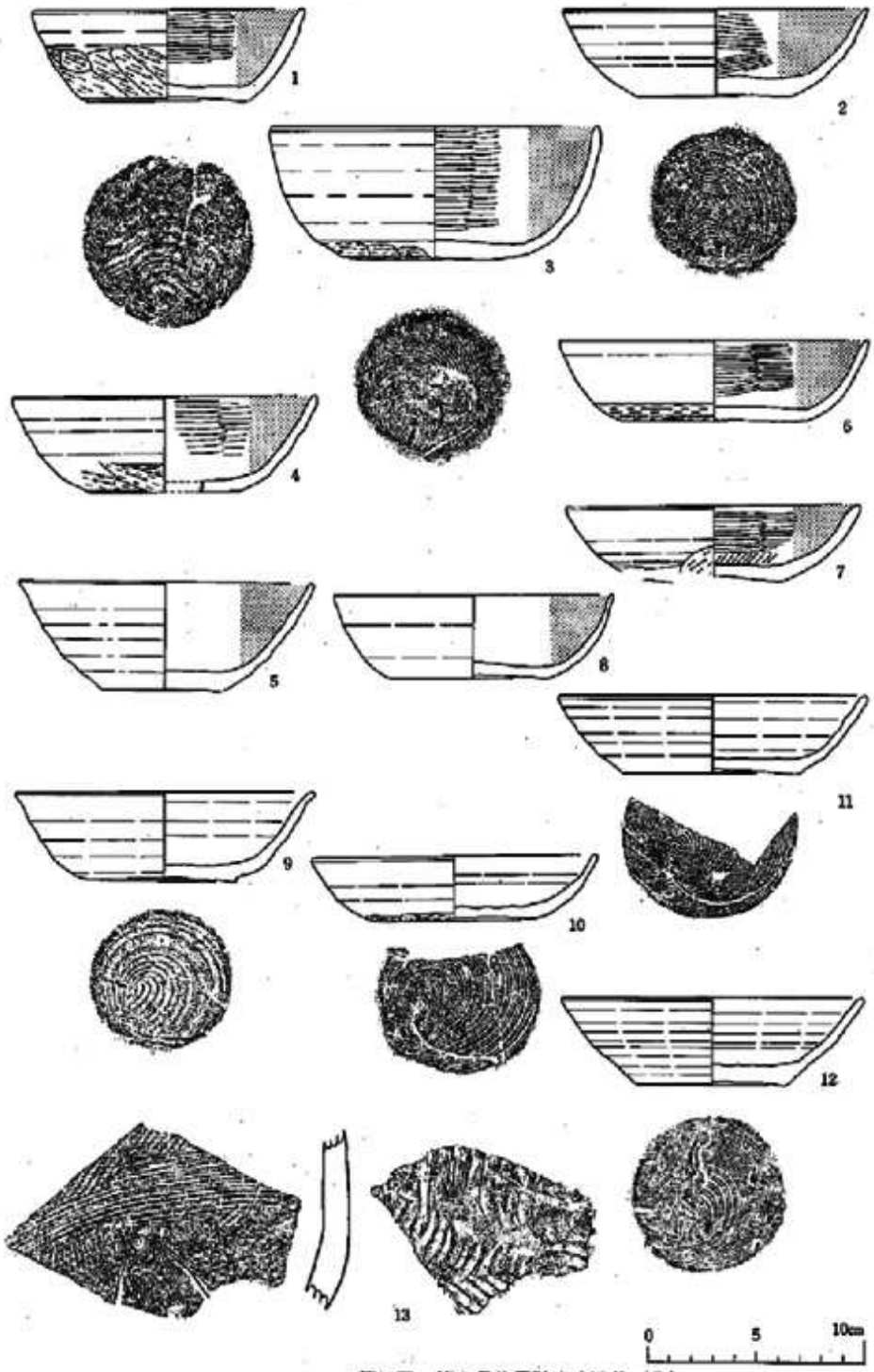
坏：第25図1・2・6は製作に際し、ロクロを使用している。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、丸味をもって立ち上がるものがある。底部は平底である。いずれも、底部を回転糸切り技法で切り離している。第25図1・6は底部切り離し後、体部中央から底部周縁に手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリ（6）が施されている。第25図2は再調整が施されていないものである。器面調整は外面がロクロ調整、内面は磨滅が著しいが、ヘラミガキ、黒色処理が施されてある。ロクロの回転方向はいずれも右回転である。

甕：第26図8は製作に際し、ロクロを使用している。口径が器高よりも大きいもので、最大径が口縁部にある。口縁部が外反し、端部は丸く、内面にはわずかに凹みが認められる。体部は長胴形である。底部は平底である。器面調整は、外面体部下端にヘラケズり、体部内外面には縦方向のナデが認められる。

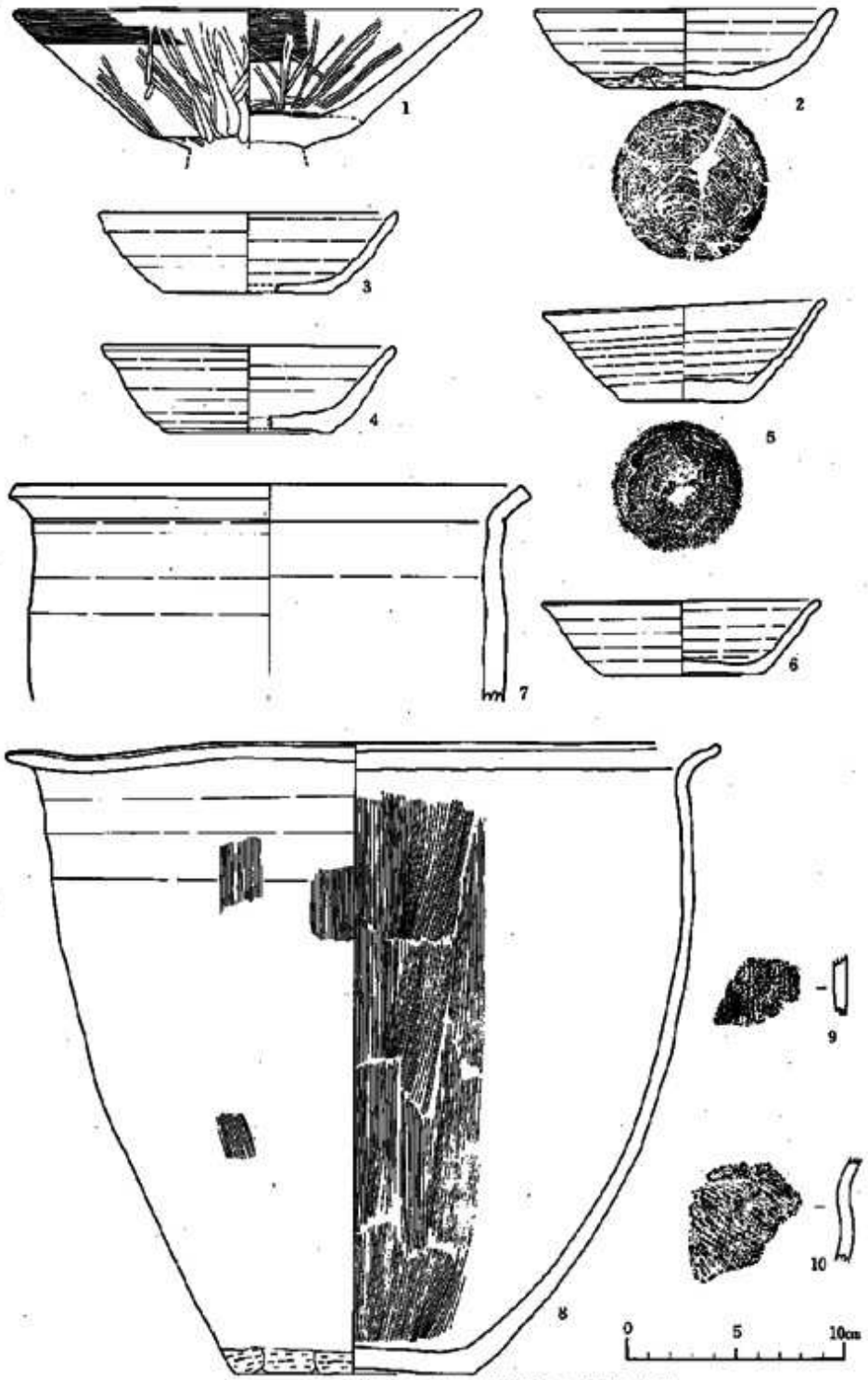
須恵器

坏：第25図9・10・11・12はいずれも底部を回転糸切り技法で切り離している。体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、丸味をもって立ち上がるものがある。前者には口縁端部がわずかに外反するものがある。後者の中には口径に比べ器高が低いものがある。底部は平底である。第25図10は底部切り離し後、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。第25図9・11・12は再調整が加えられていないものである。いずれも内外面にロクロ調整が観察される。第25図12は体部内外面に指をあてたと思われる凹凸が観察される。ロクロの回転方向はいずれも右回転である。

〔堆積土〕



第25図　第８号住居跡出土遺物（Ⅰ）



第26図　第８号住居跡出土遺物（Ⅱ）

土師器

坏：第25図3・4・5・7・8は製作に際し、ロクロを使用している。体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、丸味をもって立ち上がるものがある。第25図3・5・7は底部を回転糸切り技法、第25図4は体部下半から底部に手持ちヘラケズリされているため、切り離しが不明、第25図8は摩滅のため不明である。底部に回転糸切り痕のあるもので、第25図3・7は体部下半に手持ちヘラケズリが施されている。第25図5は再調整が施されていない。器面調整はいずれも外面にロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕：第26図7は体部下半以下を欠損している。製作に際し、ロクロを使用している。口径に比べて器高が高く、最大径が口縁部にあり、長胴形である。体部から直線的に頸部に移行し、口縁部が外傾し、端部は平坦である。

高坏：第26図1は脚部が欠損している。坏部はほぼ直線的に外傾し、坏上半、下半が不明瞭で接合部にわずかに稜がつく。器面調整として、口縁部は内外面とも横ナデ、体部は内外面とも縦方向のヘラミガキが施されている。上、下半の接合部には積み上痕が認められる。

須恵器

坏：第26図2・3・4は底部を回転糸切り技法、第26図5・6は回転ヘラ切り技法で切り離している。いずれも体部から口縁部までほぼ直線的に外傾する。前者では、第26図2は体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。第26図3・4は再調整が加えられていない。後者はいずれも再調整が施されていない。内外面にはロクロ調整が認められる。

甕：第25図13は体部破片であるため全体の器形は不明である。ロクロ調整後、外面に平行タタキ目、内面には青海波文が付されている。

縄文土器

体部破片が1点（第26図10）出土している。胎土に植物の繊維を含まず、外面に単節斜行縄文（ＲＬ）が施されている。

弥生土器

体部被片が1点（第26図9）出土している。外面に単節斜行縄文（ＲＬ）が施されている。

第9号住居跡

確認面：地山面で確認された。

重複：北辺が後世の溝と重複している。

平面形・規模：耕作・後世の溝等によって破壊されているが、平面形は隅が角ばった方形を基調とするものと考えられる。規模は南辺で5.3mある。

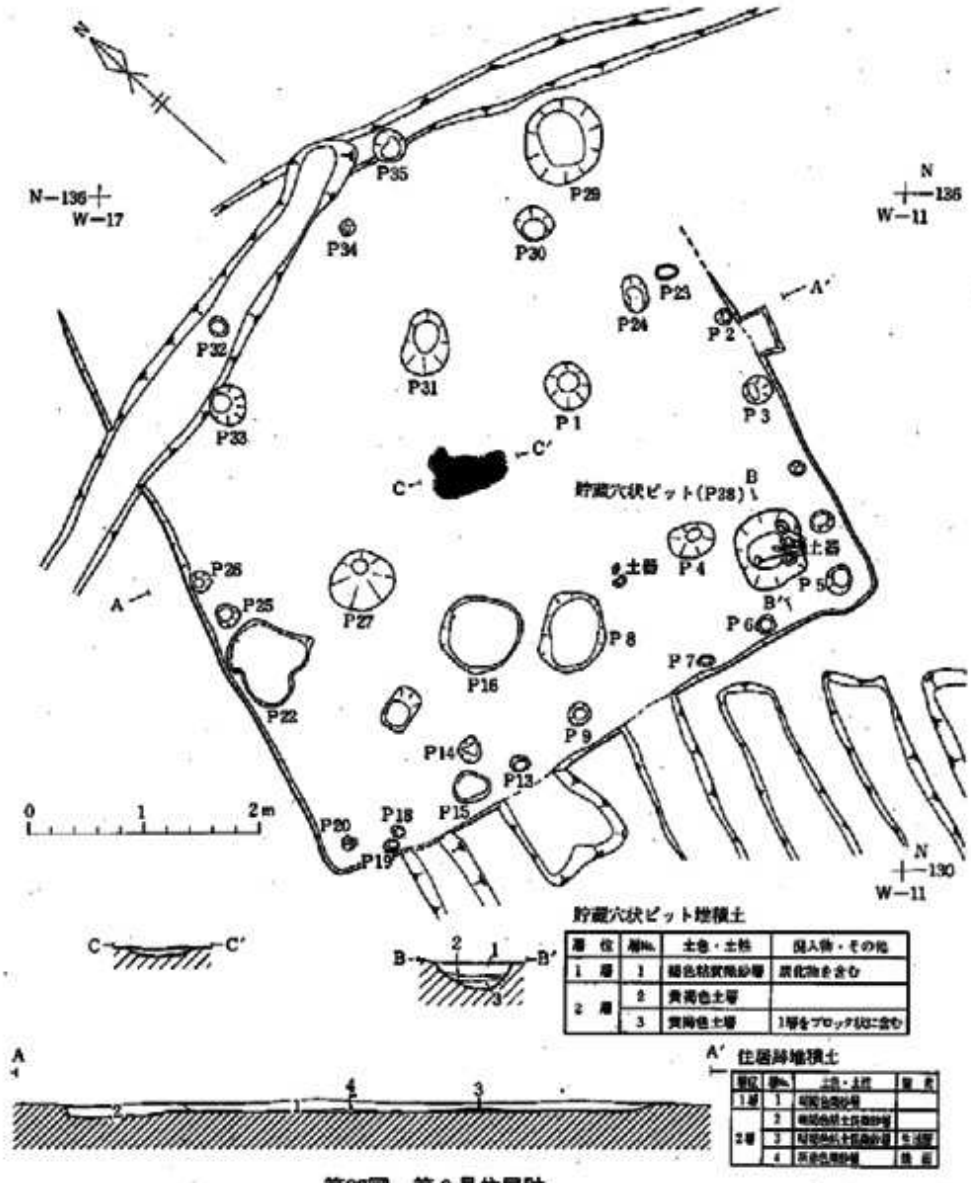
竪穴層位：堆積土は2層に大別される。第1層（明褐色微砂層）；壁際から床面上に堆積し

ている。第2層（明褐色粘質微砂層）；床面中央部に堆積している。

壁：南壁・東壁の南半・西壁の大半が残存し、地山を壁としている。残存壁高は全体に低いが、比較的良好な東壁の残存高は床面から10cm前後でほぼ垂直に立ち上がる。

床面：地山を床としている。床面はほぼ平坦であるが、中央部がわずかに高く壁際に向って傾斜している。

柱穴：床面から32個、床面下から2個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は認



第27図　第9号住居跡

められない。その中でP4・P30・P31・P33は大きさ、深さ、土色、配置等から4本柱を基本とした柱穴と考えられる。柱間は東西、南北3.1mで対角線上にある。また、壁沿いに多数の小ピットを検出した。これらのピットは壁柱穴の可能性もある。

周溝：検出できなかった。

炉：住居中央部と想われる床面に65×35cmの焼面を確認した。火熱の及んだ範囲は床面から7cm前後である。

貯蔵穴状ピット：南東隅に検出された。平面形は65×55cmの楕円形で、最深部の深さは床面から30cmほどで擂鉢状を呈する。堆積土は2層認められた。上部に炭化物を含む。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P13	P14	P15	P16	P18	P19
深さ(cm)	14	5	8	15	11	12	3	50	8	6	11	3	42	8	3
備考	茶褐色微砂層	灰褐色粘質微砂層	明褐色粘質土層	褐色粘質微砂層	褐色粘質微砂層	褐色粘質微砂層	褐色粘質微砂層	—	—	褐色粘質微砂層	褐色粘質微砂層	—	—	—	褐色粘質微砂層
	P20	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35
	8	11	6	21	7	5	19	30	33	61	31	13	91	12	13
	褐色粘質微砂層	—	明褐色粘質微砂層	明褐色粘質微砂質	褐色粘質微砂質	—	褐色粘質微砂層	貯蔵穴状ピット	—	—	暗赤微砂層	褐色微砂層	—	—	—

出土遺物：床面・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器が出土している。

〔床面・貯蔵穴状ピット〕

土師器

坏：床面(1・3)・貯蔵穴状ピット(2)から出土している。いずれも製作に際し、ロクロを使用していない。1・3は内面に稜のあるもの、2は内面に稜のないものである。前者は体部下半から丸味をもって立ちあがり、口縁部が直立するものと外反するものがある。後者は体部上半が外傾し、口縁部が直立する。1は口縁部が外方に削がれたように薄くなる。底部は丸底である。2は皮部が平底で木葉痕が認められる。

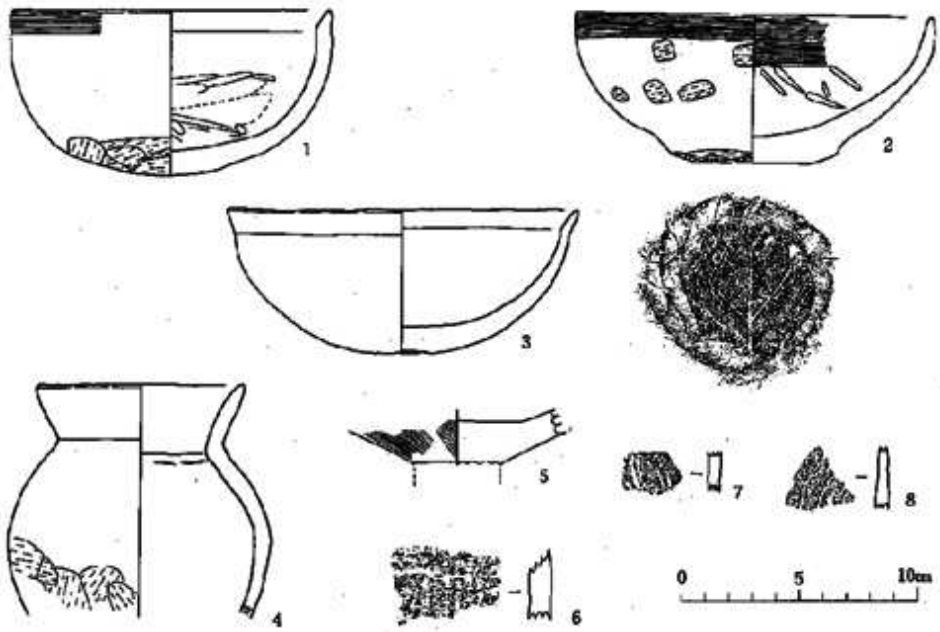
器面調整は1・2は口縁部内外面にヨコナデ、外面の体制下端(1)、底部周縁 (2) に手持ちヘラケズリ・内面にはヘラミガキ (2) 、ヘラケズリを削したヘラミガキ(1)が施されている。

壺：4は床面出土のもので体部下端以下を欠損している。製作に際し、ロクロを使用していない。頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が直線的に外傾し、体部が球形を呈している。

器面調整は摩滅が著じるしく観察が困難であるが、外面体部下半に手持ちヘラケズリの痕跡が観察される。

高坏：5は床面出土のものである。坏部下半の破片であるため全体の器形は不明である。

器面調整は外面にナデ、内面にヘラミガキが施されている。



第28図　第９号住居跡出土層物

〔堆積土〕

須恵器

坏・甕：破片が8点出土している。甕の体部外面に平行タタキ目が施されているものもある。

縄文土器

体部破片が2点出土している。胎土に植物の繊維を含むもの（6）と含まないものがある。6は外面に単節羽状縄文が施されている。

弥生土器

体部破片が6点出土している。文様表現が沈線によるもの(8)と地文だけのものがある。8は弧状沈線により文様が表現されている。地文だけのものは、外面に単節斜行縄文が施されており、原体がＲＬのもの(7)とＬＲのものがある。

第10号住居跡

確認面：地山面で確認した。

平面形・規模：南西部が大きく削平されており、平面形・規模は不明である。

竪穴層位：堆積土は削平をうけてほとんど残っていなかった。

壁：地山を壁としている。残存壁高は約5cmある。

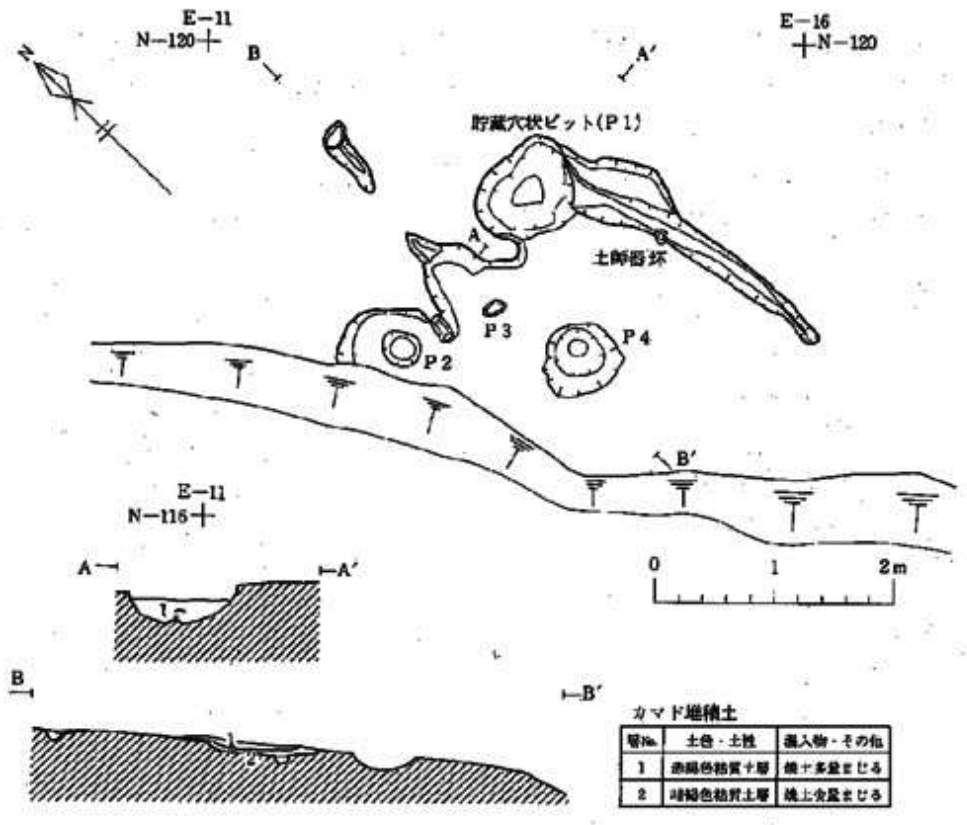
床面：削平されているため床面の状況は不明である。住居の掘り方底面はほぼ平坦で、南西部に向って緩く傾斜している。

柱穴：床面から掘り込まれたと推定されるピットが3個検出されたが、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝：東壁に沿って確認された。規模は底面幅3～8cm、床面からの深さは約5cmある。断面形は「U」字形である。

カマド：北壁に検出された。底面には焼土が堆積している。奥壁は緩やかに約10cm立ち上がり、煙道へ移行している。煙道部の長さは1.3mあり先端に煙出しがとりついている。煙道底面は煙出しに向って傾斜している。煙出しの平面形は23×15cmの楕円形で、煙道底面との比高は約6cmある。軸方向はN－1°－Eである。

貯蔵穴状ピット：カマドの右脇（住居北東隅）にある。平面形は90×75cmの楕円形で、深さは床面から約15cmある。堆積土は1層確認された。黒褐色粘質微砂層で凝灰岩や焼土を多量に含む。



第29図　第10住居跡

ピット

pit No.	P1	P2	P3	P4
深　さ (cm)	35	13	8	15
備　　考	貯蔵穴状ピット	－	－	－

出土遺物：周溝・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器・縄文土器が出土している。

〔周溝・貯蔵穴状ピット〕

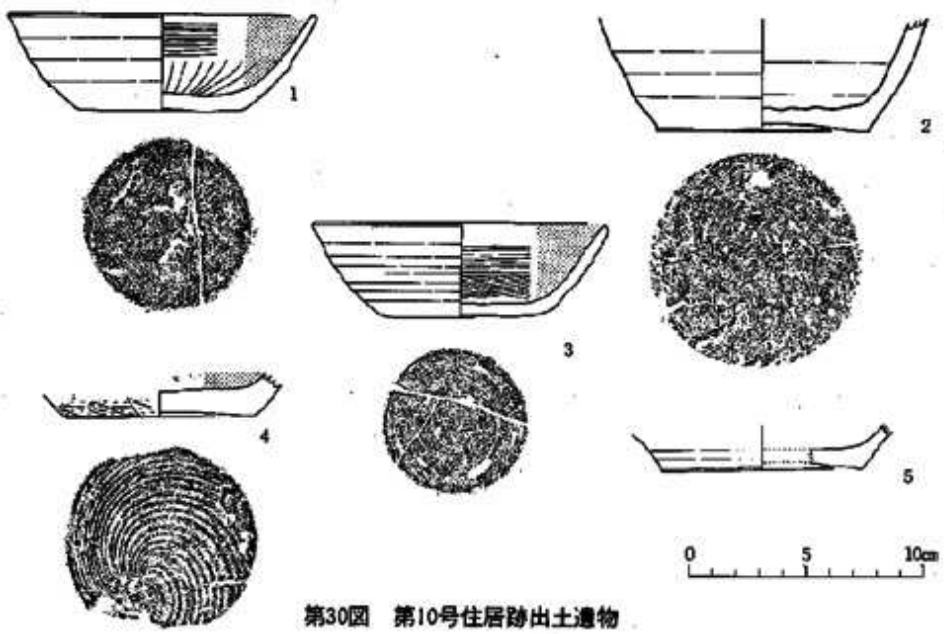
土師器

坏：周溝内（3）と貯蔵穴状ピット(1・4)から出土している。いずれも製作に際しロクロを使用している。底部の切り離しは回転糸切り技法によるもの(4)、回転ヘラ切り技法によるもの(1)と底部に回転ヘラケズリが施されているため不明なもの(3)がある。4は回転糸切り後、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。1は、底部に手持ちヘラケズリが施されている。器面調整はいずれも外面にはロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ロクロの回転方向の明らかなものは右回転である。

甕：2は底部の破片である。製作にロクロを使用しており、底部の切り離し技法は回転糸切りである。内外面にはロクロ調整が認められる。ロクロの調回転方向は右回転である。

縄文土器

体部破片が2点周溝内から出土しており、胎土には植物の繊維を含まない。外面に単節斜行縄文が施されており、原体がＲＬのものとしＬＲのものがある。いずれも摩滅が著しいため図示



第30図　第10号住居跡出土遺物

できない。

〔堆積土〕

須恵器

坏：5は底部破片である。底部の切り離し技法は回転糸切りである。

第11号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：認められない。

平面形・規模：南半が残存しているのみであるが、隅丸方形を基調としている。南辺の長さは3.8mである。

竪穴層位：堆積土は1層確認された。黄褐色粘質土層で床面に堆積している。

壁：地山を壁としている。残存状態の割合良好な南壁で10～30cmの壁高があり、急角度に立ち上がる。

周溝：検出されなかった。

床面：地山を床とし、平坦である。

柱穴：床面から12個のピットが検出された。配置の規則性や深さから柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

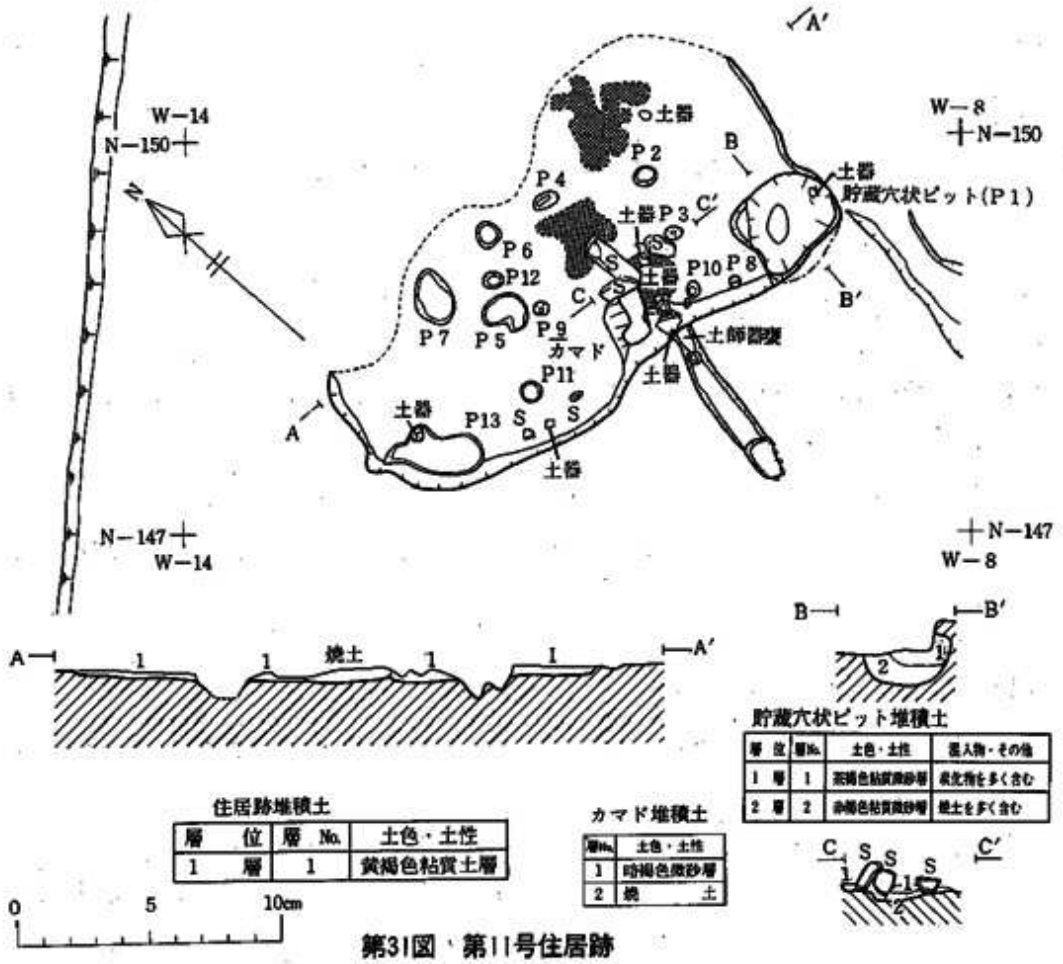
カマド：南壁中央やや東寄りにとりつけられており、燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は粘土で構築した右側壁が残存している。焚口付近と推定される位置に3個の大きな角礫が検出された。それらが元位置を保っているかどうか確認できなかったが、表面が火熱を受け赤色していることから燃焼部の側壁構造の関連したものと考えられる。底面には固くしまった焼土が堆積している。奥壁から25cm内側には支脚として用いた角礫が立った状態で検出された。奥壁は急角度に約30cm立ち上がり煙道へ移行している。煙道部長は1.4mあり、底面幅は10～15cmある。煙出しは平面形30×15cmの楕円形で、煙道底面からの比高は2cmほどでわずかにくぼんでいる。軸方向はS－13°－Wである。

貯蔵穴状ピット：カマドの左脇(住居南東隅)にある。南壁をやや削り込んでいる。平面形は径約60cmの円形で、床面からの深さは35cmある。堆積土は2層あり、第1層には炭化物を多量に含む。土師器甕が出土した。第2層は焼土を多量に含む。須恵器坏が出土している。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P11	P12	P13
深さ(cm)	35	3	7	4	4	4	4	7	6	3	6	3
備　考	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

出土遺物：床面・カマド・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器・縄文土器・弥生



第31図　第11号住居跡

土器が出土している。

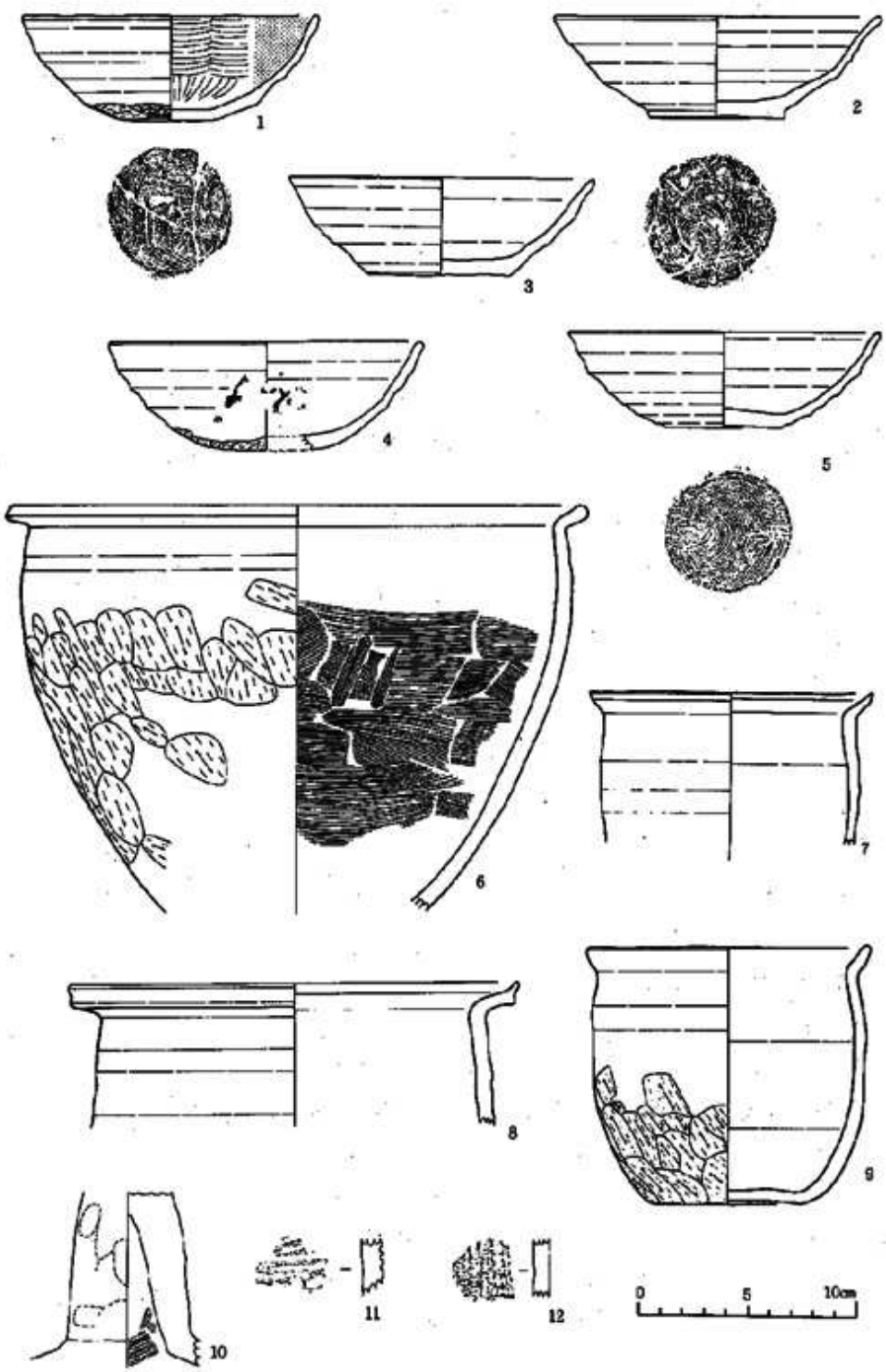
〔床面・カマド・貯蔵穴状ピット〕

土師器

甕：貯蔵穴状ピット（9）と床面(7)から出土した。両者とも製作に際し、ロクロを使用している。口径より器高が小さく、最大径の位置が口縁部にあり小形のものである。頸部でややしぼれで口縁部が外傾する(9)ものと、頸部でややしぼれ口縁部が外傾し、途中で締し口唇部が上方にのび受口状になる(7)ものがある。前者は底部が平底である。切り離し技法は摩滅のため不明である。後者は体部中央以下を欠損しているため不明である。器面調整としていずれも、内外面にロクロ調整が認められ、9は外面体部下半に縦方向のヘラケズリが施されている。

須恵器

坏：カマド(2・5)と貯蔵穴状ピット（3・4）から出土した。底部を回転糸切り技法で切り離しているもの（2・3・5）と、再調整のため切り離し技法が不明なもの(4)がある。



第32図　第11号住居跡出土遺物

前者は底部切り離し後、高調整が施されていない。後者は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されており、また、外面体部に墨書があるが判読できない。ロクロ回転方向の明らかなものは右回転である。

縄文土器

体部破片がカマド内から4点出土している。胎土に植物の繊維を含むもので（12）と含まないものがある。12は外面に単節羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）が施されている。植物の繊維を含まないもは外面に単節斜行縄文が施されているが、原体は不明である。

〔堆積土〕

土師器

坏：1は製作に際し、ロクロを使用している。底部を回転糸切り技法で切り離した後に体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されている。器面調整として外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕：口径よりも器高が大きいもの(8)と器高が小さいもの(6)がある。8は頸部でくびれ、口縁部が強く外反し途中で屈曲し、口唇部が上方にのびて受口状となる。6は頸部でくびれ外反する。体部は上半に最大径があり、やや内弯ぎみに立ち上がる。器面調整としていずれも内外面にロクロ調整が認められる。6はさらに、体部中央以下の外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

縄文土器

体部破片が12点出土している。胎土に植物の繊維を含むものが10点、含まないものが2点ある。繊維を含むものには、内外面に条痕文が施されたもの(11)と、外面に単節羽状純文、単節斜行縄文が施されたものがある。繊維を含まないものは2点とも外面に単節斜行縄文が施されている。

第13号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：南北方向に走る畝によって、部分的に破壊されている。

平面形・規模：隅丸方形で、規模は長軸3.10m、短軸3.05mである。

竪穴層位：堆積土は3層に大別することができる。第I層（明茶褐色微砂層）；木炭、焼土を含み、住居中央床面全体に堆積している。第2層（黄褐色粘質微砂層）；地山粒を斑点状に含み、北壁沿いに堆積している。第3層（灰黄色砂質粘土層）；壁際に堆積している。

壁：北壁の保存は良好であるが、東・西・南壁は畝によって切られ、部分的に残存している。地山を壁としている。壁は床面からややゆるやかに立ち上がり、壁高は北壁で約10cm、西壁で

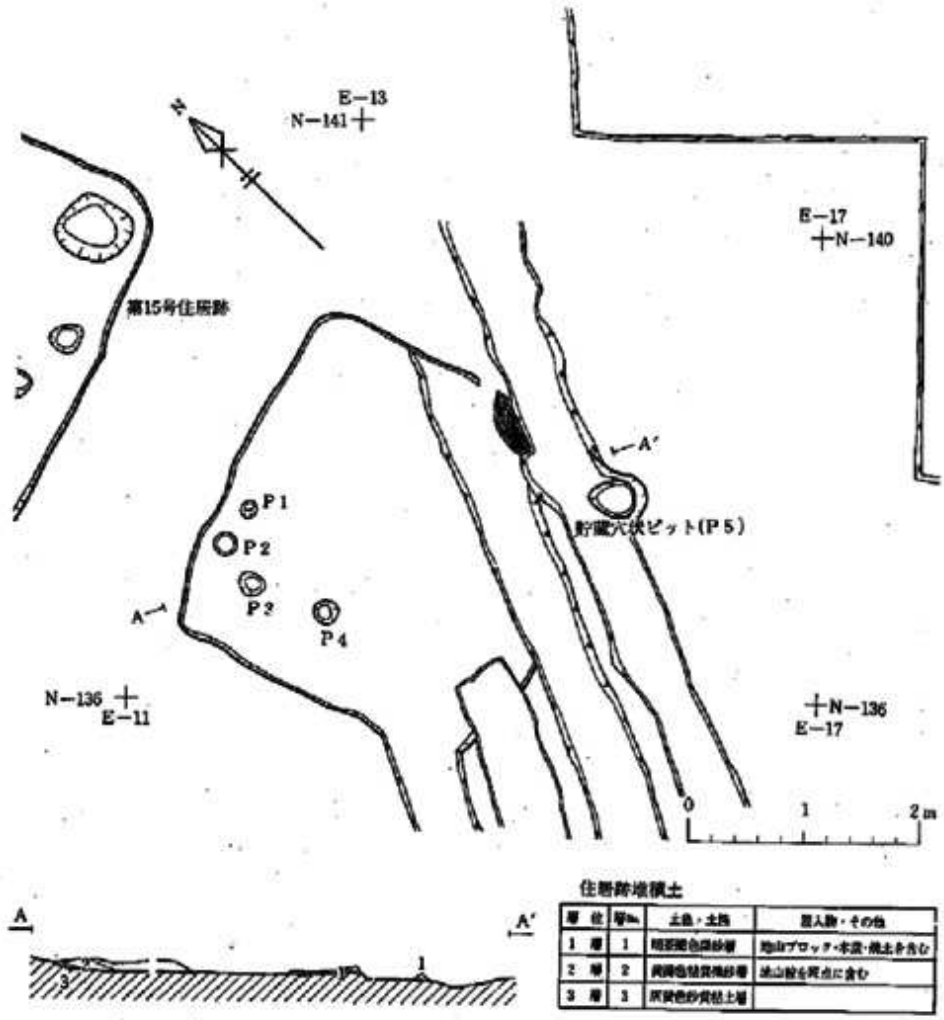
4cmある。

床面：住居南東部は畝によって破壊されている。床面は平坦で、南側に向かってわずかに傾斜している。

柱穴：床面から4個のピットが検出されている。P3、P4の深さは約26cmあるが、柱痕跡は認められない。他の2個のピットについては、柱痕跡も規則性も認められないため、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝:認められない。

カマド:東壁中央部の南寄りの床面に20×60cmの範囲で固くしまった焼面が検出されており、燃焼部底面と考えられる。しかし燃焼部側壁、煙道、煙出しは確認できなかった。



第33図　第13号住居跡

貯蔵穴状ピット：カマドの右脇（住居南東隅）から検出されている。平面形は40×30cmの楕円形で、床面からの深さは約10cmある。堆積土中には焼土・木炭を少量含み土師器甕の破片が出土している。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5
深さ(cm)	8	11	26	25	11
堆積土	淡褐色微砂	淡褐色微砂	淡褐色微砂	淡褐色微砂	淡褐色微砂
備考	－	－	柱穴？	柱穴？	貯蔵穴状ピット

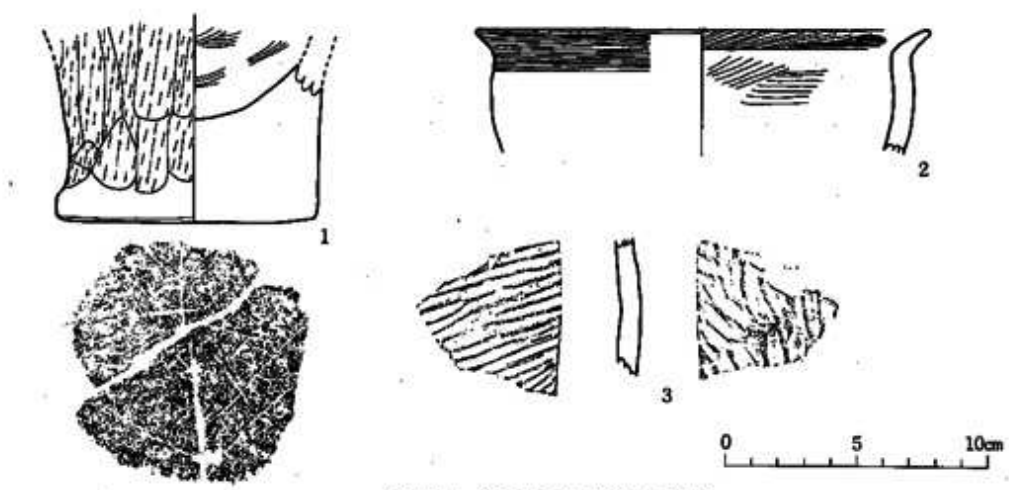
出土遺物：堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔堆積土〕

土師器

坏：小破片のため図示はできなかったが、口縁部が外傾し、体部が内弯気味で内面に稜がみられる。器面調整は著しく摩滅しており不明である。

甕：1は体部下端～底部の破片である。底面に木葉痕がみられる。外面体部下端はやや摩滅気味であるが、ヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキが施されている。2は口縁部から体部上半にかけての破片である。製作に際しロクロを使用していない。口縁部径と器高の比率は、体部下半以下が欠損しているため不明である。最大径の位置は口縁部にあり、口縁部は外傾している。体部はやや内弯気味である。器面調整は外面については、口縁部から体部上端にかけてヨコナデが施されているが、体部は摩滅のため不明である。内面については、口縁部にヨコナデ、体部にヘラミガキが施されている。



第34図　第13号住居跡出土遺物

須恵器

甕：3は体部破片のため、全体の器形は不明である。ロクロ調整後再調整をして、外面に平行タタキ目、内面に青海波文が施されている。

第15号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第4号住居跡と重複している。新旧関係については確認できなかった。

平面形・規模：隅丸方形で、規模は長軸4.45m、短軸4.43mである。

竪穴層位：床面近くまで削平が及んでいるが、堆積土は4層確認できた。第1層（黄褐色粘質微砂層）；暗褐色のブロックを部分的に含んでおり、住居全体に堆積している。第2層（暗褐色粘質微砂層）；炭化物を含んでおり、住居床面に部分的に堆積している。第3層（黄褐色粘質微砂層）；炭化物を含んでおり、西・南壁際に堆積している。第4層（凝灰岩質黄褐色粘質土層）；非常に固く、住居床面に全体的に堆積している。

壁：西壁中央部北寄りが第4号住居跡の煙道部と重複している。4壁が残存しており、地山を壁としている。残存する壁高は2～4cmである。

床面：床面は平坦である。床面下には掘り方が認められる。

柱穴：床面から10個、床面下から4個のピットが検出されている。床面下から確認されたピットの中で、2個に柱痕跡が認められるだけで、残りはいずれも柱痕跡は認められない。また

規則性もないため、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝：認められない。1

カマド・炉：床面に焼土が2ヶ所検出されているが、炉跡・カマドは認められない。炉跡・カマドに伴う焼土であるかどうかは不明である。

貯蔵穴状ピット：2個検出されている。P1は住居の北東隅にあり、平面形は80×60cmの楕円形で、床面からの深さは約10cmである。堆積土は1層確認されている。堆積土中に炭化物が含まれており、土師器・須恵器破片が出土している。P2は住居の南東隅にあり、平面形は70×60cmの楕円形で、床面からの深さは25cmである。堆積土は4層確認されており、下部に炭化物を含む。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
深さ(cm)	10	25	15	20	20	20	4	8	4	21	17	4	22	24	15	13
堆積土	暗褐色粘土	断面図参照	黄褐色粘質微砂	—	暗褐色粘土	—	—	黄褐色微砂	—	—	—	—	—	—	—	—
備考	貯蔵穴状ピット	貯蔵穴状ピット		—	—	—	—		—	—	—	—	柱痕跡あり	柱痕跡あり	—	—

出土遺物：貯蔵穴状ピット・堆積から土師器・須恵器・縄文土器が出土している。

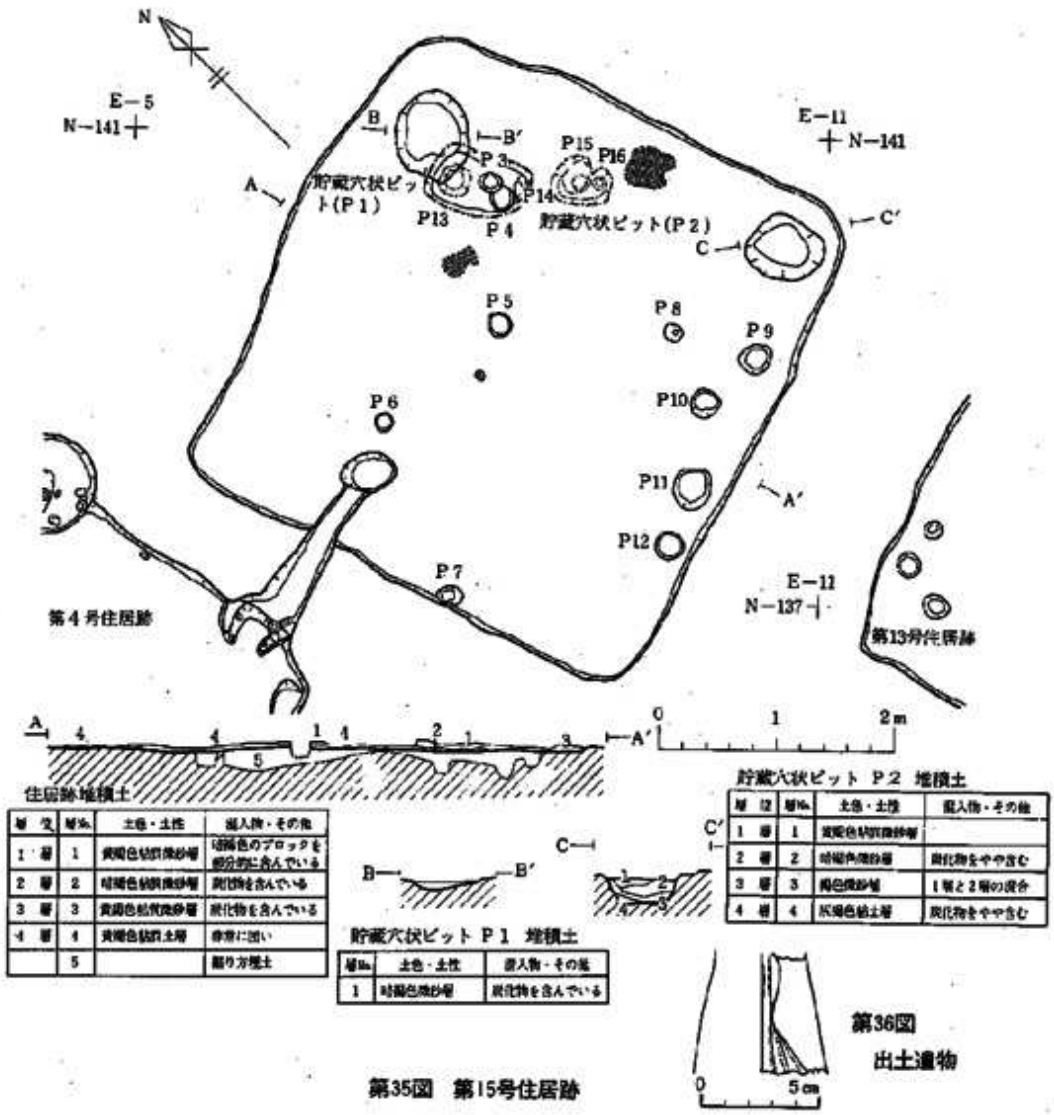
〔貯蔵穴状ピット〕

P1から土師器坪が1点、須恵器坏が1点出土しているが、2点とも小破片のため図示できない。土師器坏は口縁部破片であり、製作に際しロクロを使用しており、内面にヘラミガキ、黒色処理されている。

〔堆積土〕

土師器

高坏：脚部（柱状部）の破片である。柱状部が直立に近いもので、器面調整は、外面は摩滅



層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1 層	1	黄褐色砂質焼砂層	暗褐色のブロックを部分的に含んでいる
2 層	2	暗褐色砂質焼砂層	炭化物を含んでいる
3 層	3	黄褐色粘質焼砂層	炭化物を含んでいる
4 層	4	黄褐色粘質土層	非常に固い
	5		掘り方埋土

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1 層	1	黄褐色砂質焼砂層	
2 層	2	暗褐色焼砂層	炭化物をやや含む
3 層	3	褐色焼砂層	1層と2層の混合
4 層	4	灰褐色粘土層	炭化物をやや含む

層No.	土色・土性	混入物・その他
1	暗褐色焼砂層	炭化物を含んでいる

第35図　第15号住居跡

第36図
出土遺物

が著しいため不明、内面にはシボリ目が認められる。

縄文土器

体部破片が1点出土している。胎土には植物の繊維が含まれず、外面には縄文が施されている。縄文は単節斜行縄文（ＬＲ）である。小破片のため図示できない。

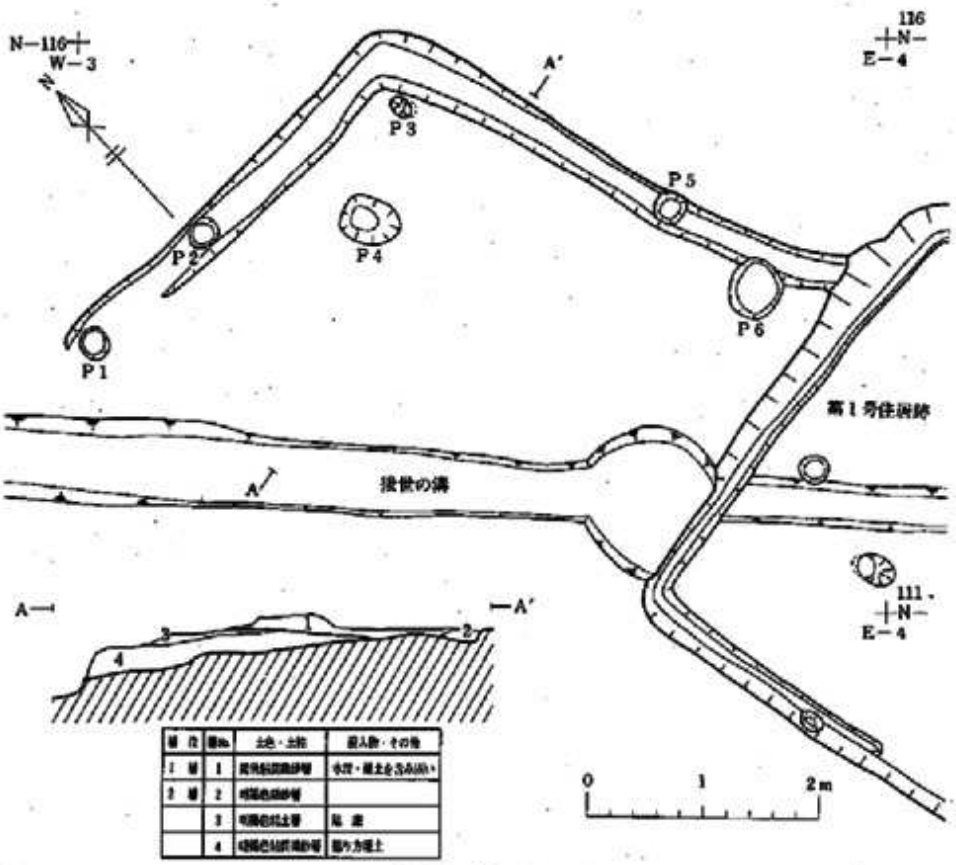
第17号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第1号住居跡と後世の溝と重複している。第1号住居跡との新旧関係は確認できなかった。

平面形・規模：南半が削平や溝で破壊を受けているが、残存している部分から推定すると、平面形は、隅丸方形を基調とすると考えられる。規模については計測できなかった。

竪穴層位：堆積土は2層確認された。第1層（褐色粘質微砂層）；木炭、焼土を含み壁際から床面上に堆積している。第2層（暗褐色微砂層）；壁際から周溝内に堆積している。



第37図　第17号住居跡

壁:東壁の大半、北壁の東半が残存している。地山を壁としている。保存良好な北壁残存高は床面から20～25cmである。床面からの立ち上がりは垂直に近い。

床面：貼床がみられ、床面はほぼ平坦で固い。床面下には、掘り方が確認された。

柱穴：床面から3個、周溝から3個のピットが検出された。いずれのピットにも柱痕跡は認められない。また規則性等も認められず、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

周溝：壁沿いに巡乱底面幅25～30cm、深さは床面から4～9cmで幅広い「U」字形を呈している。

カマド・炉：検出されなかった。

貯蔵穴状ピット:検出されなかった。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ (cm)	10	6	71	51	15	13

出土遺物：堆積土から土師器・縄文土器・弥生土器が出土している。

〔堆積土〕

土師器

甕：1は製作技法が判別できないものである。底部破片のため全体の器形は不明である。器面調整は内外摩滅、剥落が著しく観察が困難である。

縄文土器

体部破片が3点出土している。胎土に植物の繊維を含むものと含まないものがある。2は繊維を含まず、外面に単節羽状縄文（RL・LR）が施されている。繊維を含むものは外面に単節斜行縄文が施されているが摩滅が著しいため図示できない。

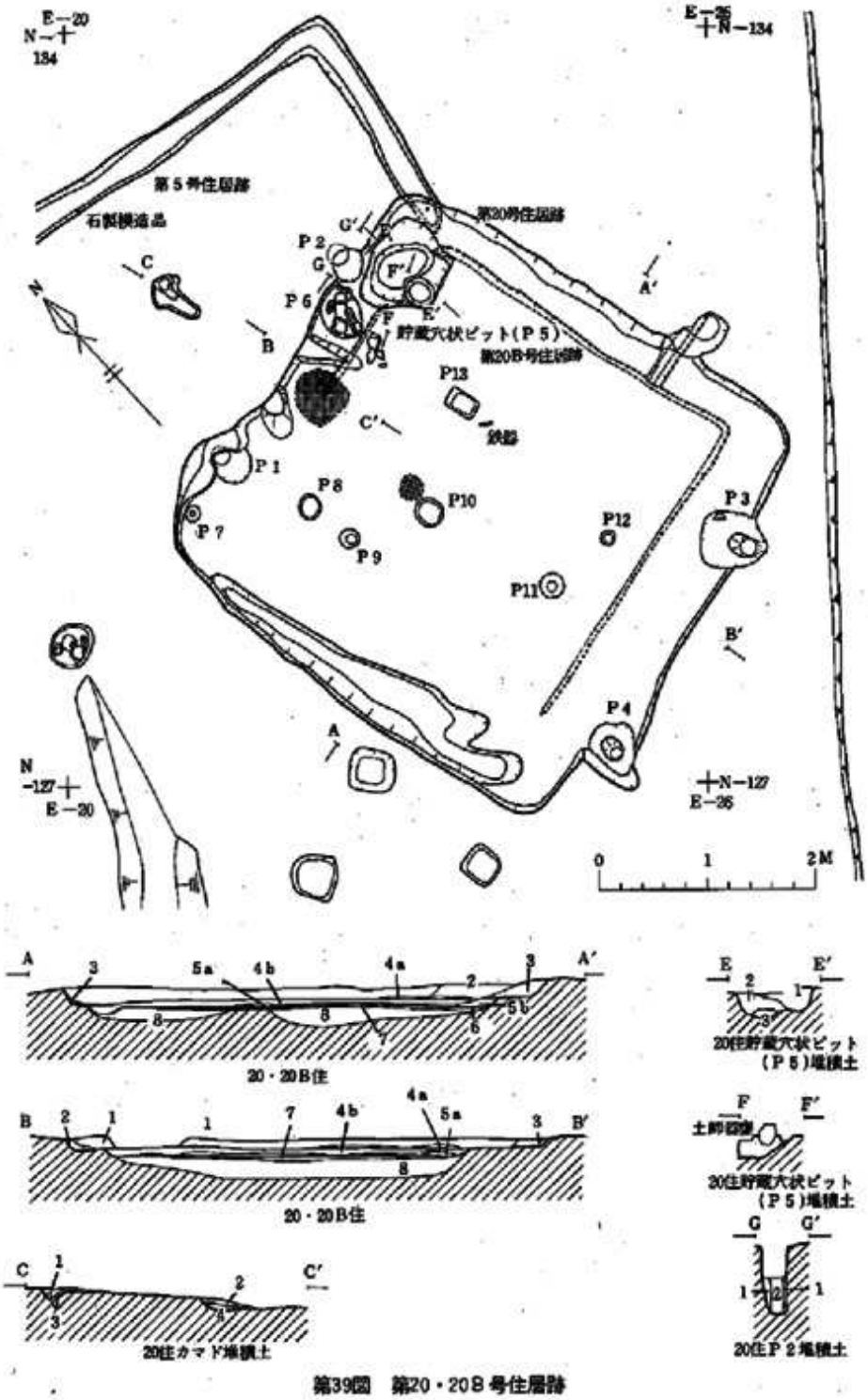
弥生土器

体部破片が2点出土している。4は、地文が無文で、外面は弧状沈線により文様が表現されている。3は、地文が単節斜行縄文（LR）で、弧状沈線により文様が表現されている。

第38図　第17号住居跡出土遺物

第20・208号住居跡

第20号住居跡の床面で第20B号住居跡は確認された。①第20B号住居跡の堆積土に木炭を若干、黄橙色のブロックを多量に含んでおり、自然流入ではないこと。②2つの住居跡の壁の方



第39図　第20・20B号住居跡

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他	備考
1層	1	明褐色微砂層	木炭・焼土を含み遺物も多く含む	第20B号住居跡埋土
	2	明褐色粘質微砂層	灰黄色砂質粘土を含んでおり遺物は少ない	
2層	3	灰褐色砂質粘土層	約3cmの凝灰岩の細礫を多く含む	
3層	4a	黄褐色粘質微砂層	堅くしまっており部分的に灰黄色粘土を含む	
	4b	明褐色粘質微砂層	本層を若干黄褐色のブロックを多量に含む20住の貼床である	
4層	5a	褐色粘質微砂層	4bに比べ黄褐色のブロックの量が非常に少ない	第20B号住居跡埋土
	5b	褐色粘質微砂層	5aより粘性を帯び、やや明るい	
5層	6	青灰色粘質土層	20B住の貼床である	
	7	黄褐色凝灰砂質	20B住の貼床である	
6層	8	黄褐色砂質土層	褐色粘土をわずかに含み締り力極土である	

層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	明褐色微砂層	炭化物を含む
2層	2	淡赤褐色粘質微砂層	焼土・炭化物を含む
3層	3	灰黄色砂質粘土層	地山を含む
	4	淡赤褐色粘質微砂層	焼土・炭化物を含む
層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	明褐色粘質微砂層	地山の土をやや含み遺物も含む
2層	2	灰黄褐色粘質微砂層	径0.5～2.0cm前後の凝灰岩礫を多く含む
3層	3	灰黄色砂質粘土層	遺物を含んでいない
層位	層No.	土色・土性	混入物・その他
1層	1	褐色粘質土層	凝灰岩を含み粘性がある
2層	2	暗褐色砂質土層	焼土が15%程じる。粘性がある

20・20B住居跡の注記

向が同一であり、同一西壁を使用していること。③第20B号住居跡の西壁付近の床面が第20号住居跡の床面と一致していること。以上のことから、第20号住居跡は、第20B号住居跡を増改築している可能性がある。

第20号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複・増改築：第20B号住居跡を増改築している可能性がある。第5号住居跡と重複している。第5号住居跡より新しい。

平面形・規模：隅丸方形で、規模は長軸4.4cm、短軸4.35cmである。

竪穴層位：堆積土は3層に大別することができる。第1層（明褐色微砂層）；木炭、焼土を含み、住居全体に堆積している。第2層（灰褐色砂質粘土層）；凝灰岩細礫を多く含み、壁際に堆積している。第3層（黄褐色粘質微砂層）；固くしまっており、灰黄色粘土を部分的に含み、床面に堆積している。

壁：第20B号住居跡の西壁を南に約50cm、北に約50cm拡張して、西壁を構築している。4壁が残存しており、地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、残存する壁高は、南、北壁で約10cm、東・西壁で約15cmである。

床面：床面は平坦である。明褐色粘質微砂の貼床が認められる。

柱穴：床面から12個のピットが検出されている。①北壁、南壁を掘りこんで検出された4個のピット（P1・P3・P4）は、深さが50～80cmである。②P1・P2のピットには柱痕跡が認められた。③それぞれのピットの埋土が類似している。④P1とP2が2.2mの間隔をもって北壁に掘りこまれて検出された。P3・P4がP1・P2と同様に、2.2mの間隔をもって南壁に掘りこまれて検出された。以上のことからP1～P4が柱穴と考えられる。柱間は東西2.2m、南北4.6mである。

周溝：認められない。

カマド：北壁の中央に位置し、粘土で燃焼部の側壁を構築している。燃焼部の長さは約50cmで底面は浅い皿状を呈し固く焼けている。煙道の中央部が削平されているが、煙道部の推定の長さは1.5m、底面幅約10cmで、先端に煙出しが取り付いている。煙出しの平面形は30×20cmの楕円形で、煙道部底面との比高は9cmある。軸方向はN－10°－Wである。

貯蔵穴状ピット：カマド右脇（住居北東隅）から検出されており、平面形は90×70cmの不整な円形で、底面からの深さは25cmである。堆積土中から直立した土師器甕が出土している。

ピット

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
深さ(cm)	47	50	85	64	22	5	11	8	16	29	29	20	13
堆積土	褐色砂	－	暗褐色粘土	褐色粘土	断面図参照	－	－	－	－	暗褐色粘土	－	－	－
備考	柱痕跡あり	柱痕跡あり	－	－	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	－	20B住

出土遺物：床面・貯蔵穴状ピット・堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔床面・貯蔵穴状ピット〕

土師器

坏：1はP3から出土しており、製作に際しロクロを使用している。器形は、体部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上がり、口縁部は直線的に外傾している。底部を回転糸切り技法で切り離している。切り離し後の再調整はみられない。土器自体は火熱を受け、内外面とも、もろい状態である。内面の底部に黒色処理の痕跡が認められる。ロクロの回転は右方向である。

甕：床面出土(4・7)と貯蔵穴状ピット出土(5)のものがある。

5は製作にロクロを使用しておらず、口径より器高が大きく、最大径は体部上半にある。器面調整は口頸部内外面に横ナデ、体部の外面上半に刷毛目、ナデ、下半にヘラケズリ、内面上半に刷毛目、下半から底部にヘラナデが施されている。

4・7は製作にロクロを使用している。4は口径より器高が大きく、最大径は口縁部にある。体部最大径は上半に位置する。器面調整は口縁部内外面と外面体部上半にロクロ調整がみられ、その後、外面体部下半にはヘラケズリ、内面体部上半に刷毛目、下半にナデが施されている。

7は口径が器高より大きく、最大径は口縁部に、体部最大径は上端にある。内外面にロクロ調整が認められる。

須恵器

坏：2は床面から出土している。体部は直線的に外傾している器形で、底面にヘラ切り痕を残している。体部下端にナデらしき痕跡(?)をわずかに残しているが、底面への再調整はみられない。

甕：9は、体部破片である。器面調整については、外面に平行タタキ目が施されている。

〔堆積土〕

土師器

甕：6は、口縁部・体部上半のみの破片である。製作に際しロクロを使用しており、口径より器高が大きく、最大径の位置が口縁部にある。体部において最大径の位置は体部上半にある。口縁部は外反しており、端部上端はわずかに上方にのびている。器面調整については、内外面にロクロ調整がみられる。

須恵器

坏：3の器形は体部がやや丸味をおび、内弯気味に外傾している。底部切り離しは再調整により不明である。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

第20号Ｂ住居跡

確認面：第20号住居跡の床面で確認した。

重複：**増改築**：本住居跡を増改築して第20号住居跡を構築している可能性がある。

平面形・規模：東西に長い隅丸長方形である。規模は長軸約4.0cm・短軸約3.3mである。

竪穴層位：堆積土は2層に大別することができる。第1層（明褐色粘質微砂層）；木炭を若干黄橙色層（褐色粘質微砂層）；床面全体に分布している。カマド周辺の床面では多量の炭と焼土を含んでいる。

壁：東・西壁の保存は良い。南壁は大部分・北壁は東半が残存している。地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、残存する壁高は西壁で約10cm、東・南壁で約5cmある。

床面：床面は平坦で貼床が認められる。床面下には掘り方が認められる。

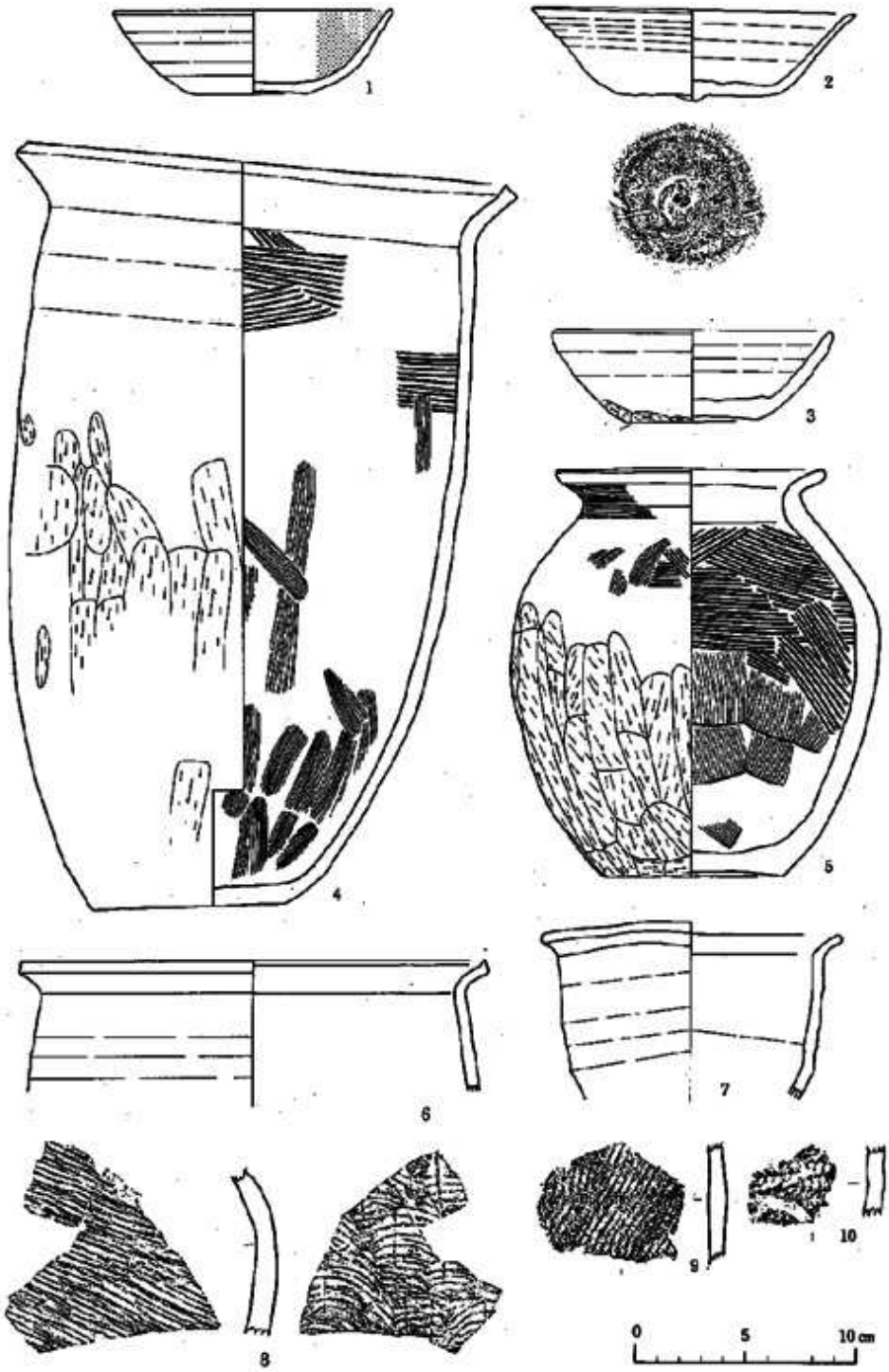
柱穴：床面にピットが1個検出された。柱穴がどうか不明である。

周溝:認められない。

カマド：西壁中央部南寄りにある。燃焼部焼面と地山掘り抜き（トンネル状）の煙道部を部分的に残すだけで、燃焼部側壁・煙出しは認められない。軸方向はＥ－8°－Ｎである。

貯蔵穴状ピット：認められない。

出土遺物：床面・堆積土から土師器・須恵器・縄文土器が出土している。



第40図　第20・20B号住居跡出土遺物

〔床面〕

土師器の坏が1点、土師器の甕が1点出土しているが、2点とも小破片のため図示できない。坏は口縁部破片であり、製作に際しロクロを使用しており、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。甕は底部のみの破片である。器面調整は、外面にヘラナデ、内面にナデが施されている。

〔堆積土〕

須恵器

甕：体部破片(8)である。外面には平行タタキ目、内面には青海波文が認められる。

縄文土器

体部破片(10)が1点出土している。胎土に植物の繊維が含まれており、外面に縄文が施されている。縄文は単節斜行縄文(ＬＲ)である。

第24号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第25住居跡と重複している。その新旧関係は不明である。

平面形・規模：北半が残存している。隅丸方形を基調とし、北辺の長さは4.1mある。

竪穴層位：堆積土は1層である。第1層（褐色粘質微砂層）；焼土を含み住居全体に堆積している。

壁：地山を壁としており保存状態の良好な北壁の残存高は12～20cmで、床面から垂直に立ち上がっている。

床面：地山を床とし、平坦である。

柱穴：床面から9個、床面下から2個検出された。Ｐ1では柱痕跡が認められた。その他のピットには柱痕跡や規則性が認められず、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

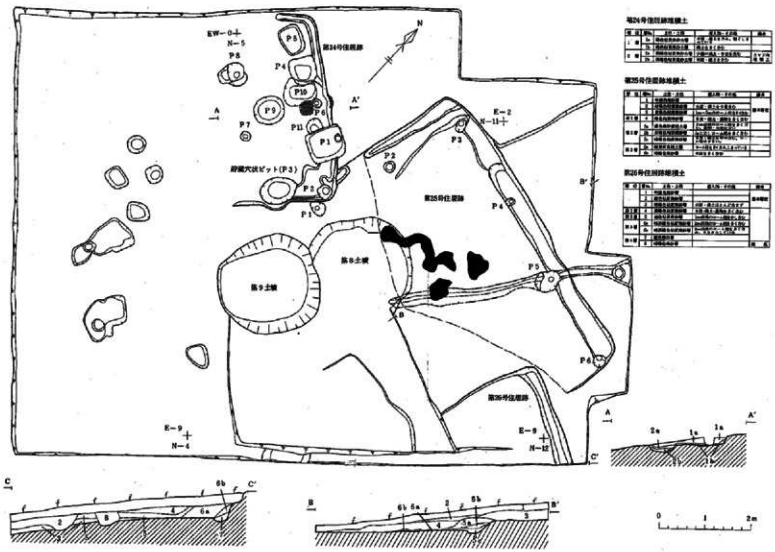
周溝：北西隅に認められる。底面幅は4～12cmあり、断面形は「U」字形である。北東隅に壁からやや離れて幅広い溝が認められたがその性格は不明である。

カマド：固く焼けしまった焼面が北壁中央部の壁上部と底面とに残存している。それらはカマド燃焼部の一部であると推定される。カマド燃焼部の両側壁・煙道部は確認されなかった。

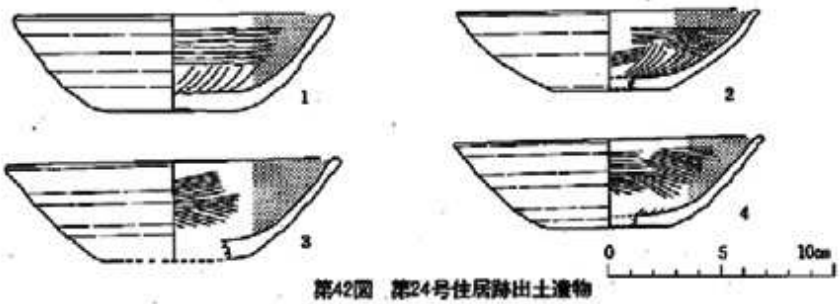
貯蔵穴状ピット：東壁際にある。平面形は80×60cmの楕円形で、深さは床面から約34cmある。

ピット

pitNo	P1	P2	P3	P4	R5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
深さ(cm)	45	28	34	30	15	5	45	40	20	17	18
備考	柱痕跡	－	貯蔵穴状ピット	－	－	－	－	－	－	床面下	床面下



第41図　第24・25・26号住居跡



第42図　第24号住居跡出土遺物

出土遺物：堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔堆積土〕

土師器

坏：1・2・3・4は全て製作に際し、ロクロを使用している。底部切り離し技法は回転糸切りのもの（1・2・4）と、再調整が施されているため不明なもの（3）がある。前者はいずれも再調整が施されていないものである。後者は底部に手持ちヘラケズリが施されている。

書面調整はいずれ、も外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

甕：体部破片が出土しているが、小破片のため図示できない。

第25号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第24住居跡・第8土壙・第9土壙・溝と重複している。第8土壙・溝より新しい。地の遺構との新旧関係は不明である。

平面形・規模：隅丸方形である。南半が削平されているが、北辺の長さは約6.8mある。

竪穴層位：堆積土は3層に大別できる。第1層（褐色粘質微砂層）；木炭・焼土を多く含み床面全体に堆積している。第2層（茶褐色粘質微砂層）；地山粒を多く含み、北壁際に堆積している。

第3層（暗褐色微砂層）；木炭を多く含み、固く床面に堆積している。

壁：北壁と西・東壁の北寄り部分とが残存している。地山を壁としており保存状態の良好な北壁で壁高は約20cmあり、垂直に立ち上がっている。

床面：地山を床とし、ほぼ平坦である。

柱穴：ピットは6個検出された。北・西壁沿いのピットには柱痕跡が確認されなかったが、それらのピット間距離が2m前後と一定しており、深さも50～80cmと一定していることから柱穴と考えられる。

周溝：北・西壁沿いにある。第24住居跡の北東隅に接続している溝も西壁沿い周溝の一部と考えられる。底面幅は25～40cm、床面からの深さは5～10cmある。断面形は「U」字形である。

カマド・炉：北壁中央から南方へ約2.5mの床面上に固く焼けしまった焼面が分布している。

その他の施設：西壁の周溝沿いと北壁の西寄りに床面からの比高約5cm、上端幅6～15cmの段状の高まりがある。その性格は確認できなかった。

ピット

PitNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深　さ(cm)	63	84	41	47	83	56

出土遺物：堆積土から土師器・須恵器・縄文土器が出土している。

〔堆積土〕

すべて小破片で図示できないが、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、縄文土器が出土している。土師器の坏の破片の中に、口縁部資料がある。これは製作に際しロクロを使用しており、器面調整外面がロクロ調整、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。須恵器の甕の体部破片の中に、外面に平行タタキ目の施されているものがある。縄文土器の体破片の中に、胎土に植物の繊維を含み、地文が単節羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)のものがある。

第26号住居跡

確認面：地山面で確認した。

重複：第25住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形・規模：調査区外にのびるため、平面形・規模は不明である。

竪穴層位：堆積土は4層に大別できる。第1層（茶褐色粘質微砂層）；木炭・焼土を含み、北壁からやや離れて堆積している。第2層（褐色粘質微砂層）；1cm大の地山粒を少量含み、北壁からやや離れて床面に堆積している。第3層（暗茶褐色粘質微砂層）；2cm大の地山粒を多く含み、北壁から北壁際の床面に堆積している。第4層（褐色微砂層）；周溝内に堆積している。

壁：地山を壁としている。北壁で約30cm、西壁で10～30cm残存し、急角度に立ち上がっている。

床面：地山とＢ地点基本層位2層（褐色粘質微砂層）を床とし平坦である。南東にやや傾斜している。

柱穴：確認されなかった。

周溝：北壁に沿って残存している。底面幅は12～15cm、床面からの深さは約10cmあり、断面形は「U」字形である。

カマド：確認されなかった。

貯蔵穴状ピット：確認されなかった。

出土遺物：堆積土から土師器・須恵器・縄文土器が出土している。

〔堆積土〕

すべて小破片で図示できないが、土師器の坏・甕・高坏・須恵器の坏・縄文土器が出土している。土師器の坏の破片の中に、口縁部資料がある。これは製作に際し、ロクロを使用しており、器面調整は外面がロクロ調整、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。須恵器の坏の口縁部破片は内外面にロクロ調整痕が観察される。縄文土器の体部破片は、胎土に植物の繊維を含み、地文が単節斜行縄文（ＬＲ）である。

(2) 掘立柱建物跡とその出土遺物

第1号掘立柱建物跡

第1号住居跡の西側に位置し、地山面で確認した。第1～4焼土遺構は位置的にみて重複しているが柱穴との切り合がないため新旧関係は不明である。平面形は南北に長い長方形を呈している。規模は南北桁行3間（5.9m）×東西梁間2間（4.7m）の建物跡である。掘り方の平面形は一辺約65～100cmの方形を呈する。掘り方と柱痕跡の区別できたものは9個ある。柱痕跡の大きさは18～25cmでほぼ円形を呈する。柱穴と掘り方底面はほぼ一致している。

柱間は桁行2.0～2.1m（約7尺）・梁間2.3～2.4m（約8尺）で、桁行、梁間ともそれぞれ等間隔である。

掘り方埋め土内から小破片のため図示できなかったが、ロクロ使用の内黒土師器坏が出土している。

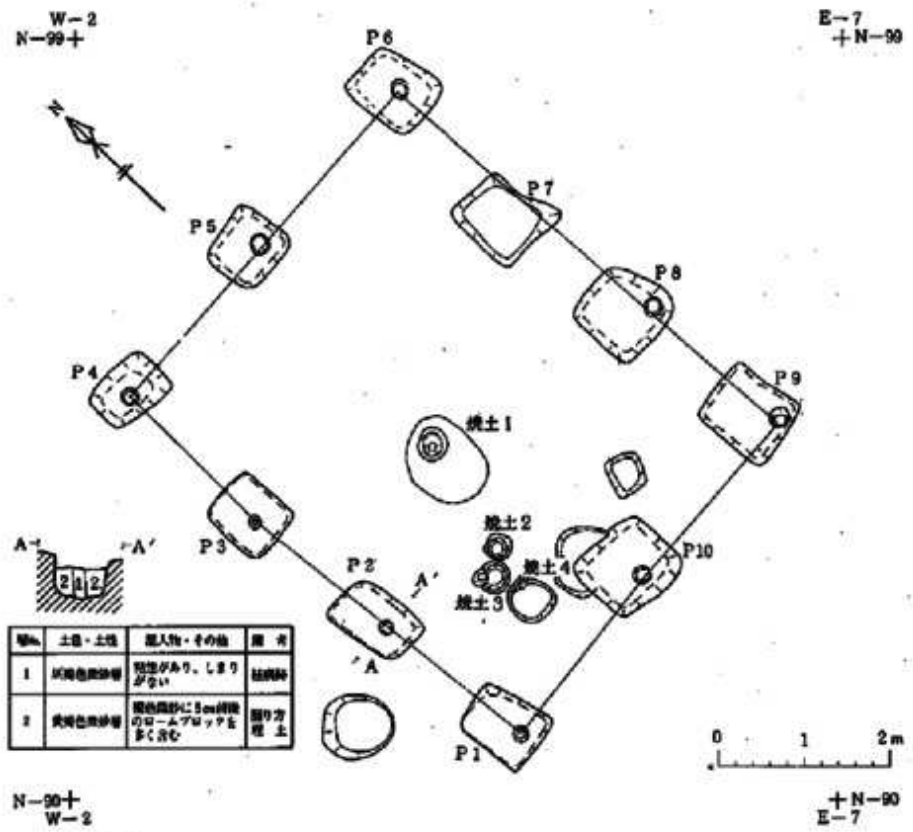
第2号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡の北側に位置し、地山面で確認した。第3号掘立柱建物跡、石組炉跡、後世の溝と重複している。第3号掘立柱建物跡よりも新しい。また石組炉跡は位置的にみて重複しているが柱穴との切り合がないため新旧関係を明らかにすることができなかった。平面形は多少歪みがあるが南北に長い長方形を呈している。規模は南北桁行3間（5.4m）×東西梁間2間（3.8m）の建物跡である。掘り方の平面形は一辺約45～30cmのほぼ方形を呈する。掘り方と柱痕跡の区別できたものはP9・P10である。柱痕跡の大きさは10cm前後で円形を呈する。柱間は、桁行1.7～2.0m（約6～7尺）梁間1.8～2.0m（約6～7尺）である。桁行、梁間はそれぞれほぼ等間隔である。掘り方埋め土方らロクロ使用の土師器が出土している。

出土遺物：ピット内から土師器が出土している。

土師器

坏：遺物が小破片のため図示できなかったがロクロ使用・内黒のものも出土している。



ピット

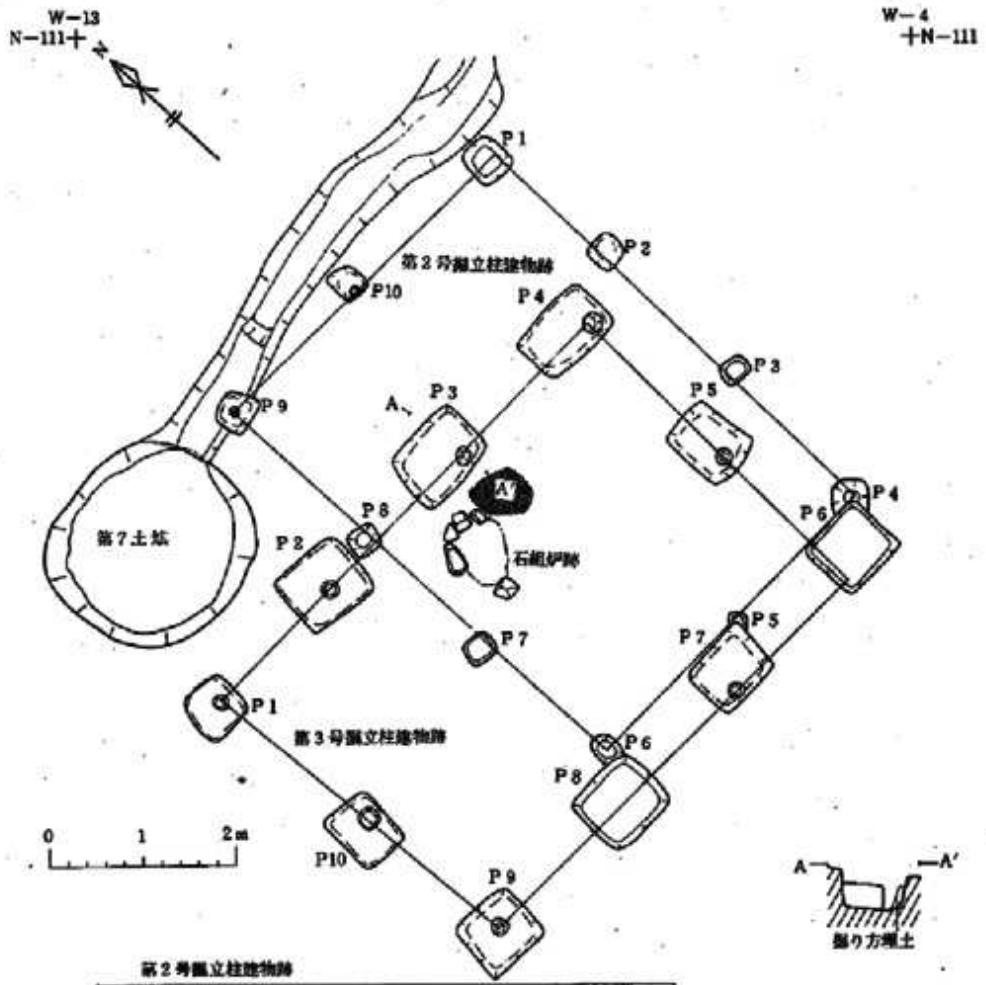
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長軸×短軸(cm)	96×70	98×65	82×75	88×64	82×74	94×79	59×78	96×94	49×86	102×95
長軸×短軸(cm)	28×18	18×18	18×18	28×28	24×22	24×20	—	24×22	25×22	30×29
深さ(cm)	35	53	55	51	42	71	60	73	48	55
色	—		—	—	—	—	—	—	—	—

第43図　第1号掘立柱建物跡

甕：第45図はピット10掘り方埋土1層から出土したもので、体部上半以上の破片である。製作にロクロを使用している。口径に比べ器高が大きいもので、最大径が口縁部にある。口縁部は外反し、途中で屈曲し、端部が直立する。特に内外面には再調整は認められない。

第3号掘立柱建物跡

地山面で確認した。東側において、第2号掘立柱建物跡、石組炉跡と重複している。第2号



第2号掘立柱建物跡

項目＼番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
掘り方の大きさ (cm)	47×42	35×35	32×25	40×？	20×？	36×30	34×30	34×30	40×40	35×32
柱穴の大きさ (cm)	—	—	—	—	—	—	—	—	18×18	12×10
深さ (cm)	72	60	33	29	41	33	36	49	57	48
色	黒褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	—

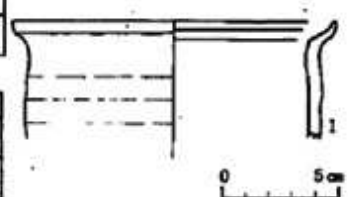
第3号掘立柱建物跡

項目＼番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
掘り方の大きさ (cm)	60×50	75×70	80×60	85×55	65×50	70×65	60×50	70×60	60×55	60×50
柱穴の大きさ (cm)	18×16	18×18	20×15	22×20	18×18	—	18×18	—	18×18	22×22
深さ (cm)	42	38	34	40	50	26	49	30	19	11
色	黒褐色土等に地山ロックブロック	黒褐色土等に地山ロックブロック	黒褐色土に地山ロックブロック	黒褐色土等に地山ロックブロック	黒褐色土等に少量地山ロックブロック	黒褐色土等に少量の地山ロックブロック	黒褐色土等に地山ロックブロック	黒褐色	黒褐色	黒褐色

第44図　第2・3号掘立柱建物跡

N－100＋
W－13

＋N－100
W－4



第45図　第2号掘立柱建物跡出土遺物

掘立柱建物跡よりも古い。石組炉跡は位置的にみて重複しているが柱穴との切り合がないため新旧関係は不明である。平面形は東西に長い長方形を呈している。規模は東西桁行3間（5.4m）×南北梁間2間（3.9m）の建物跡である。掘り方の平面形は一辺約55～90cmで方形を呈する。掘り方と柱痕跡の区別できたものは8個ある。柱痕跡はほぼ円形で、30～40cmあり比較的大きい。最も残りの良い柱穴は深さ50cmほどである。柱間は桁行1.7～2.0m（約6～7尺）梁間1.8～2.0m（約6～7尺）で西側に多少歪みがある。遺物は出土していない。

(3) 土壙とその出土遺物

第1ａ土壙

第8号住居跡の北側に位置し、地山面で確認した。第1ｂ、1ｃ土壙と重複関係にあり、両者よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、1.45×0.95mある。断面形はU字形を呈している。
堆積土は2層確認された。

出土遺物：堆積土中から土師器・縄文土器・弥生土器が出土している。

土師器

坏・甕：体部破片であるが小破片のため図示できない。器面調整は不明である。

縄文土器

1は胎土に植物の繊維を含んでおり、外面に無節羽状縄文（R・L）が施されている。

弥生土器

小破片のため図示できないが、外面に単節斜行縄文（RL）が施されているものがある。

第1ｂ土壙

第1a土城東側にあり、第1ａ・1ｃ土壙と重複している。第1c土壙よりも新しい。平面形は不整な楕円形を呈している。底面は比較的平坦である。堆積土は2層確認された。遺物は出土していない。

第1c土壙

第1ａ土壙の北側にあり、第1ａ、1ｂ土壙と重複している。第1ａ、1ｂよりも古い。平面形は不整な楕円形を呈している。遺物は出土していない。

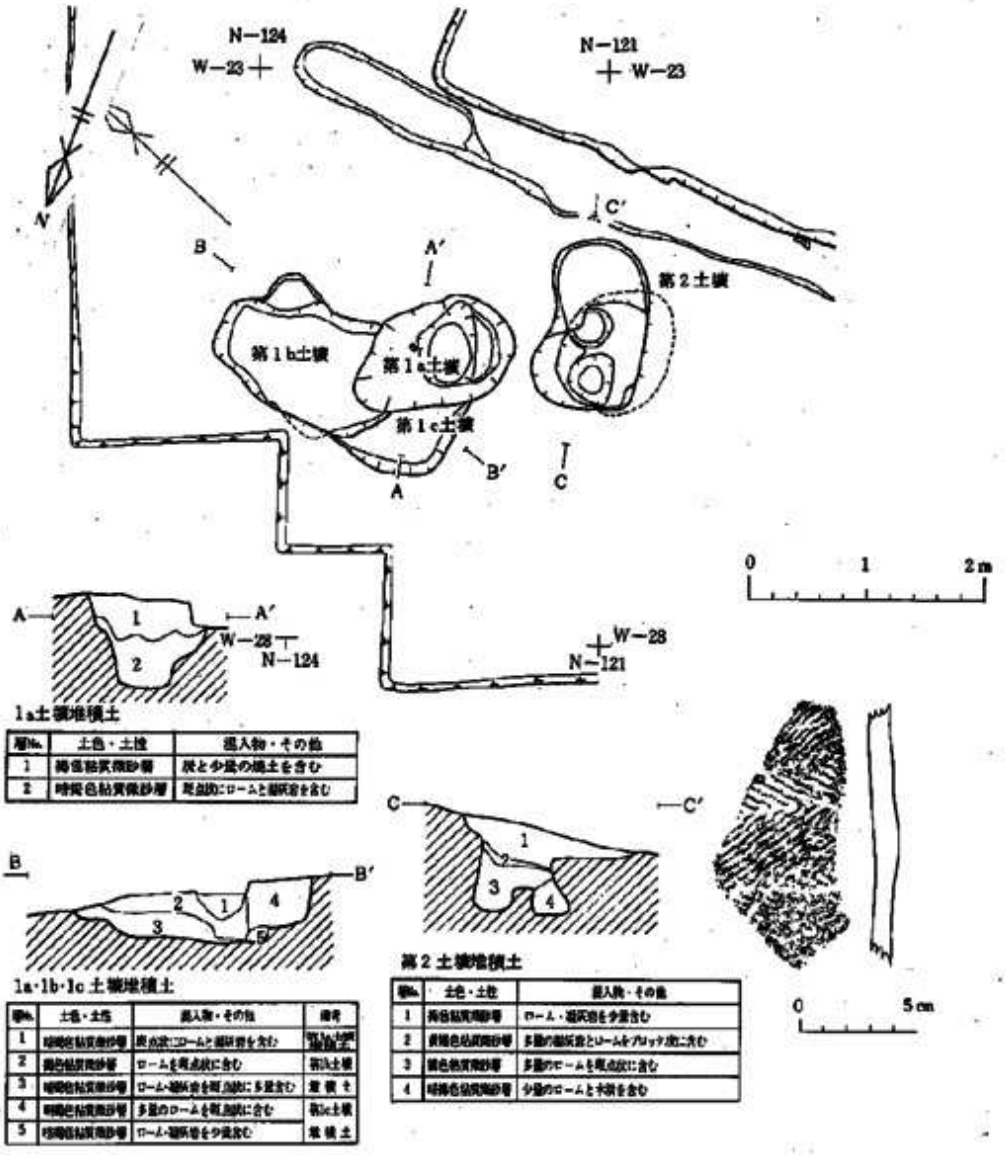
第2土壙

第1ａ土壙の南側に位置し、地山面で確認した。平面形は楕円形で1.5×6.9mある。断面形は不整なフラスコ状を呈する。堆積土は4層確認された。遺物は出土していない。

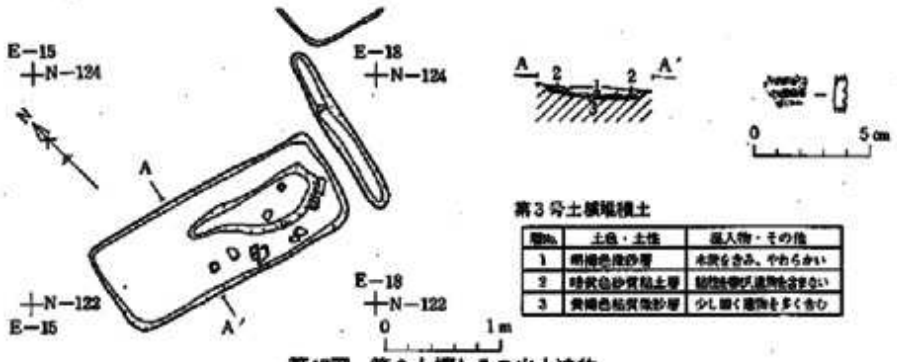
第3土壙

第5号住居跡の西側に位置し、地山面で確認した。平面形は隅丸長方形を呈し、大きさは2.2×0.9mである。確認面からの深さは約15cmあり、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層確認され上層に木炭を含む。

出土遺物：堆積土中から土師器・縄文土器・弥生土器が出土している。



第46図　1a・1b・1c・2土壙とその出土遺物



第47図　第３土壙とその出土遺物

土師器

坏：内外面にヘラミガキ、黒色処理の施されたものや外面にケズリ、内面にヘラミガキの施されたものがある。

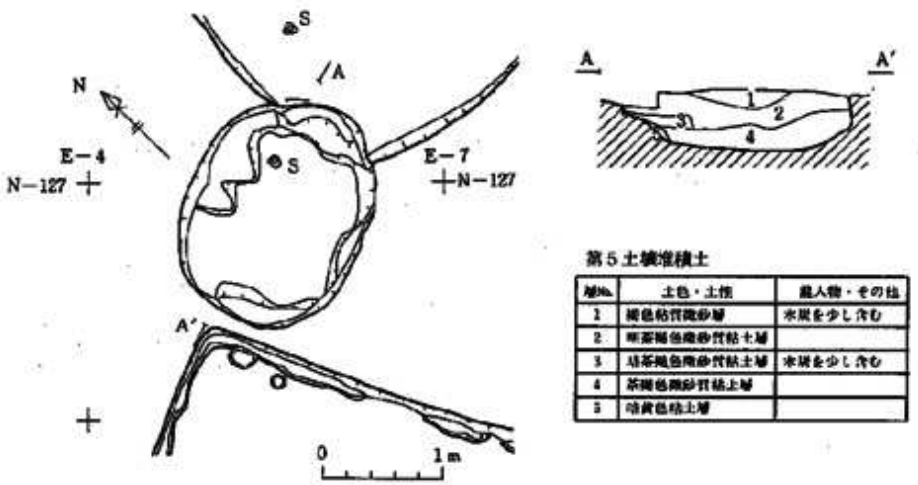
甕：体部破片の中に外面にナデ、内面に刷毛目の施されたものがある。

縄文土器

すべて胎土に植物の繊維が含まれておらず、外面に単節斜行縄文（ＲＬ）の施されたものと複節撚糸（ＲＬＲ）の圧痕を残すもの（1）がある。

弥生土器

外面に単節斜行縄文(ＲＬ)の施されたものがある。



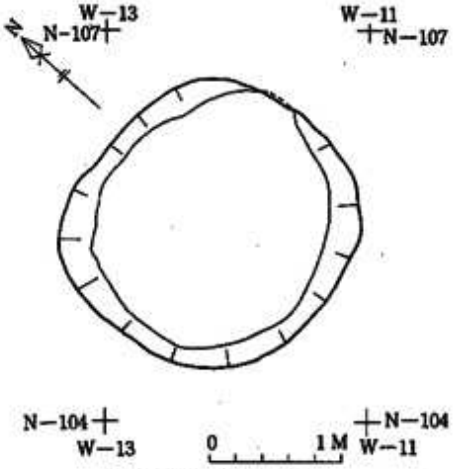
第48図　第５土壙

第5土壙

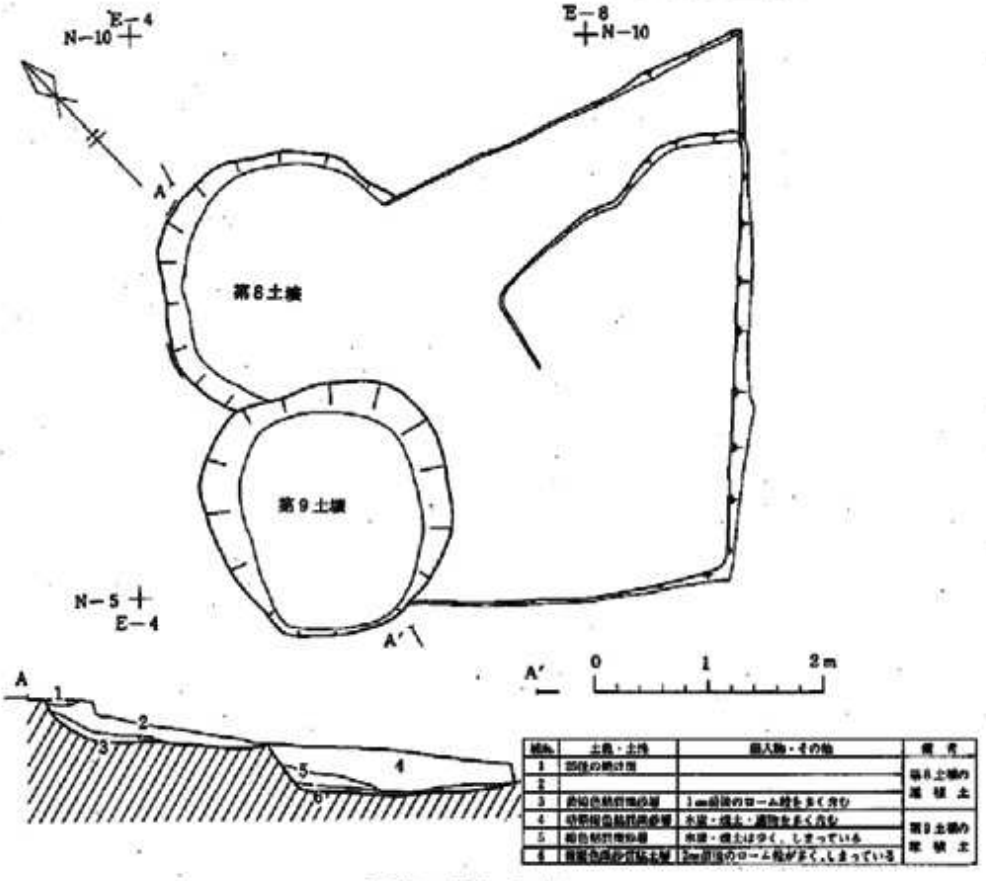
第3号住居跡の南西隅に位置し、地山面で確認した。第3号住居跡と重複し、それよりも新しい。平面形は楕円形を呈し、1.95×1.5mある。確認面からの深さは約0.5mある。遺物は出土していない。

第7土壙

第3号掘立柱建跡の北側に位置し、地山面で確認した。後世の溝と重複している。平面形は円形で径約2.2m、深さは確認面から0.6mある。遺物は出土していない。



第49図　第7土壙



第50図　第8・9土壙

第8土壙

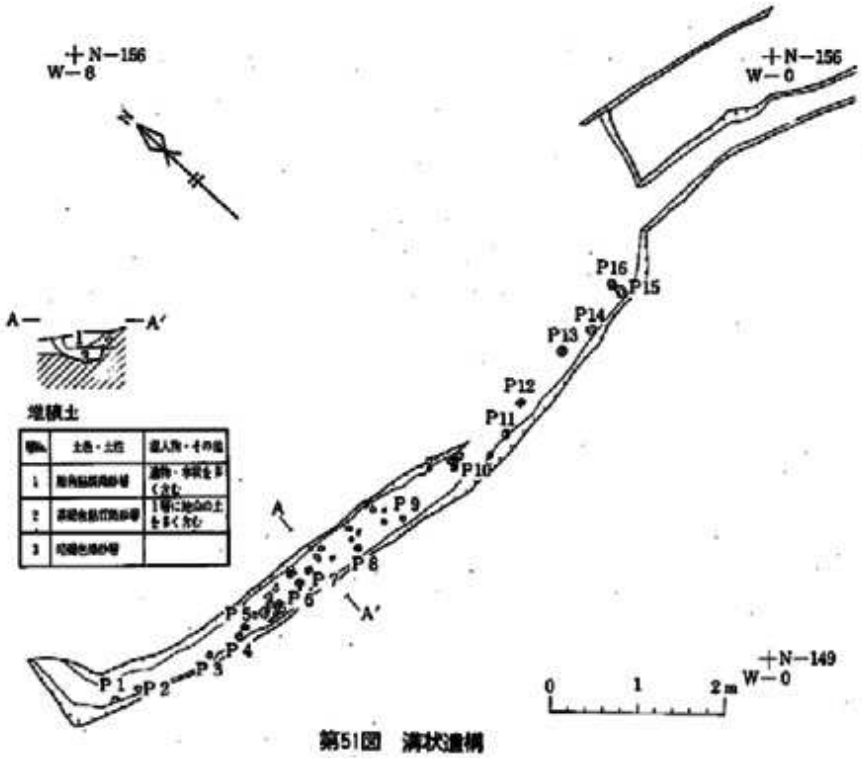
第25号住居跡の南側に位置し、地山面で確認した。第25住居跡・第9土壙と重複している。第25号住居跡より古い。第9土壙との新旧関係は不明である。南東部が削平されているが、平面形は径約2.4mの円形で、深さは確認面から約40cmあり、皿状を呈している。堆積土は2層確認された。遺物は出土していない。

第9土壙

第8土壙の南側にあり地山面で確認した。第25住居跡・第8土壙と重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は径約2.2mの円形で、深さは確認面から約45cmあり、皿状を呈している。堆積土は、3層確認された。遺物は出土していない。

(4) 溝状遺構とその出土遺物

地山面で確認した。しかし、断面を観察すれば、基本層位の第Ⅱ層から掘りこまれている。第11号住居跡の東壁に沿って1.5m南下し、そこで東方に折れ東側に延びている。底面幅は20～40cmで、断面形は「U」字形である。底面はほぼ平坦である。溝内には小ピットが点在して



第51図　溝状遺構

いるが、溝に伴うものが後世のものなのか、その性格は不明である。

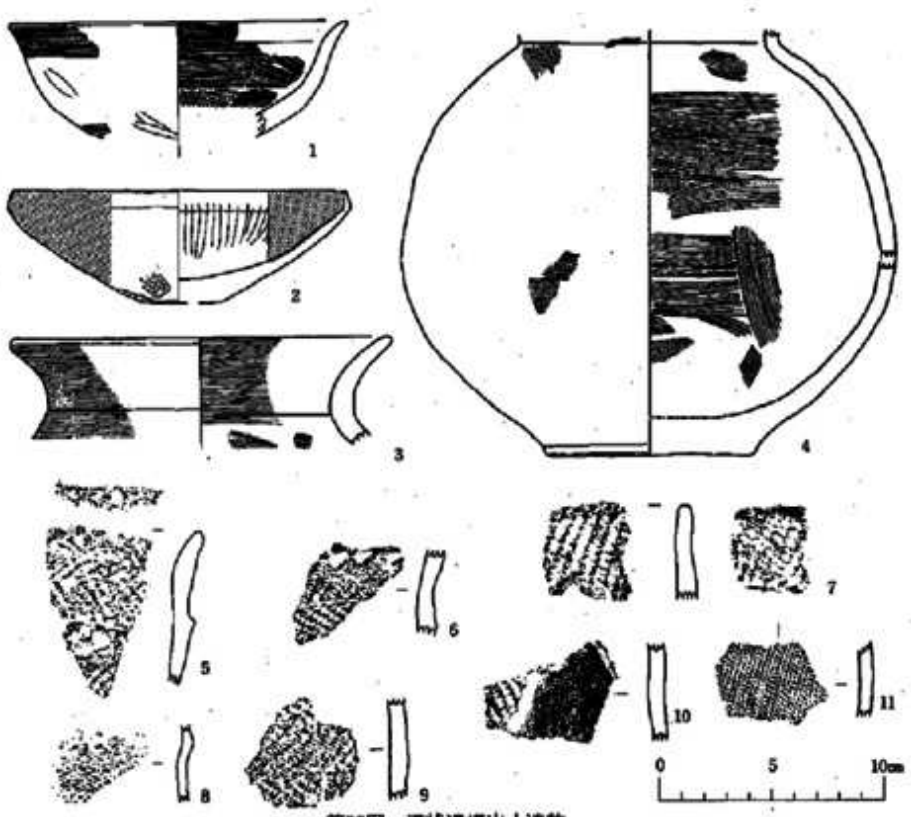
出土遺物：堆積土から土師器・縄文土器・弥生土器が出土している。

〔堆積土〕

土師器

坏：1・2は製作に際し、ロクロを使用していない。1は底部が欠損している。器形は体部央部がややはり出しながら外傾し、口縁部では内面に僅かな稜がつき外反する。器厚は体部から口縁に向って薄くなっている。器面調整として口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラミガキ、刷毛目、体部内面にはナデが施されている。2は体部が直線的に外傾し、口縁部外面が屈曲し、内傾する。底部は丸底である。器厚は底部は厚く口縁部に向ってしだいに薄くなる。
器面調整として外面体部下半にヘラケズリ、内面にはヘラミガキが施されている。口縁部は内外面とも摩滅が著じるしく観察が困難である。内外面に丹塗りされている。

甕：3・4は製作に際し、ロクロを使用していない。4は口縁部が欠損している。口径よりも器高が大きく、最大径は体部中央又は上半にあると推定される。底部は平底である。器厚は底部が特に厚く、体部はほぼ均一である。器面調整として内外面にナデが施されている。3は



第52図　溝状遺構出土遺物

口縁部の破片である。器形は器高が口径より大きく、最大径は本部中央部又は上半にあるもの体と推定される。器面調整として、口縁部内外面に横ナデが施されている。

縄文土器

体部破片の中に、植物の繊維を含むもの（6･8･9）と含まないもの（10）がある。6・9は外面に単節羽状縄文（ＲＬ･ＬＲ）が施され、さらに6は帯状の貼付文をもつものである。8は外面に刺突文をもつものである。10は沈線文と擦消縄文をもつものである。

口縁部破片は2点あり、5は口唇部に刺突をもち、外面に単節羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）が施され、帯状貼付文をもっている。7は口唇部、内外面に縄文（ＬＲ）が施されている。

弥生土器

体部破片が5点出土している。外面に単節斜行縄文が施されており、原体がＲＬのものとしＬＲのもの（11）がある。

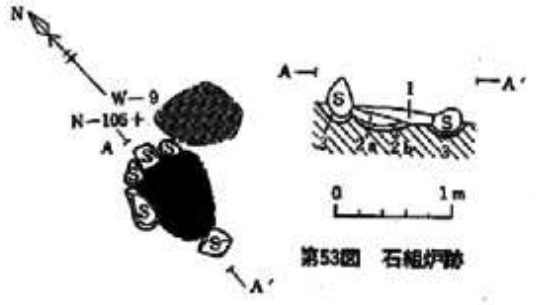
(5) 石組炉跡

第2号掘立柱建物跡の中心よりやや西側に位置し、地山面で確認した。第2・3号掘立柱建物跡と位置的にみて重複しているが柱穴との切り合がないため新旧関係については明らかにすることができなかった。

平面形は南北に長い楕円形を呈している。大きさは1.2×0.8mある。石組は比較的大きい角礫を一段組んでいる。底面は火熱を受け暗赤褐色を呈している。石組を断ち割ると掘り方が確認された。また、北側に80×50cmの範囲で焼土が確認された。遺物はまったく出土していない。

(6) 焼土遺構とその出土遺物

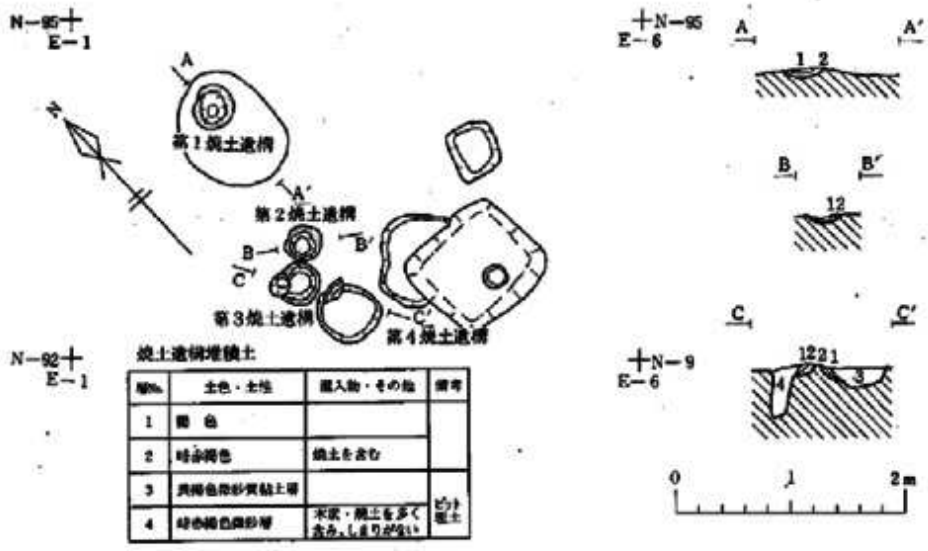
第1～4焼土遺構はいずれも地山面で確認した。第1号掘立柱建物跡と位置的にみて重複しているが、柱穴との切り合がないため新旧関係は不明である。さらに、第3・4焼土遺構は後世のピットとも重複している。第1焼土遺構は、第1号掘立柱建物跡のほぼ中心に位置し、その南側には第2焼土遺構がある。第2焼土遺構の西側には第3焼土遺構、南側には第4焼土遺構がある。平面形は第1・2焼土遺構とも径約45cmの円形である。第3・4焼土遺構は後世の



第53図　石組炉跡

石組炉跡堆積土

層No.	土色・土性	混入物・その他	備　考
1	明褐色粘質微砂層	木炭・焼土を多く含む	
2a	暗赤褐色	黒褐色、木炭を多く含む	
2b	暗赤褐色	非常に堅く、炭化物を含まず	焼　面
3	褐色土層		掘り方埋　土



第54図　焼土遺構

ピットにより破壊されているが円形を基調としている。底面はいずれも確認面から約10cmで浅い皿状を呈し、火熱を受け暗赤褐色を呈している。周辺から鉄滓・フイゴの羽口が発見されている。

(7) 遺構以外の堆積土出土遺物

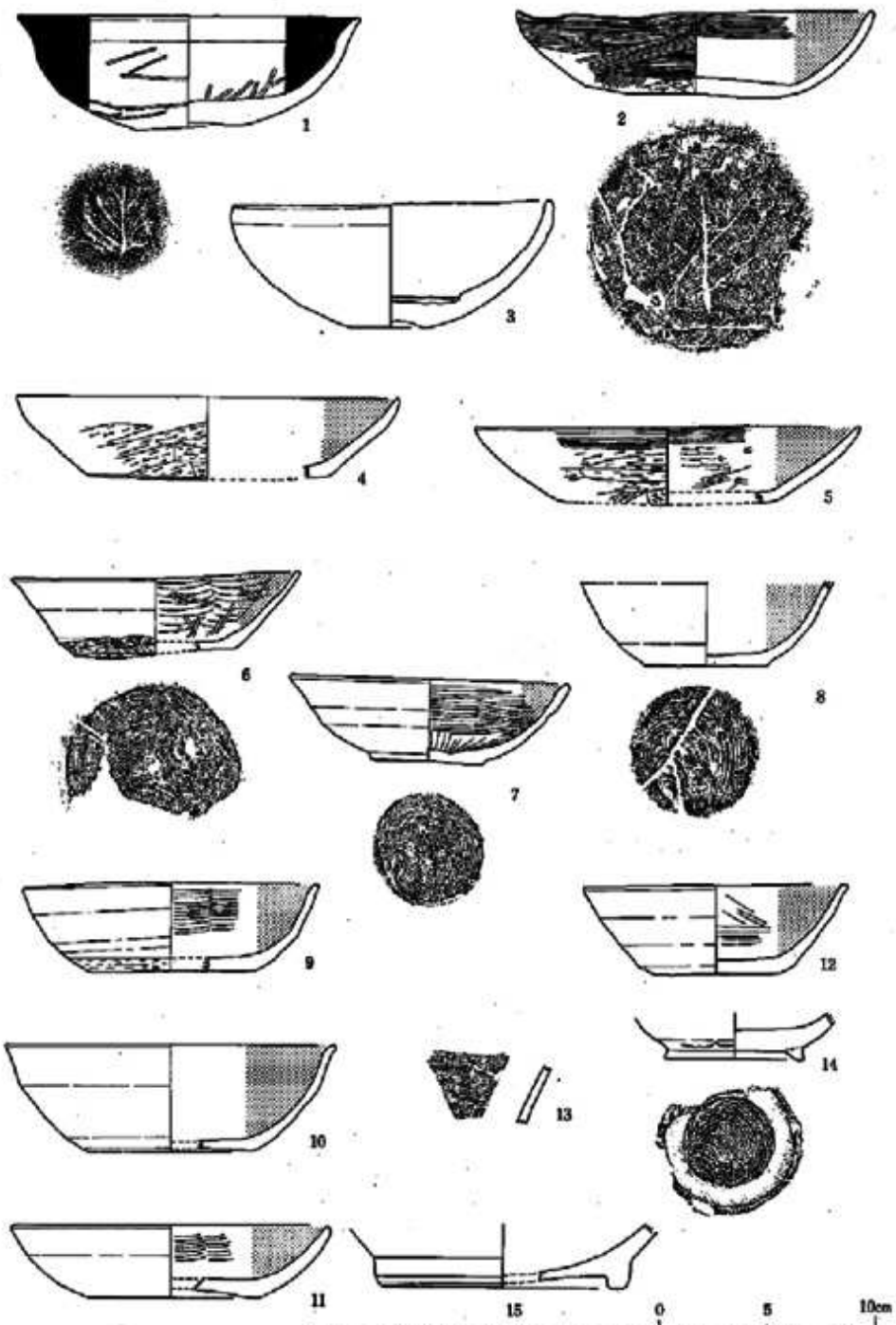
調査区の基本層位の各層から不規則な状態で土師器・須恵器・赤焼土器・縄文土器・弥生土器・石器・石製模造品・鉄製品などが出土している。

土師器

坏：製作に際してロクロを使用していないもの（第55図1～5）とロクロを使用しているもの（第55図6～12）がある。前者には口縁部が屈曲し、内面に稜があり、口縁部が外反するもの（第55図1）と、体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、内面に稜がなく直立するもの（第55図3）、体部から口縁部まで直線的に外傾するもの（第55図2・4・5）がある。底部形態の明らかなものは平底である。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されているものや不明なものがある。2・4・5は内面黒色処理されている。1は内外面に丹塗りされている。1・2は底部に木葉痕が認められる。3は内面に積み上げ痕が観察される。

後者には底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのもの（第55図12）・回転糸切りのもの（第55図7・8・10・11）・再調整が施されているため切り離し技法の不明なもの（第55図6・9）



第55図　遺構以外の堆積土出土遺物(Ⅰ)

がある。

前二者は底部切り離し後、再調整が施されていない。切り離し技法の不明なものは、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ（第55図6）・回転ヘラケズリ（第55図9）されている。

器面調整はいずれも外面にロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。また、第55図13は体部外面にヘラ書きで浅く「僧」と書いてある。

甕：製作に際し、ロクロを使用していないもの（第56図5～8）である。口径に比べ器高が大きいもの（第56図7）と口径が器高よりも大きいもの（第56図8）がある。

前者は頸部が「く」字状に屈曲し外反する。後者は体部上半に最大径があり口縁部が短く外傾する。第56図5・6は体部下半以下の破片であるため全体の器形は不明である。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ・刷毛目・ナデ、内面にはヘラナデ・ナデが施されている。第56図6は器両全体が剥落・摩滅等が著しく観察が困難である。

高坏：いずれも脚部の破片であるため全体の器形は不明である。製作に際し、ロクロを使用しているいもの（第56図10・11・12）、使用しているもの（第57図1～4）がある。

前者は脚部が下方に開くもの（第56図11・12）とほぼ直立し、中央部がわずかにふくらむもの（第56図10）がある。

器面調整は外面にヘラケズリ（第56図10・11）、丹塗り・ヘラミガキ（第56図12）、内面にはヘラケズリ・ナデが施されている。シボリ目も認められる。後者はロクロ調整後、底部を回転糸切り技法で切り離している。脚部上半が下方に開き、下半が外方向に短くのびるもの（第57図1・2）・脚部が下方に開くもの（第57図3・4）がある。

須恵器

坏：第56図1は回転ヘラ切り、第56図2は底部を回転糸切り、第56図3は体部下端から底部に回転ヘラケズリが施されているため切り離し技法の不明なものである。前2者は再調整が施されていないものである。

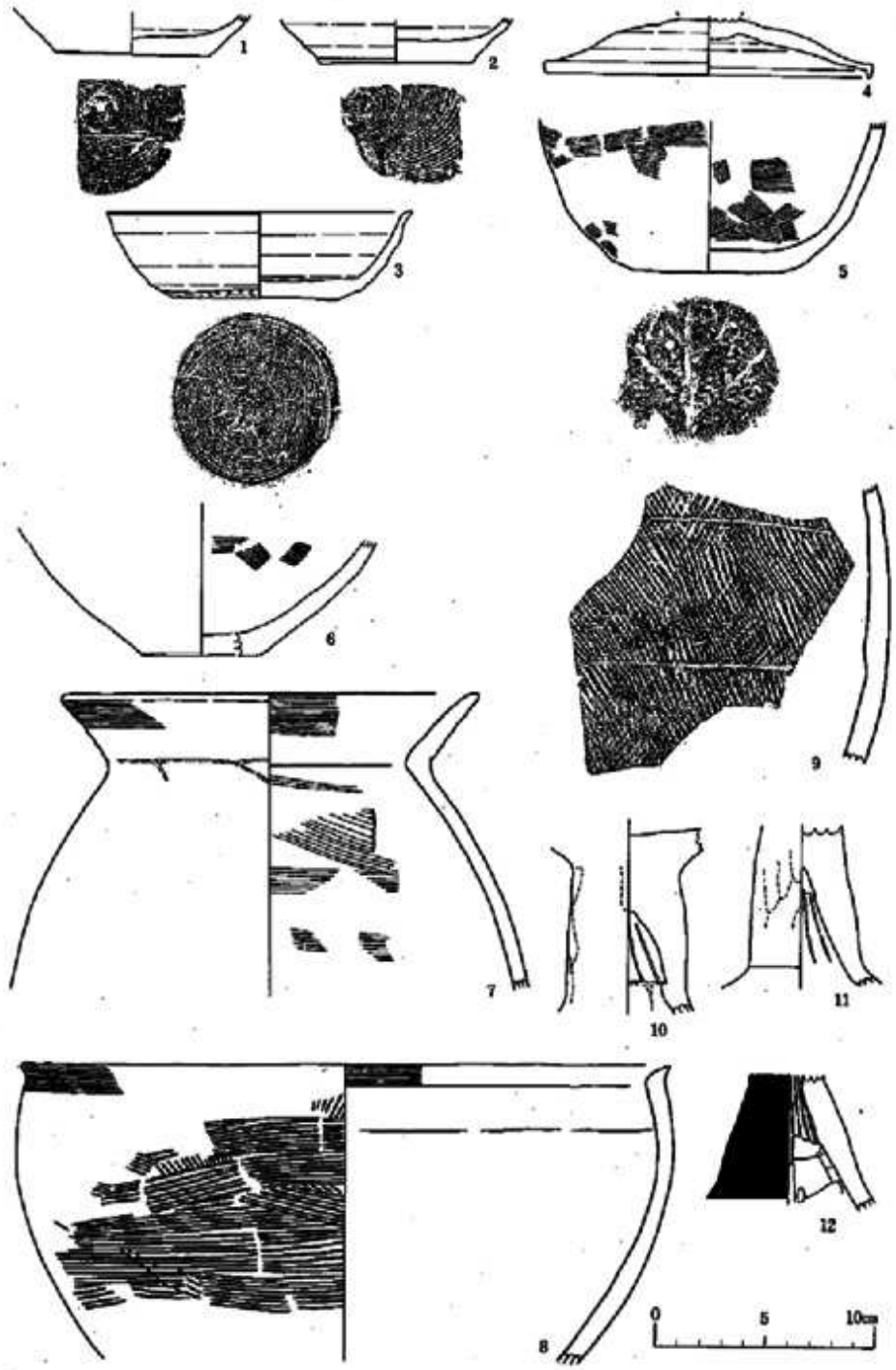
甕：第56図9は体部破片のため全体の器形は不明である。外面には平行タタキ目後に浅い沈線が横方向に巡る。内面にはオサエ痕と思われる凹が観察される。

高台付坏：第55図14は体部下半以下の破片であるため全体の器形は不明である。短い台部がつくられ、端部はわずかに下方に開き平坦面をつくる。底部に回転糸切り痕がみられる。

蓋：第56図4はつまみ部を欠損しているため全体の器形は不明である。天井部は丸味をもって口縁部に近づき、口縁部は垂直に下方に折れ曲げられている。口縁部内外面から天井部内面に自然釉がかかっている。特に再調整は認められない。

赤焼土器

坏が出土しているが小破片のため図示できなかった。底部の切り離し技法は回転糸切りのも



第56図　遺構以外の堆積土出土遺物（II）

ので、内外面とも再調整が施されておらず、黒色処理もされていない。

縄文土器

口縁部破片と体部破片が出土している。口縁部資料については、胎土に植物の繊維を含むもの（第58図1・2）と含まないもの（第58図3）がある。第58図1は半截竹管により沈線の連続文様が施されている。第58図2は口唇部に縄文が施されており、地文は単節斜行縄文（ＲＬ）である。第58図3は擦消縄文（ＬＲ）が施されている。

体部資料については、胎土に植物の繊維を含むもの（第58図4～14）と含まないもの（第58図15～21）がある。第58図4～8は地文に条痕が施されているものであり、第58図9～12は地文が縄文のものである。第58図13・14は刺突・沈線文が施されている。第58図15・16は地文が単節斜行縄文（ＲＬ）であり、第58図18・19は沈線文をもつもので擦消縄文（ＬＲ）をともなっている。第58図21は瘤状小突起をもつものである。

弥生土器

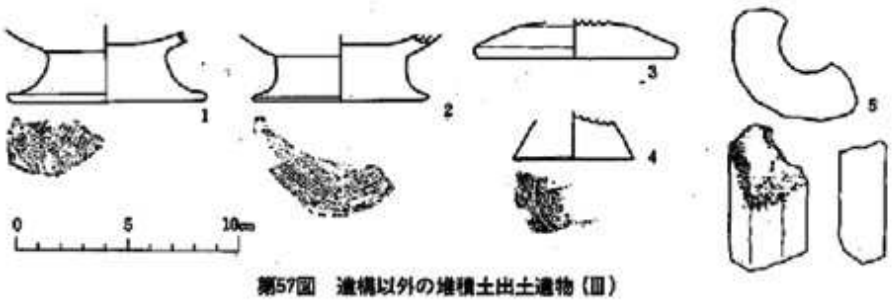
体部破片と底部破片が出土している。体部破片については沈線により文様が表現されているものと地文だけのものがある。前者の沈線文には、斜位沈線文の施されたもの（第58図22）と弧状沈線の施されたもの（第58図23）がある。後者の地文だけのものには、単節斜行縄文が施されており、その原体にはＲＬ（第58図24）とＬＲがある。底部破片は、底部形態が平底で、底面は無文である。外面には単節斜行縄文（ＲＬ）が施されている。

石　器

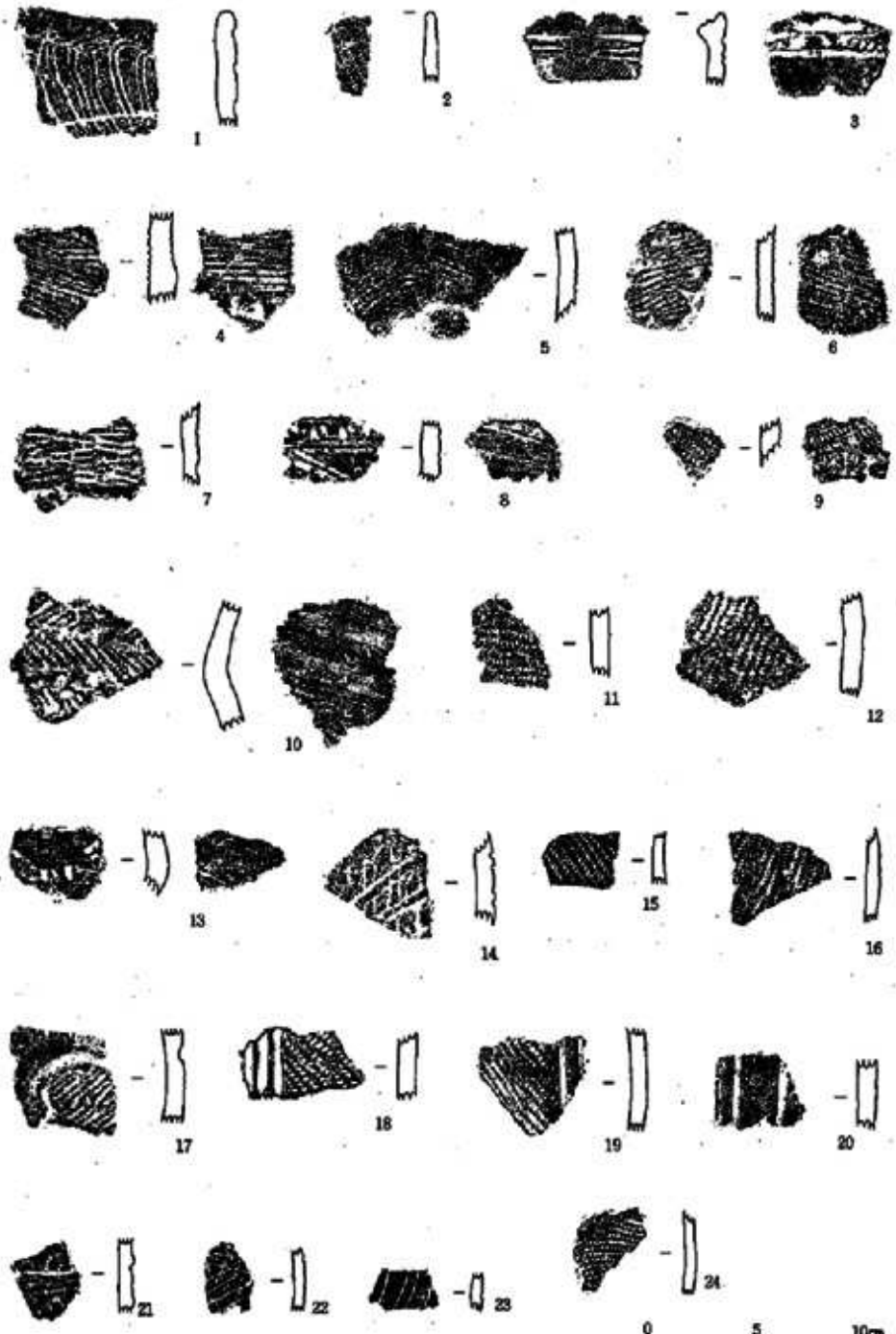
本遺跡から出土した石器は、石鏃4点、石錐3点、石匙2点、不定形石器7点、剥片5点、石核1点、砥石1点、円礫1点の計24点である。出土状況は、第5住居跡の遺構に伴う遺物で述べた円礫を除き、表面採集あるいは遺構以外の堆積土出土である。

石鏃

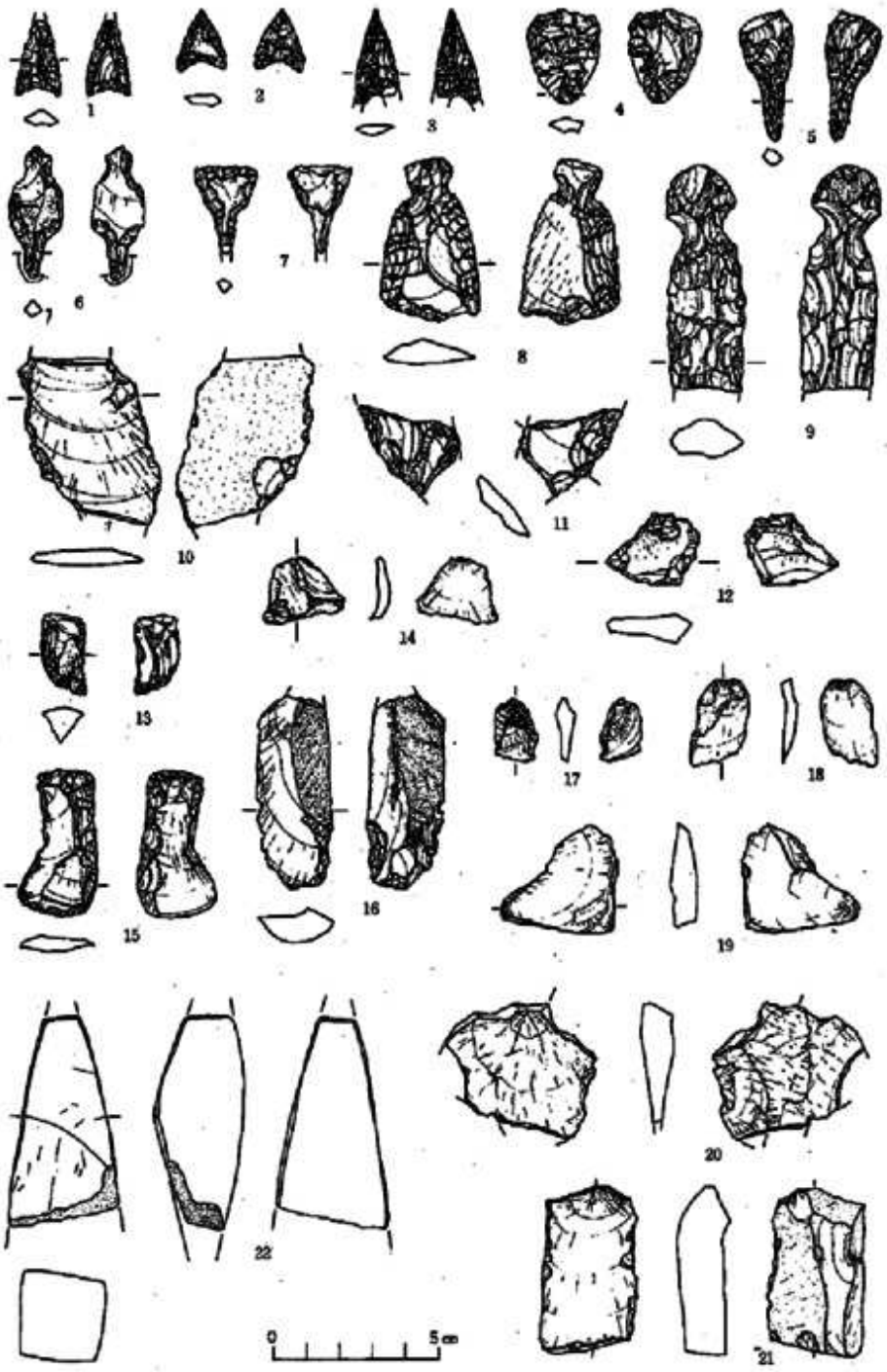
基部形態が、凹基のもの（第59図1・2・3）と平基のもの（第59図4）がある。尖頭部側縁形態は、第59図1・2・3がほぼ平坦であるのに対し、第59図4はふくらんでいる。第59図2は完形である。破損状況についてふれると、第59図1は尖頭部、第59図3は基部の両側、第



第57図　遺構以外の堆積土出土遺物（Ⅲ）



第58図　遺構以外の堆積土出土遺物（N）



第59図　遺構以外の堆積土出土遺物（V）

59図4は側縁が破損している。調整の方法については、第59図1・2・3については入念な両面加工がなされている。

石錐

すべてつまみ部を有している。第59図5・6はつまみの部分に、素材とした剥片の打面の1部を残している。第59図6の錐部先端は、著しく摩滅している。第59図7の錐部先端は折損している。

石匙

2点とも縦型であり、いずれも主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ平行である。第59図8は刃部が3つの縁辺から構成されており、刃部先端は平坦で幅が狭い。つまみの部分に素材とした剥片の打面の1部を残している。調整は両面とも部分調整である。第59図9は刃部先端の状況が尖頭状を呈すると考えられる。しかし先端部が折損しているため明確ではない。調整が両面ともほぼ全面に及んでいる。

第2表石器・礫石計測表

	品種	地区・層位	長さ×幅(mm)	重量(g)	石質	備考	図版
1	石匙	L－153 － 3	49.4×30.5	11.1g	細粒凝灰岩(珪化)	完形	第59図－8
2	石匙	J－35 － 3	(70.0)×(23.0)	(23.0g)	珪質頁岩	不完	第59図－9
3	石錐	×	(23.0)×13.3	(0.7g)	細粒凝灰岩(珪化)	不完	第59図－1
4	石錐	×	19.0×15.0	(0.7g)	黒色頁岩	完形	第59図－2
5	石錐	×	(29)×(13.0)	0.5g	細粒凝灰岩(珪化)	不完	第59図－3
6	石錐	×	39.5×16.0	3.5g	細粒凝灰岩(珪化)	完形	第59図－5
7	石錐	52 － 38 － 1	(41.2)×16.3	(3.2g)	珪質・頁岩	不完	第59図－6
8	石錐	×	(27.0)×19.0	(1.8g)	細粒凝灰岩(珪化)	不完	第59図－7
9	不定形石器	F～H－30 － 1	(62.6)×37.0	(13.8g)	珪質頁岩	不完	第59図－10
10	不定形石器	×	(33.0)×(24.5)	(3.8g)	珪質頁岩	不完	第59図－11
11	不定形石器	×	21.8×25.7	3.9g	珪質凝灰岩	完形	第59図－12
12	不定形石器	×		3.3g	珪質凝灰岩	完形	第59図－13
13	剥片	×		1.4g	珪質凝灰岩(赤色)	完形	第59図－17
14	不定形石器	A － 43 － 1	(44.0)×(44.0)	(15.4g)	流紋岩	不完	第59図－20
15	剥片	H － 34 － 3	35.5×(34.0)	(10.6g)	珪質頁岩	不完	第59図－19
16	剥片	×	21.0×24.0	1.5g	珪質頁岩	完形	第59図－14
17	剥片	×	22.5×16.0	1.8g	珪質頁岩	完形	第59図－18
18	不定形石器	5住 B－1	62.8× 35.6	26.5g	珪質頁岩	完形	第18図－3
19	不定形石器	L 36 － 3	45.0×23.4	7.5g	珪質頁岩	完形	第59図－15
20	不定形石器	L－43 － 3	59.6×22.5	17.0g	珪質頁岩	完形	第59図－16
21	石錐	×	29.0×22.4	4.8g	珪質頁岩	完形	第59図－4
22	剥片	E－31 － 3	51.0× 29.0	33.1g	珪質頁岩	完形	第59図－21
23	砥石	H－44 － 1		(69.1g)	砂岩	不完	第59図－22
24	円礫	5住ピット1 － 1	(64.0)×(33.5)			不完	第18図－1

不定形石器（第59図10・11・12・13・15・16）

不定形石器に分類したものは、剥片を素材としており、定形化されていない石器である。第59図15は自然面を打面とした剥片を素材とし、刃部調整は全縁辺に及んでいる。特に末端調整は腹面からのみ行われ、刃部は丸味をおびている。第59図11は両端欠損した石槍とも考えられるが、不定形石器に分類した。

剥片（第59図14・17・18・19・20・21）

末端の形状は蝶番状で終っている第59図17を除き、羽毛状末端である。

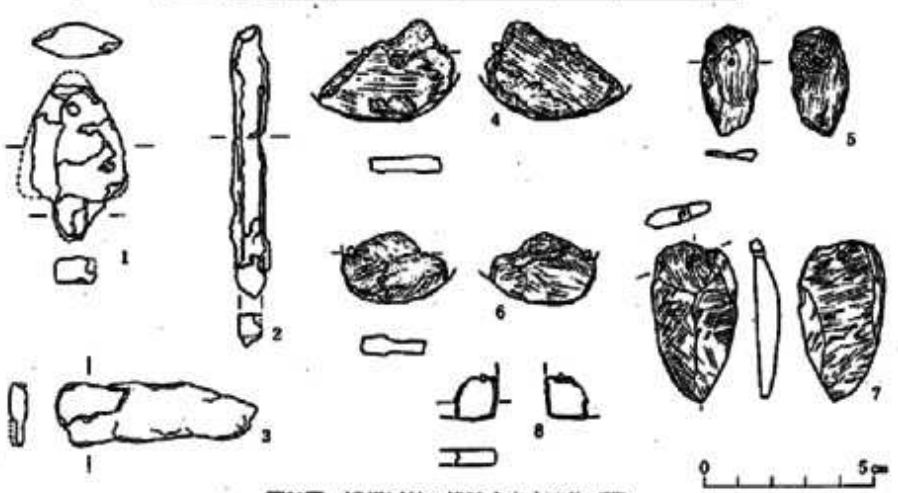
砥石（第59図22）

5面で構成されている。そのうち2面に擦痕が認められる。

石製模造品

第3表石製模造品計測表

	地区・層位	重 量(g)	石 質	備 考	図 版
1	12住（ ）	2.6	粘板岩	不 完	第60図－5
2	5住 床面	5.2	緑色片岩	完 形	第18図－2
3	× ×	（1.5）	緑色片岩	不 完	第60図－8
4	F－33－2	（4.3）	緑色片岩	不 完	第60図－6
5	× ×	（9.9）	緑色片岩	不 完	第60図－4
6	7住	（14.8）	粘板岩	不 完	第23図－1
7	5住 床面	20.2	緑色片岩	完 形	第18図－4
8	X－0	14.1	緑色片岩	完 形	第60図－7
9	1住 2層	（16.5）	緑色片岩	不 完	第 9図－12
10	1住 3層	4.6	緑色片岩	完 形	第 9図－13
11	1住 2層	（5.0）	緑色片岩	不 完	第 9図－11



第60図　遺構以外の堆積土出土遺物（Ⅵ）

剣形石製模造品：第60図7は基部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品である。柳葉形を呈し、先端部が尖り、基部には3個の孔をもつが、穿孔されているものは1個である。孔は一方向から穿たれている。一面に稜がある。表裏側面の3面は研磨しており、擦痕が認められる。

現存部分の長さは4,8cm、最大幅2.5cm、最大厚9mm。孔の径は2mmあり、比較的大形のものである。第60図5は先端部、片面が欠損しているものである。柳葉形を呈し、基部に1個の孔がある。孔は、片面の大半が欠損しているため、どちら側から穿たれたかは不明である。

表裏両面は研磨しており、擦痕が認められる。現存部分の長さは3.2cm、最大幅1.5cm、最大厚5mm、孔の径は2mmである。

円板状石製模造品：第60図4・6はいずれも欠損品ではあるが、残存部から推定すると円形ないし、楕円形を呈すると思われる。第60図4は扁平な面に2個の孔がある。孔はいずれも欠損しているため穿たれた方向、大きさは不明である。表裏両面は研磨しており、擦痕が認められる。現存部の最大幅4.1cm、最大厚6mmである。第60図5は扁平な面に1個の孔があるが、欠損している。表裏側面の3面は研磨しており、擦痕が認められる。現存部の最大幅は3.1cm、最大厚さ5mmである。

形態不明な石製模造品：第60図8は扁平な面に半分ほど欠損した孔が1個ある。表裏両面は研磨しており、擦痕が認められる。現存部の最大厚5mmである。

鉄製品

鉄鏃：先端部の一部、茎部の大部分を欠損しているものである（第60図1）。身幅は広く逆刺がない。断面形は比較的厚いレンズ状を呈している。茎部の断面形は方形を呈している。
現長は4.7cmある。

刀子形製品：刀身の部分と思われる（第60図3）。剥落、錆化が著じるしく、断面形は不明である。現長4.7cmある。

棒状製品：現長8.3cm、幅0.7cmある（第60図2）。断面形は方形を呈している。釘かもしれない。

施釉陶器

高台をもつ壺・瓶の破片と思われる（第55図15）。外面の体部下端と底部に灰白色の釉がみられ、貫入が認められる。古瀬戸と思われる。

フイゴの羽口

2点出土している。第57図5は欠損しているが羽口の端部である。残存部から推定して内径2.3cm、外径約7cmであり、残存長は約9cmである。端部は斜めにそがれており、外面には成形時のケズリの痕跡が認められる。内面は火熱を受けたらしく赤変しており、外面端部には鉄滓が付着している。

Ⅳ　遺構、遺物に関する考察と問題点

本遺跡から出土した遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・赤焼土器・施釉陶器・石器・石製模造品・鉄製品・フイゴの羽口等がある。

1. 縄文土器

縄文土器は、発掘区および住居内堆積土中から出土している。口縁部資料は5点、体部資料は186点土している。すべて破片資料のため、実測図の作成できるものはない。

胎土・器形・文様などについて観察を行なった結果、いくつかの観察項目において一定の特徴が認められ、それもとに分類を試みた。

a．口縁部資料

破片点数が5点と少ないので、特徴を一覧表にしてあげることにする。

b．体部資料

胎土に植物の繊維を含むもの（A類）と含まないもの（B類）に大別される。また文様により、A類は地文だけの土器（AⅠ）と刺突文・沈線文をもつ土器（AⅡ）に細分される。地文だけの土器には、条痕文の施されているもの（AⅠⅰ）と、単節羽状縄文、無節羽状縄文、単節斜行縄文が施されているもの（AⅠⅱ）がある。B類は地文だけの土器（BⅠ）、撚糸圧痕文による文様をもつ土器（BⅡ）、沈線文をもつ土器（BⅢ）に細分される。地文だけの土器には、単節斜行縄文、無節斜行縄文が施されている。沈線文をもつ土器には、擦消縄文、無文、瘤状小突起をもつものがある。

第4表　縄文土器（口縁部）の観察

胎土	口唇部・口縁部上端の特徴	装飾文様	地文 外面	地文 (内面)	図版番号	出土地点
繊維混入有	口唇部に刺突をもつ	帯状貼付文による文様をもつ	羽状縄文 RL・LR		第52図5	溝　1
	文様をもたない	沈線文による連続文様をもつ	無文		第58図1	X－1
	口唇部に縄文が施文されている	地文のみのもの	縄文（縄文） LR（LR）		第52図7	溝　1
			縄文、RL		第58図2	H－31－3
無	口唇部が小波状に隆起内面の体部上端に突図	地文のみ	擦消縄文、LR		第58図3	Ⅰ－31－3

〈年代〉

A類のように胎土に植物の繊維を含む土器群は、縄文時代早期末から前期初頭のものとされている。さらに細部の特徴をみると、AⅠi類のように条痕文をもつ土器群は素山貝塚（伊東:1940）、山前遺跡（小牛田町教委：1976）、北沢遺跡（宮教委:1978）などに類例がみられ、縄文時代早期末の「素山2式」とされている。AⅠii類の内外面に縄文の施されている土器（第58図9、口縁部第52図7）は素山貝塚（伊東:1940）、山前遺跡（小牛田町教委:1976）などに類例がみられ、「素山2式」とされている。また羽状縄文をもつ土器群は上川名貝塚（加藤：1951）や金山貝塚（鳴瀬町教委：1977）などに類例がみられ、縄文時代前期初頭の「上川名Ⅱ式」「大木1式」に位置づけられる。AⅡ類の刺突文の施されている土器（第52図8･13）網目撚線文の施されている土器（第58図14）は前期初頭のものと考えられる。口縁部資料は5点中4点が胎土に植物の繊維を含んでいる。第52図5は帯状貼付文をもち、植物の繊維を含んでいることから前期前葉に位置づけられよう。第58図1は植物の繊維を含んでおり、口縁部に半截竹管によって平行沈線文が施されているものである。県内では三神峯遺跡（白鳥：1974）、中島貝塚（千葉：1975）に類例がみられるが、報告例は少ない。前期前葉に位置づけられよう。

B類は胎土に植物の繊維を含まない土器群である。BⅢ類の沈線文と擦消縄文をもつ土器は県内でも報告例が多く、青島貝塚（南方町:1975）、長者原貝塚(南方町教委:1978)などに類例があり、縄文時代中期に位置づけられている。沈線文と瘤状小突起をもつ土器は後期と考えられる。第58図3は口縁部資料で、胎土に植物の繊維が含まれていないものである。口唇部などの特徴から晩期に位置づけられよう。

2. 弥生土器

弥生土器は、発掘区および住居内堆積土中から出土している。体部資料は44点、底部資料は1点である。これらの土器はすべて破片であり、ここでは45点すべてをとりあつかった。

〈分類〉

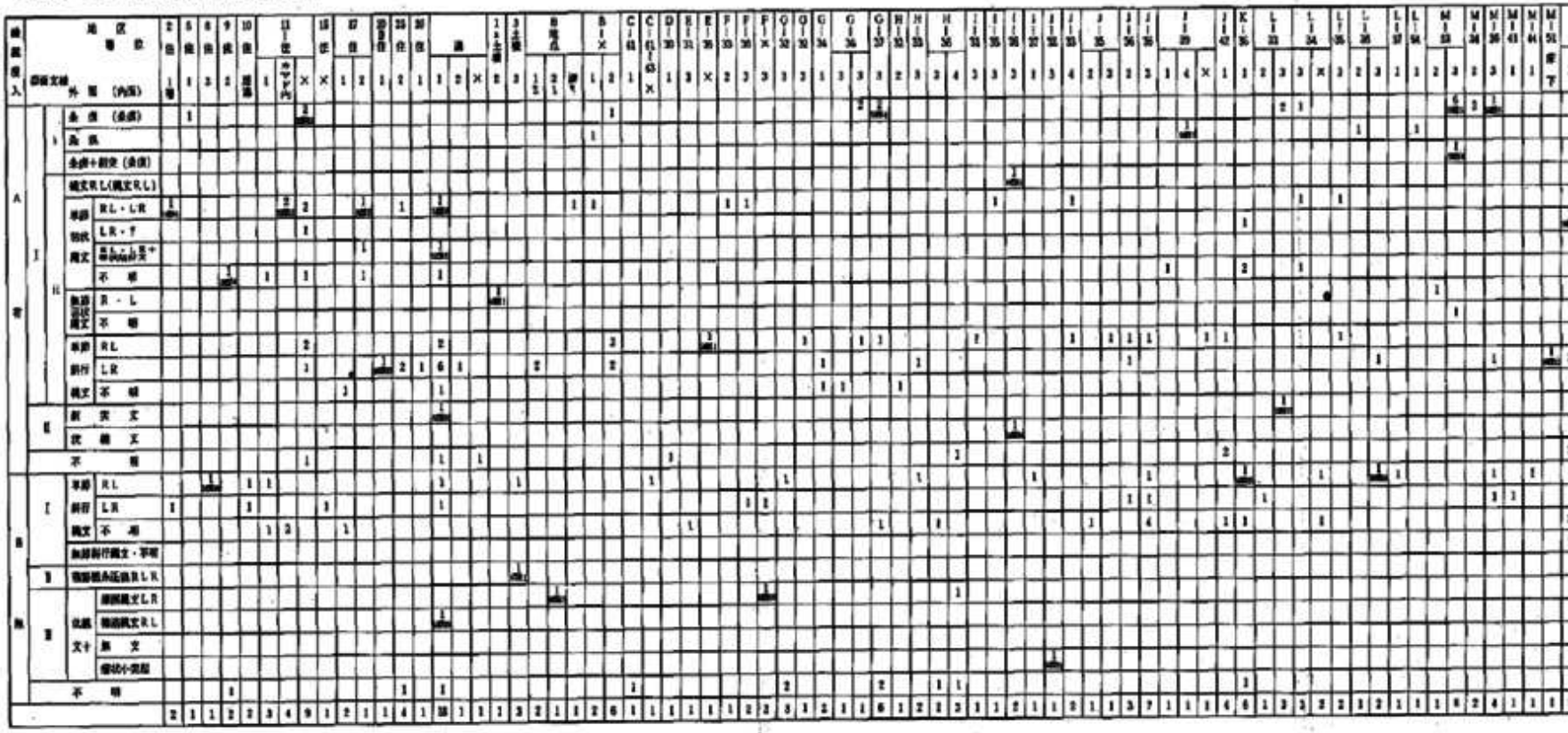
体部については文様表現により分類を行ない、底部については特徴を述べてみたい。

体部は、沈線により文様表現がなされたもの(A類)、地文だけのもの（B類）に大別されるA類は文様表現の種類により、横位の沈線(Ⅰ)、斜位の沈線（Ⅱ）、弧状の沈線(Ⅲ)に細分される。B類は地文に単節斜行縄文をもつものであり、その原体にはＲＬとＬＲがある。

底部は1点のみ出土しているが、小破片のため図示できない。底部形態は平底で、底面は無文である。外面には単節斜行縄文（ＲＬ）が施されている。

A類の沈線文による文様はすべて一本工具により描かれている。この類例は蔵王町矢遺跡（

第5表　縄文土器(体部)の分類と破片集計



第6表　弥生土器の分類と破片集計

部位	分類	文様 ＼ 地区・層位		2住 1	5住 1	6住 1	8住 1	9住 1	9住 2	9住 ×	11住 2	17住 1	14溝 1	14溝 2	1a 土坑 1	第3 土坑 3	B— 1 1	F— 36 3	F— X 3	G— 32 3	G— 33 3	H— 35 2	I— 35 3	J— 35 3	K— 36 1	L— 36 3	L— 37 1	M— 33 2	M— 36 3	
体部	A 沈線文によるもの	地文	文様表現																										
		無文	斜位沈線			1																							1
			弧状沈線																			1							1
			弧状沈線＋LR							2		1							1										4
	B 縄文だけのもの	縄文	弧状沈線＋LR									1																	1
		縄文	単節 RL	2	1		1	1	2				1	1	1	1	1			1		1	1	3	2			3	24
			斜行 LR	1				1			1		3					1					1	1					9
			撚文 不明													1									1	1	3		4
底部	地文だけのもの	縄文	単節斜行縄文RL																									1	1
			単節斜行縄文LR																										
			撚文 不明																										
	沈線文	無文	斜位沈線																										
			弧状沈線																										
			弧状沈線＋LR																										
		縄文	弧状沈線＋LR																										
		縄文	単節 RL																										
			斜行 LR																										
			撚文 不明																										
	不明																												

白鳥:1971）、大橋遺跡（藤沼：1971）、村田町北沢遺跡（宮城県教委:1978）などにみられる。これらの編年的位置づけは、弥生時代の「円田式」とされている。

3. 土師器･須恵器

(1) 分類

土師器

土師器は本遺跡出土土器の中で最も多量に出土している。そのうち、分類可能な坏･甕･高坏を対象に、器形･製作技法･底部切り離し技法･器面調整等の特徴をもとに分類を試みてみたい。

坏：坏には製作に際しロクロを使用していないものと使用しているものがある。前者は器形の特徴により4類、後者は底部の切り離し技法の特徴により3類に分けられる。

A類－製作に際し、ロクロを使用していないもので、口縁部が屈曲し、内面に稜があるもの。

B類－製作に際し、ロクロを使用していないもので、口縁部捌曲し、外面に稜があるもの。

C類－製作に際し、ロクロを使用していないもので、丸味をもって立ち上がり、稜がないもの。

D類－製作に際し、ロクロを使用していないもので、体部から口縁部まで直線的に外傾するもの。

E類－製作に際し、ロクロを使用しているもので、底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのもの。

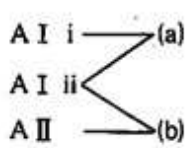
F類－製作に際し、ロクロを使用しているもので、底部の切り離し技法が回転糸切りのもの

G類－製作に察し、ロクロを使用しているもので、底部に再調整が加えられているため、切り離し技法が不明なもの。

さらに、各類は口縁部、体部、底部の器形、および器面調整などからいくつかに細分される。

〈坏A類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。口縁部が屈曲し、内面に稜がつくものである。器形の特徴によりＡＩ・ＡⅡに分類される。ＡＩ類は口縁部が外反し、体部上半が内弯するものをＡＩｉ類、体部上半が外傾するものをＡＩⅱ類とする。ＡⅡ類は口縁部が直立し、体部上半が直立するものである。さらに底部の形態により細分される（ａ）は平底、（ｂ）は丸底で次のような組み合せが認められる。



器面調整はＡＩ類が口縁部内外面とも横ナデ、体部外面がヘラミガキ・刷毛目・ヘラケズリ・ミガキの前段階としてのヘラケズリ、内面は、ヘラナデ・ヘラミガキ・ナデが施されている。

なかには、内外面丹塗りされ、口縁部から底部までヘラミガキが施されているものがある。ＡⅡ類は口縁部に横ナデ・体部外面がヘラケズリ、内面にはヘラミガキが施されている。

〈坏Ｂ類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。口縁部が屈曲し、外面に稜がある。口縁部は内傾し、体部上半が外傾する。底部は丸底である。

器面調整は内外面とも丹塗りされ、体部外面がヘラケズリ、内面にはヘラミガキが施されている。

〈坏Ｃ類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。底部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、稜がみられないもの。口縁部が直立し、体部上半が外傾する。底部は平底で、木葉痕の認められるものもある。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にはヘラミガキ、体部下端から底部周縁にヘラケズリ、内面にはヘラミガキされている。また、内外面とも口縁部に横ナデ、体部にはヘラミガキされているが摩滅が著しく、方向が不明なものもある。

〈坏Ｄ類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。体部から口縁部まで直線的に外傾する。さらに、底部の形態により2者に細分される（ａ）は平底、（b）は丸底のものである。

器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にはヘラケズリ・横ナデ後ヘラミガキ・ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面にはヘラミガキ.黒色処理が施されている。

〈坏Ｅ類〉

製作に際し、ロクロを使用しているものである。底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのものである。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾する。ロクロの回転方向の明らかなものは右回転である。

外面に再調整が施されているものＥＩ類、再調整が施されていないものＥⅢ類とする。前者は底部全面に手持ちヘラケズリが施されている。

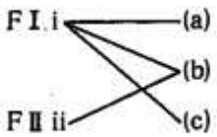
器面調整はいずれも外面がロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は底部から体部下半にかけて放射状、それ以外では横、斜位である。ＥＩ・ＥⅡ類はいずれも1点づつである。前者は内面が再酸化を受けたと思われ、黒色の一部が失なわれている。

第7表　土師器 坏分類基準表

		口縁部	体部（上半）		底　部	内面調整	
ロクロ非使用	A．口縁部が屈曲し内面に稜がある	Ⅰ 外 反	内 傾(i)		(a)平 底		AⅠi
			外 傾(ii)		(b)丸 底		AⅠii
		Ⅱ 直 立	直 立				AⅡ
	B．口縁部に屈曲し外面に稜がある。	直 立	直 立 外 傾		丸 底		B
	C．全体的に丸味をもって立ち上がり内面に稜がない。	直 立	外 傾		平 底		C
	D．口縁部・体部が直線的に外傾する。	外 傾	外 傾		(a)平 底 (b)丸 底	黒色処理	D
ロクロ使用		底部切り離し	切り離し後の再調整	再調整	再調整のある部位	黒色処理	
	E．回転ヘラ切り		Ⅰ．再調整あり	ⅰ手持ちヘラケズリ	底部全面		EⅠ
			Ⅱ．再調整なし				EⅡ
	F．回転糸切り		Ⅰ．再調整あり	ⅰ手持ちヘラケズリ	(a)体部下半 (b)体部下半～底部周縁 (c)体部下半～底部全面		FⅠi
				ⅱ回転ヘラケズリ			FⅠii
			Ⅱ．再調整なし				FⅡ
	G．再調整により不明		ⅰ回転ヘラケズリ	ⅰ手持ちヘラケズリ	(a)体部下半～底部全面 (b)底部全面		GⅠ
				ⅱ回転ヘラケズリ			GⅡ

〈坏F類〉

製作に際し、ロクロを使用しているものである。底部の切り離し技法が回転糸切りのものである。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、丸味をもって立ち上がるものがある。ロクロの回転方向の明らかなものは全て右回転である。外面に再調整が施されているものをＦⅠ類、再調整が施されていないものをＦⅡ類とする。前者は手持ちヘラケズリされているものをＦⅠｉ類、回転ヘラケズリされているものをＦｉⅱ類とする。さらに、再調整されている部位により細分される直体部下半に再調整が施されているもの（a）、体部下半から底部周縁に再調整が施されているもの（b）、体部下半から底部全面に再調整が施されているもの（ｃ）がある。これらの（a）・（b）・（ｃ）を組み合わせると次のようになる。



器面調整はＦⅠ・ＦⅢ類とも外面にロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は底部が放射状、その他の部分は横、斜位である。ＦⅠ類に墨書土器が1点出土しているが判読できない。

〈坏G類〉

製作に際し、ロクロを使用しているものである。庭部の切り離し技法は再調整が施されているため不明なものである。器形は体部から口縁部までほぼ直線的に外傾する。外面の再調整により手持ちヘラケズリされているものをＧｉ類、回転ヘラケズリされているものをＧｉ類とする。さらに鯏整されている部位により細分される。体部下半から底部全面に再調整が施されているもの（ａ）、底部全面に再調整が施されているもの（b）がある。これらの（a）、（b）を組み合わせると次のようになる。

器面調整はいずれも外面にロクロ調整、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は底部が放射状、その他の部分は横、斜位である。

甕：甕には製作に際し、ロクロを使用していないものと使用しているものがある。さらに、それらは口縁部径と器高の比、最大径の位置によって以下の5類に分類できる。

Ａ類－製作に際し、ロクロを使用しないもので、口縁部径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。

Ｂ類－製作に際し、ロクロを使用しないもので、口縁部径より器高が大きく最大径の位置が

体部にあるもの。

C類－製作に際し、ロクロを使用しないもので、口縁部径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるもの。

D類－製作に際し、ロクロを使用しているもので、口縁部径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。

E類－製作に際し、ロクロを使用しているもので、口縁部径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるもの。

〈甕A類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。口縁部径より器高が大きく、最大径の位置が口縁部にあるものである。口縁部は外傾しており、体部から口縁部へなだらかに移行する。底部の明らかなものは平底である。

器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にはナデ、ヘラケズリ、体部内面にはナデ、ヘラナデ、刷毛目が施されている。

〈甕B類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。口縁部径より器高が大きく、最大径の位置が体部にあるものである。体部最大径の位置は中央ないし上半にあり、球形を呈する。口縁部の明らかなものは、外反するものと、外傾するものがある。

器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面には、わずかにナデ、刷毛目、中央以下にヘラケズリ、内面にはナデ、ヘラナデ、刷毛目が施されている。

〈甕C類〉

製作に際し、ロクロを使用していないものである。口縁部径より器高が小さく、最大径の位置が口縁部にあるものである。口縁部は短かく外傾する。体部は半球形を呈しながら底部に向ってすぼまる。

器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面には刷毛目、内面は摩滅が著しく、観察が困難である。内面に積み上痕が認められるものもある。

〈甕D類〉

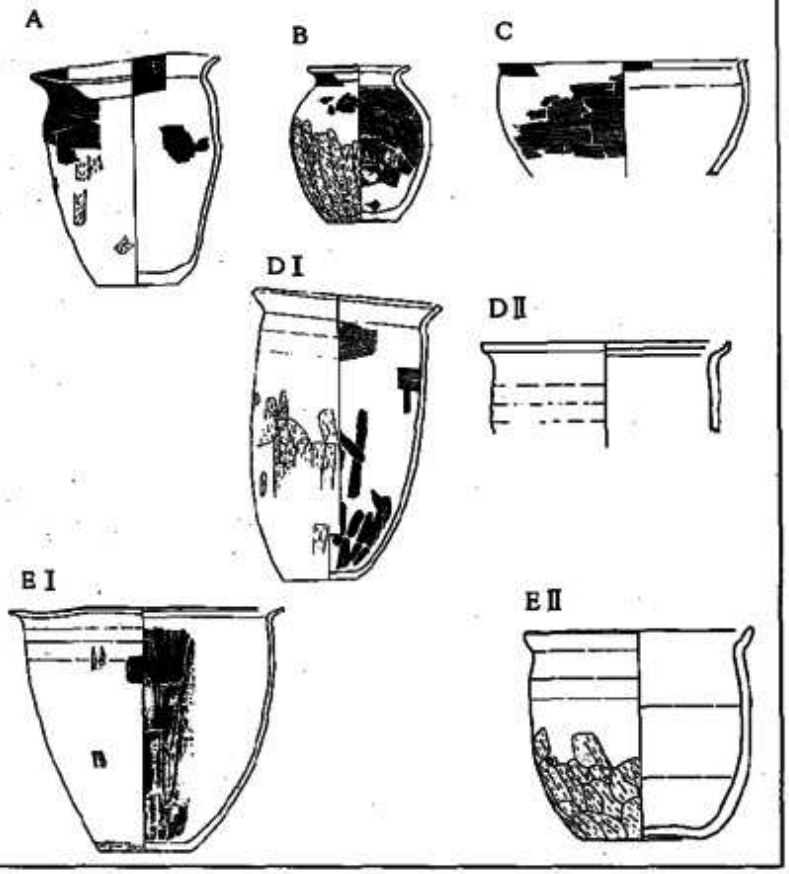
製作に際し、ロクロを使用しているものである。口縁部径より、器高が大きく最大径が口縁部･体部にあるものである。口縁部径から推定して、比較的大形のものをＤⅠ類、小形のものをＤⅡ類とする。

ＤⅠ類

口縁部が強く外反し、途中で屈曲し口唇部がわずかに上方にひきだされるものと外傾するものがある。体部、底部の器形が明らかなものは、長胴形のもので底部が平底を呈する。

第8表　土師器甕分類基準表

	口径と器高	最大径の位置	
ロクロ非使用	口　径＜器　高	A. 口縁部	最大径 体部中央または上半
		B. 体　部	最大径 体部中央または上半
	口　径＞器　高	C. 口縁部	最大径 体部中央または上半
ロクロ使用	口　径＜器　高	D. 口縁部≧体部	Ⅰ. 大　形
			Ⅱ. 小　形
	口　径＞器　高	E. 口縁部	Ⅰ. 大　形
			Ⅱ. 小　形



ＤⅢ類

口縁部が強く外反するものと、口縁部が外反し、途中で屈曲し口唇部が短く上方にひきだされるものがある。長胴形になるものと推定される。

器面調整はＤⅠ類が、ロクロ調整後、体部外面にヘラケズリ、内面には刷毛目・ナデが施されているものと、再調整が施されていないものがある。ＤⅡ類は内外面ともロクロ調整が認められ、特に再調整が施されていない。

〈甕Ｅ類〉

製作に際し、ロクロを使用しているものである。口縁部径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるものである。口縁部径から推定して、大形のものをＥⅠ類、小形のものをＥⅡ類とする。

ＥⅠ類

口縁部が強く外反するものと外傾するものがある。器形が明らかなものは、長胴形を呈し底部は平底である。

器面調整はロクロ調整後体部外面に、ナデ、ヘラケズリ、内面には、ナデが施されている。

ＥⅡ類

口縁部が強く外反するもの・外傾するもの・外傾し途中で屈曲し、口唇部が上方にひきだされるものがある。

器面調整は体部外面にヘラケズリされているものが1点ある。その他のものは、すべてロクロ調整痕が観察され、特に再調整は施されていない。

高坏：高坏には全体の器形が判明するものは出土していない。そのため、坏部、脚部に区別し、分類を行なう。高坏の細部名称について、便宜上、坏部上半、下半、脚部上半（柱状部）下（裾部）とする。

坏部は、製作に際し、ロクロを使用していないが、脚部はロクロを使用しないものと使用しているものがある。

坏部

坏部は、3点出土している。器形の明らかなものは1点だけで、それ以外のものは、上、下半のいずれかを欠損している。前者は坏部上・下半接合部の形態が不明瞭でわずかに稜がつき直線的に外傾する。

器面調整は、坏部内外面に横ナデ後ヘラミガキが施されているものと、ヘラミガキのものがある。

脚部

脚部は、12点出土している。器形の判明しているものは、3点だけで、それ以外のものは柱状部だけのものである。ロクロを使用していないものをA類、使用しているものをB類とする。

A類は柱状部の形態によりＡＩ類、ＡⅢ類に細分される。

脚部ＡＩ類

柱状部がほぼ直立し、中央部がわずかにふくらむものである。裾部の器形が明らかなものは外方に強く開く。

脚部ＡⅡ類

1点だけ出土している。柱状部は円錐台状に開くものである。

器面調整はＡＩ類が、柱状部外面にヘラミガキ、ヘラミガキの前段階としてヘラケズリ、裾部には、横ナデ、柱状部内面には、ナデ、裾部にはヘラナデ、横ナデが施されている。内面にはシボリ目がある。ＡⅡ類は外面に丹塗り、ヘラミガキ、内面にヘラケズリが施されてある。また、内面にはシボリ目がある。

〈脚部Ｂ類〉

4点出土している。坏部下半から脚部までのものと脚部だけのものである。脚部底面を回転糸切り技法で切り離している。特に再調整は施されていない。

須恵器

須恵器は本遺跡出土土器の中で土師器についで出土量が多い。器種には坏・高台付坏･壺･甕･蓋がある。図化できたもののうち数の多い坏・高台付坏を対象に、底部の切り離し技法および再調整の有無によって分類することができる。

坏：器形は体部から口縁部まで直線的あるいは丸味をもって外傾するものがある。いずれも内外面にロクロ調整痕が観察される。ロクロの回転方向の明らかなものは全て右回転である。底部の切り離し技法により3類に分類される。

Ａ類－底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのもの。

Ｂ類－底部の切り離し技法が回転糸切りのもの。

Ｃ類－底部の切り離し技法が再調整のため不明なもの。

さらに、切り離し後の再調整によっていくつかに細分される。

〈坏Ａ類〉

底部の切り離し技法は回転ヘラ切りのもので、再調整が施されていないものである。

〈坏Ｂ類〉

底部の切り離し技法は回転糸切りのものである。再調整が施されているものをＢＩ類、施されていないものをＢⅡ類とする。前者は体部下端に手持ちヘラケズリされている。

〈坏C類〉

底部の切り離し技法は再調整が施されているため不明なものである。体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施されているものCⅠ類、回転ヘラケズリが施されているものをCⅡ類とする。CⅠ類には墨書土器が1点あるが判読できない。CⅡ類は1点だけである。

高台付坏

2点出土している。いずれも坏部下半以下の破片であるため、全体の器形は不明である。底部の切り離し技法により2類に分類される。

A類－底部の切り離し技法が回転糸切りのもの。

B類－底部の切り離し技法が再調整によって不明なもの。

〈高台付坏A類〉

底部の切り離し技法が回転糸切りのもので再調整が施されていない。

〈高台付坏B類〉

底部の切り離し技法は再調整が施されているため不明なものである。底部に回転ヘラケズリが施されている。

以上のように土師器・須恵器の分類を行なった。図示した土器を分類にあてはめると第10表のようになる。また、分類に従って、図示した土器を遺構・出土地点・層位毎に配列すると第11・12表のようになる。

第9表　須恵器坏分類基準表

底部切り離し	切り離し後の再調整
A　回転ヘラ切り	Ⅰ．無
B　回転糸切り	Ⅰ．手持ちヘラケズリ（体部下端）
	Ⅱ．無
C　再調整により不明	Ⅰ．手持ちヘラケズリ（体部下端から底部）
	Ⅱ．回転ヘラケズリ（体部下端から底部）

第１０表　図示遺物分類表①

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	分類
第9図1	1住 掘出し	土師器	甕	A	7	5住 貯蔵穴状ピット	土師器	壺	
2	1住 掘出し	土師器	甕	DI	8	5住 床面	土師器	高坏(脚)	A
3	1住 床面	土師器	坏	Gi(a)	9	5住 堆積土	土師器	高坏(坏)	
4	1住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Fii(b)	10	5住 堆積土	須恵器	壺	
5	1住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Gi(a)	11	5住 堆積土	土師器	高坏(脚)	A
6	1住 床面	須恵器	坏	BI	12	5住 床面	土師器	甕	
7	1住 床面	須恵器	高台付坏	B	第20図1	6住 堆積土	土師器	坏	AI
8	1住 床面	須恵器	甕		第22図1	7住 貯蔵穴状ピット	土師器	甕	A
9	1住 堆積土	土師器	甑		2	7住 堆積土	須恵器	甕	A
10	1住 堆積土	須恵器	坏	BI	3	7住 堆積土	須恵器	坏	BII
第11図1	2住 床面	土師器	坏	D(b)	第25図1	8住 床面	土師器	坏	Fii(b)
2	2住 堆積土	土師器	坏(小形)	D(b)	2	8住 床面	土師器	坏	FII
3	2住 堆積土	土師器	坏(小形)	D(b)	3	8住 堆積土	土師器	坏	Fii(b)
4	2住 堆積土	土師器	甕		4	8住 堆積土	土師器	坏	Gi(a)
第13図1	3住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Eii(b)	5	8住 堆積土	土師器	坏	FII
2	3住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Gi(a)	6	8住 床面	土師器	坏	Fiii(b)
3	3住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Fii(b)	7	8住 堆積土	土師器	坏	Fii(a)
4	3住 床面	土師器	坏		8	8住 堆積土	土師器	坏	
5	3住 貯蔵穴状ピット	須恵器	坏	BII	9	8住 床面	須恵器	坏	BII
6	3住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏		10	8住 床面	須恵器	坏	BI
7a・7b	3住 貯蔵穴状ピット	土師器	甕	EII	11	8住 床面	須恵器	坏	BII
第15図1	4住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Fii(b)	12	8住 床面	須恵器	坏	BII
2	4住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	FII	13	8住 堆積土	須恵器	甕	
3	4住 堆積土	土師器	坏	Fii(b)	第26図1	8住 堆積土	土師器	高坏(坏)	
4	4住 堆積土	土師器	甕	DII	2	8住 堆積土	須恵器	坏	BI
5	4住 堆積土	土師器	甕	EII	3	8住 堆積土	須恵器	坏	BII
6	4住 堆積土	須恵器	甕		4	8住 堆積土	須恵器	坏	BII
7	4住 堆積土	須恵器	甕		5	8住 堆積土	須恵器	坏	AII
第17図1	5住 床面	土師器	坏	Aiii(a)	6	8住 堆積土	須恵器	坏	AII
2	5住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Aiii(b)	7	8住 堆積土	土師器	甕	DII
3	5住 C－1 C－1土壙	土師器	坏	Aiii(b)	8	8住 床面	土師器	甕	EI
4	5住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	Aiii(a)	第28図1	9住 床面	土師器	坏	AII
5	5住 床面	土師器	坏	Aii(a)	2	9住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	C
6	5住 堆積土	土師器	坏	AI	3	9住 床面	土師器	坏	Aii(a)

②

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	分類
第28図4	9住 床面	土師器	壺		4	24住 堆積土	土師器	坏	FⅡ
5	9住 床面	土師器	高坏(坏)		第45図1	第2層立	土師器	甕	DⅡ
第30図1	10住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	EⅠ	第52図1	溝状遺構 堆積土	土師器	坏	AⅠi
2	10住 貯蔵穴状ピット	土師器	甕		2	溝状遺構 堆積土	土師器	坏	B
3	10住 周溝	土師器	坏	Gii(b)	3	溝状遺構 堆積土	土師器	甕	
4	10住 貯蔵穴状ピット	土師器	坏	FⅠi(a)	4	溝状遺構 堆積土	土師器	甕	
5	10住 堆積土	須恵器	坏	BⅡ	第55図1	堆積土	土師器	坏	AⅠi(a)
第32図1	11住 堆積土	土師器	坏	FⅠi(c)	2	堆積土	土師器	坏	D(a)
2	11住 カマド	須恵器	坏		3	堆積土	土師器	坏	C
3	11住 貯蔵穴状ピット	須恵器	坏		4	堆積土	土師器	坏	D
4	11住 貯蔵穴状ピット	須恵器	坏	CⅠ	5	堆積土	土師器	坏	D
5	11住 カマド	須恵器	坏	BⅡ	6	堆積土	土師器	坏	GⅠ(a)
6	11住 堆積土	土師器	甕	EⅠ	7	堆積土	土師器	坏	FⅡ
7	11住 床面	土師器	甕	EⅡ	8	堆積土	土師器	坏	FⅡ
8	11住 堆積土	土師器	甕	DⅠ	9	堆積土	土師器	坏	Gii(a)
9	11住 貯蔵穴状ピット	土師器	甕	EⅡ	10	堆積土	土師器	坏	FⅡ
10	11住 貼床下	土師器	高坏(坏)	A	11	堆積土	土師器	坏	FⅡ
第34図1	13住 堆積土	土師器	甕		12	堆積土	土師器	坏	EⅡ
2	13住 堆積土	土師器	甕		13	堆積土	須恵器	高台付坏	A
3	13住 堆積土	須恵器	甕		第56図1	堆積土	須恵器	坏	BⅡ
第36図1	15住 堆積土	土師器	高坏(脚)	A	2	堆積土	須恵器	坏	AⅡ
第38図1	17住 堆積土	土師器	甕		3	堆積土	須恵器	坏	CⅡ
第40図1	20住 P9	土師器	坏	FⅡ	4	堆積土	須恵器	蓋	
2	20住 床面	須恵器	坏	AⅠ	5	堆積土	土師器	甕	
3	20住 堆積土	須恵器	坏	CⅠ	6・7	堆積土	土師器	甕	B
4	20住 床面	土師器	甕	DⅠ	8	堆積土	土師器	甕	C
5	20住 貯蔵穴状ピット	土師器	甕	B	9	堆積土	須恵器	甕	
6	20住 堆積土	土師器	甕	DⅠ	10	堆積土	土師器	高坏	A
7	20住 床面	土師器	甕	EⅡ	11	堆積土	土師器	高坏	A
8	20住 堆積土	須恵器	甕		12	堆積土	土師器	高坏	B
9	20住 床面	須恵器	甕		第57図1	堆積土	土師器	高坏	B
第41図1	24住 堆積土	土師器	坏	FⅡ	2	堆積土	土師器	高坏	B
2	24住 堆積土	土師器	坏	FⅡ	3	堆積土	土師器	高坏	B
3	24住 堆積土	土師器	坏		4	堆積土	土師器	高坏	B

第11表　図示遺物分類集計表（遺構に伴う土器）

	土師器																						須恵器										
	坏										甕							高坏坏部	高坏脚部		壺	鉢	坏					壺		高台付坏		盤
	AⅠ	AⅡ	B	C	D	EⅠ	EⅡ	FⅠ	FⅡ	G	A	B	C	DⅠ	DⅡ	EⅠ	EⅡ		AⅠ	AⅡ			A	BⅠ	BⅡ	CⅠ	CⅡ			A	B	
第1号住居跡								1		2	1			1										1				1			1	
第2号住居跡					1																											
第3号住居跡								2		1							1								1							
第4号住居跡								1	1																							
第5号住居跡	4																		1		1											
第6号住居跡																																
第7号住居跡											1																					
第8号住居跡								2	1							1								1	3							
第9号住居跡	1	1		1														1			1											
第10号住居跡						1		1		1																						
第11号住居跡																	2								3	1						
第13号住居跡																																
第15号住居跡																																
第17号住居跡																																
第20号住居跡									1			1		1			1						1										
第20B号住居跡																																
第24号住居跡																																
第25号住居跡																																
第26号住居跡																																
第1号掘立柱建物跡																																
第2号掘立柱建物跡																																
第3号掘立柱建物跡																																

第12表　図示遺物分類集計表（遺構に伴わない土器）

	土師器																						須恵器										
	坏											甕							高坏	高坏脚部		壺	鉢	坏					甕	壺	高台付坏		蓋
	AⅠ	AⅡ	B	C	D	EⅠ	EⅡ	FⅠ	FⅡ	G	A	B	C	DⅠ	DⅡ	EⅠ	EⅡ		AⅠ	AⅡ			A	BⅠ	BⅡ	CⅠ	CⅡ			A	B	
第1号住居跡																							1			1							
第2号住居跡					2																												
第3号住居跡																																	
第4号住居跡								1							1		1											2					
第5号住居跡	1																		1	1									1				
第6号住居跡	1																																
第7号住居跡																									1			1					
第8号住居跡								2	1	1				1					1				2	1	2			1					
第9号住居跡																																	
第10号住居跡																									1								
第11号住居跡								1						1		1				1													
第13号住居跡																																	
第15号住居跡																																	
第17号住居跡																																	
第20号住居跡														1												1							
第20B号住居跡																												2					
第24号住居跡								3																									
第25号住居跡																																	
第26号住居跡																																	
第1号掘立柱建物跡																																	
第2号掘立柱建物跡																																	
第3号掘立柱建物跡																																	
溝	1		1									2																					
地区				2	3				2	2										2			1		1		1	1		1		1	
表採																					1												
不明	1						1		1		1	1	1																				

(2) 組合せとその年代

土師器・須恵器は前項のように分類された。それらは各住居跡において、第11表のような共伴関係が認められた。上記の分類資料をもとに、出土土器が各住居跡とどのような共伴関係・組み合せにあるか比較検討してみたい。

① 土師器坏には製作に際し、ロクロを使用しない－以下ロクロ非使用と呼ぶ－ものと、ロクロ使用のものがある。前者にはA・B・C・D類があり、D類は内面黒色処理が施されている。第9号住居跡においてはＡⅠⅱ・ＡⅡ・C類が共伴関係にある。また、第5号住居跡においてはＡⅠⅰ・ＡⅠⅱ類が共伴していた。このことから、ＡⅠ・ＡⅡ・C類の組み合せ（第1群）が成立するものと考えられる。D類は第2号住居跡から出土しているが、他の住居跡からは出土例がなく、共伴関係については不明である（第2群）。

後者には、E・F・G類がある。第10号住居跡においてはＥⅠ・ＦⅠⅰ・Ｇⅱ類第1・3号住居跡においてはＦⅠⅰ・Ｇⅰ・Ｇⅱ類、第4号住居跡においてはＦⅠⅰ・ＦⅡ類が共伴関係にある。これらを総合するとＥⅠ・ＦⅠⅰ・ＦⅠⅱ・ＦⅡ・Ｇⅰ・Ｇⅱ類が共伴関係にあり、すべて、組み合せが成立するものと考えられる（第3群）。

そして、ロクロ非使用のA・C類・内面黒色のD類とロクロ使用のE・F・G類の間には共伴関係は認められなかった。よって、これらはおのおの限られた年代幅における土器の組み合せとして考えることができる。

以上のように、土師器坏には3群の組み合せが考えられる。

② 土師器甕には、ロクロ非使用のものとロクロ使用のものがある。前者はA・B・C類、後者はD・E類がある。両者は共伴関係を検討するにあたって土師器坏との共伴関係において検討を加えてみたい。

土師器坏の第1群土器に共伴する甕は小破片のため図示できなかったので、第3群土器（土師器坏）に共伴する甕について検討を加えてみる。

第20号住居跡ではＢ・ＤⅠ・ＥⅡ類が土師器坏ＦⅡ類と、第1号住居跡ではＡ・ＤⅠ類が土師器坏ＦⅠⅰ・Ｇⅰ類と共伴関係にある。また、第8号住居跡ではＥⅠ類が土師器坏ＦⅠⅰ・ＦⅡ類と共伴している。よって、これらの土師器甕A・B・ＤⅠ・ＥⅠ・ＥⅡはいずれも第3群土器（ロクロ使用の土師器坏）と共伴関係にあり、組み合せが成立すると考えられる。

また、第1群土器に第5・9号住居跡の高坏の坏部・脚部ＡⅠ類・壺が共伴している。

次に、須恵器坏について検討を加えてみたい。

③ 須恵器坏には底部に回転ヘラ切り痕のあるもの（A類）、回転糸切り痕のあるもの（B類）・再調整のため不明なもの（C類）がある。第8号住居跡ではＢⅠ・ＢⅡ類が土師器坏ＦⅠⅰ・ＦⅡ類と、

第20号住居跡ではA類が土師器坏FⅡ類と共伴している。第11号住居跡ではBⅡ・CⅠ類が共伴している。

また、第1号住居跡では高台付坏B類とも共伴関係にある。以上のように、出土土器の共伴関係、組み合せを検討してきた。これらをまとめると第13表のようになる。

東北地方南部の土師器の編年は氏家和典氏によって大筋が組み立てられた（氏家:1957）。その後、氏家氏自身によって補なわれ、編年を明確にした（1967）。また、阿部義平、工藤雅樹、桑原滋郎、小笠原好彦、小井川和夫、高橋守克、白鳥良一、加藤道男の各氏によっても検討が加えられてきた。それによると、第1群土器は南小泉式、第2群土器は国分寺下層式、第3群土器は表杉ノ入式に相当すると考えられる。

以上のように出土土器の組み合せ、年代を見てきたが、第1～3群のいずれにも共伴関係が認められなかった土師器坏B、甕C、高坏AⅡ・B類、須恵器高台付坏A類について年代を考えてみたい。

土師器坏B類の器形の特徴は県内では類例がないが、器面調整などの類似から南小泉式にいものと思われる。

土師器甕Cの特徴は、現在までのところ報告例がなく編年的位置づけについては明らかにすることができなかった。

土師器高坏AⅡ類は南小泉式のものと考えられる。

また高坏B類の器形の特徴は現在のところ報告例がないが底部に糸切り痕をもつことから表杉ノ入式期以降に属するものと考えられる。

高台付坏A類は底部に回転糸切り痕をもつことから表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

第13表　出土土器の組合せ表

	土師器					須恵器		
	坏	甕	高坏 坏部	高坏 脚部	壺	坏	甕	高台付坏
第1群土器	AIi・AIii・AII・C	○	○	AI	○			
第2群土器	D							
第3群土器	EIi・FIi・FIii・FII GI・GII	A・B・DII EI・EII				A・BI BII・CI	○	B

(3) 土師器・須恵器に関する問題点

〔第1群土器について〕

第1群土器はおもに、第5・9住居跡から出土しているが、その他の遺構、発掘区の堆積

土からも出土している。第1群土器には土師器坏・高坏・壺・甕の各器種がある。坏が比較的多く、高坏・壺・甕の順に少なくなる。いずれの器種もロクロ非使用である。

以下、それぞれの特徴について述べてみる。

土師器坏－口縁部が屈曲し、内面に稜がつくもの（A類）、内面に稜がつかないもの（C類）がある。さらに、部位の特徴により細分される。底部の明らかなものは平底と丸底があり、前者が多い。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にはヘラケズリ後ヘラミガキ、体部内外面にヘラミガキのものが多いが、なかには、内面にナデ、刷毛目のものもある。また、内外面に丹塗りされている。底部に木葉痕の認められるもののなかに底部周縁に手持ちヘラケズリされているものもある。なお、これらの土器はいずれも内面に黒色処理されていない。

高坏－全体の器形の明らかなものは出土していない。すでに述べたように、坏部の器形の明らかなものは、上・下半が直線的に外傾する。外面坏部上、下半の境にわずかに稜がつくものがある。また、脚部では、脚部上半（柱状部）の器形により、ＡＩ類は柱状部がほぼ直立し、中央部がわずかにふくらむものである。

器面調整は坏部内外面横ナデ、ヘラミガキ・脚部上半は外面にヘラケズリ後ヘラミガキ・ヘラミガキ、裾部外面に横ナデ、内面には横ナデ、ヘラナデが施されている。脚部のなかには外面に丹塗りされているものもある。また、内面にシボリ目の認められるものもある。

壺－口縁部の明らかなものは、頸部でく字状に屈曲し、口縁部が外傾する。体部は球形のものと楕円形のものがある。底部の明らかなものは丸底である。

器面調整は体部外面にヘラケズリ、ヘラケズリ・刷毛目消したヘラミガキ、内面にはナデが施されている。また、口縁部内外面とも摩滅のため不明である。

甕－口縁部が欠損しているものである同体部は球形を呈し、底部は平底である。

器面調整は内外面とも摩滅のため不明である。

民家氏によって設定された第2型式の坏形土器の特徴は『丸底のものに伴出して平底の器形の多いことである。口縁部は比較的小で、口縁の外反するもの、内弯するもの等がある』としている。さらに第3型式の特徴は『口縁部外反の坏形土器において指摘することができる。即ち、口縁部と体部の接続部分たる頚部の内側に、顕著に稜線を形成することである。この稜線形成は、第2型式のものにもやや見られるが、引田式のものにあっては、他の部分に比して頚部やや厚味を増すのが原則で稜線形成は特に顕著である。この類の他に引田遺跡からは口縁部が体部からそのまま伸びて内弯する坏形土器が出土しているが、両者共に丸底を呈する点にその特徴がある』また、第2型式の高坏形土器の特徴は『脚部にあっては中膨み中空であって裾部は脚柱部より顕著に外方に屈曲し所謂拡がった裾部を形成している。この類は第Ｉ型式のよ

うに胸中央部に窓を有しない。坏部にあっては坏底部外側に稜線を形成している』（氏家：1957）とされている。

さらに、岩切鴻ノ巣遺跡から出土した第2群の土師器坏はＡ－Ｃ類に分類されており、引田式類似のものを含めて南小泉式に位置づけられている。（県教委：1974）

本群のＡ・Ｃ類坏・高坏・壺などは岩切鴻ノ巣遺跡出土の土師器と器形・器面調整等に強い類似性が認められる。

以上のように、本群の土器は南小泉式・引出式のいずれの型式にも類似する特徴を有しているが、両型式おのおのの特徴を抽出して区別できず、共伴関係においても本群を細分する根拠は認められない。

したがって、第1群土器は、出土量が少いこともあって、器形の組み合せが不足していることも考えられるが、その所属時期は岩切鴻ノ巣同様、高小泉式の範疇に入れて理解しておきたい。

〔第2群土器について〕

第2群土器は国分寺下層式のものと考える。

器種に坏がある。ロクロ非使用のものである。主に第2号住居跡から出土しているが、発掘区の堆積土からも出土している。器形の特徴は体部から口縁部まで直線的に外傾し、体部外面には段・沈線は認められない。底部形態により平底・丸底がある。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面が横ナデ後ヘラケズリ、あるいはヘラミガキのものとヘラケズリ後ヘラミガキされているものがある。底部はヘラケズリ、あるいはヘラケズリ後弱いヘラミガキが施されている。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。また、木葉痕の認められるものも1点ある。

従来、国分寺下層式としてきた坏の特徴は、ロクロ未使用、丸底、内面黒色処理されているものである。また、外面の段によりＩＩＩ・Ⅲ類に細分されている（氏家:1967）さらに桑原氏によっても研究がおしすすめられている（1976）。

近年、宮城県対馬遺跡の出土土器（小井川・高橋:1977）の器形には底部が平底もしくは丸味をもった平底で、体部外面には段・沈線は認められなかったという観察結果がある。また、宮城県志波姫町糠塚遺跡出土のものにロクロ未使用で、丸底・平底の両者があり、段・沈線の有無によってＡＩ～ＡⅣ、ＢＩ～ＢⅢ類に細分されている。

器面調整は体部外面がヘラケズリ後ヘラミガキ、底部はヘラケズリ・ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面にはヘラミガキされ黒色処理が施されている。これらは国分寺下層式の範疇に入れて理解している。よって、本群の土器も国分寺下層式の範疇に入れて理解すべきものと考え

〔第2群土器について〕

土師器坏には底部に回転ヘラ切り痕のあるもの（E類）、回転糸切り痕のあるもの（F類）再調整により不明なもの（G類）がある。さらに、底部切り離し後の再調整の有無、部位によって前章で示したように細分され、多様な製作・調整技法で構成されている。

底部の切り離し技法を観察するとE類が65%、F類が71%、G類が22.5%といった数値を示しており、F類が大半を占め、E類はわずかである。さらに、外面の再調整を観察すると、EII類が35%、FIi類が32%、G類が16%、Gii類が6.5%、EI・EII・FIiiが3%という数値を示し、手持ちヘラケズリが施されているもの51.5%、回転ヘラケズリが施されているもの9.5%、再調整が施されていないもの38%である。これらの坏では口径1に対する底径の比率はE類が0.47～0.53、F類が0.3～0.59、G類が0.38～0.56といった非常にバラエティーに富んだ数値を示しているが、大半は0.38～0.55の間におさまる。

また、図示できなかった底部破片の中にはF類が86.7%・G類が13.3%出土しており・E類はまったく出土しなかった。底部破片ではF類が大半を占めている。F類の中ではF1類が97%も占めている。

以上のように、本遺跡の土師器坏は底部に回転糸切り痕のものが大多数を占め、回転ヘラ切り痕のものは極めて少ない。また、手持ちヘラケズリの施されているものが半数を占めしてい

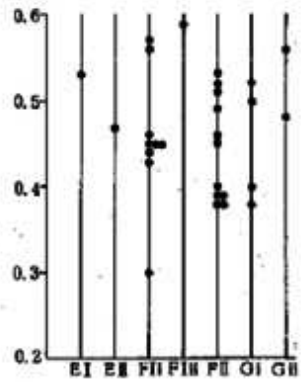
第14表　土師器坏

土師器坏の底部切り技法の数量グラフ

土師器坏の外面再調整の有無数量グラフ
※図示しなものを対象とした。

第15表　土師器坏

第17表　土師器口径底径の対比



第16表　土師器坏底部出土数

切り離し技法分類 / 数量	回転ヘラ切り		回転糸切り			再調整のため不明	
	EI	EII	EIi	FIii	FII	GI	GII
図示した土器	1	1	10	1	11	5	2
底部破片	0	0	4	0	140	18	4

る。

なお、阿部義平氏は多賀城砂押川出土（1968）において、回転ヘラケズリのものが、手持ちヘラケズリされているものより古い要素をもっているとしているが、本遺跡の場合には第10号住居跡でＥＩ・ＥＩｉ・Ｇⅱが共伴関係にあることから、上記のような新旧関係を指摘できなかった。なお、底部破片の数量は摩滅、欠損などによって、切り離し技法が不明なものは除外してある。また、底部個体数の中には同一個体のものがふくまれている可能性もあるが、資料としては一応の目安となり、有効なものと考えられる。以下須恵器坏においても同様である。

土師器甕にはロクロ非使用のものとロクロ使用のものがある。直前者は、A・B・類・後者はD・E類である。以下その特徴を述べる。

前者は口径より器高が大きく、最大径が口縁部にあるもの（A類）・体部にあるもの（B類がある。後者は口径より器高が大きく、最大径が口縁部、あるいは体部にあり、大形のもの（DⅠ類）・小形のもの（DⅡ類）さらに口径より器高が小さく、最大径が口縁部にあり、大形のもの（ＥⅠ類）、小形のもの（ＥⅡ類）がある。すでに前章で述べた通り全体の器形が判明しているものは少ないが、長胴形の甕が主体をなしている。中には他の器形も認められる。本遺跡においては、ロクロ非使用の甕には、段・沈線等は観察されなかったが、前段階の形式の流れを受けついでいるものがロクロ使用の甕と共伴関係にある。

須恵器坏には底部に回転ヘラ切り痕のあるもの（A類）、回転糸切り痕のあるもの（B類）、再調整により不明なもの（C類）がある。さらに再調整の有無により前述した通り細分される。なお、底部の切り離し技法を観察するとA類が17%・B類が70%・C類が13%出土しており、B類が大半を占めている。さらに外面の再調整の有無を観察すると、A類が17%・ＢⅠ類が13%、ＢⅡ類が57%、ＣⅠ類が8.7%、ＣⅡ類が4.3%あり、再調整が施されていないものが大半を占めている。これらの坏では口径1に対する底径の比率はA類が0.41～0.53・B類が0.37～0.56・C類が0.46～0.49といったバラエティーに富んだ数値を示しているが、大半は底径が口径の約との間におさまる（0.45～0.55）

また、図示できなかった底部破片の中にはA類が3.8%・E類が78.5%、C類が17.7%出土しており、B類が大半を占めている。B類の中ではＢⅡ類が97%も占めている。

本遺跡の須恵器坏は上記のように回転糸切り痕のものが圧倒的に多く、わずかにヘラ切り痕のものも共伴している。従来、須恵器研究において、ヘラ切り痕のものが回転糸切り痕よりも先に出現すると言われてきている。それに従えば、ヘラ切り痕のものは住居跡に伴っているが、基本層位から出土したものがすべて第3群土器に伴うかどうか不明ではあるが、本遺跡から出土した須恵器坏はヘラ切り痕の終末期にあたる段階のものと考えられる。

また、高台付坏についてみると、B類とも共伴関係にあった。なお、図示した遺物が少ない

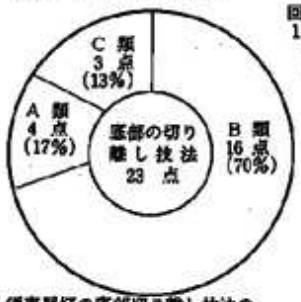
ので十分な資料とは言えないが、おおよそのことが理解されたと思われる。

以上のように、第3群土器の各器種について見てきた。第3群土器は第1・2群土器との大きなちがいは製作に際して、ロクロを使用していることにある。すでに述べているように土師器甕においてはロクロ非使用のものとロクロ使用のものが共伴関係にあり、ロクロ非使用のものがこの時期にまで存続している。さらに、土師器・須恵器坏は回転ヘラ切り、回転糸切り・が共伴している。また、本群では赤焼土器との共伴関係について、明確にすることができなかったが、志波姫町糠塚遺跡では表杉ノ入式期の土器と共伴していたことから、本群の土器は問題となる点が多く、年代的な考察が深められる必要があると思われる。

第3群土器は一括して表杉ノ入式に比定しておきたい。

以上のように、出土土器について記述してきたが絶対年代の明らかな遺物は出土しておらずこれまでの研究成果をふまえ、第1群土器は古墳時代中期、第2群土器は奈良時代・第3群土器は平安時代のものと考える。

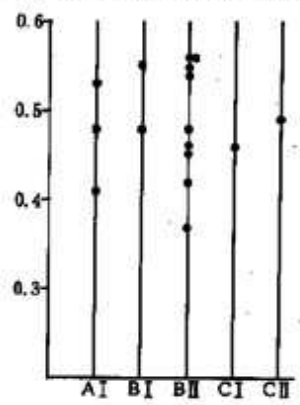
第１８表　須恵器坏



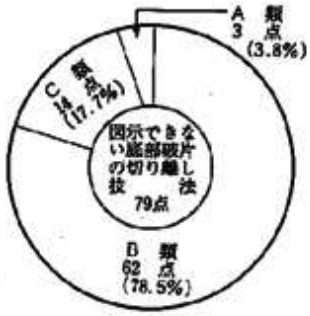
須恵器坏の底部切り離し技法の数量グラフ

須恵器坏の外面再調整の有無数量グラフ
※図示したものを対象とした

第２０表　須恵器口径底径の対比



第１９表　須恵器坏



第２１表　須恵器坏底部出土数

切り離し技法 分類 / 数量	回転ヘラ切り	回転糸切り		再調整のため不明	
	A	BⅠ	BⅡ	CⅠ	CⅡ
図示した土器	4	3	13	3	1
底部破片	3	2	60	12	2

4. 土器以外の遺物について

石製模造品

水遺跡から剣形状・円板状、形態不明な石製模造品が合計11点出土している。そのうち、第5号住居跡の床面・周溝から剣形・円板状石製模造品が各1点出土している。その他は第1・7号住居跡の堆積土・地区・層位から出土している。

古墳時代の特徴的な祭祀遺物である石製模造品には、有孔円板・剣形品・円玉・勾玉・管玉などが知られている。

本遺跡からはすでに述べたように、第5号住居跡では第1群土器と共伴していることから、石製模造品は南小泉式期のものと考えられ、石製模造品の年代認定をするのに良好な資料と考えられる。

県内において、住居跡内から石製模造品が出土した例としては亘理町宮前遺跡などが知られ南小泉式の土器と共伴している。

現在まで、県内の塩釜式期の集落跡である蔵王町大橋遺跡、名取市西野田遺跡には石製模造品は出土しておらず、古墳時代でも限られた年代幅に使用された可能性がある。よって、本遺跡では古墳時代中期（南小泉式期）の集落跡において、なんらかの祭祀が行なわれたと思われる。

5. 遺構の年代

住居跡の年代的位置づけを決定するにあたって、出土土器と住居跡相互の重複関係を資料として、検討を加えてみたい。

第1群土器が出土している住居跡は第5・9号住居跡の2軒であり、南小泉式期に属するものと考えられる。

第2群土器が出土している住居跡は第2号住居跡の一軒だけであり、国分寺下層式期に属するものと考えられる。

第3群土器が出土している住居跡は第1・3・4・7・8・10・20号住居跡である。これらは表杉ノ入式期に属するものと考えられる。また、第20B号住居跡については、遺物が小破片のため図示できなかったが、床面からロクロ使用の内黒土師器坏が出土している。さらに、第20号住居跡との重複関係により、第20号住居跡よりも以前の段階あるいは同時期のもので表杉ノ入式期のものと考えられる。第15号住居跡については第4号住居跡との重複関係は不明である。さらに、遺物が小破片のため図示できなかったが、貯蔵穴状ピットから、ロクロ使用の内黒土師坏が出土していることから、表杉ノ入式期のものと考えられる。なお、第1・3・4・8・10号住居跡は相互の重複関係がないが、第10号住居跡から土師器坏E1・EIi・Gⅱが共伴している。他の住居跡ではこのような共伴関係は認められず、第10号住居跡は他の住居跡と比較して古い要素をふくんでいる可能性がある。

時期不明としたものには第6・13・17・24・25・26号住居跡がある。第6・13・17・24号住居跡は、住居に伴う土器はないが堆積土出土の土器からみて、ほぼ奈良・平安時代に属するものと考えられる。さらに、26号住居跡は遺物が小破片のため図示できなかったが出土土器、住居跡形態から奈良、平安時代に属するものと考えられる。

次に掘立柱建物跡の年代について考えてみたい。

第1号掘立柱建物跡は図示できる遺物はなかったがピット内からロクロ使用の内黒土師器坏が出土していることから表杉ノ入期に属するものと考えられる。

第2号掘立柱建物跡のピット内からの土師器甕A類と図示できなかったがロクロ使用の内黒土師器坏が出土していることから表杉ノ入期に属するものと考えられる。

第3号掘立柱建物跡には出土遺物がないが、第2号掘立柱建物跡との重複関係により、それよりも古いもので、表杉ノ入期以前の段階のものか、あるいは同時期に属するものと考えることができる。なお、第3号掘立柱建物跡は、第1号掘立柱建物跡との形態に類似性がみられる。それから推定して表杉ノ入式期に属すべきものと考える。

溝状遺構は堆積土中から土師器、縄文土器などが出土しているが時期は不明である。

第5土壙は第3号住居跡を切っており、表杉ノ入期かそれ以降である。

第8土壙は第25号住居跡によって切られており、同時期かそれ以前のものである。

第1a・1b・1c・2・3・7・9土壙、焼土遺構、石組炉跡は所属時期が不明である。

6. 竪穴住居跡の考察と問題点

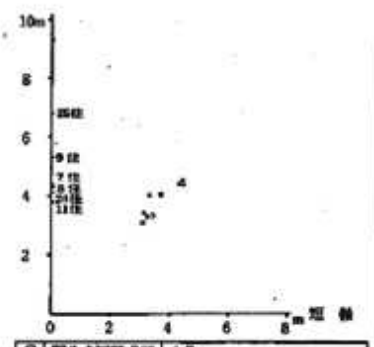
今回の調査によって発見された遺構は竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、土壙9基、溝状遺構1本・石組炉跡1基・焼土遺構4基である。ここでは竪穴住居跡について考察を加えてみたい。

19軒の住居跡が発見された。これらの平面形、規模、柱穴、周構、カマド・炉、貯蔵穴状ピットについて検討を加えてみたい。

第22表　平　面　形

平面形	四隅の形態	住　居　跡
A 正方形	A_1 隅 丸	1住・3住・4住・6住・13住 15住・20住
	A_2 隅 角	2住
B 長方形	隅 丸	20B住
(C 不明)	C_1 隅 丸	7住・8住・11住・17住・24住 25住・26住
	C_2 隅 角	5住・9住

〔平面形〕平面形の完全な住居跡は9軒(1住・2住・3住・4住・6住・13住・15住・20住・20B住)、一部分もしくは半壊の住居跡は9軒(5住・7住・8住・9住・11住・17住・24住・25住・26住)、平面形の不明な住居跡は1軒（10住）である。平面形の不明な10住を除いて、18軒の住居跡はすべて方形を基調としており、A：正方形に近いもの、B：長方形のもの、C：部分的に破壊を受け不明なものとに大別できる（長軸と短軸の差が長軸の10%未満のものを正方形、10%以上のものを長方形としている）。台ノ山遺跡における南小泉式期の住居跡(5住・9住)は部分的に破壊を受けているため、平面形は不明である。国分寺下層式期の住居跡(2住)は正方形である。また表杉ノ入式期の住居跡については平面形が正方形のものは5軒(1住・3住・4住・15住・20住)、長方形のものは1軒(20B住)である。次に四隅の形態についてみると、隅丸であるもの(18軒中15軒)と角はっているもの(18軒中3軒)とがある。南小泉式期の住



※平面形の完全な住居跡を上記の記号で表わしている。半壊の住居跡については、残存している辺の長さを長軸として表わし、記入している。

第23表　規　模

住居跡	大きさ (m)×(m)	住居跡面積 (m²)
1 住	4.50×4.40	19.98
2 住	3.45×3.40	11.67
3 住	3.40×3.10	10.02
4 住	3.30×3.20	10.33
5 住	北辺の長さ3.2m	(46.34)
6 住	4.30×3.70	15.22
7 住	北辺の長さ4.4m	(9.50)
8 住	北辺の長さ4.2m	(10.69)
9 住	東辺の長さ5.3m	(26.66)
11 住	東辺の長さ2.5m	(6.67)
13 住	3.10×3.05	9.18
15 住	4.45×4.43	18.71
20 住	4.40×4.35	18.83
20B住	4.00×3.30	13.10
24 住	北辺の長さ4.3m	(8.04)
25 住	北辺の長さ4.8m	(18.91)

※（　）は残存面積

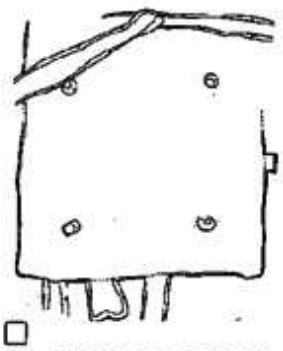
居跡（5住・9住）と国分寺下層式期の住居跡（2住）の3軒が角ばっており、表杉ノ入式期の住居跡はすべて隅丸である。

〔規模〕平面形の完全な9軒の住居跡(表杉ノ式期)について、その規模をみると、3.10×3.05m～4.5×4.4mの範囲内にある。面積は10m²と20㎡集中するようである。南小泉式期の住居跡(5住・9住)は平面形が完全ではないが、5住の北辺の長さは9.3m、9住の南辺の長さは5.3mあり、台ノ山遺跡の住居跡においては大きい規模の部類に入る。国分寺下層式期の住居跡(2住)、表杉ノ入式期の住居跡(1住・3住・4住・7住・15住・20住・20B住)は長軸長がほぼ3～4.5mに集中している。

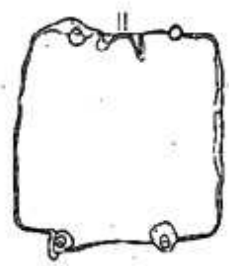
第24表　床　　面

貼床の有無		模式図	住居跡
Ⅰ 貼床なし		地山	2住・6住・8住 9住・11住・13住 24住・25住・26住
Ⅱ 貼床あり	a i		1住・5住・10住 15住
	a ii		3住・20住
	b i		7住・17住
	b ii		4住・20B住

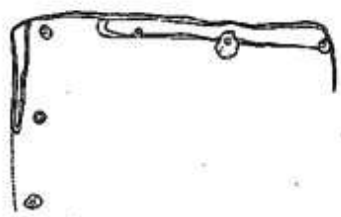
〔床面〕床面の構築方法については、Ⅰ：掘り方底面(地山面)を床面としているもの、Ⅱ：掘り方に粘土を貼って固め貼床としているものとに大別できる。なおⅡ類については、a：掘り方に1層の埋土があり、その上面を床面としているもの、b：掘り方に何層かの埋土があり、その最上層が貼床であるものに細分される。また、貼床の規模により、i：床面の一部に貼床のみられるもの、ii：床面全体に貼床がおよぶものに分けられる。台ノ山遺跡においては、南小泉式期の9住はⅠのタイプ、5住はⅡのタイプである。表杉ノ入式期の住居跡に関しては、ⅠのタイプよりはⅡタイプの方が多い傾向がある。貼床のある住居跡に限って、床面とカマドの関係をみると、カマド燃焼部底面が貼床上面になるもの(3住)と、燃焼部付近には貼床はされず、燃焼部底面が地山面であるもの(7住・10住・20住)とがある。このような違いは、どのような意味をもつものか、今後、検討を



第62図　第9号住居跡



第63図　第20号住居跡



第64図　第25号住居跡

要する問題である。

〔柱穴〕配置の規則性、深さなどから柱穴と認められるピットを有する住居跡は6軒(3住・9住・15住・20住・24住・25住)である。9住・20住は柱穴を正方形に4個配置した住居跡であり、25住は半壊の住居跡であるが、北壁、西壁ぞいに2m間隔で配置された柱穴が5個残存している。15住、24住は柱痕跡のあるピットを1～2個有するが、配置が不規則で、組み合うピットもない住居跡である。

第25表　周　　溝

周溝の有無	構　式　図	住　居　跡
Ⅰ 有	a. 部分的	1住・2住・4住 10住・20B住・ 24住・25住・26住
	b. 不明	5住・17住
Ⅱ 無		2住・3住・6住 13住・15住・20住
Ⅲ 不明		7住・8住・9住 11住

〔周溝〕周溝については、Ⅰ:あるもの、Ⅱ:ないもの、Ⅲ:不明なものに大別される。Ⅰ類については、a:部分的にあるもの、b:半壊もしくは一部分破壊されているが床面残存部内においては、壁沿いに周溝が連続的にめぐるものに細分される。Ⅲ類については、半壊もしくは一部分破壊されているが、床面残存部内においては周溝のないものである。

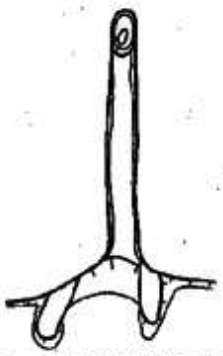
台ノ山遺跡においては、平面形の完全な9軒の住居跡をみる限りでは、周溝のない住居跡と部分的に周溝のある住居跡がほぼ同数である。

南小泉式期の住居跡については、5住はⅠb類に分類されており、全周の可能性がある。9住はⅢ類に分類されており、周溝はないと考えられる国分寺下層式期の住居跡(2住)は部分的に周溝のある住居跡であり、表杉ノ入式期の住居跡には周溝の部分的にあるものと、全くないものがある。

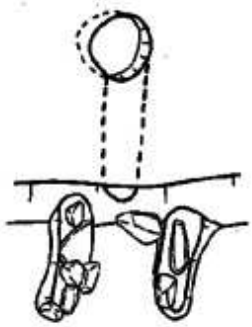
〔カマド〕カマドを有する住居跡は12軒あり、そのうち2軒は（燃焼部底面）のみを残しており、燃焼部側壁・煙道部は削平されている。側壁・煙道をもつ10軒の住居跡のうち、カマドを1基もつものは8軒、2基もつものは2軒ある。2基もつ住居跡はいずれも、2基のカマドに使用の時期差がみられ、住居廃絶時においては1基のみ使用していたと考えられる。

第65図　カマドの軸方向と地形

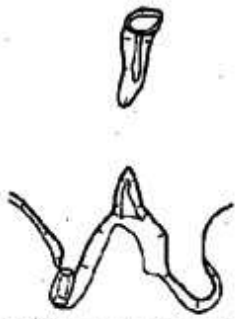
(1) 位置　14基のカマドの付設場所としては、北辺にあるものが8基、東辺にあるものが4基、



第66図　第3号住居跡第2カマド



第67図　第1号住居跡カマド



第68図　第10号住居跡カマド

南辺にあるものが2基である。

(2) 方向　カマドの軸方向は壁とほぼ直交しており、煙道が北方向に伸びるものは7基、東方向に伸びるものは3基、南方向に伸びるものは2基である。

(3) 側壁素材　側壁の構築方向については、Ⅰ粘土によるもの、Ⅱ.粘土と石によるもの、Ⅲ.地山削り出しに大別できる。

(4) 支脚　支脚の痕跡を残すものが11住において検出されている。燃焼部奥壁から25cm内側のところに角礫が直立した状態で検出されている。他の住居跡には、支脚の痕跡をとどめるものが検出されていない。

第26表　煙道の傾斜・煙出しピット

分類		模式図	住居跡	傾斜角度	煙道底面と煙出しの比高
Ⅰ	a		1　住	+7°	0cm
	b		2　住	+5°	1～2cm
			3住第1カマド	+4°	21cm
			11　住	+5°	2cm
Ⅱ	a		6　住	−10°	0cm
	b		3住第2カマド	−4°	8cm
			4　住	−3°	20cm
			6　住	−10°	0cm
			7住第1カマド	−7°	1～2cm
			7住第2カマド	−7°	1～2cm
			10住住	+6°→−7°	10cm
			20　住	−5°	?

※煙出しに向って上がるものをプラス(+)
煙出しに向って下がるものをマイナス(−)としている。
10住の煙道は煙出しに向って上がっていたものが途中で下がっているものである。

(5) 煙道の傾斜・煙出しピット　煙道は地山まで削平を受けているため、ほとんどその構築方法は明確でない。しかし、1住・6住・7住においてはトンネル状に掘り抜いてつくられている。分類は煙道の傾斜および煙出しの2つの要素の組み合わせからおこなわれている。煙道の傾斜は、Ⅰ．煙出しに向かって上向き、Ⅱ．下向きに分類され、煙道底面と煙出しピット底面の比高から、a：段差のほとんどないものと、b：段差があるものに分類される。なお、10住は煙道底面が煙出しに向かって上向きであったのが煙道の途中で下向きとなっているものであるが、Ⅱ類に含めている。

〔炉〕 炉をもつ住居跡は9住、炉らしき焼面をもつ住居跡は25住である。9住では床面の中央

部に65×35cmの焼面があり、火熱のおよんだ範囲は床面から7cm前後で浅い丸底状を呈している。炭火物などが含まれないことから地床炉と考えられる。25住については住居床面の中央付近に焼土が残されているものであるが、半壊の住居跡であるため、はっきりしない。

台ノ山遺跡において、カマドをもつ住居跡は国分寺下層式期(2住)と表杉ノ入式期である。南小泉式期の住居跡(5住・9住)は半壊・一部分破壊されているが、残存部内にはカマドは検出されていない。9住においては地床炉と考えられる焼面が検出されている。カマドの位置についてみると、平坦部に住居跡が位置しているものは様々な方向を向いているが、緩斜面に住居跡が位置しているものは、すべて斜面に対して高い方に設置されているという共通性がある。しかし、煙道の傾斜については、煙道の残存しているもの11例についてみると、煙出しピットに向かって上がるものが4例、下がるものが7例ある。その傾斜角度については、煙出しピットに向かって上がるもので最高の角度をもつものは7°（1住）である。下がるもので最高の角度は10°（6住）である。煙出しピット底面と煙道底面との比高については、比高0cm(1住・6住)から比高21cm(3住第1カマド)のものまである。

〔貯蔵穴状ピット〕貯蔵穴であるという確証はないが、床面で検出されたピットの中で、規模が大きく、形も整っていることから、貯蔵穴状ピットと仮称している。台ノ山遺跡においては規模は70～80cm、深さ20cm前後で円形もしくは楕円形のピットが多い。貯蔵穴状ピットの数は1軒に1個もつものは14軒中11軒、2個もつものは3軒である。

台ノ山遺跡の貯蔵穴状ピットについて、堆積土に混入しているものから分類してみると、Ⅰ類:焼土や炭化物を含むものと、Ⅱ類:焼土や炭化物を含み、土器も出土しているもの、Ⅲ類:焼土や炭化物を含まず土器の出土しているものの3類に分類される。Ⅰ類に分類される住居跡は2住、4住P1、6住、15住P2である。Ⅱ類に分類される住居跡は1住、3住P2、4住P2、7住、9住、10住、11住、13住、15住P1である。1住の貯蔵穴状ピットはカマドの右脇から検出され、堆積土は3層認められた。底面の一部に灰と思われる青灰色粘土層が堆積しており、上部の2層には多量の木炭、焼土が含まれていた。また、堆積土2層からは完形に近い土師器坏が2点出土している。また、7住も堆積土の最下層に灰らしきものを含んでおり、その上層には炭化

第27表　貯蔵穴状ピットの数

カマド・炉	貯蔵穴状ピットの数	住居跡
カマドあり	0	20B住
	1	1住・2住・6住・7住・10住・11住・13住・20住・24住
	2	3住・4住
炉あり	1	9住
不明	1	5住
	2	15住
	不明	8住・17住・25住・26住

第28表　貯蔵穴状ピットの位置

カマドと貯蔵穴状ピットの位置関係	住居跡	計
カマドの右脇	1住・3住第1カマド・6住・7住第2カマド・10住・13住・20住	7
カマドの左脇	2住・3住第2カマド・11住	3
カマドと離れている	4住・24住	2

物や焼土を含み、土器も出土している。Ⅲ類に分類される住居跡は3住P1、5住、20住である。3住のP1の堆積土には焼土や炭火物は含まれていないが土師器坏、甕、須恵器坏が出土している。5住の貯蔵穴状ピットは床面の中央部から検出され、その中から土師器坏2点、土師器壺、円礫が出土している。20住の貯蔵穴状ピットの堆積土には地山の土が含まれているが、焼土、炭化物は含まれていない。なお、この中から直立した土師器甕が出土している。

貯蔵穴状ピットとカマドの位置関係は、貯蔵穴状ピットがカマドの右脇にある例は7例、左脇にある例は3例である。カマドと離れている例も2例ある。このことからカマドの脇にある例が多いといえる。

〔まとめ〕

19軒の住居跡について、様々な観点から述べてきたが、次に、ここでは平面形、規模、柱穴、周溝、カマド・炉、貯蔵穴状ピットについて、他の遺跡と比較してみたい。また、分布状況や造営時期と合わせて、台ノ山遺跡から発見された住居跡のまとめをしてみたい。

〔平面形〕宮前遺跡(宮城県教委:1975)、土平遺跡(宮城県教委・東北地方建設局仙台工事事務所:1975)、宮下遺跡(名取市教委:1975)、十三塚遺跡(名取市教委:1977)天狗堂遺跡(田尻町教委:1978)、北沢遺跡(宮城県教委・宮城県開発公社:1978)、糠塚遺跡(宮城県教委:1978)などで住居跡が発見されている。これらの遺跡の南小泉式期、国分寺下層式期、表杉ノ入式期の住居跡の平面形をみると、すべて正方形もしくは長方形の方形を基調としている。この点では台ノ山遺跡の住居跡も方形を基調としており同様の傾向がみられる。

四隅の形態については、南小泉式期の住居跡で、四隅が角ばっているという例は宮下遺跡、宮前遺跡、十三塚導遺跡でもみられる。しかし、栗駒町長者原遺跡(金野正・佐藤信行:1973)においては隅丸の住居跡が報告されている。国分寺下層式期の住居跡で、四隅が角ばっている例は、糠塚遺跡、天狗堂遺跡でもみられるが、これらの遺跡においては、同時に隅丸方形の住居跡も存在していることが報告されている。

〔規模〕南小泉式期の住居跡の規模(長軸長による)について、宮下遺跡では、3.6m(30住)から8m(2住)までの規模の住居跡が報告されている。十三塚遺跡では、5.2m、7.4mの住居跡が報告されている。このことから台の山遺跡の5住、9住は、19軒の住居跡の規模の中では例外的な大きさではあるが、南小泉式期においてはきわだったものではないといえよう。

国分寺下層式期の住居跡は天狗堂遺跡や糠塚遺跡などで発見されている。表杉ノ下式期の住居跡は宮下遺跡、宮前遺跡、北沢遺跡、糠塚遺跡などで発見されている。これらの遺跡の国分寺下層式期・表杉ノ入式期においては、大小様々の住居跡がみられるが、台ノ山遺跡の住居跡では面積が$10m^2$と$20m^2$に集中する傾向がみられる。

〔床面〕南小泉式期、国分寺下層式期、表杉ノ入式期のそれぞれに、地山面を床面としている

もの、粘土を貼って固めて貼床にしているもの、2つのタイプがあるということは宮前遺跡、天狗堂遺跡、北沢遺跡、宮下遺跡、十三塚遺跡などでも報告されており、台ノ山遺跡においても同様の傾向がみられる。

〔柱穴〕台ノ山遺跡の9住、20住のように4個の柱穴を配置する形態の住居跡は他の遺跡でも類似は多いが、25住のような形態の住居跡は、類似がない。半壊の住居跡であるため、全体は明らかでないが、新しいタイプの住居跡である。

〔周溝〕南小泉式期の住居跡で周溝の全周するものは十三塚遺跡、宮前遺跡などにみられる。また、宮下遺跡における南小泉期の住居跡は、周溝のない住居跡と、周溝のある住居跡(ほとんどの住居跡が部分的に破壊を受けているため、全周するものはないが混在している。

国分寺下層式期の住居跡をみると、天狗堂遺跡では、周溝のある住居跡が多く、周溝のある住居跡は少ない傾向にある。また、糠塚遺跡においては、周溝がほぼ全周する住居跡と周溝が一部ある住居跡で占められている。

表杉ノ入式期の住居跡をみると、宮前遺跡のほとんどの住居跡には、周溝が1本壁沿いにまわっている例が多いが、台ノ山遺跡の住居跡においては、周溝が部分的にあるものと、全くないもので占められている。これは機能的な相違が、地域的な相違が、その他の相違なのかは今後、検討を要する問題である。

〔カマド〕カマドの位置については、土平遺跡、天狗堂遺跡、糠塚遺跡では、北辺に付設される例が大変に多く、東辺が次いでいる。台ノ山遺跡においても北辺に付設される例は8基と多いが、東辺4基、南辺2基の例もある。側壁の構築方法については、台ノ山遺跡では粘土構築が7例あり、石と粘土によるものが1例、地山削り出しと思われるものが1例ある。粘土構築による例は、国分寺下層期、表杉ノ入式期において、大変多く天狗堂遺跡、糠塚遺跡、北沢遺跡、宮前遺跡、土平遺跡などでも報告されている。

煙道の傾斜について、糠塚遺跡では、国分寺下層式期、表杉ノ入式期には煙出しピットに向って下がるもの、水平なもの、上がるものが報告されている。このようにカマドの設置場所、煙道の傾斜、煙道底面と煙出しピット底面の比高などについてはカマドの機能、効率化を考える上で重要なことである。今後、検討を要する問題である。

台の山遺跡において、南小泉式期の住居跡(5住・9住)のうち、9住では地床炉と考えられる焼面が検出された。しかし、十三塚遺跡、宮前遺跡では、この南小泉式期の住居跡には、カマドをもつものと炉をもつものが報告されている。岩切鴻ノ巣遺跡では2軒の住居跡にカマドが検出されている。この時期にはカマドのある住居跡が在在するということが明らかにされている。

〔貯蔵穴状ピット〕南小泉式期においては、宮下遺跡で、貯蔵穴のある住居跡とない住居跡が

存在していることが報告されている。

台ノ山遺跡の南小泉式期の住居跡(5住)では焼土や炭化物を含まず完形に近い土器が3点出土している。しかし、9住では土器が出土しているが、堆積土に焼土、炭化物も混入している。貯蔵穴状ピットの有無については、台ノ山遺跡の2軒とも有している。

国分寺下層式期において、天狗堂遺跡では貯蔵穴を伴っていない住居跡がほとんどである。しかし、台ノ山遺跡の国分寺下層式期の住居跡(2住)では貯蔵穴状ピットがカマドの左脇にあり、堆積土に炭化物を含んでいる。表杉ノ入式期においては、焼土や炭化物だけを含むもの、焼土・炭化物とともに土器も出土しているもの、焼土や炭化物を含まず土器を出土しているものの3つのタイプの貯蔵穴状ピットがみられる。

貯蔵穴状ピットの機能を考えてみると、台ノ山遺跡においては、貯蔵穴状ピットがカマドの脇にあり、堆積土に焼土や炭化物を含む例が多いことから灰だめの機能を有するものであったかもしれない。しかし、3住のP1・5住・20住においては焼土や炭化物が全く含まれず、土器が出土していることから貯蔵としての機能とともに、貯蔵としての完形に近い土器も出土していることから、灰だめとしての機能とともに、貯蔵としての機能も有するものであったかもしれない。今後、検討を要する問題である。

南小泉式期の住居跡（5住・9住）は2軒とも平坦部から検出されている。他の17軒の住居跡と比較して、いくつか特徴的なことがあげられる。①四隅の形態は角ばっているこ②規模は大きい方に入り、特に5住については、半壊の住居跡であるが、北辺の長さが9.3mある。③カマドはなく炉をもっており、特に9住については地床炉をもっていること④5住の貯蔵穴状ピットは床面の中央部から検出され、その堆積土内から完形に近い土師器坏2点、土師器壺1点、円礫が出土していること。以上の特徴があげられる。

国分寺下層式期の住居跡(2住)は平坦部から検出されている。その特徴は、表杉ノ入式期の住居跡と同様である。

表杉ノ入式期の住居跡(1住・3住・4住・7住・8住・10住・11住・15住・20住・20B住)は平坦部および平坦部から南、北緩斜面に移行する地区と広範囲にわたって検出されている。2住を含めて11軒について特徴的なことは、①四隅の形態は隅丸が多く、平面形は方形を基調としていること。②住居内面積は10、20m^2に集中していること。③周溝は壁に沿って部分的にみられるものと、全くないものに分けられること。④カマドの付設場所については、平坦部に住居跡が位置しているものは北、東、南壁と様々な方向にあるが、緩斜面に住居跡が位置しているものは、斜面に対して高い方にあること。⑤側壁の素材については粘土による構築が多く、他に石と粘土によるもの、地山削り出しと考えられるものがあること。⑥貯蔵穴状ピットはカ

マドの脇にあることが多いこと。以上の特徴があげられる。

台ノ山遺跡の19軒の住居跡について、時期ごとに特徴をあげたが、立地状況（平坦部や緩斜面）と床面・周溝・煙道の傾斜などとの関係ではまとまりはとらえられなかった。今後、検討を要する問題である。

他の遺跡と台ノ山遺跡を比較してみると、南小泉式期においては、住居跡の平面形、規模、床面などについては宮前遺跡や宮下遺跡、十三塚遺跡などと共通点がみられる。しかし周溝の全周するものが宮前遺跡、十三塚遺跡で発見されているが、周溝のないものも宮下遺跡で発見されている。台ノ山遺跡の5住は半壊の住居跡であるが残存部内の壁沿いに周溝がみられる。9住は周溝がない住居跡である。またカマドについては、5住はないと考えられる。9住は地床炉と考えられる焼面が検出されている。宮前遺跡や十三塚遺跡ではカマドをもつものと炉をもつものがこの時期にみられ、カマドをもつ住居跡が出現することが明らかにされている。この点5住、9住にはカマドの使用はみられず、炉を使用していたと考えられる。国分寺下層式期については、台ノ山遺跡では2住が1軒検出されただけであるが、糠塚遺跡や天狗堂遺跡では数の上でかなりまとまりをもって検出されている。2住は、平面形、規模、床面、カマドなどについて、これらの住居跡と類似性をもっているが、2住では周溝がないことが特徴的である。糠塚遺跡の国分寺下層式期の住居跡には、周溝がほぼ全周するものと一部有るものが半々であり・天狗堂遺跡の国分寺下層式期の住居跡には、周溝が有るものがほとんどで、ないものはわずかである。住居群の分布については、天狗堂遺跡では比較的急な斜面の上から下まで分布しているのに対して、台ノ山遺跡では、発掘区内の緩斜面からは国分寺下層式期の住居跡は検出されず、平坦部で1軒のみ検出されている。表杉ノ入式期については、他の遺跡と比較して特徴といえることはないが、宮前遺跡などの住居跡には周溝が壁に沿ってめぐるものが多いのに対し、台ノ山遺跡では、周溝が部分的にあるものとないものが半々である。また、貯蔵穴状ピットについては堆積土内に焼土、炭化物を含むものが多いことがあげられる。表杉ノ入式期になると、住居群は平坦部のみならず緩斜面にも分布するが、これに類似した例としては宮前遺跡がある。

V　まとめ

1. 台ノ山遺跡は高館丘陵から南東にのびた舌状小丘陵に立地しており、今回の調査区域は舌状小丘陵の末端部の平坦部と緩斜面にある。
2. 今回の調査では竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、土壙9基、溝状遺構1本、焼土遺構4基、石組炉跡1基の遺構および、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、石製模造品などの遺物が発見された。検出された遺構は平坦部および平坦部から緩斜面に移行する位置に分布しており、古墳時代中期、奈良時代、平安時代など各時代のものが重複し合っている。
3. 調査の成果により、台ノ山遺跡の特性や歴史的過程を検討してみると次のようになる。

① 発見された遺物の中で最も古いものは縄文時代の土器であり、早期末から前期初頭にかけての土器片が大半である。少量ではあるが、中期、後期、晩期の土器片も出土している。この時期の遺構や包含層は、今回の調査区内では確認されなかった。縄文時代の遺物としては、土器のほかに石鏃、石錐などの石器も出土している。なおこの中に弥生時代の所産の石器が含まれている可能性もある。縄文時代からこの丘陵が人々の生活の舞台となったことがうかがわれる。

② 弥生時代後期の土器片が、発掘地区および住居内堆積土中から少量出土しているが、遺構や包含層は確認できなかった。

③ 古墳時代に入り、南小泉式期になるとこの地に集落が営まれていたことが明らかになった。南小泉式期と認定された住居跡は2軒ある。この時期の住居群は亘理町宮前遺跡(宮城県教委:1975)や名取市宮下遺跡(名取市教委:1975)などにみられるが、宮前遺跡(宮城県教委:1975)ではこの時期にカマド出現が報告されている。台の山遺跡においてはカマドをもつ住居跡は発見されていない。

④ 奈良時代になり、国分寺下層式期と認定された住居跡は1軒のみであり、糠塚遺跡(宮城県教委:1978)や天狗堂遺跡(田尻町教委:1979)などにみられるような集落としてのまとまりはみられないようである。

⑤ 平安時代になると、構造の異なる住居跡が数多くみられるようになる。また住居跡の数とともに重複も数多くなる。住居跡のカマドは、斜面の高い方に付設されるといった特徴もみられる。加えて、掘立柱建物跡などの遺構もみられるようになり、これらの遺構は舌状小丘陵の平坦部のみならず、緩斜面にも立地している。

4. 遺跡の範囲は、今回の発掘地区以外にものびており、舌状小丘陵全体に良好な状態で遺構・遺物が遺存していると考えられる。

〔引用参考文献〕（アイウエオ順）

阿部義平（1968）：『東国の土師器と須恵器』帝塚山考古学No. 1

伊東信雄（1940）：『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』「東北帝国大学文学部奥羽史料調査研究報告第二」

（1950）：『仙台市内の古代遺跡』「仙台市史第3巻」

氏家和典　大場恒一（1954）：『宮城県高倉村引田出土の土師器』「歴史第8輯」東北史学会

氏家和典（1957）：『東北土師器の型式分類とその編年』「歴史第14輯」東北史学会

（1961）：『陸奥国分寺跡一土器』所収「陸奥国分寺跡発掘調査委員会編」

（1967）：『陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって』「山形県の考古と歴史」柏倉亮吉教授還暦記念論文集刊行会

（1972）：南奥羽地域における古式土師器をめぐって」「北奥古代文化第4号」北奥古代文化学会

小笠原好彦　阿部義平（1968）：『宮城県新田遺跡の土師器』「考古学雑誌第54巻第2号」日本考古学会

小笠原好彦（1976）：『東北における平安時代の土器についての二・三の問題』「東北考古学の諸問題」東北考古学会編

岡田茂弘　桑原滋郎（1974）：『多賀城周辺における古代杯形土器の変遷』「研究紀要Ⅰ」多賀城跡調査研究所

加藤　孝（1951）：『宮城県上川名貝塚の研究』「宮城学院女子大学論文集Ⅰ」宮城学院女子大学

（1954）：『塩釜市表杉ノ入貝塚の研究』「宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ」宮城学院女子大学

川崎利夫（1972）：『庄内平野の土師式土器』「庄内考古学第11号」庄内考古学研究会

桑原滋郎（1969）：『ロクロ土師器坏について』「歴史第39輯」東北史学会

（1976）：『須恵系土器について』「東北考古学の諸問題」東北考古学会編

（1976）：『東北北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について』「考古学雑誌61巻第4号」日本考古学会

工藤雅樹　桑原滋郎（1972）：『東北地方における古代土器生産の展開』「考古学雑誌第57巻第3号」日本考古学会

小井川和夫　高橋守克（1977）：『宮城県対馬遺跡出土の土器』「宮城史学第5号」

小牛田町教育委員会（1976）：『山前遺跡』

金野　正　佐藤信行（1974）：『栗駒町長者原遺跡発掘調査概報』「栗原郷土研究第5号」栗原郷土史研究会

斉藤良治（1978）：『槻木貝塚群とその自然現境』「柴田町郷土研究会報第11号」

柴田町教育委員会（1974）：『柴田町の文化財』「柴田町の文化財第5集」

白鳥良一（1974）：『仙台市三神峯遺跡の調査』「東北の考古・歴史論集」

仙台市教育委員会（1978）：『南小泉遺跡』「仙台市文化財調査報告第13集」

田尻町教育委員会（1978）：『天狗堂遺跡』「田尻町文化財調査報告書第1集」

玉川一郎　大越道正（1978）：『大玉村上高野遺跡出土遺跡の再検討』「しのぶ考古7」

千葉宗久（1975）：『原始時代の河北町』「河北町誌上巻」

名取市教育委員会（1975）：『宮下遺跡』「名取市文化財調査報告書第1集」

（1977）：『十三塚遺跡』「名取市文化財調査報告書第2集」

鳴瀬町教育委員会（1977）：『金山貝塚』

林謙作（1965）：『日本の考古学Ⅱ　東北』「河北書房新社」

平安学園考古学クラブ（1966）：『陶邑古窯址群Ⅰ』「研究論集第10号」

南方町（1975）：「宮城県登米郡南方町　青島貝塚発掘調査報告」

南方町教育委員会（1978）：『長者原貝塚』「南方町文化財調査報告書第1集」

宮城県教育委員会（1972）：『台ノ山遺跡現地説明会資料』

宮城県教育委員会（1975）：『宮前遺跡』「宮城県文化財調査報告書第38集」
東北地方建設局仙台工事事務所　『土平遺跡発掘調査概報』「宮城県文化財調査報告書第39集」

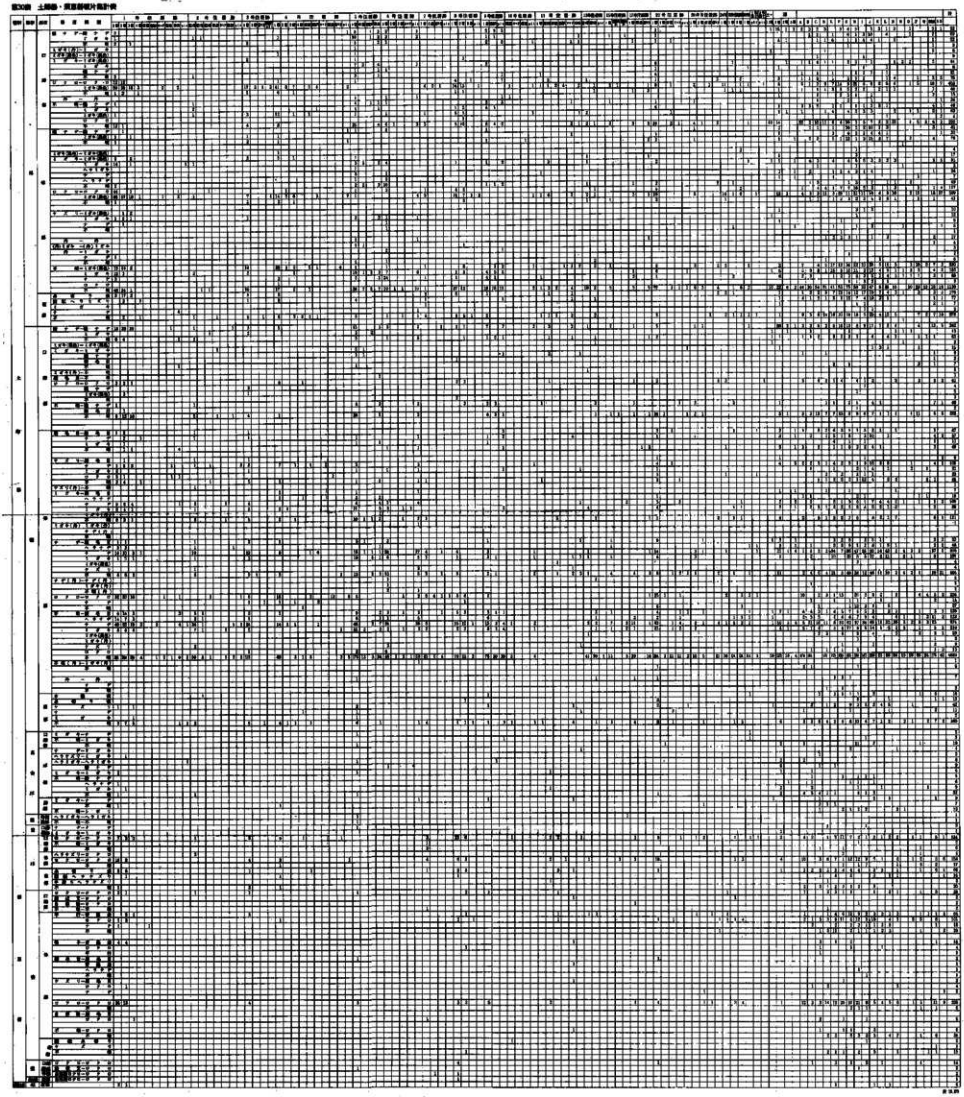
宮城県教育委員会（1978）：『北沢遺跡発掘調査概報』「宮城県文化財調査報告書第56集」
宮城県開発公社

白鳥良一（1971）：『東北自動道関係調査概報－東山遺跡「宮城県文化財調査報告書第24集」
高野芳宏

秦　昭繁（1973）：『東北新幹線関係発掘調査概報－台ノ山遺跡』「宮城県文化財調査報告書第30集」

白鳥良一（1974）：『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－岩切鴻ノ巣遺跡・西野遺跡』「宮城県文化財調査報告
加藤道男　書第35集」

小井川和夫　（1978）：「宮城県文化財発掘調査略報－鎌塚遺跡」「宮城県文化財調査報告書第53集」
手塚　均

第29表　住　居　跡　一　覧　表

住居番号	位置	検出面	重複増改築	平面形	規模 長軸×短軸(m)	竪穴層位	壁の状況			床面	柱穴	周溝	カマド(炉)						貯蔵穴状ピット				時期
							壁	残存高(cm)	立ち上がり				位置	方向	袖壁素材	支脚	煙道の傾斜(角度)	焚口ピット 床面との比高(cm)	位置	規模	床面からの深さ(m)	埋積土・出土遺物	
第1号住居跡	平坦部	地山面	17住・後世の溝と重複 17住との新旧不明	A1.隅丸方形	4.50×4.40	3層	地山	60cm	急角度	IIai.貼床		Ia. 一部有	東壁中央南	E−9°−N	II. 石と粘土		I. ↗ +7°	a. 0cm	南東隅(カマドの右脇)	径1mの円形	30cm	II.焼土、炭化物 炭?.土器	表杉ノ入式期
第2号住居跡	南緩斜面	地山面	ナシ	A2.隅の角ばった正方形	3.45×3.40	8層	地山	35cm	ほぼ垂直	I.地山面		Ia. 一部有	北壁中央西	N−25°−W	I.粘土		I. ↗ +5°	b.1~2cm	北西隅(カマドの左脇)	径約40cmの円形	20cm	I.焼土、炭化物	国分寺下層式期
第3号住居跡	南緩	地山面	第5土壙と重複 新旧不明	A1.隅丸方形	3.40×3.10	3層	地山	10~15cm	急角度	IIaii.貼床	P4に柱痕跡有	II. ナシ	第1カマド北壁中央 第2カマド南壁中央東	N−8°−E S−12°−E	煙滅 I.粘土		I. ↗ +4° II. ↘ −4°	b. 21cm b. 8cm	P1.北東隅(第1カマドの右脇) P2.南東隅(第2カマドの左脇)	最大径85cmの不整な円形 70×60cmの楕円形	20cm 30cm	III.土器 II.焼土,炭化物,土器	表杉ノ入式期
第4号住居跡	南緩	地山面	15住と重複 新旧不明	A1.隅丸方形	3.30×3.20	4層	地山	10cm	急角度	IIbii.貼床		Ia. 一部有	東壁南隅	E−14°−N	I.粘土		II. ↘ −3°	b. 20cm	P1.北壁中央 P2.北東隅	90×60cmの楕円形 径90cmの円形	30cm 30cm	I.焼土、炭化物 II.焼土,炭化物,土器	表杉ノ入式期
第5号住居跡	南緩	地山面	20住と重複 20住より古い	C2.隅が角ばってかり方形基調	(北辺の長さ 9.3m)	1層	地山	10~15cm	急角度	IIai.貼床		Ib. 全周?	不明						中央部	径45cmの円形		III.土器	南小泉式期
第6号住居跡	南緩	地山面	ナシ	A1.隅丸方形	4.10×3.70	2層	地山	20~25cm	ほぼ垂直	I.地山面		II. ナシ	北壁中央東	N−7°−W	I.粘土		II. ↘ −10°	a. 0cm	北東隅(カマドの右脇)	80×70cmの不整楕円形	15cm	I.焼土、炭化物	?
第7号住居跡	平坦部	地山面	ナシ	C1.隅丸で方形基調	(北辺の長さ 4.4m)	3層	地山	40~50cm	急角度	IIbi.貼床		II. ナシ	第1カマド北壁中央 第2カマド北壁中央東	N−27°−W N−27°−W	煙滅 I.粘土		II. ↘ −7° II. ↘ −7°	b.1~2cm b.1~3cm	北東隅(第2カマドの右脇)	80×75cmの楕円形	15cm	II.焼土、炭化物 炭?.土器	表杉ノ入式期
第8号住居跡	南緩	地山面	後世の溝と重複	C1.隅丸で方形基調	(北辺の長さ 4.3m)	5層	地山	30cm	ほぼ垂直	I.地山面		II. ナシ	不明										表杉ノ入式期
第9号住居跡	南緩	地山面	後世の溝と重複	C2.隅が角ばってかり方形基調	(南辺の長さ 5.3m)	2層	地山	10cm	ほぼ垂直	I.地山面	4	II. ナシ	〔炉〕床面中央に65×35cmの浅い丸底状の焼面地床炉						南東隅	65×55cmの楕円形	30cm	II.焼土、炭化物 土器	南小泉式期
第10号住居跡	南緩	地山面	ナシ	不明	不明	不明	地山	5cm	不明	IIai.貼床		Ia. 一部有	北壁	N−1°−E	II. 地山削り出し		II. (+6° −7°)	b. 10cm	北東隅(カマドの右脇)	80×75cmの楕円形	15cm	II.焼土、炭化物 土器	表杉ノ入式期
第11号住居跡	北緩斜面	地山面	ナシ	C1.隅丸で方形基調	(南辺の長さ 3.8m)	1層	地山	10~20cm	急角度	I.地山面		II. ナシ	南壁中央東	S−13°−W	I.粘土	角礫	I. ↗ +5°	b. 2cm	南東隅(カマドの左脇)	径60cmの円形	35cm	II.焼土、炭化物 土器	表杉ノ入式期
第13号住居跡	南緩	地山面	後世の坑と重複	A1.隅丸方形	3.10×3.05	3層	地山	10cm	ややゆるやか	I.地山面		II. ナシ	東壁中央南						南東隅(カマドの右脇)	40×30cmの楕円形	10cm	III.土器	?
第15号住居跡	南緩	地山面	4住と重複 新旧不明	A1.隅丸方形	4.45×4.43	4層	地山	2~4cm	不明	IIai.貼床	P1a.P1bに柱痕跡有	II. ナシ	不明(東壁中央に焼土有)						P1.北東隅 P2.南東隅	80×60cmの楕円形 70×60cmの楕円形	10cm 25cm	II.焼土,炭化物,土器 I.焼土、炭化物	表杉ノ入式期
第17号住居跡	平坦部	地山面	1住・後世の溝と重複 1住との新旧不明	C1.隅丸で方形基調	不明	2層	地山	20~25cm	ほぼ垂直	IIbi.貼床		Ib. 全周?	不明										?
第20号住居跡	南緩	地山面	5住・20B住と重複 5住より新しい 20B住を増改築	A1.隅丸方形	4.40×4.35	3層	地山	10~15cm	急角度	IIaii.貼床	4	II. ナシ	北壁中央	N−10°−W	I.粘土		大部分が削平され、不明	b. 9cm	北東隅(カマドの右脇)	80×70cmの不整楕円形	25cm	III.土器	表杉ノ入式期
第20B号住居跡	南緩	20住の床面	20住と重複 20住より古い	B.隅丸長方形	4.00×3.30	2層	地山	5~10cm	急角度	IIbii.貼床		Ia. 一部有	東壁中央南	E−8°−N	煙滅		II. −6°	不明					表杉ノ入式期
第24号住居跡	南東緩斜面	地山面	25住と重複 新旧不明	C1.隅丸で方形基調	(北辺の長さ 4.1m)	1層	地山	12~20cm	ほぼ垂直	I.地山面	P1に柱痕跡有	Ia. 一部有	北壁中央						東壁の北	80×60cmの楕円形	30cm	?	?
第25号住居跡	南東緩斜面	地山面	24住・26住・第8号土壙、溝と重複。第8土壙より新しい、他は新旧不明	C1.隅丸で方形基調	(北辺の長さ 6.8m)	3層	地山	20cm	ほぼ垂直	I.地山面	北・西壁沿いに2m間隔で4個	Ia. 一部有	不明(床面中央に焼土有)										?
第26号住居跡	南東緩斜面	地山面	25住と重複 新旧不明	C1.隅丸で方形基調	不明	4層	地山	10~30cm	急角度	I.地山面		Ia. 一部有	不明										?